石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅰ

――滋賀県住宅供給公社宅地造成事業に伴う――

昭和63年３月

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

石田三宅Ⅰ　正誤表

ページ	行	誤	正
29	26	日影式	月影式
35	19	３方透してある。	３方透しである。
51	19	388は口縁大きく	388は口縁は大きく
67	9	432はしっかりとして	432はしっかりとした
69	12	内・外面が	内外面に
80	25	釘	杭
88	21	粒土層	粘土層
91	27	納める	収める
93	13	褐色ＳＤ－１	ＳＤ－１
96	7	南側梁行中央穴	南側梁列中央穴
96	11	北東梁行中央穴	北東梁列中央穴
96	17	北側梁行中央穴	北側梁列中央穴
124	24	39は	38は
図版21		ＳＤ－18･19･20	ＳＤ－18
図版75		ＳＫ－３	ＳＲ－３

石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅰ

――滋賀県住宅供給公社宅地造成事業に伴う――

昭和63年３月

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化的な環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策は、重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような文化遺産を後世に引き継いでいくためには、広く国民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに石田団地宅地造成事業に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護の御理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和63年３月

滋賀県教委員会

教育長　飯田　志農夫

例　　言

1．本書は滋賀県住宅供給公社宅地造成事業に伴う石田三宅遺跡の発掘調査報告書の第1冊であり、昭和61年度に発掘調査したものを、昭和62年度に整理報告したものである。

2．本調査は滋賀県住宅供給公社からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．発掘調査にあたっては、守山市教育委員会より社会教育課主事宮下睦夫氏を派遣していただいた。また整理業務にあたっては守山市立埋蔵文化財センターの協力を得た。

6．本事業の事務局は次の通りである。

昭和61年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
主任技師	用田　政晴
管理係主任主事	山本　徳樹

㈶滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査二係長	大橋　信弥
技師	森　格也
総務課長	山下　弘
主事	泉　良子

昭和62年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
主任技師	用田　政晴
管理係主任主事	山出　隆

㈶滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎　貞一
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査二係長	大橋　信弥
技師	森　格也
総務課長	山下　弘
主事	立入　裕子

5．本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

6．本書の執筆、編集は調査担当者森　格也、宮下睦夫が行った。

7．出土遺物・写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　調査の方法と経過……2

Ⅲ　位置と環境……4

Ⅳ　調査の結果……6

1、第1調査区……6

(1) 遺　構……6

(2) 遺　物……9

(ⅰ)土　　器……9

(ⅱ)木 製 品……79

(ⅲ)鉄　　器……88

(3) 小　結……88

2、第2調査区……89

(1) 遺　構……89

(2) 遺　物……91

(3) 小　結……93

3、第3調査区……94

(1) 遺　構……94

(2) 遺　物……104

(3) 小　結……112

4、第4調査区……113

(1) 遺　構……113

(2) 遺　物……120

(3) 小　結……126

Ⅴ　お　わ　り　に……127

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……5
第３図　第１調査区遺構図……7
第４図　第１調査区，遺構断面図……7
第５図　第１調査区ＳＲ－３杭列……8
第６図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……12
第７図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……14
第８図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……16
第９図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……18
第10図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……20
第11図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……22
第12図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……24
第13図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……26
第14図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……28
第15図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……30
第16図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……32
第17図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……34
第18図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……36
第19図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……39
第20図　第１調査区ＳＲ－２出土土器実測図……40
第21図　第１調査区ＳＲ－２出土土器実測図……42
第22図　第１調査区ＳＲ－２出土土器実測図……44
第23図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……46
第24図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……48
第25図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……50
第26図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……52
第27図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……54

第28図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……56
第29図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……58
第30図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……59
第31図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……60
第32図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……62
第33図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……63
第34図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……64
第35図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……66
第36図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……68
第37図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……70
第38図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……72
第39図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……74
第40図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……76
第41図　第１調査区ＳＲ－３出土土器実測図……78
第42図　第１調査区ＳＲ－１出土土器実測図……81
第43図　第１調査区ＳＲ－１・３出土木器実測図……82
第44図　第１調査区ＳＲ－３出土木器実測図……83
第45図　第１調査区ＳＲ－３出土木器実測図……84
第46図　第１調査区ＳＲ－３出土木器実測図……85
第47図　第１調査区ＳＲ－３出土木器実測図……86
第48図　第１調査区ＳＲ－３出土木器実測図……87
第49図　第１調査区ＳＲ－３出土鉄器実測図……88
第50図　第２調査区遺構図……88・89
第51図　第２調査区ＳＤ－１断面図……89
第52図　第２調査区ＳＫ－１平面図……90
第53図　第２調査区ＳＢ－１……90
第54図　第２調査区ＳＤ－１出土土器実測図……92
第55図　ＳＢ－１平面図、柱穴内遺物出土状況図……95
第56図　建物平面図（ＳＢ－２～５）・柱穴内遺物出土状況図……97
第57図　ＳＸ－１遺物出土状況図……101

第58図　ＳＸ－２遺物出土状況図・断面図……102
第59図　断　面　図……102・103
第60図　ＳＥ－１・ＳＥ－２断面図……103
第61図　ＳＤ－１出土土器実測図……104
第62図　ＳＢ－１出土遺物実測図……106
第63図　その他の建物・柱穴出土遺物実測図……106
第64図　ＳＤ－２・３・遺構面出土遺物実測図……108
第65図　ＳＸ－２出土遺物実測図……108
第66図　ＳＸ－３出土遺物実測図(1)……110
第67図　ＳＸ－３出土遺物実測図(2)……111
第68図　ＳＤ－15遺物出土状況図……114
第69図　ＳＤ－16堰出土状況図……114
第70図　建物平面図(ＳＢ－７・８)……115
第71図　建物平面図(ＳＢ－９～13)……117
第72図　柱穴内遺物出土状況図……119
第73図　断　面　図……119
第74図　ＳＤ－16出土遺物実測図……120
第75図　ＳＤ－16(堰)出土木製品実測図……121
第76図　ＳＤ－15・ＳＤ－17・遺構面出土遺物実測図……123
第77図　建物・柱穴出土遺物実測図……123
第78図　ＳＤ－20出土遺物実測図……125
第79図　ＳＤ－13・ＳＤ－14出土遺物実測図……125

付　図　目　次

付図１　第３調査区遺構平面図２
付図２　第４調査区遺構平面図１（弥生時代～古墳時代）
付図３　第４調査区遺構平面図２（平安時代～鎌倉時代）

図　版　目　次

図　版

1　遺　構(第三・四調査区)第三・四調査区航空写真

2　遺　構（第三調査区）第三調査区航空写真

3　遺　構（第四調査区）第四調査区航空写真

4　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－１、ＳＲ－２

　　2　ＳＲ－１、ＳＲ－２

5　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－３(南から)

　　2　ＳＲ－３杭列

6　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－３杭

　　2　ＳＲ－３杭

7　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－１土器出土状況

　　2　ＳＲ－１土器出土状況

8　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－１木器出土状況

　　2　ＳＲ－１土器出土状況

9　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－１木器出土状況

　　2　ＳＲ－１木器出土状況

10　遺　構（第一調査区）1　ＳＲ－３鉄器出土状況

　　2　ＳＲ－３土器出土状況

11　遺　構（第二調査区）1　第２地区　南半分(東から)

　　2　ＳＤ－１

12　遺　構（第二調査区）1　第２地区　北半分(北西から)

　　2　ＳＢ－１

13　遺　構（第二調査区）1　ＳＤ－１

　　2　ＳＫ－１

14　遺　構（第二調査区）1　ＳＤ－１土器出土状況

　　2　ＳＤ－１石器出土状況

15　遺　構（第三調査区）1　第三調査区　全景(東から)

　　2　ＳＢ－２

16 遺　構（第三調査区）1　ＳＢ－５

2　ＳＢ－４

17 遺　構（第三調査区）1　ＳＸ－１

2　ＳＸ－２

18 遺　構（第三調査区）1　ＳＢ－１、Ｐ－１土師器皿出土状況

2　ＳＢ－１、Ｐ－１須恵器瓶子出土状況

19 遺　構（第三調査区）1　ＳＢ－１、Ｐ－２土師器皿出土状況

2　ＳＢ－１、Ｐ－２須恵器瓶子出土状況

20 遺　構（第三調査区）1　ＳＢ－４、Ｐ－１土師器皿出土状況

2　ＳＰ－７黒色土器椀出土状況

21 遺　構（第四調査区）1　ＳＤ－16

2　ＳＤ－18・19・20

22 遺　構（第四調査区）1　ＳＤ－16　堰

2　ＳＤ－16　遺物出土状況

23 遺　構（第四調査区）1　ＳＤ－17

2　ＳＤ－13・14

24 遺　構（第四調査区）1　ＳＢ－７

2　ＳＢ－13

25 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１

26 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１

27 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１

28 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１

29 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１

30 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－１

2　ＳＲ－１

31 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－１

2　ＳＲ－１

32 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－１

2　ＳＲ－１

33 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
34 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
35 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
36 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
37 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
38 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
39 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
40 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－1
2　ＳＲ－1
41 遺　物（第一調査区）ＳＲ－2
42 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－2
2　ＳＲ－2
43 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－2
2　ＳＲ－2
44 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－2
2　ＳＲ－2
45 遺　物（第一調査区）ＳＲ－3
46 遺　物（第一調査区）ＳＲ－3
47 遺　物（第一調査区）ＳＲ－3
48 遺　物（第一調査区）ＳＲ－3
49 遺　物（第一調査区）ＳＲ－3
50 遺　物（第一調査区）ＳＲ－3

51	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
52	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
53	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
54	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
55	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
56	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
57	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
58	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
59	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
60	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
61	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
62	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
63	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
64	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３
65	遺　物（第一調査区）	1	ＳＲ－３
		2	ＳＲ－３

66 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－１
　　2　ＳＲ－３

67 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－２、ＳＲ－３
　　2　ＳＲ－３

68 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－３
　　2　ＳＲ－３

69 遺 物(第一・二調査区)第一調査区ＳＲ－１
　　第二調査区ＳＤ－１

70 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１、ＳＲ－２

71 遺　物（第一調査区）ＳＲ－１、ＳＲ－３

72 遺　物（第一調査区）ＳＲ－２、ＳＲ－３

73 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－３
　　2　ＳＲ－３

74 遺　物（第一調査区）1　ＳＲ－３
　　2　ＳＲ－３
　　3　ＳＲ－２

75 遺 物(第一・二調査区)1　第一調査区ＳＲ－３
　　2　第二調査区ＳＤ－１

76 遺　物（第二調査区）1　ＳＤ－１
　　2　ＳＤ－１

77 遺　物（第三調査区）1　ＳＤ－１
　　2　ＳＢ－４、ＳＰ－１、ＳＰ－２、ＳＰ－４、
　　ＳＰ－５、ＳＰ－７、ＳＰ－８

78 遺　物（第三調査区）ＳＢ－１、ＳＰ－３、ＳＰ－６

79 遺　物（第三調査区）1　ＳＢ－１
　　2　ＳＢ－２

80 遺　物（第三調査区）1　ＳＢ－１
　　2　ＳＢ－１、ＳＢ－４

81 遺　物（第三調査区）ＳＸ－２、ＳＸ－３

82 遺　物（第三調査区）1　ＳＸ－３

2　ＳＸ－３

83 遺　物（第四調査区）1　ＳＤ－３、遺構面

2　ＳＤ－２、ＳＤ－３、遺構面

84 遺　物（第四調査区）ＳＤ－15、ＳＤ－16、ＳＤ－17、ＳＢ－10、ＳＢ－12、ＳＰ－９、ＳＰ－13、遺構面

85 遺　物（第四調査区）ＳＤ－13、ＳＤ－14、ＳＤ－19

86 遺　物（第四調査区）1　ＳＢ－８、ＳＢ－10、ＳＰ－９、ＳＰ－10、ＳＰ－11、ＳＰ－12

2　ＳＤ－19

87 遺　物（第四調査区）1　ＳＤ－16、堰

2　ＳＤ－16、堰

Ⅰ　調査に至る経過

守山市石田町に滋賀県住宅供給公社が宅地造成事業を計画したのに際し、近隣に弥生時代中期の方形周溝墓群を検出した石田遺跡があり遺跡の存在が予想されたため、滋賀県教育委員会は昭和60年9月と昭和61年2月の2回に分けて、造成予定地20,000㎡内を対象に埋蔵文化財確認調査を行った。その結果、弥生時代中期、古墳時代初頭、平安～鎌倉時代の遺構、遺物を確認した。そこで当該地を石田三宅遺跡として周知するに至り、事前に発掘調査の必要が生じた。①

県住宅供給公社は第1期宅地造成事業を昭和62年度に計画していたために、昭和61年度に発掘調査を県教委に依頼した。ところが調査機関である㈶滋賀県文化財保護協会では他の発掘調査との調整がつかず、本調査に担当者を派遣することが困難な状況であった。そこで県住宅供給公社と県教委、㈶県文化財保護協会とで協議を行った。その結果、昭和58年度から同じく県住宅供給公社の宅地造成事業に伴う発掘調査として守山市横江遺跡を継続調査していたが、その調査を一時停止して石田三宅遺跡の発掘調査を優先させることになり、石田三宅遺跡の調査終了後にまた横江遺跡の調査を再開することになった。②ところが横江遺跡の調査は守山市教育委員会と共同で行っていたため、石田三宅遺跡の調査を県が単独で行うのか、それとも守山市と共同で行うのかという問題が生じた。ところが幸いにも守山市教育委員会の配慮により職員を派遣していただけることになり、横江遺跡と同じ調査体制で石田三宅遺跡を調査することになった。

そして試掘調査の結果をもとに用地内10,000㎡を対象に発掘調査を行うことになった。現地調査は昭和61年4月1日から同9月30日の予定地で開始した。

註

①仲川　靖『石田遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1985

②木戸雅寿・宮下睦夫『横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1987

（森）

II　調査の方法と経過

調査対象地を4つの調査に分けて、第1調査区から第4調査区へと順次調査を行った。第1調査区と第2調査区は農道や用水、水田の関係で調査区を一度に調査することが出来なかったので、各調査区の半分を調査し、その排土は残りの半分に置き、その部分の調査が済むと土を反転させ残り半分を調査する方法をとった。第3調査区調査時は排土を第4調査区へ、第4調査区調査時は第3調査区へと排土を置くことが出来たのでそれぞれの調査区を一度に調査することが出来た。

調査はすべて耕土をバックフォーにより除去した後に人力によって精査し遺構検出、掘込を行った。そして図面、写真によって記録化を図った。

また調査期間中の6月後半から7月前半にかけては梅雨に悩まされ、数日にわたる豪雨で、調査区全体が水没してしまうことがたびたびかさなり、連日排水作業の日が続いたり、遺構が崩れるなどで調査の進行にも影響した。梅雨が明けると今度は逆に雨が降らず、遺構面が粘質土であるためひび割れが生じ、遺構の検出や掘込を困難にした。このような状況の中で多数の作業員、調査補助員の方々の参加、協力を得ることが出来て、9月30日に現地調査を完了させることが出来た。

（森）

第１図　調査区配置図

III　位置と環境

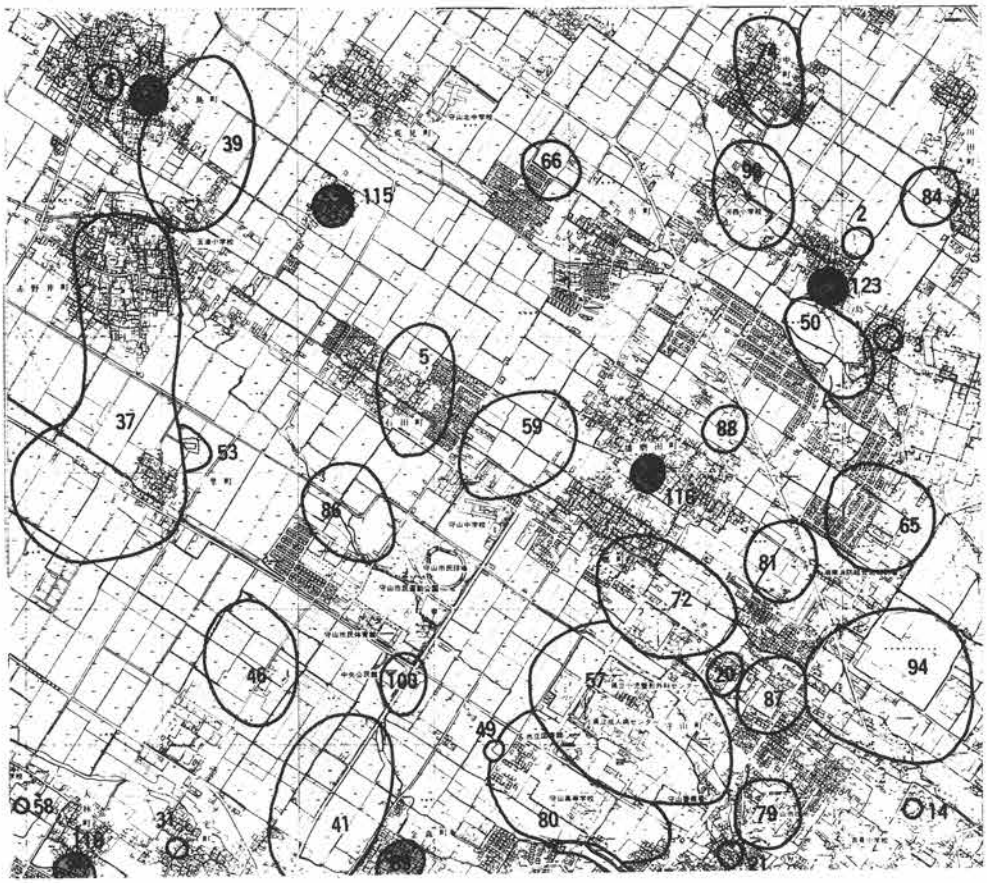
石田三宅遺跡が所在する守山市は太古から野洲川が運んだ土砂により形成された沖積地である。野洲川は「近江太郎」の異名をとるあばれ川で、現代に至るまで度重なる氾濫の歴史をくり返してきた。市内にはそのおり生じた分流が小河川となって現在もなお多く流れている。本遺跡を縦断する天神川もその一つで、遺跡は天神川が形成した微高地上に立地している。

周辺部で最古の遺跡は縄文時代晩期の遺物を出土した播磨田西遺跡である。近年守山においては縄文時代後期～晩期における遺物の発見数が増加してきており、従来地山と考えてきた土層の再確認が提起される。弥生時代には中期中葉に盛期をもつ寺中遺跡が北西約150mに位置し、さらに周辺にはそこから分かれた金森西・金森東・中島の各遺跡が分布しており、寺中遺跡を核とした小宇宙を形成していたといえる。中期後葉には下之郷遺跡が環濠集落として成立し、野洲川流域の中の中枢に成長する勢いが認められる。この時期には石田遺跡・播磨田酒手遺跡・八ノ坪遺跡・吉身西遺跡・金森東遺跡など墓地を主流とする遺跡が誕生してきており、核集落である下之郷遺跡との強い結びつきが想起される。後葉に下之郷遺跡が廃棄されると、東方約600mの地点に一部重複するような形で二ノ畦横枕遺跡が誕生してくる。二ノ畦遺跡は最近の調査で径400mに達する二重の環濠が考えられており、その内部に３～４の単位が確認され、さらに未調査部分を考えるとそれに倍する数が想像される。この環濠の廃棄こそ後期社会の突入であった。県立成人病センター周辺には金森東・吉身西遺跡で後期の集落が検出されていて、比較的短期（１～２型式）の存続であったことが知られている。環濠から解き放たれたムラが短期のうち集合・離散をくり返したことを物語るといえる。引きつづいて古墳時代前期には金森東遺跡で集落が形成されており、吉身西遺跡でも分散したムラが営まれている。中期には境川が氾濫をくり返したのであろうか。金森西遺跡でみるように数多くの小水路が形成されている。後期にはその中枢が現在の JR 線付近から南側に集中し、大規模集落が形成される。赤野井遺跡でも６世紀後半から掘立柱集落が成立し、平安時代まで続いており、その性格が三宅（屯倉）に関連するものと注目されている。又白鳳期の瓦が出土していて、建物の性格が課題となっている。平安時代以降は調査例が少なく明らかにし難いが、川中遺跡・中島遺跡・金森東遺跡で集落が検出されている。川中遺跡は出土遺物に占める施釉陶器の量が多く、又中島遺跡は青銅製鋏、金森東は金銅製帯金具と印刻花文入り緑釉陶器が出土していて、いずれ

も通常の集落とはやや異なる一面をもつ。

以上のように石田三宅遺跡の周辺には縄文時代から連綿と続く歴史が豊富にあり、石田三宅遺跡はこれら遺跡群と密接なつながりの上において成立し、やがて衰退していったのである。

（宮下）



第２図　周辺遺跡分布図

2	益ノ塚遺跡	41	金森西遺跡	69	金森城遺跡	90	長塚遺跡
3	小島薬師堂遺跡	46	三宅北遺跡	72	下之郷遺跡	94	二ノ畦遺跡
4	観音堂遺跡	49	庭塚遺跡	74	中北遺跡	100	中島遺跡
5	石田遺跡	50	阿比留遺跡	79	吉身中遺跡	110	大林城
14	神輿塚遺跡	53	狐塚遺跡	80	金森東遺跡	114	矢島御所
21	養源寺遺跡	57	吉身西遺跡	81	播磨田酒寺遺跡	115	布施野城
26	女天神遺跡	58	冬塚遺跡	84	川原田遺跡	116	播磨田城
31	三宅薬師堂遺跡	59	播磨田西遺跡	86	**石田三宅遺跡**	123	小島城
37	赤野井遺跡	65	播磨田東遺跡	87	横枕遺跡		
39	寺中遺跡	66	川中遺跡	88	八ノ坪遺跡		

Ⅳ　調査の結果

1. 第１調査区（第３図）

天神川と守山川が合流する地点に接する調査区で、この調査区は他の調査区や周辺の地形からも水田面にして約50cm程低いところである。この調査区をはさむ両側から調査区に向って地形が落ち込んでいて当調査区が谷状になっていて横に延びていることからも、調査前から旧河道の検出が予想された。基本層序は耕土、床土、灰色粘土、青灰色粘土が遺構面となっていて、耕土下約80cmのところである。

(1)　遺構

旧河道（SR）

基本的には一条の旧河道とその支流が検出されたのだが、調査の都合上、調査区内を半分調査して反転せざるを得なかったので、同じ旧河道を、遺物の出土地点などを考慮して、便宜上 SR-1 と SR-3 とに分け、この支流を SR-2 とした。

SR-1（第３図）

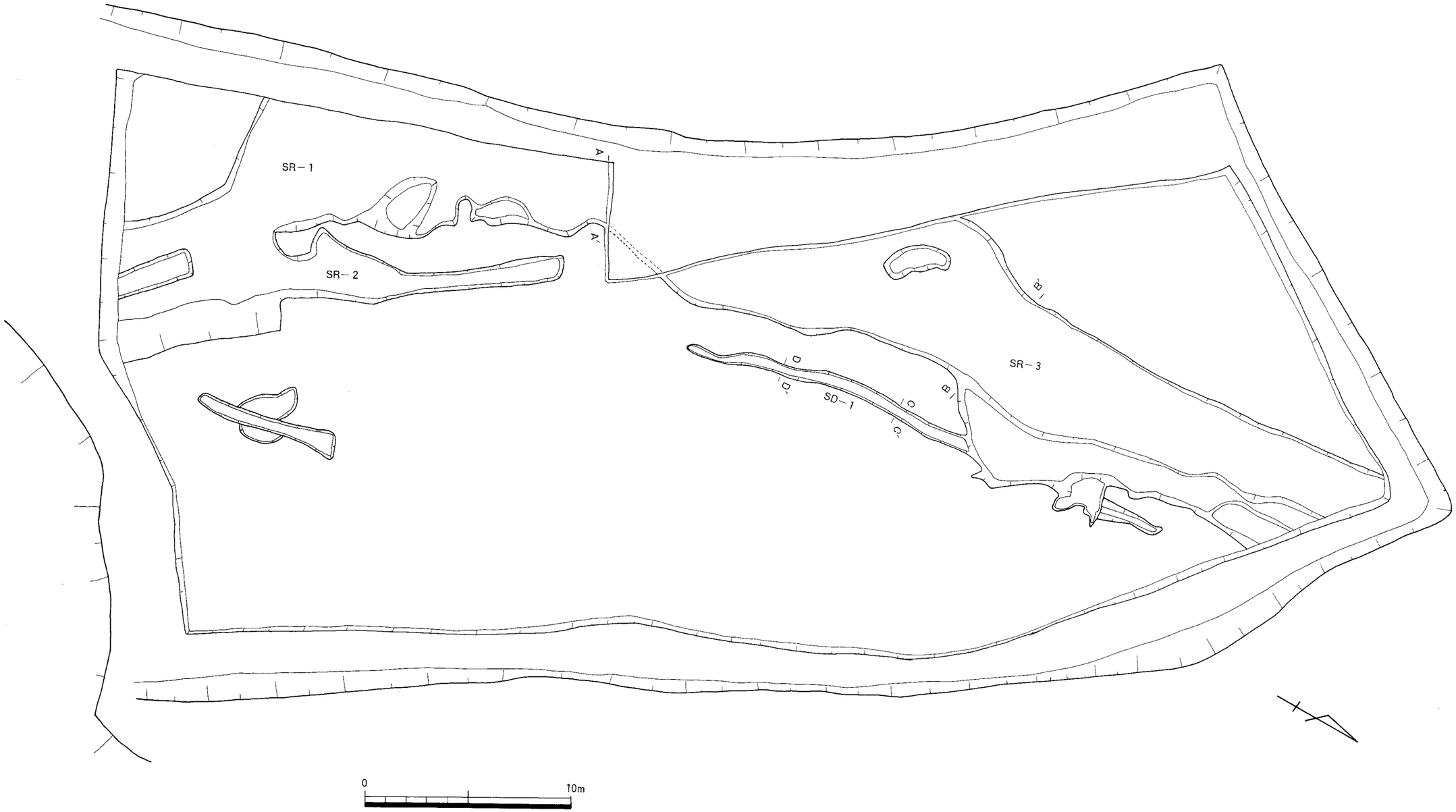
調査区の南コーナーから南西方向に流れるものである。この旧河道の東側のラインはすべて検出できたので旧河道の流れるコースは確認出来た。西側のラインは途中から調査区外に出てしまい、現用水路に重なっていると思われる。幅は、両岸が確認出来た所で5.6mで、深さは80cm～１mである。旧河道は青灰色粘土面から切り込まれて形成されている。埋土は、灰色粘質土が上層に、灰褐色砂土が下層にそれぞれ堆積している。土器・木器等の出土遺物の大多数は下層の砂層中に含まれていた。

SR-2（第３図）

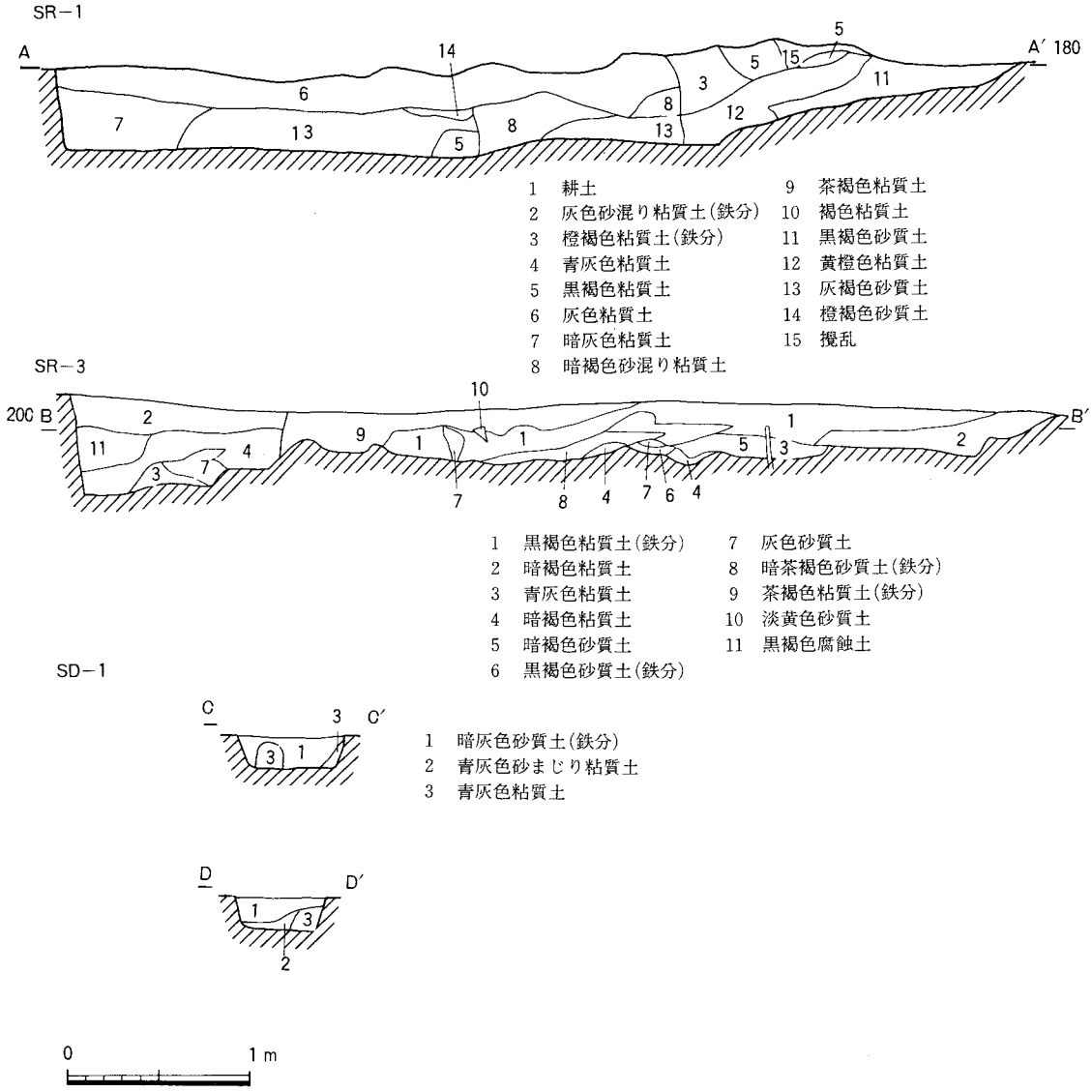
SR-1 の支流である。幅約１m、深さ約50cmである。埋土は暗灰色粘土の単一層であった。ここは SR-1 と異なり砂層もなく遺物は少なかった。底には一部、流木や木片を含んだ腐植土が見られた。

SR-3（第３図）

SR-1 に続くものである。調査区の北半分を南から北へ流れる。農道や堤防の関係で先は調査できなかったが続きは天神川に合流すると考えられる。幅は５～７mで、深さは30cmであり、SR-1 より浅くなっている。SR-1 と同様に青灰色粘土面から切込まれている。埋土は、上層と下層に大別出来て、上層は褐色系の粘質土で、下層は灰色系の砂土であり、粘



第３図　第１調査区遺構図



第４図　第１調査区・遺構断面図

第５図　第１調査区SR－３杭列

土が一部混じる。遺物はここでも下層の砂層から多量出土した。旧河道の中央部には、しがらみと考えられる杭列が検出された。

SR-1 と SR-3

先述のように、調査の都合により、調査区の南半分を SR-1、北半分を SR-3 としたが、本来は一つのつながる旧河道である。当初、天神川から守山川へ至る旧河道と考えたが、昭和62年度の調査で守山川をはさんで第1調査区の反対側を調査したところ、この旧河道の続きが、守山川の旧河道に切られてさらに続くことが確認されたので、天神川の旧河道と考えられる。そして[(1)]後述の出土遺物からみても、古墳時代初頭の短期間に形成されて、短期間で埋没してしまったものである。

SD-1（第3図）

幅60cm、深さ15～20cmの溝である。SR-3 に合流する。遺物は出土しなかった。

SX-1（第5図）

SR-3 中央部分を中心に設けられた杭列である。杭は合計50本検出された。SR-3 の底の青灰色粘土面から、約30～80cmほど土中に打ち込まれていた。そして杭の頭30cmぐらいが外につき出ていた。これは SR-3 の底から打ち込まれていることからも、SR-3 と同時期のものである。しがらみとして機能していたと考えられる。杭列の近くで検出された板材や丸材などの木製品はこのしがらみの部材であった可能性がある。

(1)昭和62年7月～昭和63年3月に県教委・(財)滋賀県文化財保護協会が調査した。

(2) 遺物

第1調査区出土の遺物は SR-1、2、3 から出土したが、その数は整理用コンテナ数にして約200箱である。中には口縁部や胴部の破片が多数含まれているが、実測可能なものに限って報告する。遺物としては古式土師器が圧倒的に多く、須恵器、弥生土器、縄文土器、製塩土器、黒色土器が少量出土した。その他の遺物としては木器、石器、鉄器が出土した。

(ⅰ)土器

第1調査区では古式土師器が大多数であるため、古式土師器に限って形式分類を行って報告することにする。そして便宜上、縄文土器・弥生土器・須恵器は各遺構出土遺物の最後に報告する。

甕A　受口状口縁をなすもの

I　口縁端部が内傾するもの

a　口縁端部をつまみ出すもの

b　口縁端部をつまみ出さないもの

II　口縁端部が外傾するもの

III　口縁端部に水平な面をもつもの

a　口縁端部をつまみ出すもの

b　口縁端部をつまみ出さないもの

甕B　「く」字口縁をなすもの

I　直線的に立上るもの

II　内弯して立上るもの

III　外反して立上るもの

甕C　「S」字口縁をなすもの

甕D　二重口縁をなすもの

壺A　単純口縁をなすもの

I　直線的に立上るもの

II　外反しながら立上るもの

III　内弯しながら立上るもの

壺B　二重口縁をなすもの

壺C　口縁端部の外側に幅広の面をもつもの。パレス式系統のもの

器台A　受部が直線的に立上るもの

器台B　受部端部を上方へつまみ上げるもの

器台C　受部が内弯しながら立上るもの

器台D　大型品で口縁端部に幅広の面をもつもの

小型丸底壺A　口縁径が体部径を上回るもの

小型丸底壺B　口縁径と体部径がほぼ等しいもの

小型丸底壺C　口縁径より体部径のほうが上回るもの

鉢A　口縁部が一段屈曲するもの、あるいは屈曲しないもの

鉢B　口縁部が二段に屈曲するもの

その他高杯、有孔鉢、甕　壺の底部は便宜上分類はしなかった。また縄文土器、弥生土器、須恵器に関しても特に分類は行わなかった。

SR-1 出土遺物（第6図～第19図）

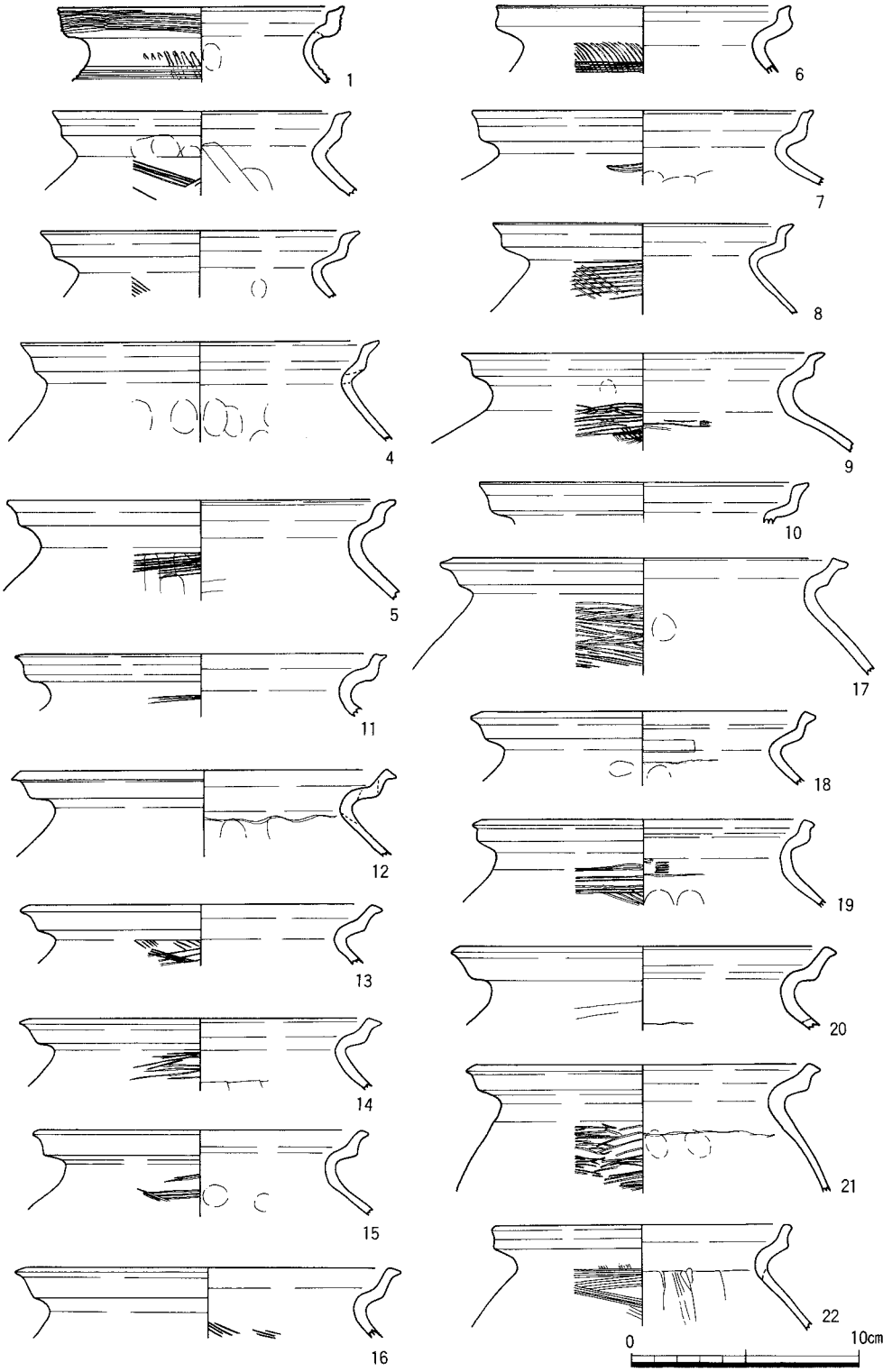
遺物は灰褐色砂層（第3層）の上面から出土した。その上層の灰色粘土層により一度に埋ったため、遺物はほとんどローリングを受けておらず残りは非常に良好であったが、大多数は破片であった。

甕AⅠ-a（第6図2～5・8・9）

2は胴部外面にハケ目を、内面に板状工具でのナデが見られる。4は胴部内、外面ともに指頭圧痕が見られる。5は胴部外面に縦方向に板状工具によるナデを施した後に、横方向のハケ目を施している。8・9は胴部外面にハケ目を施している。口縁部はいずれも内・外面にナデを施している。

甕AⅠ-b（第6図1・6・7・10）

1は口縁部外面に5条1単位の櫛描沈線が巡っていて、口縁部全体が厚く作られている。



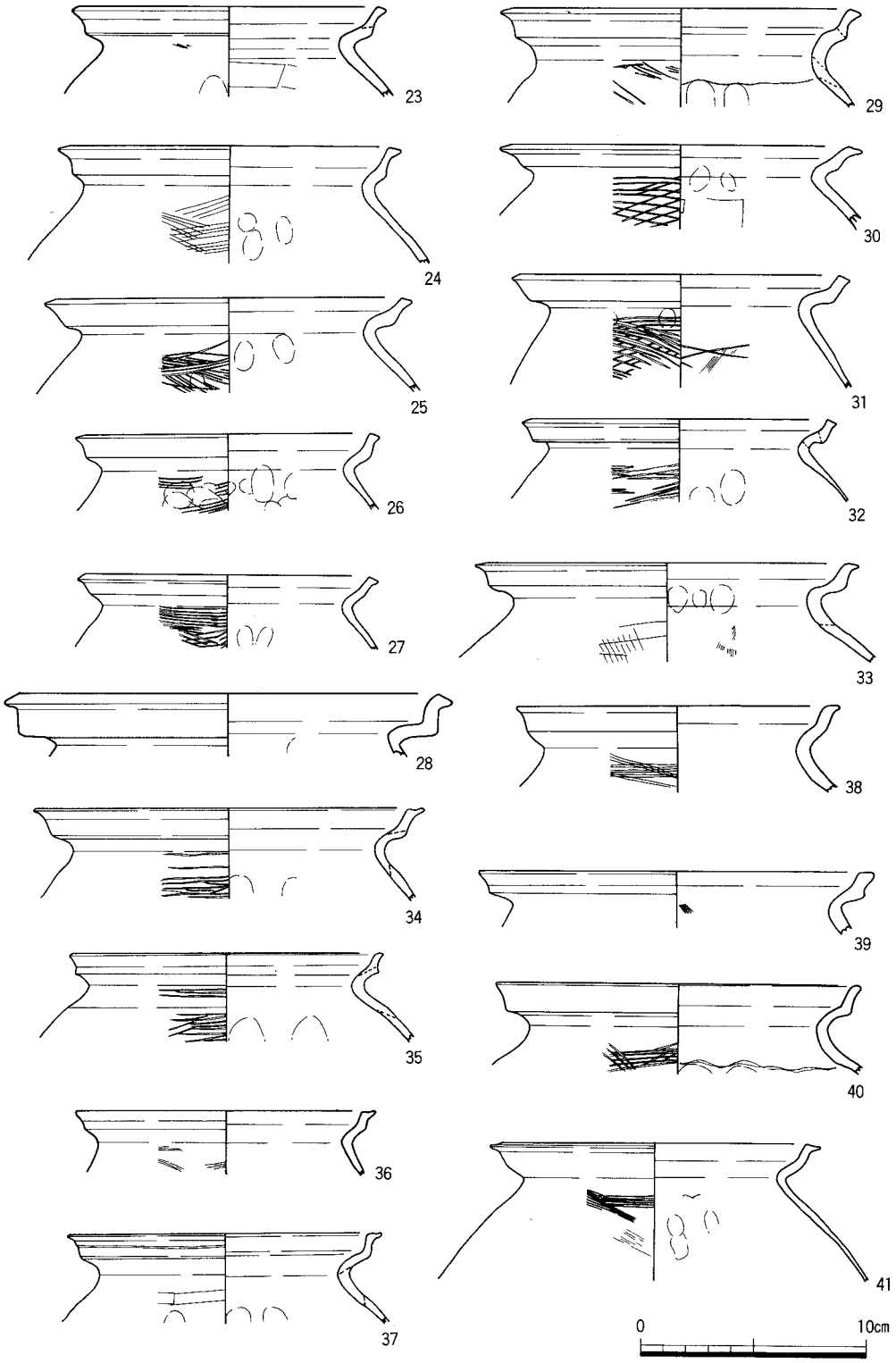
第６図　第１調査区８Ｒ－１出土土器実測図

胴部上方外面には、縦方向の粗いハケ目を施した後に、現存で3条の櫛描沈線による直線文が施されている。内面はナデている。6は口縁部内・外面ともにナデのみで、厚く作られている。胴部外面は、縦方向のハケ目の後に横方向にハケ目を施している。内面はナデている。7・10ともに口縁部内・外面ともにナデていて、このナデのため口縁端部がつまみ出しているように見える。

甕A-II（第6図11～22、第7図23～32）

11は口縁部端面はゆるやかに外傾しているが端部は鋭くなっている。12は口縁部端面は鋭く外傾している。口縁部と胴部との境には接合痕が明瞭に残り、接合の際の指頭圧痕も残っている。13は胴部外面にはハケ目が残る。14は胴部外面にはヘラ描沈線文を施し、内面には板状工具による断続的なナデが施されている。15は胴部外面に横方向のハケ目を施し内面はナデている。口縁端面は外傾しているが端部はつまみ出してはいない。16は胴部内・外面ともにナデている。17は胴部外面はハケ目を、内面はナデている。18は口縁部の立上る部分の内面に板状工具でナデを施している。19は口縁部は厚く作ってあり、端部はつまみ出していない。胴部外面には斜め方向のハケ目の後に、横方向にハケ目を施している。内面の上方に一部ハケ目が見られる。20も口縁部端部はつまみ出してはいない。21は口縁部をナデることによって端部を引き出している。胴部外面には粗いハケ目が施されている。内面の上方には接合痕が見られ、接合部には指頭圧痕が見られる。22は口縁端面の傾斜はゆるやかで、端部はつまみ出さない。胴部外面には横方向と斜め方向のハケ目が施されている。内面は板状工具でナデた後に指ナデを施している。23は胴部外面はナデのみであるが、内面には横方向のヘラ削りが施されている。24～27は胴部外面はハケ目を、内面はナデているが、26は内、外面ともに指頭圧痕が認められ、雑な作りである。28は口縁部は横に開いた後に上方へ立上り、端部を横へつまみ出し、端面が外傾するもので、受口状口縁の受部がしっかりとしているものである。29は口縁部を強くナデている。胴部外面はハケ目の後にナデている。一部ヘラ状工具の痕が見られる。内面には接合痕と指頭圧痕が見られる。30は胴部外面に横方向と斜め方向に粗いハケ目が施されている。内面には横方向のヘラ削りが施されている。31は口縁端部をつまみ出しておらず、胴部外面にはハケ目が施されている。32も同様に口縁端部はつまみ出していない。胴部外面にはハケ目の後に、一部に櫛描沈線が見られる。内面はナデている。

II類は、いずれも口縁部内・外面はナデている。そして口縁部外面はすべて無文となっ



第７図　第１調査区SR－１出土土器実測図

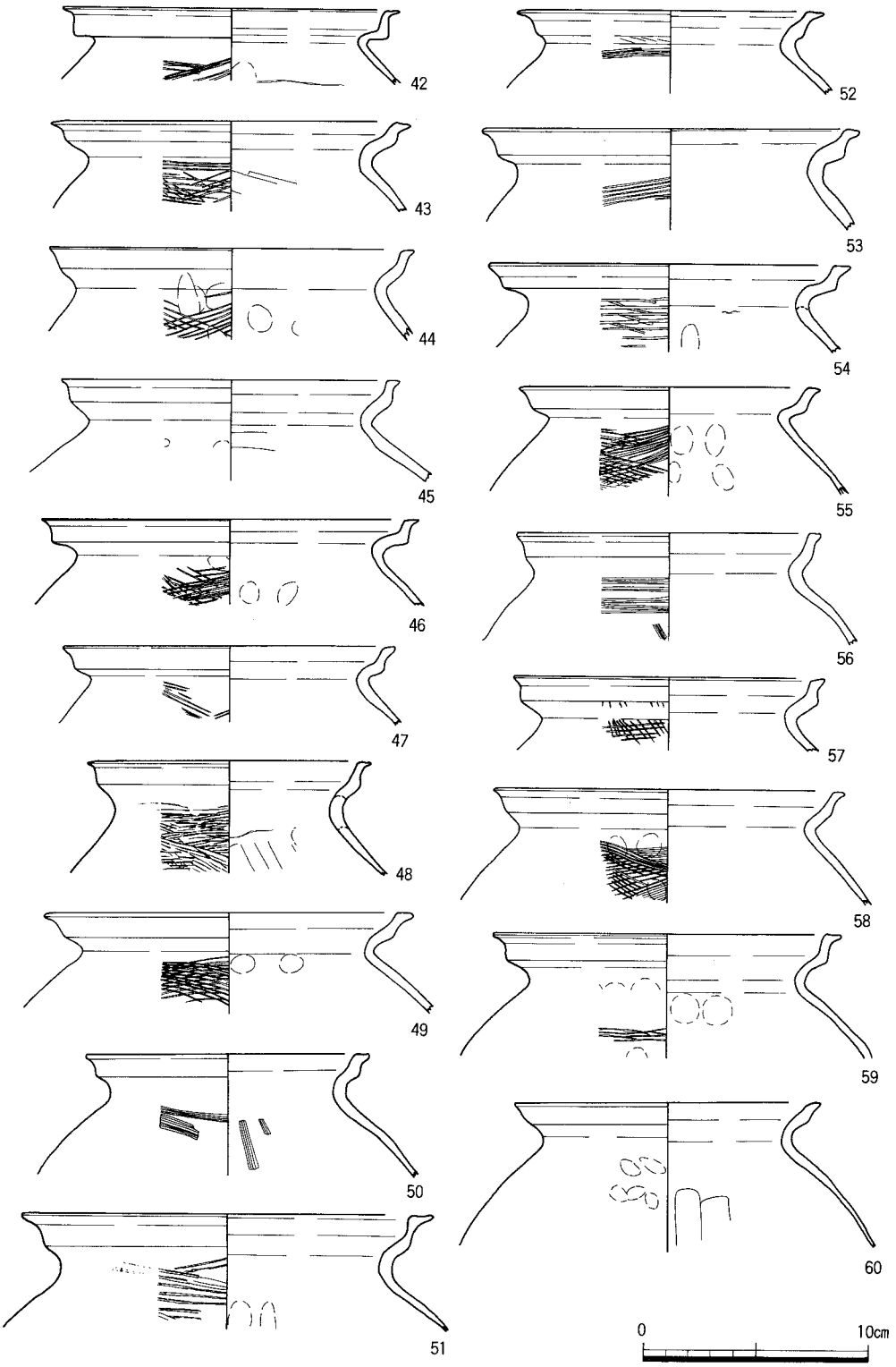
ている。胴部外面はハケ目も粗く、ヘラ状工具による施文も雑になっている。

甕AIII-a（第7図33・34・36～38・41、第8図42・43・44・46～54・57・59）

33は胴部外面は縦方向のハケ目を施した後にナデている。内面もハケ目を施した後にナデを施している。また外面には煤が付着している。34は口縁部の端面にナデにより凹線状にくぼんでいる。また胴部外面はヘラ状工具による直線文が見られる。煤が付着している。36は口縁部と胴部の境は鋭い稜をもって屈曲する。胴部外面はハケ目を施した後にナデている。37は口縁部外面に、ヘラ状工具による沈線が1条巡っている。胴部外面には一部板状工具によるナデが見られる。38は口縁部の屈曲はゆるく、なだらかに立上る。胴部外面は横方向の後に斜め方向にハケ目を施している。41も口縁部はなだらかに2段に立上るが明確な稜をもっては立上っていない。胴部外面にはハケ目が施されている。内面には一部接合痕が残る。42はハケ目はほぼ真横に開いた後に真上に立上り、端部を強く横へつまみ出していて、受口部が深くなっている。胴部外面はハケ目を施し、内面はナデている。43は胴部外面に、粗いハケ目を交互に斜めに施している。内面は板状工具によりナデている他、指頭圧痕が見られる。44は口縁は斜め上方に立上った後に、そのままなだらかに立上り、端部を横につまみ出している。胴部外面にはハケ目を施している。46・47ともに口縁部は鋭い稜をもって立上り、胴部外面にはハケ目を施している。48は口縁部から胴部にかけて大きくゆるく曲るため壺のような形態をとる。胴部外面は、不定方向のハケ目が一面に施されている。内面は板状工具によるナデと指押えがみられる。また一部に接合痕を残している。49・51・52・53は胴部外面にハケ目を施している。50は胴部の内・外面ともハケ目を施した後にナデているが、ハケ目が一部残っている。54は胴部外面に櫛描直線文を施している。57は口縁部下半から胴部にかけて、ハケ目を施した後に、口縁部下半はナデてハケ目を消しているが、口縁部に一部ハケ目が残っている。59は口縁部は斜め上方に大きく立上った後に上方に立上り、端部を大きく横へつまみ出す。胴部外面にはハケ目を施した後にナデを施している。内・外面ともに指頭圧痕が多く残っている。

甕AIII-b（第7図35・39・40、第8図45・55・56・58・60）

35は口縁部の2段に立上った部分を強くナデているため、立上り部には鋭い稜がついている。胴部外面はハケ目とヘラ状工具による直線が見られる。外面には煤が付着している。39は口縁端部にしっかりとした面をもつ。胴部内面には一部ハケ目が残る他はナデている。

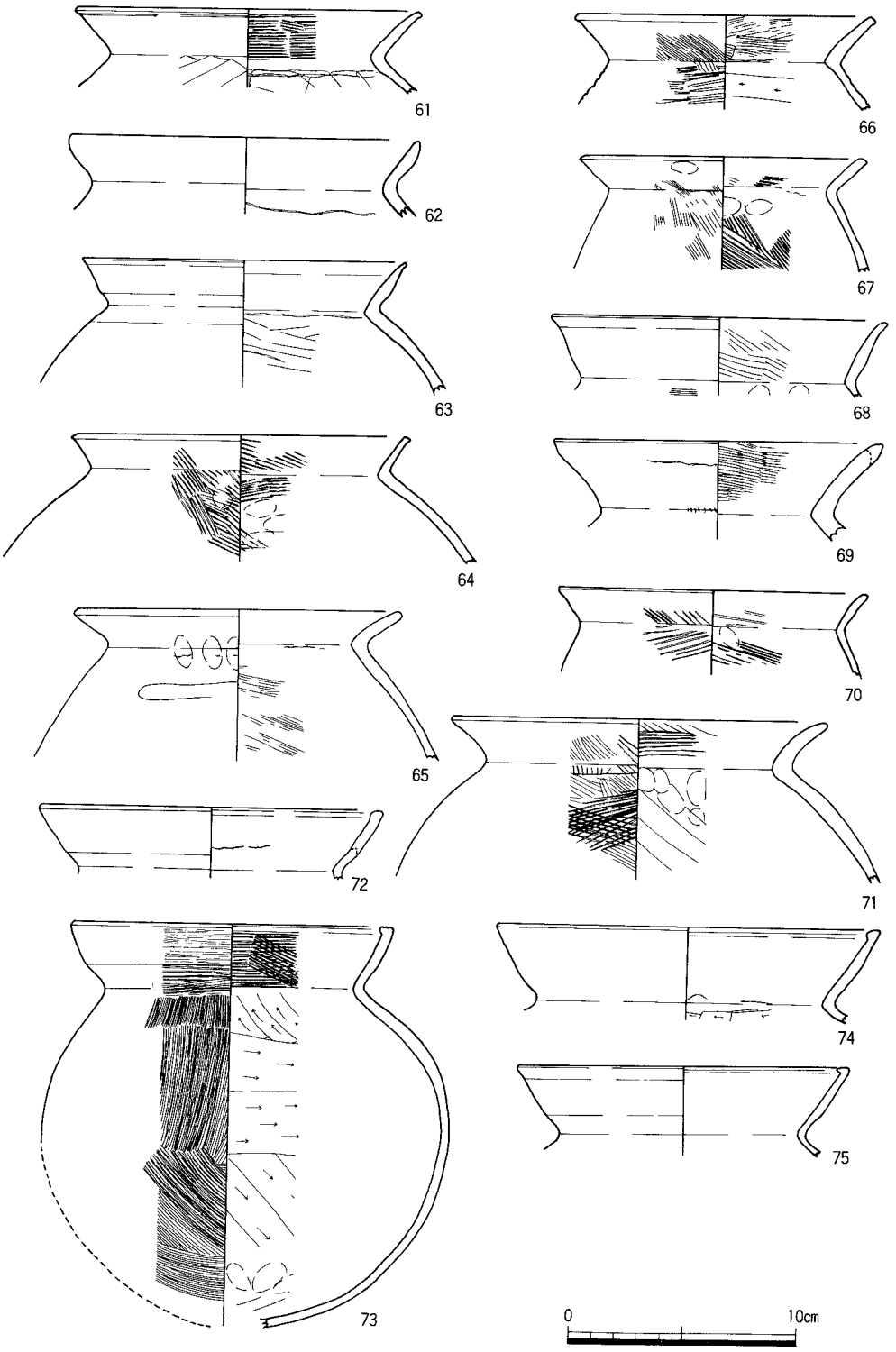


第８図　第１調査区SR－１出土土器実測図

40は斜め上方に立上った後に、上方へやや長めに立上ったまま終る口縁を持つ。胴部外面にはハケ目が施され、内面は接合痕付近を中心に指頭圧痕が残っている。外面に煤が付着している。45は口縁部を強くナデているために、端部がつまみ出されているように見える。胴部内面には板状工具によりナデた痕がある。55はやや斜め上方に開いた後に、斜め上方へ立上る口縁をもつ。胴部外面は斜め方向にハケ目が施される。内面には指頭圧痕が多く残っている。56は口縁部はなだらかに2段に立上る。胴部外面には、櫛描直線文が施されその下半は、ハケ目を施した後にナデている。58は口縁部をナデることにより、つまみ出しているように見えるものである。胴部外面にはハケ目を施し、その後に指で押えている。外面の一部に煤が付着している。60はわずかに屈曲しながら立上る口縁を持つ。胴部外面には指頭圧痕が多く残る。内面には指で器壁をかき取った痕が見られる。

甕B－Ⅰ（第9図61～64・66・67・70、第10図78　第11図91・92）

61はほぼ直線的に外方にひらき、端部は若干外側に肥厚する口縁をもつ。口縁部の外面はナデているが、内面には横方向のハケ目が施されている。胴部外面には斜め方向にヘラ削りが施される。また口縁部と胴部の接合痕が内面に見られ、それを消すようにヘラ削りが施されている。外面には煤が付着している。62もほぼ直線的に外方にひらく口縁をもち、端部は丸く収める。ナデているため外面はやや内弯気味である。63は口縁は直線的に外方にのび、端部はやや外側へつまみ出すようにして丸く収めている。口縁は強くナデているために稜がついている。胴部外面はナデているが、内面は横方向にヘラ削りを施している。煤が外面に付着している。64は口縁は短く直線的に外方へひらき、端部は外方へつまみ出しながら外傾する面をもつ。口縁部は内・外面ともにハケ目が施されている。胴部外面は、斜め方向にハケ目を施した後に一部指押えを行っている。胴部内面は横方向のハケ目を施した後に一部ナデており、その上に指押えを行っている。また胴部外面には黒斑が見られる。66は直線的に外方へのび、端部は外傾する面をなす口縁をもつ。口縁部の外面は斜め方向のハケ目が、内面は横方向のハケ目が施されている。また口縁部と胴部の境は鋭い稜をもって屈曲している。胴部外面には横方向のタタキが施され、内面にはヘラ削りが施されている。67は口縁が直線的に外方にひらき、端部は丸く収めるもので、全体に厚みを帯びている。口縁部内・外面はナデているが、一部にハケ目が残っている。胴部外面はハケ目を施しているが、頸部には接合痕が残り、ハケ目を施した後に横方向にナデている。胴部内面は、ハケ目を施しているが、上部には指頭圧痕が残っている。70は口縁は直線的に



第９図　第１調査区SR－１出土土器実測図

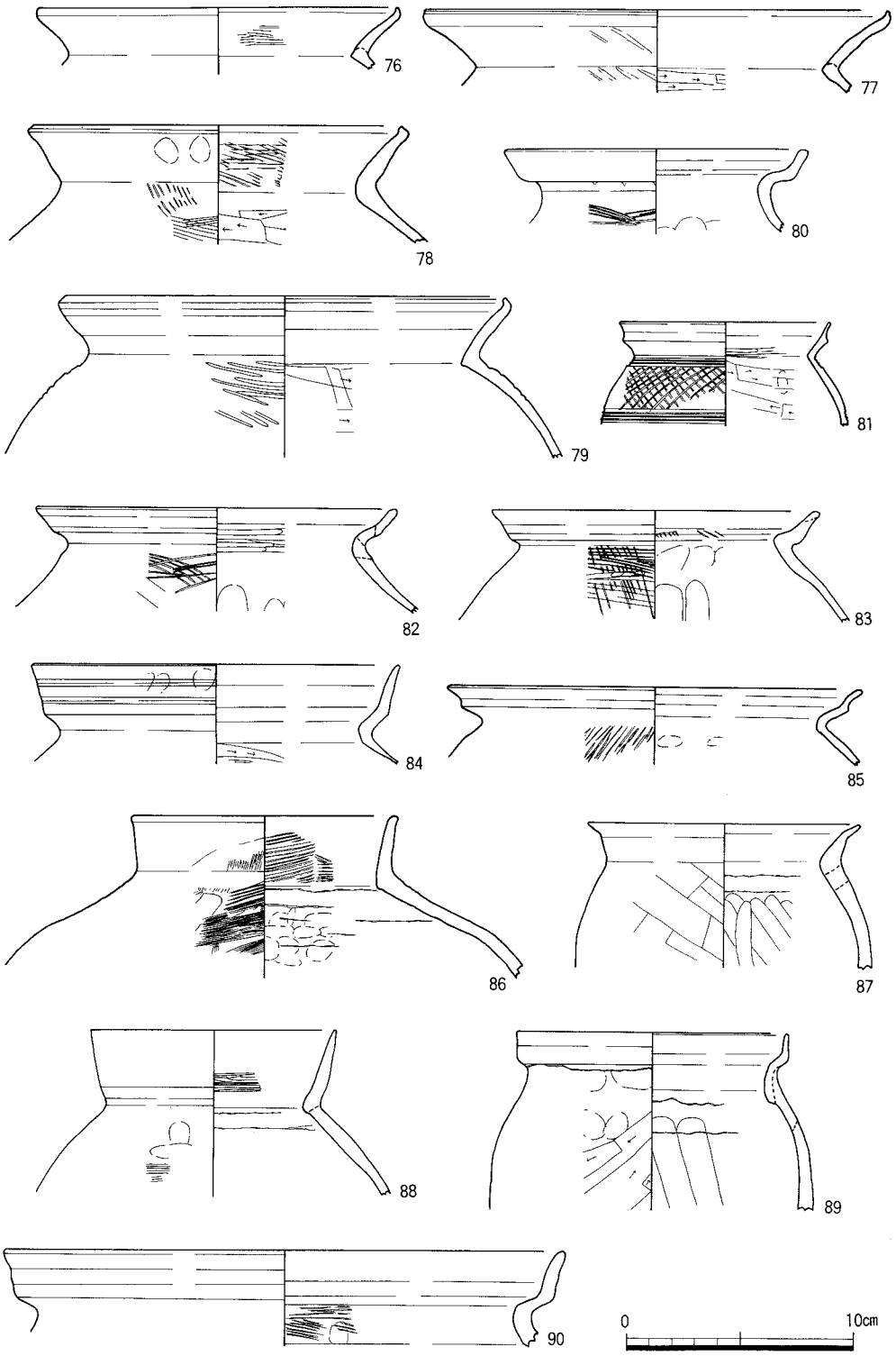
外方にひらき端部は丸く収めている。口縁部は内・外面ともにハケ目を施した後に、横方向にナデている。またナデた時の稜が見られる。胴部外面は粗いハケ目が施されている。内面にもハケ目が施されている。また外面には煤が付着している。78は口縁はほぼ直線的に外方にのび、端部は内側を若干つまみ上げている。口縁部外面は横方向のナデと指押えが施され、内面はハケ目が施されている。口縁部は全体として厚く作られている。胴部外面はハケ目が施されている。また内面には、横方向にヘラ削りが施されている。91は口縁内面が若干屈曲しながらも直線的にのびる。頸部の内面にヘラ削りが見られる。92は先細りしながら直線的にのびる口縁をもつ、胴部内面はヘラ削りである。

甕B-II（第9図72～75）

72はやや内弯しながら立上り、端部は内側に若干肥厚させながら丸く収める口縁をもつ。口縁部の内面には接合痕が残っている。また口縁部外面に煤が付着している。73は口縁は内弯しながら立上り、端部を内側へ肥厚して面をなす。口縁部外面は横方向のハケ目の後にナデている。口縁部内面にもハケ目を施している。胴部は球形をなし、中央部に最大径がくる。胴部外面の上半は縦方向のハケ目が下半は斜め方向、底部付近は横方向にそれぞれハケ目が施されている。胴部内面は、上半と下半には斜め方向のヘラ削りが、中央部には横方向のヘラ削りが施されている。底部付近には指頭圧痕が見られる。また外面には煤が付着している。74はやや内弯して立上り、端部は内側に肥厚し、内傾する面をもつ口縁形態である。内面には一部ヘラ削りが認められる。75も内弯気味に立上り、端部を内側につまみ出すことにより肥厚させる口縁をもつ。口縁部は内・外面ともにナデている。

甕B-III（第9図65・68・69・71、第10図76・77・79）

65は短く外反するやや厚めの口縁をもつ。口縁部は内・外面ともナデているが、胴部と接合する時にうまく接合出来なかったのか、いくつも指で押えた痕が残っている。胴部外面はナデている。内面にはハケ目が施されている。68は口縁は外反しながら立上り、端部は丸くおさめる。口縁部外面には強くナデが施され、内面には粗目のハケ目が施されている。69はゆるく外反する厚手の口縁をもつ。口縁部外面はナデている。内面には断続的にハケ目が施されている。頸部径は短く壺のような形態をとる。71は口縁は短く外反し、端部は丸くおさめる。口縁部外面には斜め方向のハケ目が、内面には斜め方向の後に横方向のハケ目が施されている。胴部外面には斜め方向にハケ目を数回くり返し施している。内



第10図　第１調査区SR－１出土土器実測図

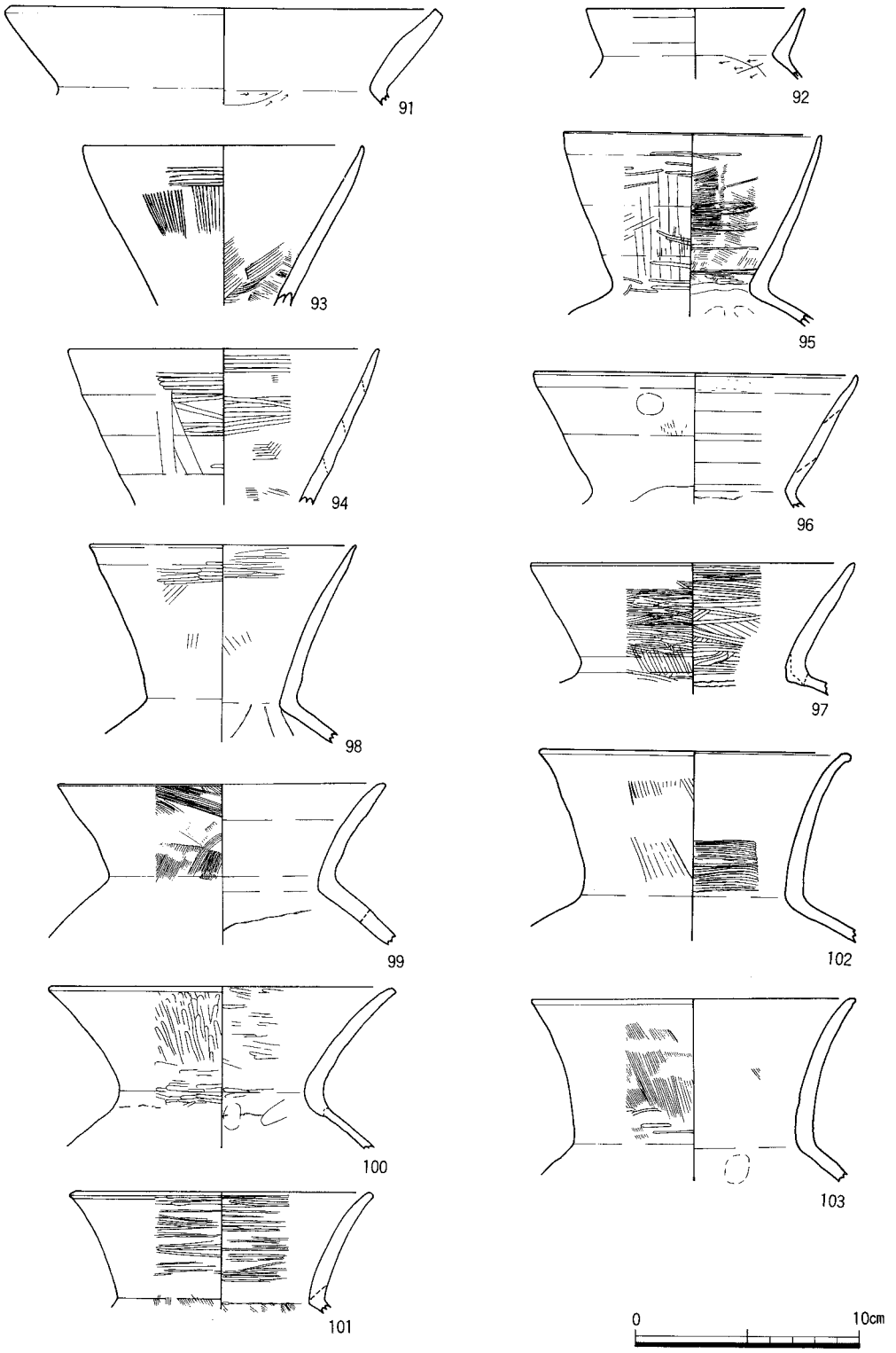
面には、指でナデた痕と指頭圧痕が多く残っている。76の口縁は外反しながら立上り、端部を上方につまみ上げている。口縁部外面はナデている。内面は横方向のハケ目の後にナデている。また頸部内面の屈曲部は鋭い稜をなす。口縁部外面には煤が付着している。77は口縁はゆるく外反しながら立上り、丸みをもたせながら端部を上方へつまみ上げている。また口縁端部の外面には沈線が1条めぐっている。胴部外面には左上りのタタキ目が見られる。また内面には横方向のヘラ削りが施されている。外面に煤が付着している。79は口縁はやや外反しながら立上り、端部は内側斜め上方につまみ上げて、外傾する面をつくっている。頸部内面の屈曲部は鋭い稜をもっている。胴部外面には左上りのタタキを施した後にナデている。内面は板状工具で整形した後に横方向にヘラ削りを行っている。外面には煤が付着している。

甕C（第10図85）

85は口縁部は斜め上方に立上った後に、さらに斜め上方に一気につまみ出していて、端部は丸く収めている。いわゆる「S」字口縁である。口縁部は内・外面ともにナデている。胴部外面は、やや斜め方向に鋭く明瞭なハケ目を施している。内面はナデており、一部に指頭圧痕が認められる。

甕D（第10図80・82～84・89・90）

85は口縁は頸部から大きくカーブを描いて横へ開いた後に斜め上方に立上り、端部は丸く収める二重口縁である。胴部外面には櫛描沈線が、弧を描くように施されている。内面には指押えが見られる。82は口縁はなだらかに2段に屈曲しながら立上る。口縁部は内・外面ともにナデているが、外面にはナデにより凹線状に線が入る。また頸部の内面には横方向にヘラ磨きが施されている。胴部外面はハケ目とヘラ状工具による施文が見られる。また板状工具によるナデも見られる。内面はナデており、指頭圧痕が見られる。外面には煤が付着している。83は口縁は短く横に開いた後に斜め上方にやや外反気味に立上る。口縁部は全体として厚く作られている。胴部外面はハケ目が施されている。内面は指で粘土を削り取った痕が見られる。84は口縁は斜め上方に立上った後に屈曲して長く立上るもので、端部は丸く収めている。口縁部外面は指押えの後にナデて、2条の凹線文を施している。胴部外面はナデており、内面は横方向のヘラ削りを施している。北陸系の土器である。89は口縁は2段に屈曲しながら上方へ立上り端部は丸く収める。口縁部と胴部の接合は雑



第11図　第１調査区SR－１出土土器実測図

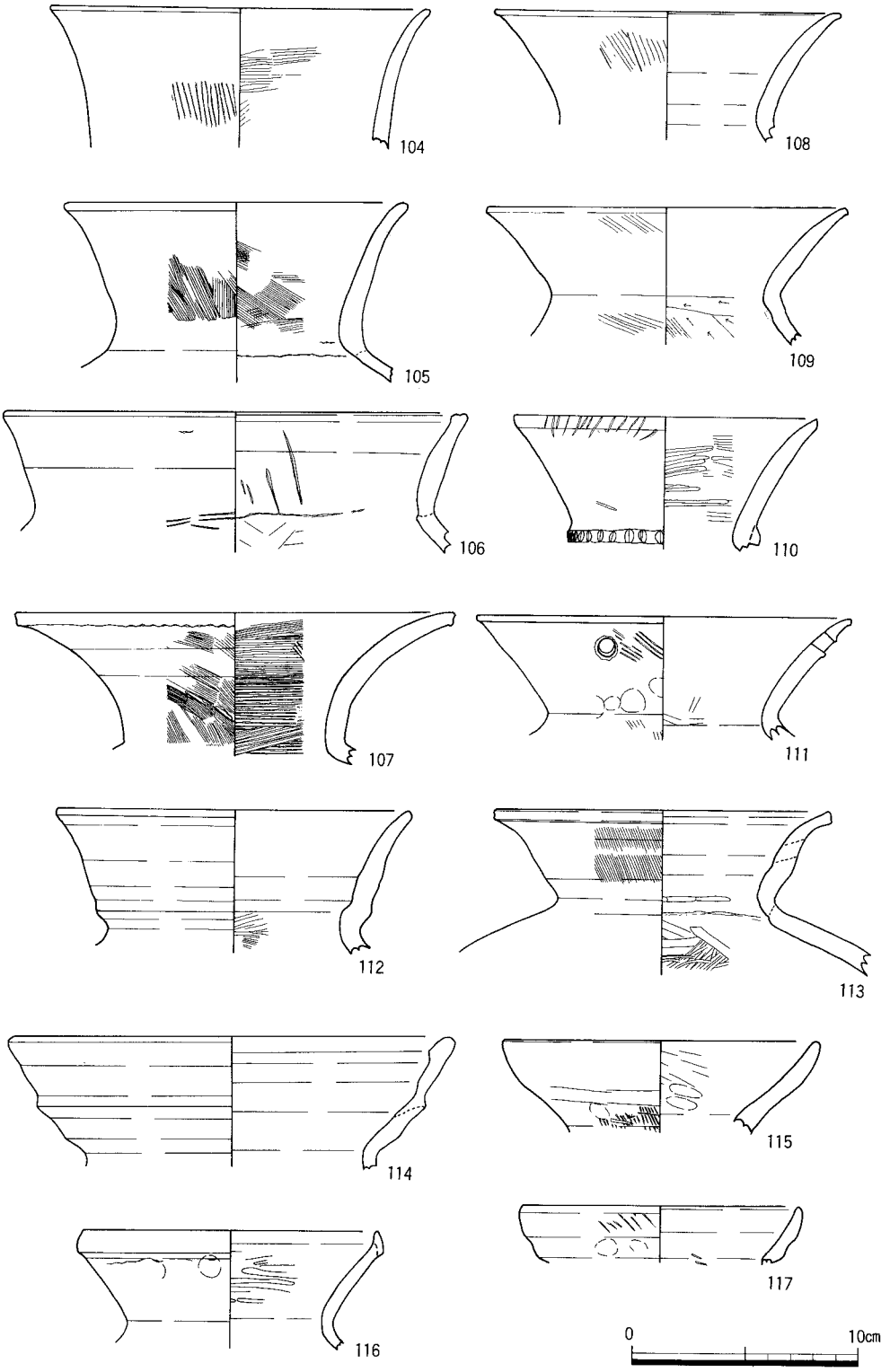
であり、外面に接合痕と指頭圧痕が、内面にも接合痕が残り、接合部の粘土瘤を削りとらずに肥厚したままになっている。胴部外面には斜め方向にヘラ削りが施され、内面には指ナデが見られる。胴部は形態は、張りが少なく長胴をしているものと思われる。90は2段に屈曲して立上り、端部は丸く収める口縁をもつ。口縁部は内・外面ともにナデている。頸部の内面に断続的にハケ目を施している。口径が24.6cmの大型の甕である。

その他の甕（第10図81・86～88）

81は口縁は斜め上方に直線的に立上った後にそのまま強くつまみ上げて、端部は丸く収めている。つまみ出した部分には鋭い稜が形成されている。口縁部は内・外面ともにナデているが、内面下部に一部横方向のヘラ磨きが見られる。胴部外面は口縁部下と中央部にそれぞれ4条単位の櫛描直線文が施され、その間にヘラ描の斜格子文が丁寧に施されている。内面は横方向にヘラ削りが施されている。全体に装飾性が強く丁寧に作られており、色調も内・外面ともに橙色である。搬入品の可能性が強い。86はほぼ直立する短い口縁をもつ。端部は丸く収めている。口縁部外面は縦方向にハケ目を施した後にナデている。内面は、横方向のハケ目が残っている。胴部外面には、ハケ目原体の異なる2種類のハケ目が施されている。内面は接合痕の部分を中心に多数指頭圧痕が認められる。胴部は大きく広がり肩部をもつ大型品と思われる。また口縁部から胴部にかけての外面には黒斑が認められる。87は小さく外方に屈曲する先細りの口縁をもつ。口縁部の下部はかなり厚手である。胴部外面は板状工具でナデている。内面は指ナデとなっている。88はほぼ直線的に外方へのび端部を丸く収める口縁をもつ。口縁部外面はナデており、内面は横方向のヘラ磨きの後にナデている。胴部外面には一部ハケ目が見られる他はナデている。内面もナデている。形態は壺と甕の中間形態をしているが、外面に煮沸時の煤が付着していることから甕として分類した。

壺A－Ⅰ（第11図93・94・96・97）

93は直線的に上方にひらき、端部を丸く収める口縁をもつ。口縁部内・外面ともにナデた後にハケ目を施している。94も93と同様の口縁部をもつ。口縁部外面は、横方向のヘラ磨きを施した後に、一部に板状工具によりナデている。内面は、ハケ目を施した後に横方向にヘラ磨きを施している。96は口縁はほぼ直線的に外方にのびるが、端部付近は強いナデのため内弯気味である。端部は丸く収めている。口縁部外面は、ハケ目を施した後にナ

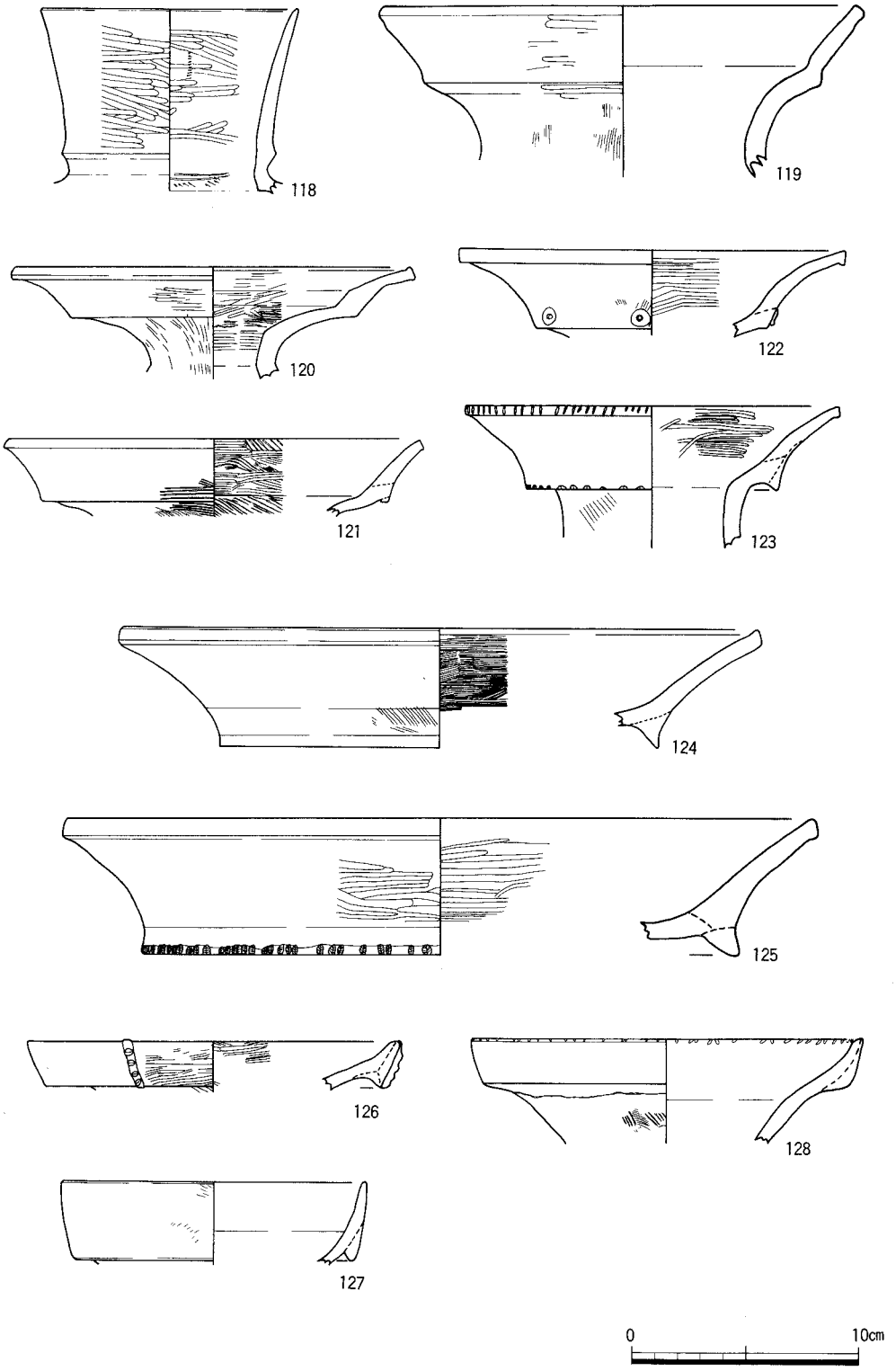


第12図　第１調査区SR－１出土土器実測図

デている。一部に指頭圧痕が残っている。内面はナデている。97も直線的に外方へひらき端部を丸く収める口縁をもつ。口縁部外面はハケ目を施した後に、横方向の細かいヘラ磨きを施し、最後に端部付近をナデている。内面はほぼ一面にヘラ磨きが施されている。口縁部は全体に厚く作られており、頸部の屈曲部の内面は、接合の際の粘土が厚く残っている。

壺A-II（第11図98～103、第12図104～113）

98はゆるく外反しながら立上り、端部を丸く収める口縁をもつ。口縁部外面はハケ目を施した後に横方向にヘラ磨きを行い、その後にナデている。特に端部付近は強くナデているため凹線を形成している。内面もヘラ磨きの後にナデている。99は厚みのある口縁がゆるく外反しながら立上る。口縁部外面は、斜め方向に細めのハケ目が一面に施された後に、一部をナデている。内面はナデている。 100はゆるく外反する口縁をもつ。口縁部外面は縦方向のヘラ磨きが施されている。頸部は横方向のヘラ磨きが施されている。口縁部内面は横方向のヘラ磨きの後にナデている。頸部には接合痕が残り、内面には指押えと指ナデが見られる。101はゆるく外反し、端部に面をもつ口縁である。口縁部は内・外面ともに横方向のヘラ磨きを施している。頸部の内・外面にはハケ目が施されている。102は口縁はゆるく外反し、端部は外方につまみ出すように肥厚させている。口縁部外面は縦方向のハケ目の後にナデている。内面は横方向のハケ目の後に上半部をナデている。103は口縁は外反しながら立上り、端部を若干横方向へつまみ出している。口縁部の外面はやや斜め方向のハケ目を丁寧に施した後に端部付近と頸部付近を中心にナデている。また内面は、斜め方向のハケ目を施した後にナデている。104は外反する口縁をもち、口縁部外面は縦方向のハケ目を施した後にナデている。内面は横方向のハケ目を施している。105は口縁は外反しながら立上り、端部は丸く収まる。口縁部外面は斜め方向にハケ目を施した後に上半をナデている。内面は多方向にハケ目を施した後に上半を中心にナデている。106は口縁は短くやや外反しながら立上り、端部は内・外方にやや肥厚させ、端部の中央部は若干の凹みをもっている。口縁部外面はナデており、頸部付近に横方向にヘラ状工具による圧痕が見られる。口縁部内面はナデており、縦方向にヘラ状工具による圧痕が見られる。頸部内面は板状工具によるナデが見られる。107は強く外反する口縁をもち、端部に面を持つがナデにより若干凹線状にくぼむ。また端部下端には刻み目が見られる。口縁部外面は斜め方向にハケ目を施した後に一部ナデている。内面は横方向のハケ目を施している。108は外反しなが



第13図　第１調査区SR－１出土土器実測図

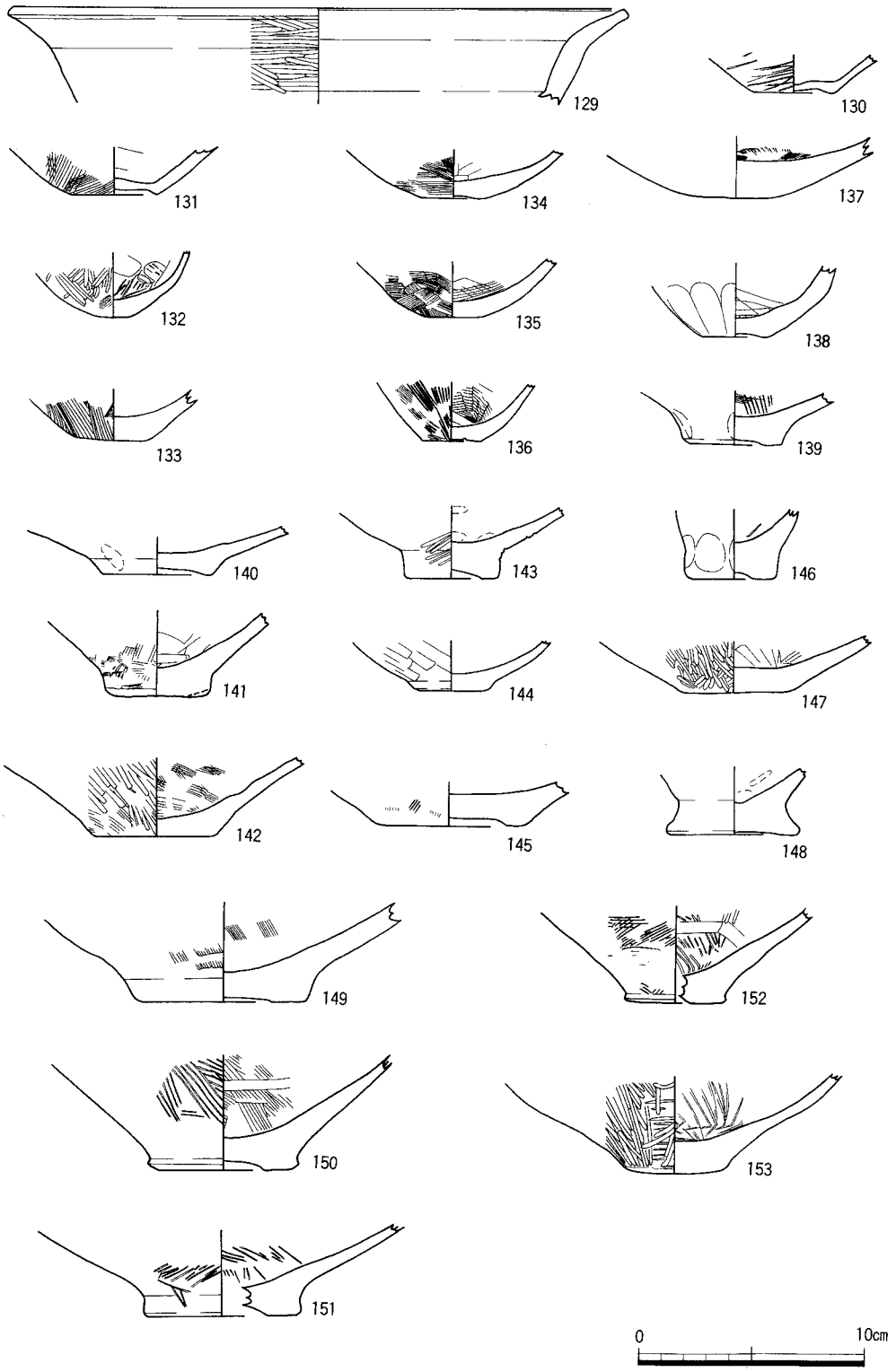
ら立上り、端部を横へつまみ出す口縁をもつ。口縁部外面は斜め方向のハケ目の後にナデている。内面もナデている。109はゆるく外反しながら立上り、端部に面をもつ口縁である。口縁部外面はハケ目を施した後にナデている。内面はナデている。胴部外面はハケ目を施し、内面はヘラ削りの後、一部にハケ目を施している。胴部内面にヘラ削りを施していることからも甕の可能性もある。110は若干外反する口縁をもち、端部は外側に面をもつ。口縁部外面は、端面にヘラ状工具による刻み目がある。他はハケ目を施した後にナデている。内面は横方向にヘラ磨きを施した後に一部をナデている。頸部には断面方形の刻み目突帯が1条巡っている。111は若干外反して立上り、端部は横につまみ出すようにして丸く収める口縁をもつ。口縁部は内・外面ともにハケ目を施した後にナデている。また1箇所内側から外側に向って円孔が穿たれている。112は頸部付近で外方にやや屈曲した後に、外反しながら立上る口縁である。口縁部内・外面ともにナデている。頸部内面に一部ハケ目が見られる。113は口縁はゆるくS字状に屈曲しながら外反し、端部は外側に面をもつ。口縁部外面はハケ目が施され、内面は強くナデている。胴部外面はナデており、内面はヘラ磨きを施した後に、板状工具によりナデている。

壺A-III（第11図95、第12図114・115・117）

95はゆるく内弯しながら立上る口縁をもつ。口縁部外面は板状工具で整形した後に横方向にヘラ磨きを施し、さらにナデている。内面は、ハケ目を施した後に、粗いヘラ磨きを行っている。114は口縁は強いナデにより屈曲しながら内弯気味に立上り、端部は内側に肥厚し、内傾する面をもつ。口縁部は内・外面ともにナデている。115はゆるく内弯する口縁をもつ。口縁部外面は一部板状工具によりナデており、頸部付近にはハケ目が見られる。内面も板状工具でナデている。117は短くやや内弯する口縁をもつ。口縁部外面はハケ目を施した後に、ナデているが、強くナデているために口縁部には稜が形成されている。内面はナデている。

壺B（第13図119～125）

119は頸部から屈曲しながら外反し立上る二重口縁の壺で、端部は外傾する面をもつ。口縁部外面は横方向のヘラ磨きが施され、頸部外面には縦方向のハケ目が施されている。内面は磨滅のため観察が不可能である。120は頸部から大きく外反して開いた後に二段に屈曲して立上る二重口縁壺である。端部はわずかに内・外に肥厚し、外側に面をもつ。また屈



第14図　第１調査区SR－１出土土器実測図

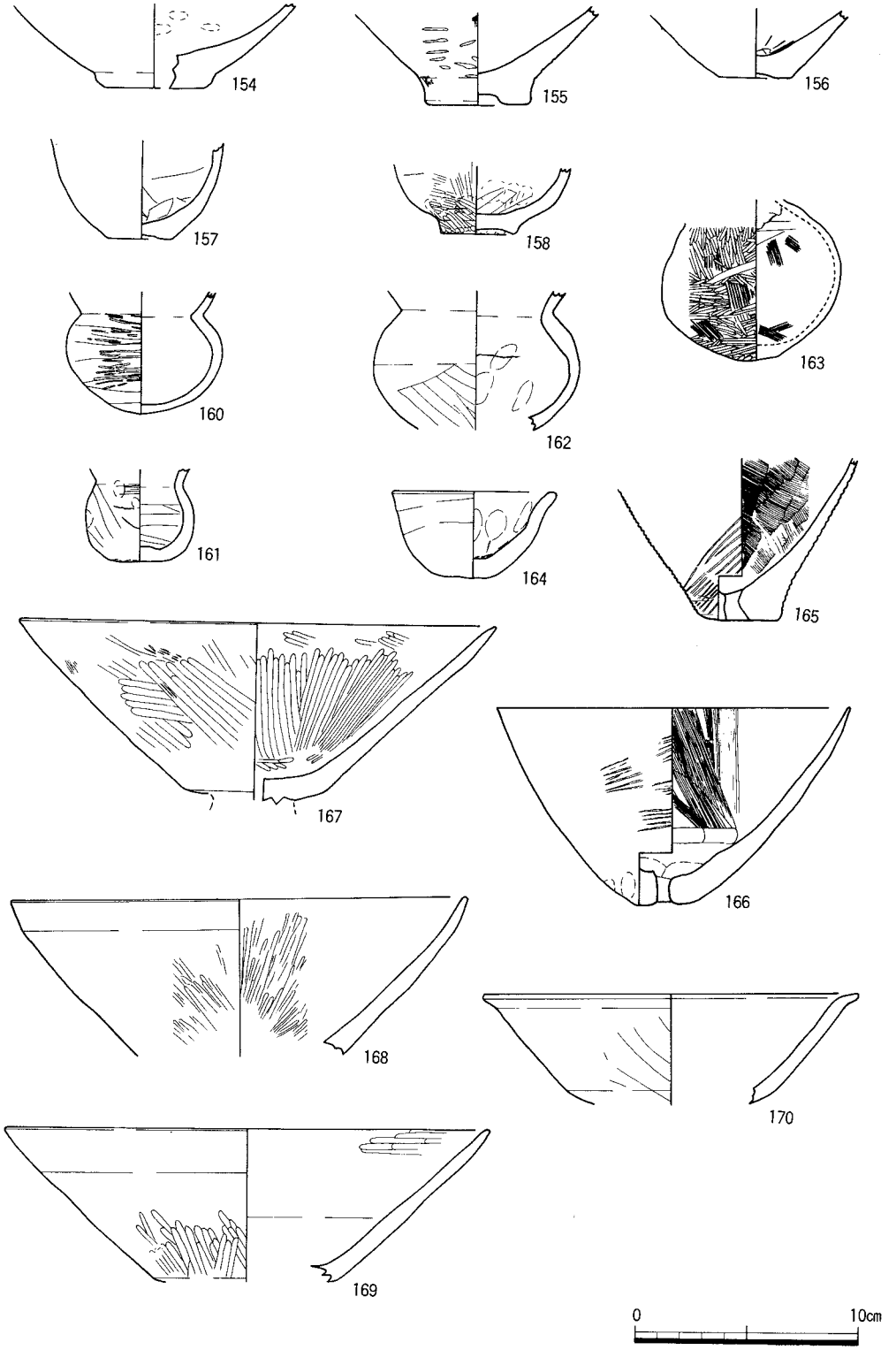
曲部は明瞭な稜をもつ。口縁部外面は横方向にヘラ磨きが施されている。頸部外面は縦方向にハケ目を施した後にナデている。口縁部内面はヘラ磨きを施し、頸部内面はハケ目を施している。121は口縁は屈曲しながら外反し、端部は外傾する面をもつ。屈曲部は下方に垂下する。口縁部外面は、ハケ目の後にナデている。頸部はハケ目が施されている。口縁部、頸部の内面は、全体にハケ目が施されている。122は屈曲しながら外反する二重口縁壺で、口縁端部は上下にやや拡張し、外側に面をもつ。口縁部外面はハケ目を施した後にナデている。さらに屈曲部の稜線のやや上に、円形浮文を貼り付けている。内面はハケ目を施している。123は頸部から強く外反し、稜部を下方に拡張した後に外反して立上る口縁をもち、端部は外側に面をもつ。口縁部外面は端面と稜部に刻み目を巡らせている。他はナデている。頸部外面はハケ目を施した後にナデている。口縁部内面は横方向のヘラ磨きで頸部内面はナデている。頸部は筒状になっている。124は二重口縁壺であり、屈曲部は大きく下方に垂下させる。外面はハケ目を施した後にナデている。内面はハケ目を丁寧に施している。口径28.0cmの大型品である。125も124と同様に屈曲部を垂下させる二重口縁壺である。端部は外側に面をもつ。口縁部外面は横方向にヘラ磨きを行った後に、一部をナデている。また垂下した屈曲部下端には刻み目を巡らせている。内面は黒く炭素を付着させた後に横方向に丁寧にヘラ磨きを施している。口径33.0cmの大型品で、全体に丁寧に作ってある。

壺C（第13図126）

126は口縁端部は上下に大きく拡張して幅広の面をつくる。端面には横方向にハケ目を施し、刻み目の入った棒状浮文を貼付けている。内面はヘラ磨きの後にナデている。

その他の壺（第12図116、第13図118・127・128）

116はほぼ直線的に外方に立上り、端部を上方へ大きくつまみ上げ、やや外傾する面をもたせる口縁をもつ。口縁部外面はナデている。一部指頭圧痕が見られる。118は頸部が浅くくびれた後に若干外反気味に立上る口縁をもっており、端部は丸く収める。口縁部外面は、横方向に丁寧にヘラ磨きを施した後に端部付近をナデている。内面はヘラ磨きを施した後に一部にハケ目を施し、最後にナデている。北陸地方の日影式に特徴的な壺と思われる。127は内弯する口縁に粘土を貼付け幅広の面をつくり出している。外面はハケ目の後にナデている。



第15図　第１調査区SR－１出土土器実測図

128は頸部から外反気味に立上った後に、内弯して立上る口縁をもち、端部付近の外側に粘土を貼付け、稜部を形成し外側に幅広の面をつくり出す。端部の内・外面に浅い刻み目を巡らせている。外面に一部ハケ目が見られる。

甕及び壺の底部（第14図130～第15図159）

底部のみの破片では甕か壺か判断できないものが多いので、便宜上一括した。

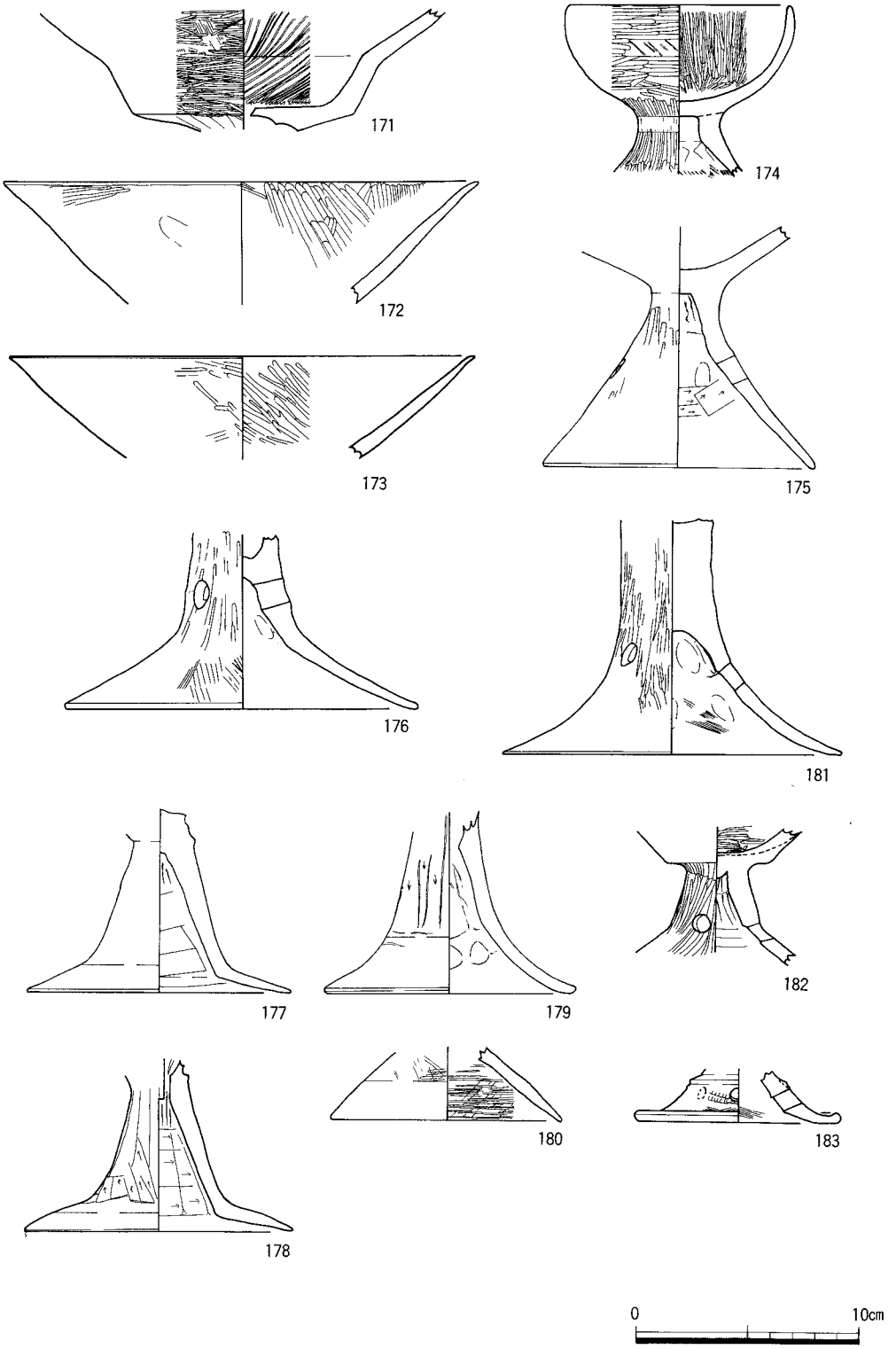
130・131はやや上げ底の底部で、外面にはハケ目を施している。両者とも外面に煤が付着している。甕Aの底部と思われる。132～135・137はやや平底気味の丸底となっている。136･138はやや上げ底の平底となっている。136は内･外面ともにハケ目を施している。138は外面は板状工具で面取りを行っている。内面は指でナデて整形している。139･140･143･145・146・149～152・155～158は平底の中央部がくぼんで上げ底となっているものである。139は底部側面に整形時の指頭圧痕が見られる。143は外面のタタキが底部にまで施されている。152は内・外面ともにハケ目を施した後にナデている。155は外面にはタタキが残っている。158は外面はヘラ磨きが、内面は板状工具によりナデている。また内・外面ともに指頭圧痕が残っている。141・142・144・147・148・153・154は平底となっている。142は外面はハケ目を施した後にヘラ磨きを行っている。内面はハケ目を施した後に一部ナデている。147は外面は丁寧にヘラ磨きを行っている。内面は板状工具でナデている。 148は大きく突出し、すそ広がりの底部となっている。153は外面は横方向のタタキの後に、ヘラ磨きを行っている。内面は板状工具でナデている。

有孔鉢（第15図165・166）

165は平底の底部に穿孔されている。外面は右上りのタタキを施している。内面は斜め方向に丁寧にハケ目を施している。甕を甑に転用したものと思われる。166は若干内弯気味に立上り、端部は丸く収める。外面には粗いハケ目が施された後にナデている。内面はハケ目を施した後に底部付近をナデている。底部には焼成前の穿孔がある。また底部を中心とした内・外面に黒斑が見られる。

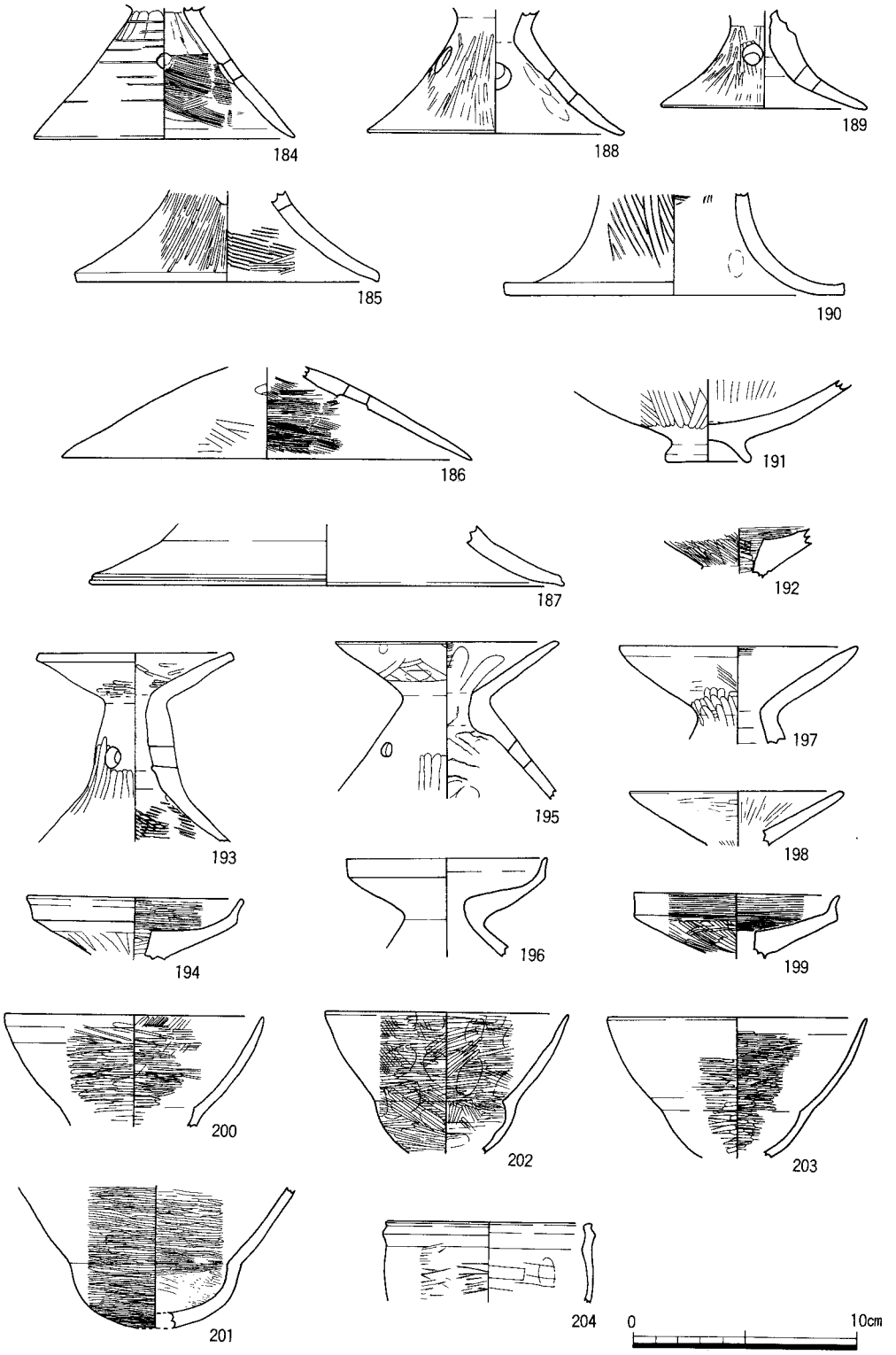
高杯（第15図167～第17図191）

167は杯部は下部で屈曲したのち斜め外方に直線的にひらき、端部は丸く収める。外面はハケ目を施した後にヘラ磨きを行っている。内面は縦方向にヘラ磨きを行っている。168



第16図　第１調査区SR－１出土土器実測図

は、やや内弯気味に立上る杯部である。外面は全体にヘラ磨きを施した後に、端部をナデている。内面は全面に丁寧にヘラ磨きを施している。169はほぼ直線的にひらく杯部で、端部は丸く収める。内・外面ともにヘラ磨きを行ってからナデている。170は杯部は下部でゆるやかに丸く屈曲した後に斜め上方にのび、端部で外反して終る。内・外面ともにナデている。外面の一部に黒斑が見られる。171は二段に強く屈曲しながら外反する杯部をもつ。外面はハケ目を施した後に一面にほぼ横方向にヘラ磨きを施している。内面も縦方向に一面にヘラ磨きを施している。全体に非常に丁寧に作られている。172はほぼ直線的に開く杯部で端部は丸く収まる。外面は端部付近に一部ヘラ磨きが認められる。他はナデている。内面もヘラ磨きが施された後に一部ナデている。173もほぼ直線的に開き、端部はややつまみ出し気味に終る。内・外面ともにヘラ磨きである。174は椀形に内弯して立上る杯部をもち、端部は丸く収まる。脚部は杯部と別に作り接合している。杯部外面はハケ目を施した後に横方向にヘラ磨きを行っている。内面は一面に縦方向に細いヘラ磨きを丁寧に行っている。杯部から脚部にかけては、縦方向にヘラ磨きを行った後に、接合部をナデている。脚部外面はヘラ磨きが、内面はハケ目が施されている。175はハの字に開き、脚端部は丸く収める。２方透しである。脚外面は縦方向のヘラ磨きが施されている。内面はヘラ削りが施され、上部には、しぼり痕が見られる。脚外面の端部に一部黒斑がある。176は途中で屈曲して外反し広がる脚で、端部は外側に面をなす。３方透しである。脚外面の上半は縦方向のヘラ磨きが、下半はハケ目が施されている。内面はナデている。177は脚は下半で大きく屈曲して開く。外面はナデている。内面は板状工具でナデている。脚部外面下半と、内面の裾部の一部には黒斑が見られる。178は下半で大きく屈曲して外方に開く脚部である。外面は脚柱部を板状工具で面取りを行った後にヘラ削りを施し、裾部はナデている。内面は横方向にヘラ削りを施している。179はゆるやかに外反しながら開く脚である。外面脚柱部には板状工具でナデている。内面にはしぼり痕が見られる。181はゆるやかに外反する脚で、３方透しをもつ。脚柱部は中実となっている。外面は縦方向のヘラ磨きを施し、裾部はナデている。内面は一部ハケ目が残る他はナデている。182は脚中位で屈曲して外反している。杯底部には円板充塡が見られる。杯部内面、脚部外面にはヘラ磨きが施されている。脚部内面には、しぼり痕と板状工具でナデた痕が見られる。また脚部には３方透しが穿たれている。183は外方に開き、段をもって大きく外反し、端部は上方に肥厚し丸くなっている脚部である。現存で２孔の透しが認められる。外面はハケ目を施し、端部をナデている。内面はハケ目を施した後にナデている。184は直線的にひらく脚で、４方透しをも



第17図　第１調査区SR－１出土土器実測図

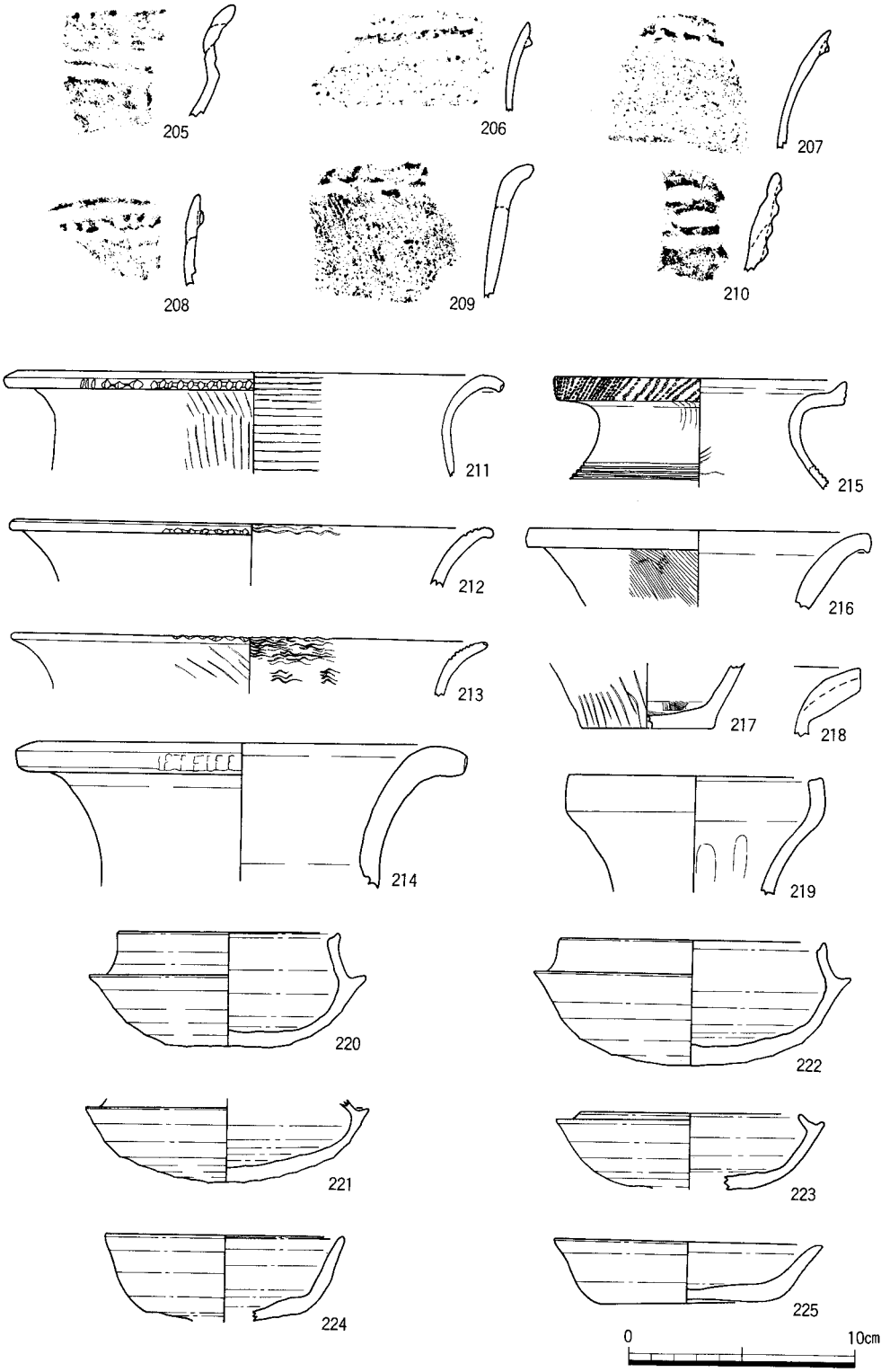
つ。外面は板状工具で面取りを行った後にヘラ磨きを施し、その後にナデている。内面にはハケ目を施している。185は「ハ」字状に開き、端部外側に面をもつ脚である。透しは現存では1個である。外面は縦方向のヘラ磨きを施している。内面は横方向のハケ目を施した後に、ヘラ磨きを行っている。186はほぼ直線的に開く脚である。外面はナデ、内面はハケ目を施している。187は脚端面にヘラ描沈線が1条巡る。188はほぼ直線的に開き、3方透しをもつ脚で、外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。内面はナデている。189は外反しながら開き、端部は丸く収める脚で、3方透しをもつ。外面は縦方向のヘラ磨きを施している。内面はナデている。190は強く外反して、端部は外側に面をもつ。外面は粗いハケ目を施している。内面はナデている。191は短く外方に開く脚をもつ。杯部は内弯しながら開く。内・外面ともにヘラ磨きを施している。山陰地方に特徴的な、低脚高杯と思われる。

器台A（第17図193・195・197・198）

193は、受部は直線的に開き、端部に面をもつ。脚部は脚柱部からやや屈曲して、外反しながら広がる。受部と脚部とは中空となっており、脚部には3方透しがある。受部は内・外面ともにヘラ磨きを施している。脚部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。内面で脚柱部には板状工具によるナデが、裾部はハケ目が施されている。195は受部、脚部ともに直線的に広がる。受部と脚部の接続部は中空となっており、肥厚している。受部は外面はヘラ磨きの後にナデ、内面も同様である。脚部外面は縦方向のヘラ磨きが施され、内面はナデており、しぼり痕が見られる。3方透してある。197は、直線的に外方に開く受部で端部は丸く収める。外面はヘラ磨きの後にナデている。内面も同様である。受部から脚部にかけては中空となっており、外面は縦方向のヘラ磨きが、内面は横方向にヘラ削りを施している。198は直線的に外方に開く受部で、端部は丸く収める。外面は横方向にヘラ磨きを施し、内面は縦方向にヘラ磨きを施した後にナデている。

器台B（第17図194・196・199）

194はほぼ直線的に外上方に開き、端部を上方へつまみ上げる受部である。受部と脚部とは中空となっている。外面の下部は面取りを行い、口縁部付近はナデている。内面は横方向に丁寧にヘラ磨きを行っている。196も194とほぼ同様の形態であるが、調整は磨滅のために観察不可能である。199は受部端部は外反気味につまみ上げられている。受部と脚部



第18図　第１調査区SR－１出土土器実測図

は中空となっている。外面は横方向のヘラ磨きの後に、下部に放射状にヘラ磨きを行っている。内面は横方向にヘラ磨きを施した後にナデている。

小型丸底壺A（第17図200～203）

いずれも小さな体部から、口縁が内弯気味に大きく外方に開く。口縁径が体部最大径を大きくうわまわる。すべて体部、口縁部の内・外面一面に丁寧に横方向にヘラ磨きを施している。

小型丸底壺B（第15図160・162・163）

160は体部最大径は中央部にあり、ほぼ球形である。口縁部は破損しているが、口縁径は体部最大径とほぼ同じと思われる。外面は、板状工具で整形した後に、横方向にヘラ磨きを施している。内面はナデている。162は球形の体部に、外上方に開く口縁をもつ。口縁径と体部最大径とがほぼ等しいと思われる。内・外面ともにナデている。また内面には指頭圧痕が多く残る。また内・外面には黒斑が見られる。163は球形の体部である。外面は一面に多方向のヘラ磨きが施されている。内面はハケ目の後にナデている。口縁部は欠損している。

ミニチュア土器（第15図161・164）

161は扁平な体部で、底は平底となっている。器壁は厚く仕上げている。内・外面ともに、板状工具によるナデと、指頭圧痕が残る。粘土紐の痕が見られる。底部には煤が付着している。164は丸底気味の底部からそのまま外上方へのび口縁部に至り、端部は丸く収める。器壁は厚い。内・外面ともにナデていて、また内面には指頭圧痕が多く残る。外面には黒斑が見られる。器高 3.9cmの小型品である。

縄文土器（第18図205～208）

205は浅鉢である。体部から2段に屈曲して口縁部に至る。口縁部はやや外反している。外面は磨滅して観察が困難であるが、粗いヘラ磨きと思われる。内面はナデている。口縁部には凹線が2条巡る。206～208は深鉢である。206は口縁部は外反し、端部は丸く収める。端部より約5㎜ほど下に、断面三角形の突帯を貼付けている。内・外面ともにナデている。207も206と同様の形態で、端部より約5㎜下に断面三角形の刻目突帯を貼付けてい

る。208は直立気味の口縁をもつ。端部より約8㎜下に断面台形状の刻目突帯を貼付けている。刻目は「口」字状である。外面ともナデている。

弥生土器（第18図209～219）

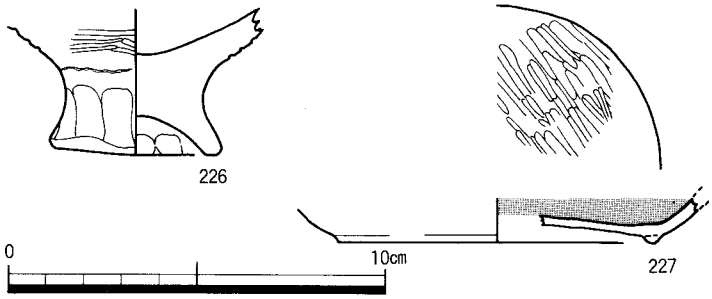
211は口縁部は強く外反し、端部は斜め下方を向く甕である。端面外面には刻み目を巡らせている。外面は縦方向に粗いハケ目を施している。内面は口縁部から下にかけて、横方向にハケ目を施している。212も外反する口縁をもち、端部は外側に面をもち、端面下部に刻み目を巡らせている甕である。口縁部内面に櫛描波状文を施している。213も外反する口縁をもち、端部上半に刻み目を施す甕である。口縁部内面には櫛描波状文を施している。214は頸部はゆるやかに外反し、口縁部でやや強く外反し外側に面をもつ壺である。口縁端面には列点文の痕跡が認められる。内・外面ともに磨滅のため観察不能である。215は、頸部は大きく屈曲し、外側に顎をつくり出し、ほぼ垂直に立上る受口状口縁の壺である。口縁部外面には櫛描列点文が一面に巡らされている。胴部には櫛描直線文が施されている。頸部から胴部にかけてはハケ目の後にナデている。内面はナデている。216はやや外反する口縁をもち、端部は下方に少し拡張している。口縁部外面は斜め方向にハケ目を施し、内面はナデている。217は壺の底部と思われる。しっかりとした平底で、外面には粗いハケ目を施している。内面はハケ目の後にナデている。218は甕の口縁である。 219は頸部はやや外方へ開き気味にのび、口縁部はやや内傾して立上り、端部はやや内傾する面をもつ壺である。内・外面ともにナデている。

須恵器（第18図220～225）

220・222は受部はやや上方を向き、立上りはやや内傾しており、端部は内傾する段がある。底外面の下半には回転ヘラ削りが、その他はナデている。221もほぼ同様だが、器高は低くなり法量も減少している。223は立上りは内傾してのび、端部は丸く収める。受部は斜め上方にのびる。底外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデとなっている。224は底部から斜め上方に立上り、端部は丸く収める。底部はやや丸みをもつ。225も底部から斜め上方に、やや開き気味に立上る。

その他の土器（第17図204、第19図226・227）

204は体部はやや内弯し、頸部でわずかに外反し口縁部外側に稜をなし、端部で強く短く外側に屈曲する。口縁部は内・外面ともにナデている。体部外面には横方向にハケ目を施



第19図　第１調査区SR－１出土土器実測図

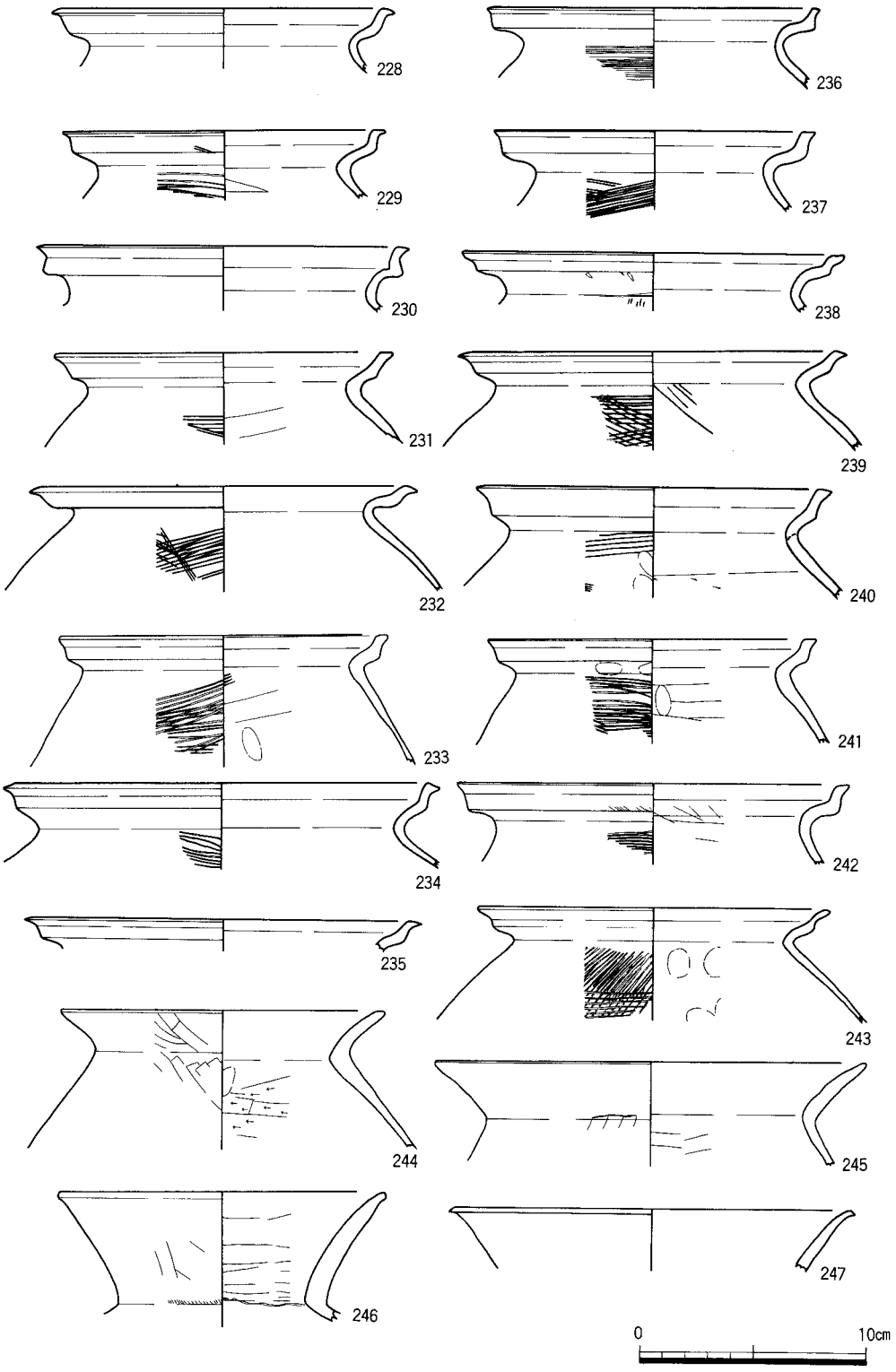
している。内面はナデている。色調は内面灰白色、外面が淡橙色である。製塩土器の可能性がある。226は製塩土器の脚部である。脚部は「ハ」字状に開き端部は丸い。脚外面は指でナデている。胴部にはタタキが施されている。227は黒色土器の椀の底部である。内面に炭素を付着させており、ヘラ磨きを行っている。底部には台形の高台を貼付けている。全体に薄く作られている。

SR-2 出土遺物（第20図～第22図）

遺物は暗灰色粘土層の下半から集中して出土した。遺物はローリングを受けておらず、保存状態がよかった。

甕ＡII（第20図228・230・232・234～236・239・240）

いずれも口縁端部は、外傾する面をもつものである。228は口縁は斜め上方に立上った後にそのまま屈曲して上方に立上り、端部をつまみ出す。内・外面ともにナデている。 230は大きく外反して横へ開いた後に上方へ立上り、端部をつまみ出す。口縁部は内・外面ともにナデている。232は口縁は横へ開いた後に斜め上方に立上り、端部は外傾する面をもつ。口縁部は内・外面ともにナデている。胴部外面は斜め方向にハケ目を施している。内面はナデている。234は斜め上方に立上りそのまま上方に立上り、端部を横へつまみ出し外傾する面をもつ。口縁部内・外面はナデている。胴部外面は横方向のハケ目を施している。内面はナデている。235も同様の口縁である。 236は横に開いた後に上方へ立上る。口縁部は内･外面ナデ。胴部外面は横方向のハケ目を施している。239は斜め上方に立上り、そのまま屈曲して立上り、外傾する端面をもつ。胴部外面はハケ目を施している。内面は、ハケ目の後にナデている。240は斜め上方に立上った後に稜を形成して上方に立上る。口縁部



第20図　第１調査区SR－２出土土器実測図

内・外面はナデている。胴部外面はハケ目を施した後にナデている。内面は横方向にヘラ削りを施した後にナデている。

甕AIII-a（第20図229・238・242）

229は斜め上方に立上った後に屈曲して上方に立上り、端部は横に大きくつまみ出す。口縁部は内・外面ともナデている。胴部外面はヘラ状工具で施文している。内面は板状工具でナデている。238は外反しながら立上り、そのまま屈曲して上方に立上り端部を横へつまみ出す。242は胴部外面に櫛状工具で施文している。頸部内面は板状工具でナデている。

甕AIII-b（第20図231・233・237・241）

231は斜め上方に立上った後に、そのまま屈曲して斜め上方に立上り、端部に面をもつ。強くナデることにより、端部はつまみ出しているように見える。胴部外面にはハケ目を施され、内面は板状工具でナデている。外面に煤が付着している。233は胴部外面には粗いハケ目が施されている。内面はナデている。237は口縁は厚く作られている。胴部外面にはハケ目が施され、内面はナデている。241も口縁部をナデることにより端部をつまみ出し気味にする。胴部外面は櫛状工具で施文しており、内面は板状工具でナデている。

甕B-I（第20図244・245、第21図250）

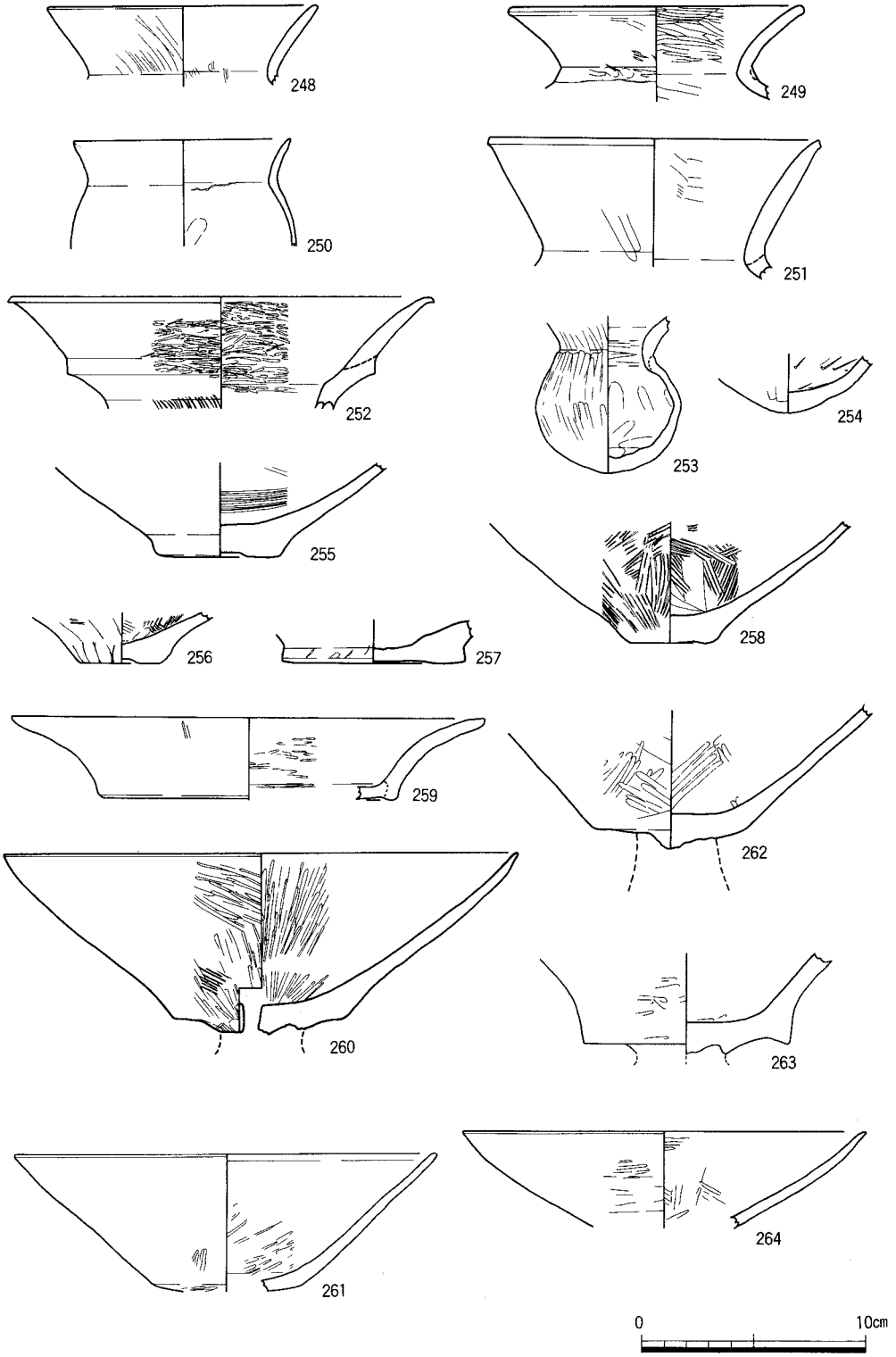
244はほぼ直線的に斜め上方に立上り、端部は丸く収める口縁をもつ。口縁部は外面は板状工具でナデている。内面はナデている。胴部外面も板状工具でナデている。内面はヘラ削りを施している。外面には黒斑が認められる。 245もほぼ直線的に開く口縁で、内・外面ともナデている。頸部外面に板状工具の痕が認められる。250もほぼ直線的に立上る口縁である。調整は磨滅のため不明瞭である。

甕B-III（第20図246）

246はゆるく外反しながら開き、端部は外傾する面をもつ。内・外面ともにナデている。

甕C（第20図243）

243は口縁は斜め上方に立上った後に、大きく斜め上方につまみ出す。「S」字口縁である。口縁部は内・外面ともにナデている。胴部外面は、シャープなハケ目を一面に施して



第21図　第１調査区SR－２出土土器実測図

いる。内面はナデており、指頭圧痕が残っている。

壺A－Ⅰ（第21図248・251）

248は直線的にのびる口縁で端部は丸く収める。口縁部は内・外面ともにハケ目を施した後にナデている。251も直線的に外上方にのび端部は外傾する面をなす。口縁部外面は、ヘラ磨きの後にナデている。内面はハケ目の後にナデている。

壺A－Ⅱ（第20図247、第21図249）

247は若干外反気味に外上方に立上り、端部は外傾する面をもつ。外面はハケ目の後に板状工具でナデている。内面も板状工具でナデている。249は頸部で鋭く屈曲し、ゆるく外反しながら立上り端部は丸く収める口縁である。口縁部外面はナデており、内面はヘラ磨きが施されている。頸部外面に粘土の貼付けが認められる。

壺B（第21図252・259）

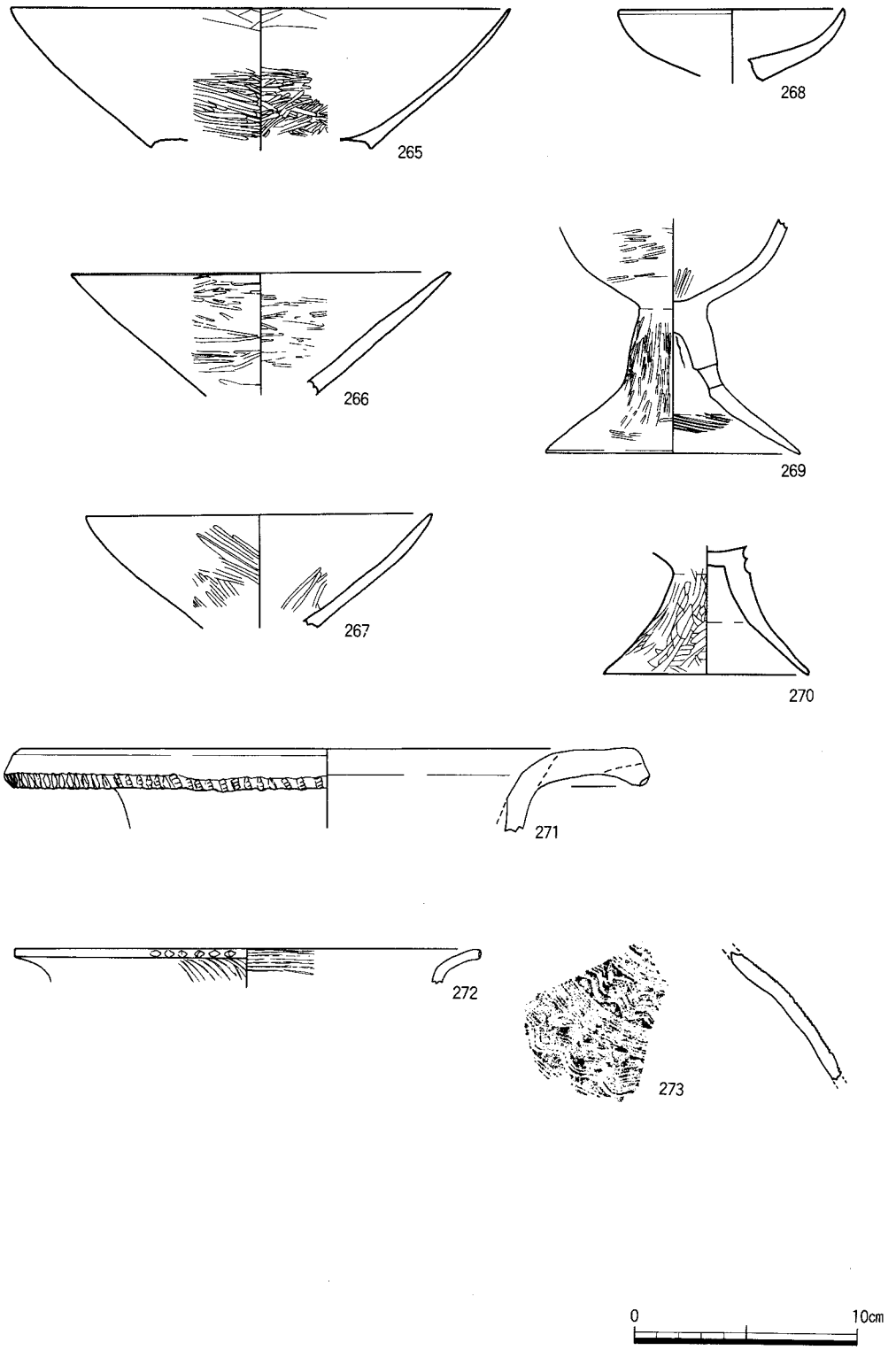
252は斜め上方に立上った後に、段をなして屈曲して、さらに外反して立上る二重口縁である。頸部内面には稜が形成されている。口縁部外面は横方向にヘラ磨きを施し、端部付近をナデている。内面は横方向のヘラ磨きである。頸部外面は縦方向にハケ目を施した後にナデている。全体に丁寧につくってある。259は頸部から横に開いた後に、大きく外反して立上る二重口縁である。外面は縦方向のヘラ磨きの後にナデている。内面は横方向のヘラ磨きの後にナデている。

小型丸底壺B（第21図253）

253は体部は球形で、底部は丸底となる。頸部からは肥厚した口縁が外反する。外面は頸部以下に縦方向のヘラ磨きを施している。頸部内面には板状工具でナデている。体部内面には指頭圧痕が多く残る。体部外面中央に黒斑が見られる。

壺及び甕の底部（第21図254～258）

254は丸底で外面には板状工具によるナデが、内面にはヘラ状工具の当った痕がある。255・256は中央部が上げ底の平底となっている。256の外面には板状工具によるナデと押圧痕が認められる。内面にはハケ目が施されている。両者とも壺の底部と思われる。257はし



第22図　第１調査区SR－２出土土器実測図

っかりとした平底となっている。258は壺の底部で平底である。外面はハケ目が、内面はハケ目と板状工具によるナデとなっている。

高杯（第21図260～264、第22図265～267・269）

260はやや内弯気味に立上る、深く大きな杯部である。杯部底部には円孔が穿たれている。内・外面ともにヘラ磨きが施されている。261は直線的に大きく開く杯部をもつ。外面はヘラ磨きの後にナデている。内面は、ヘラ磨きであるが端部付近はナデている。内・外面の一部に黒斑が見られる。262も底部から直線的に大きく広がる杯部をもつ。内・外面ともにヘラ磨きを施している。杯部と脚部との接合は差込み式となっている。263は底部から横に開いたのち、明瞭な稜をもって外上方へ外反しながら立上る杯部である。外面はヘラ磨きの後にナデている。内面も同様である。脚部との接合は差込み式となっている。264・265・267もやや内弯気味の杯部で、内・外面ともにヘラ磨きを施している。266は直線的に外方に立上る杯部で、内・外面ともに横方向にヘラ磨きを施している。

269は杯部は底部からゆるやかに内弯する椀形を呈す。脚部は脚柱部から屈曲して開き、端部は丸く収める。３方透しをもつ。杯部の外面は横方向のヘラ磨きが施されている。内面は磨滅して観察が困難であるがヘラ磨きと思われる。脚部外面はヘラ磨きが、内面裾部にはハケ目が施されている。またしぼり痕も見られる。

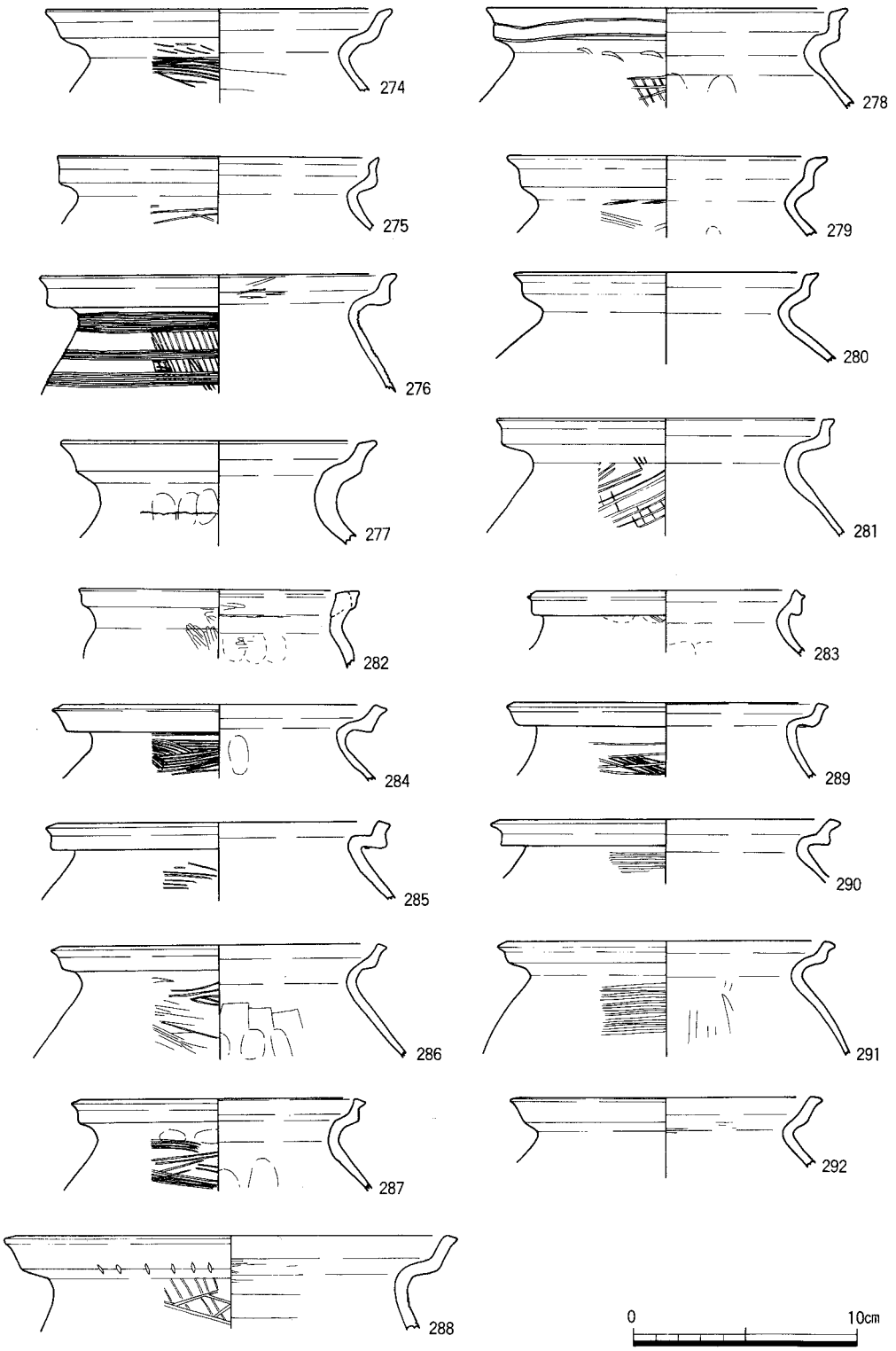
270は高杯の脚と思われる。透しは穿たれていない。外面にはヘラ磨きが施されている。内面はナデている。杯部とは円板充塡している。

器台Ｃ（第22図268）

268は内弯して立上る受部である。調整は磨滅のため観察不可能である。

弥生土器（第22図271～273）

271は壺で頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁部はほぼ水平になり、端部はやや下方に垂下し外側に面をもつ。端面の下端に刻み目を巡らしている。272は口縁部は外反し、端部は外側に面をもつ甕である。端面には刻み目を施している。外面は縦方向の粗いハケ目が口縁内面は横方向に粗いハケ目が施されている。273は壺の胴部である。現存で上から５条の櫛描直線文、９条の櫛描波状文、10条の櫛描直線文、９条の櫛描波状文、３条の櫛描直線文が施されている。内面はナデている。



第23図　第１調査区SR－３出土土器実測図

SR-3 出土遺物（第23図～第41図）

遺物は SR-1 と同様に灰褐色砂層（第３層）の上面より出土した。SR-1 から SR-3 に至り曲る部分で特に多くの出土を見た。ここでも遺物そのものの残存状態は良好であった。

甕ＡＩ－ａ（第23図274・276・278～280）

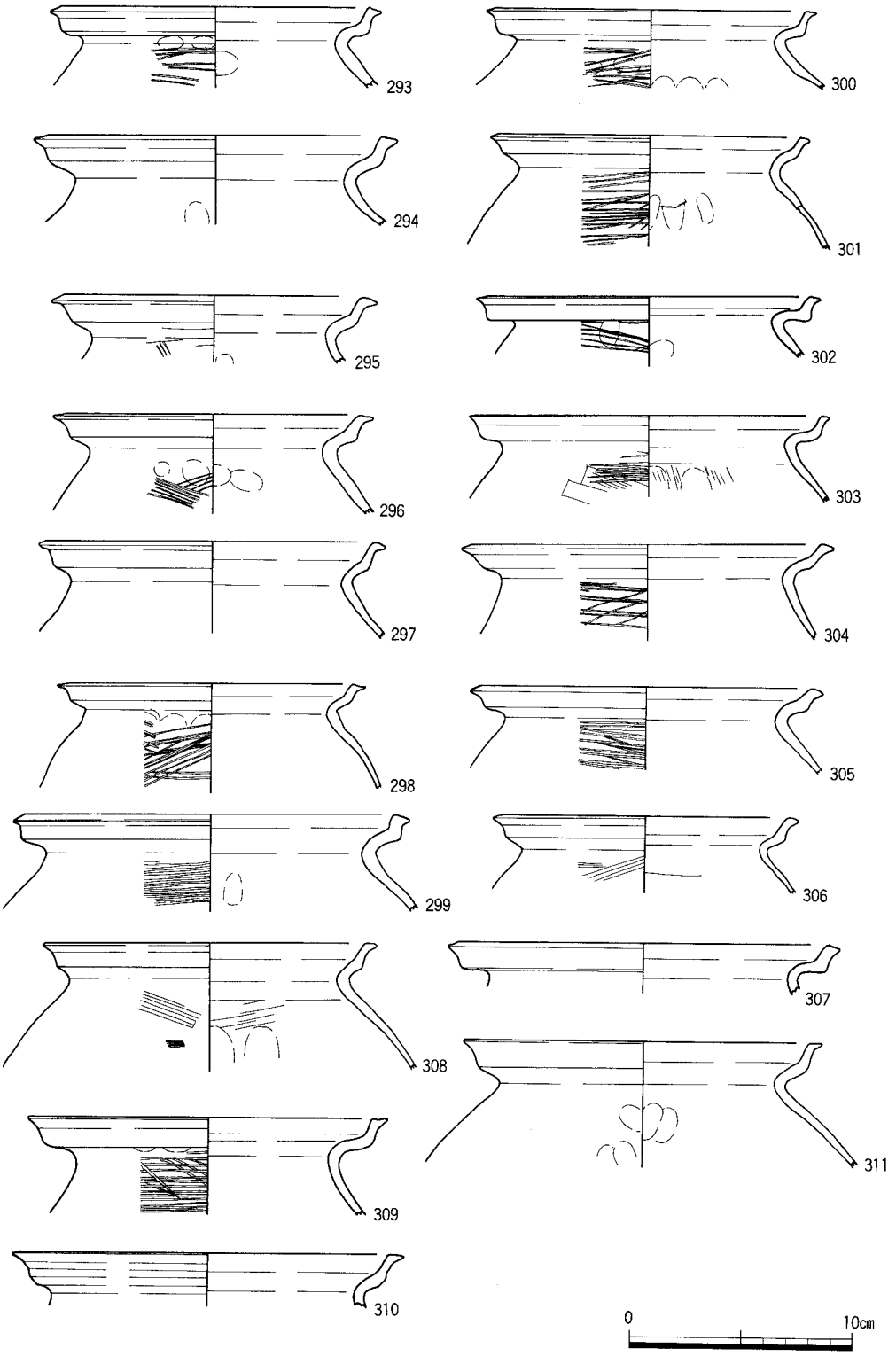
274は頸部以下を、粗いハケ目を施した後に細かいハケ目を再度施している。内面は板状工具によりナデている。276は受口状口縁の上方への立上り部分は厚くなっている。胴部外面は縦方向の粗いハケ目を施した後に、櫛描直線文を３箇所に施している。278は斜め上方に立上った後に上方へ立上り、端部をつまみ出し内傾する面をもつ口縁で、頸部内面は肥厚している。口縁部外面にヘラ描沈線が２条巡らされている。頸部以下、外面にはヘラ描の施文がみられる。279は口縁端部のつまみ出しが鋭くなっている。口縁部は内・外面ともナデている。頸部外面はハケ目が施されている。280は内・外面全体にわたりナデている。

甕ＡＩ－ｂ（第23図275・277・281・282）

275は斜め後上方に立上り、端面は内傾する口縁で、内・外面ともにナデている。277は全体として厚みのあるものである。281は外面を強くナデることにより端部がつまみ出されているように見える。胴部外面上は右上りの櫛描文が施され、内面はナデている。282は、口縁部は肥厚しながら外反し、端面は内傾気味となる。特徴的な口縁部形態をしている。

甕ＡII（第23図283～292、第24図293～307）

283は口縁部は外側に肥厚し、短いずんぐりとしたつくりになっている。端面は外傾し、ヘラ描沈線が１条巡る。胴部は内・外面ともにナデている。284は横へ大きく開いた後に斜め上方に立上る口縁をもつ。胴部外部はハケ目を丁寧に施している。285も横へ大きく開いた後に上方へ短く立上る。胴部外面はハケ目の後にナデている。286は胴部外面には、ハケ目を施した後にナデを行い、その後ヘラ状工具で施文している。指頭圧痕も残っている。287は口縁部は屈曲が強くなっている。胴部外面は櫛描文が施されている。288は口縁部は立上ったままで端部を終えている。口縁部縁にはヘラ状工具による刺突文が施されている。胴部外面には粗いハケ目の後に、ヘラ状工具により施文している。289は厚みのある口縁部で、胴部外面には、ハケ目の後にヘラ状工具により施文している。290は、横へ開いた後に斜め上方に立上るが、強くナデているために屈曲が強くなっている。胴部上方には櫛描直

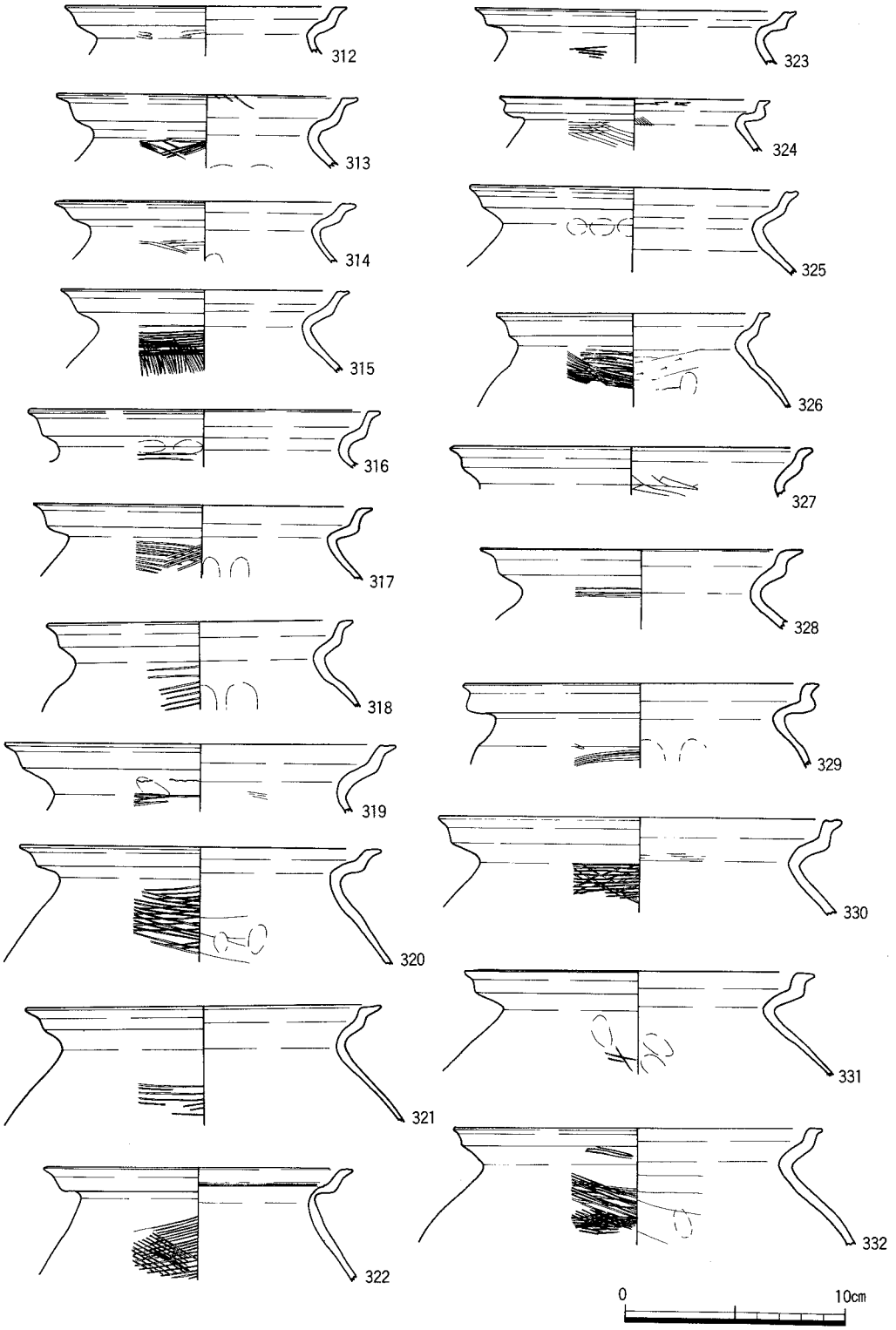


第24図　第１調査区SR－３出土土器実測図

線文が施されている。291は丸みをもって立上る口縁をもち内・外面ともにナデている。胴部外面は横方向にハケ目を施した後にナデている。292はなだらかな屈曲をもって立上る口縁をもち、内・外面ともにナデている。胴部も内・外面ともにナデている。293は胴部外面に櫛描文を施す。294は外傾する口縁部端面をナデている。295は口縁部端部を大きくつまみ出し、外傾する面をもつ。胴部外面はハケ目の後に板状工具でナデている。296は胴部外面にハケ目を施す。また煤が付着している。297はゆるやかに大きく立上る口縁をもち、端部を横へつまみ出し、外傾する面をもたす。298は口縁端部は大きく横へつまみ出されている。胴部外面はナデた後に櫛描文を施している。内面はナデている。299は口縁は斜め上方に立上った後に上方に立上り、端部をつまみ出す。胴部外面には多条の櫛描直線文が施されている。300は胴部外面にヘラ描の施文がなされている。煤が付着している。 301はゆるやかに屈曲して立上る口縁をもつ。胴部には接合痕が残る。302は大きく横へ開いた後に短く上方へ立上り、外傾する端面をもつ口縁である。胴部外面にはハケ目を施している。303は口縁は横へ開いた後に丸みをもたせて上方へ立上る。胴部外面は板状工具でナデた後に、櫛描文を施している。304･305ともに胴部外面に櫛描文を施す。306は口縁部外面を強くナデている。端面はやや丸みをもつ。胴部外面はハケ目が、内面は板状工具でナデている。307は口縁は横へ開いたのち斜め上方に立上る。厚みのある口縁である。

甕III-a（第24図308～311、第25図312～328・330～332）

308は胴部外面はハケ目を施した後にナデている。内面は板状工具でナデている。309は口縁は横へ開いた後に上方へ立上り、端部を横へつまみ出す。胴部外面には櫛描文が施されている。煤が付着している。310・311ともに丸みをもって屈曲しながら立上る口縁で、内・外面ともにナデている。312は口縁下部に板状工具の木口部が当った痕が見られる。313は口縁端部の横へのつまみ出しが顕著である。314は胴部外面にヘラ状工具で施文している。315は立上りの大きい口縁をしている。胴部外面は縦方向にハケ目を施した後に、櫛描直線文を施している。内面はナデている。煤が付着している。316・317ともに胴部外面に櫛描文を施している。318は胴部外面は、ハケ目の後にナデている。内面には指頭圧痕が残る。319は屈曲しながら大きく立上る口縁をもつ。320は口縁は横へ開いた後に、斜め上方に短く立上り端部を横へつまみ出す。胴部外面には粗いハケ目が施されている。内面は板状工具でナデている。また内面には黒斑が見られる。321は口縁端部を大きくつまみ出している。322は胴部外面にハケ目を施している。内面はナデている。323は口縁は横へ開いた



第25図　第１調査区SR－３出土土器実測図

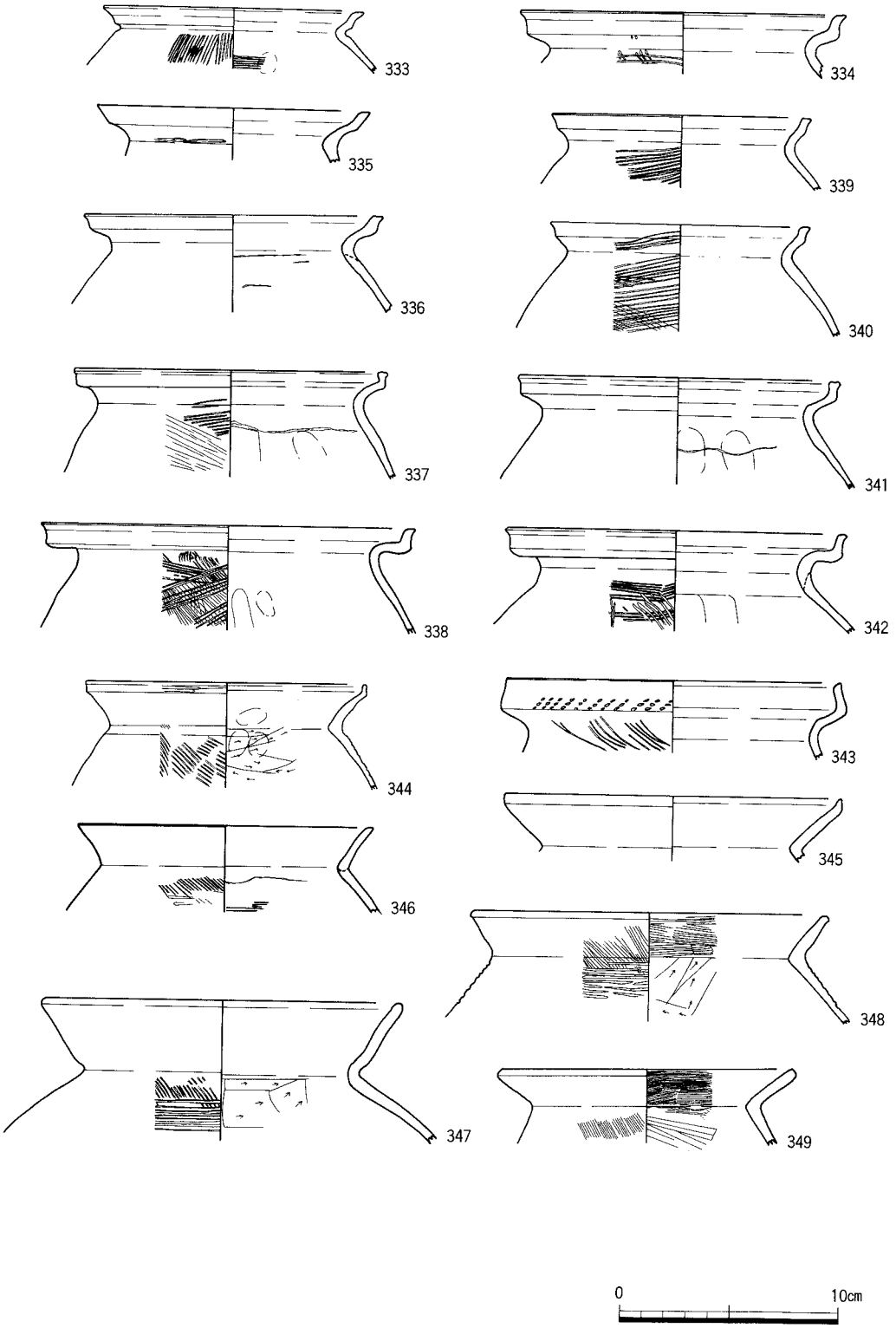
後に短く上に立上り、端部を横へつまみ出している。口縁部は内・外面ともナデている。外面には一部黒斑が見られる。324は口縁は横へ開いた後に上へ立上り、端部を横へつまみ出している。口縁部外面はナデ、内面はハケ目の後にナデている。胴部外面にはハケ目を施している。326は口縁部と胴部との接合が、いびつで段になっている。胴部外面にはハケ目が施されている。内面にはヘラ削りが施されている。327はゆるやかに屈曲して立上る口縁で、端面はやや丸みをもつ。口縁部内面には板状工具によるナデ見られる。328は口縁端部を大きくつまみ出している。330は口縁部の端面をナデているため凹線上の窪みが見られる。胴部外面には櫛描文が施されている。331は厚手の口縁をもつ。332は口縁はなだらかな屈曲をもって立上り、端部を横へつまみ出している。胴部外面にはハケ目が施されている。内面は板状工具でナデている。

甕III-b（第25図329、第26図333～342）

329は口縁は横へ開いた後に上に立上る。端部は平坦な面をもつ。口縁部は強くナデているために屈曲している。口縁部と胴部との接合部は段になっている。胴部外面にはヘラ状工具により施文されている。煤が付着している。333は、胴部内・外面にハケ目を施している。334は口縁は斜め上方に立上った後に上方に立上り、そのまま端部に面をもたせて終る。外面には櫛描文が施されている。335・336とも口縁は斜め上方に立上った後に上方に立上り端部に平坦な面をもたせる。内・外面ともにナデている。337は口縁は斜め上方に立上った後に短く上方に立上り、端部を外側に肥厚させる。胴部外面にハケ目を施した後に一部櫛描文を重ねている。内面には接合痕が明瞭に残っている。338は口縁大きく横へ開いた後に上へ立上る。胴部外面は斜め方向にハケ目を施した後に、櫛描文を重ねている。内面はナデている。339・340とも口縁はゆるく屈曲して立上り、端部は平坦な面ももたす。胴部外面は両者とも、ナデた後に櫛描文を施している。341は口縁端部の面に、ナデたときの凹線上の窪みが残る。342は口縁は広くしっかりとした受口状を呈している。胴部外面には櫛描文が雑に施されている。内面は板状工具でナデている。

その他の甕A（第26図343）

口縁は斜め上方に立上った後に、内傾して立上り、端部に内傾する面をもつ。口縁部の下半に3条1単位の櫛描列点文を巡らせている。胴部外面には斜め方向にハケ目を施している。



第26図　第１調査区SR－３出土土器実測図

甕B-Ⅰ（第26図345～349、第27図350・352・354・356・358）

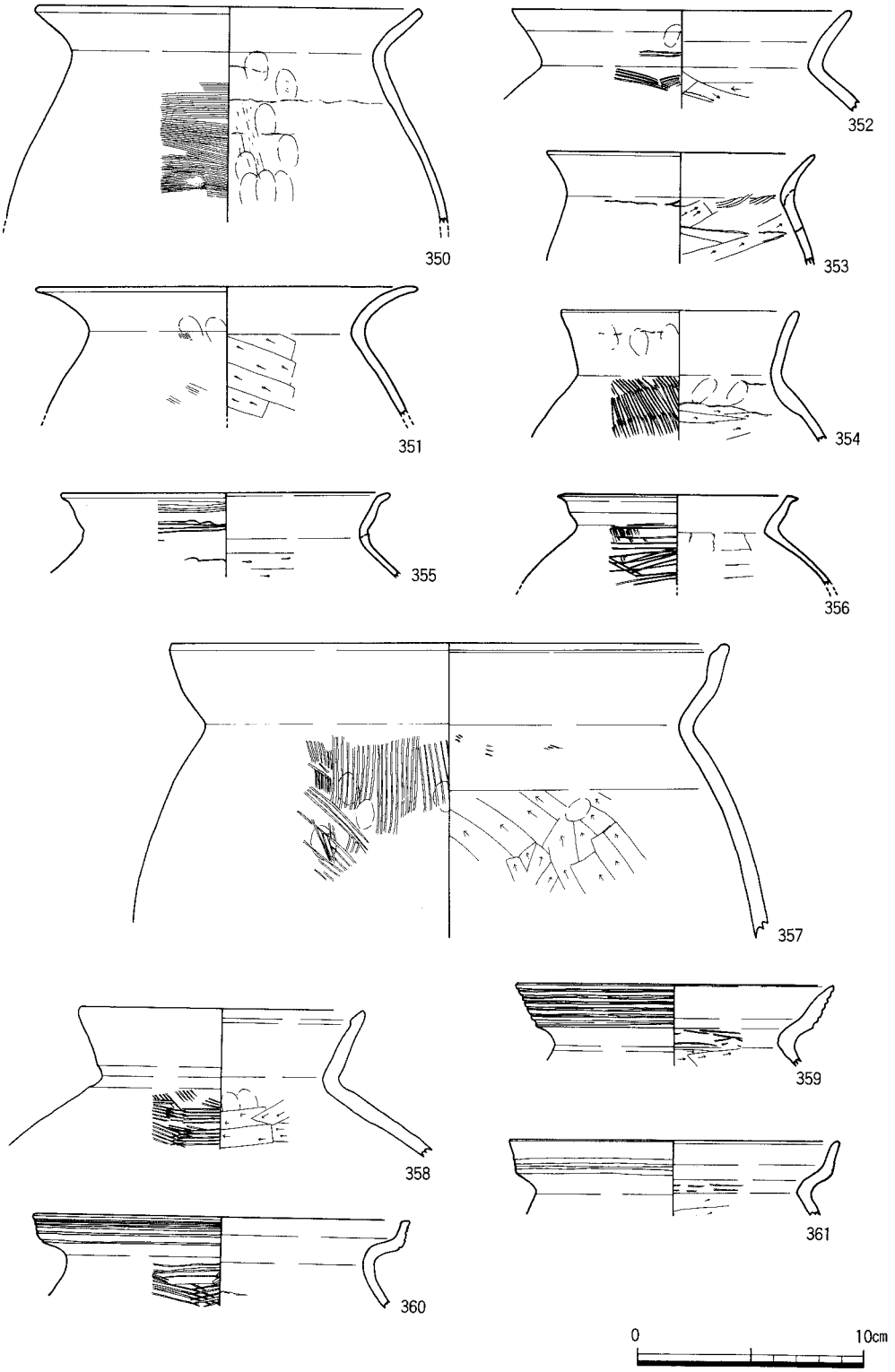
345は直線的に外方にのび、端部を上へつまみ上げる口縁である。346は、口縁は直線的に外方にのび、端部を丸く収める。胴部内・外面ともにハケ目を施した後にナデている。347は口縁はほぼ直線的に外方にのび、端部は丸く収める。口縁部はナデたときの凹凸が認められる。胴部外面はハケ目の後にナデており、その後に櫛描直線文を施している。内面にはヘラ削りを施している。348は直線的に短かめの外方にのびる口縁で、端部には外傾する面をもつ。口縁部外面はハケ目を施した後に一部をナデている。内面は横方向にハケ目を施している。胴部外面にはタタキ目を行っている。内面はヘラ削りを行っている。349は厚手の口縁が直線的に外方にのび、端部は外傾する面をもたす。口縁部は外面はナデているが内面は横方向にハケ目を施している。胴部外面は斜め方向にハケ目を施している。内面は板状工具でナデている。350は口縁は直線的に外方にのびる。胴部は口縁部からなだらかにつながる。胴部外面は横方向にハケ目を施している。内面には接合痕が見られる。ヘラ削りの後にナデている。352は胴部は外面はハケ目を、内面はヘラ削りを施している。354はやや直立気味に立上り端部を丸く収める口縁をもつ。口縁部と胴部との接合部は厚くなっている。胴部外面は斜め方向にハケ目を施している。内面はヘラ削りを行っている。煤が外面に付着している。356は甕Aが退化しBに変化したものと思われる。358は口縁は直線的に外方にのび、端部を内側に肥厚させ内傾する面をもつ。胴部外面はハケ目を、内面はヘラ削りを施している。

甕B-Ⅱ（第27図357）

357は内弯しながら立上る口縁で、端部内側には段が認められる。胴部外面にはハケ目が施されている。内面の上部はナデているが、他はヘラ削りを施している。

甕B-Ⅲ（第26図344、第27図351・353・355）

344は若干外反して立上り、端部を上方につまみ上げている。胴部外面はタタキの後にナデている。内面はヘラ削りを施している。351は大きく外反する口縁をもつ。胴部外面はハケ目の後にナデている。内面は斜め方向にヘラ削りを行っている。353は外面は磨滅のため不明だが、内面は頸部はハケ目、胴部はヘラ削りの後にナデている。355は屈曲しながら外反する口縁をもつ。口縁部外面はハケ目及びヘラ状工具で施文している。胴部外面はナデており、内面はヘラ削りしている。



第27図　第１調査区SR－３出土土器実測図

甕C（第28図362～368・373）

362は口縁は短く外反した後に端部をさらに外反させてつまみ出している。外面にはハケ目が見られる。363は口縁は短く外反して開いた後に端部を一気に外反させながらつまみ出している。胴部外面には掘りの深いハケ目を施している。内面はナデている。364は口縁端部は欠損しているが、「S」字状口縁である。胴部外面にはハケ目を一面に施している。365は胴部外面に粗い斜め方向のハケ目の後に横方向のハケ目を施している。内面は板状工具でナデている。366・367ともに「S」字状口縁である。368は「S」字状口縁で、胴部外面に横方向のハケ目の後に斜め方向にハケ目施す。ハケ目はいずれも掘りが深くシャープである。373も短く外反した後に端部を一気に外反させてつまみ出す「S」字状口縁である。外面に煤が付着している。

甕D（第27図359～361）

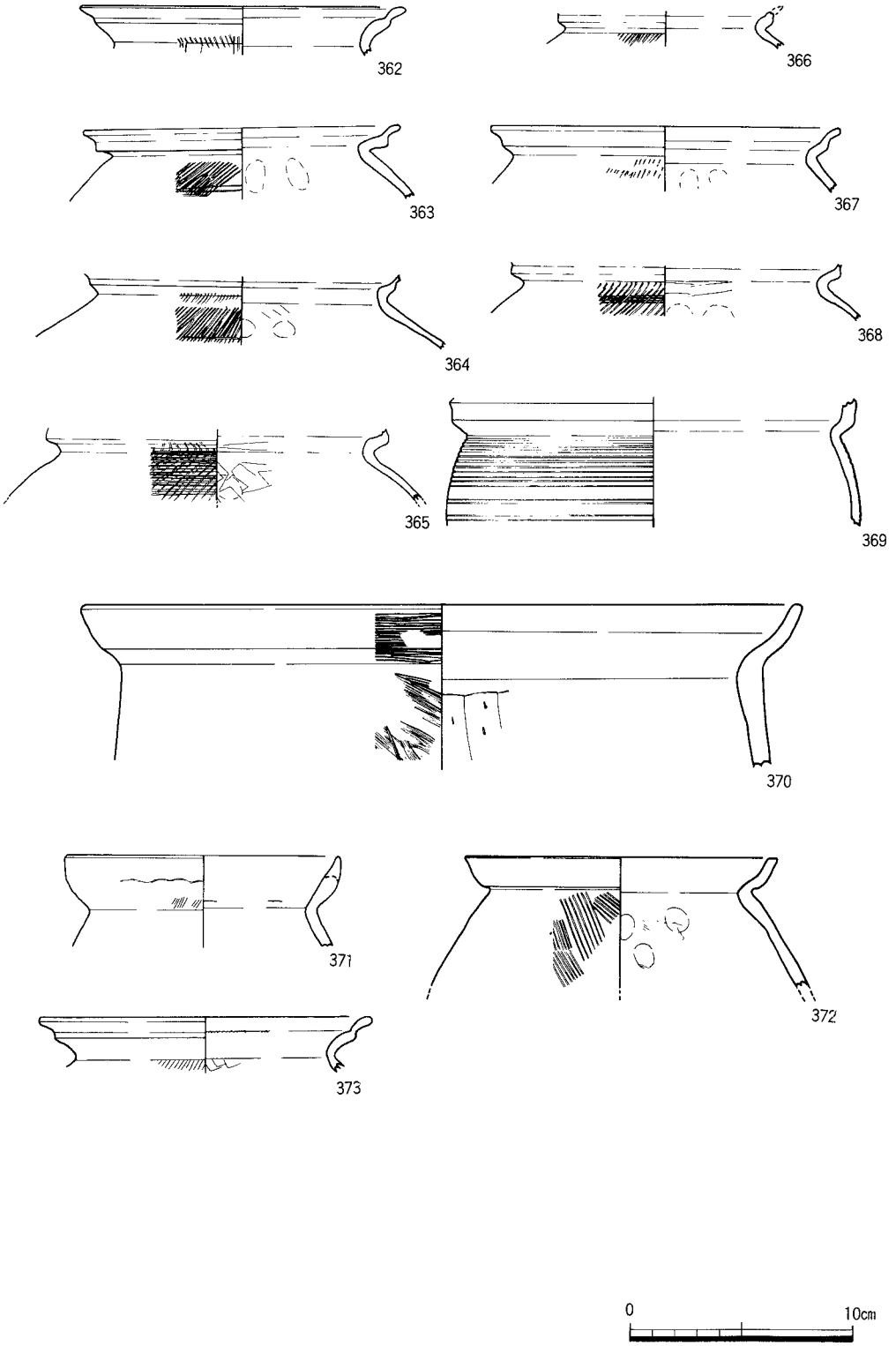
359は二重口縁をなし、口縁外面に6条の擬凹線を巡らせている。胴部外面はハケ目の後にナデている。内面はヘラ削りを行っている。北陸系の甕である。360は口縁外面に5条の沈線を巡らせている。胴部外面には櫛描文を施している。361は3条の擬凹線を口縁外面に施している。胴部外面はナデている。内面は横方向にヘラ削りを施している。

その他の甕（第28図369～372、第33図425・426）

369は口縁形態は不明である。胴部には一面に櫛描直線文を施している。370は長胴甕である。口縁は内弯しながら立上り、端部を丸く収める。口縁部外面は横方向のハケ目で、内面はナデている。胴部外面はハケ目を施した後にナデている。内面は縦方向にヘラ削りを行っている。371は口縁を一度つくった後に、さらにその上に粘土をつぎたして口縁をのばしている。頸部にはハケ目が残っている。372は内弯して立上る口縁で、端部には平坦な面をもつ。胴部外面は斜め方向のハケ目が施されている。内面はハケ目の後にナデている。425・426はともに大形の甕である。 425は胴部内面にヘラ削りを施している。

壺A-I（第29図374～376・378・379・381～383）

374はほぼ直線的に開く口縁をもち、端部付近を強くナデている。375は口縁は厚手である。口縁部外面は、縦方向のハケ目の後にヘラ磨きを行っている。内面は縦方向にヘラ磨きを施している。376は口縁部には強くナデた時の凹凸が残り、端部を上方へつまみ上げて

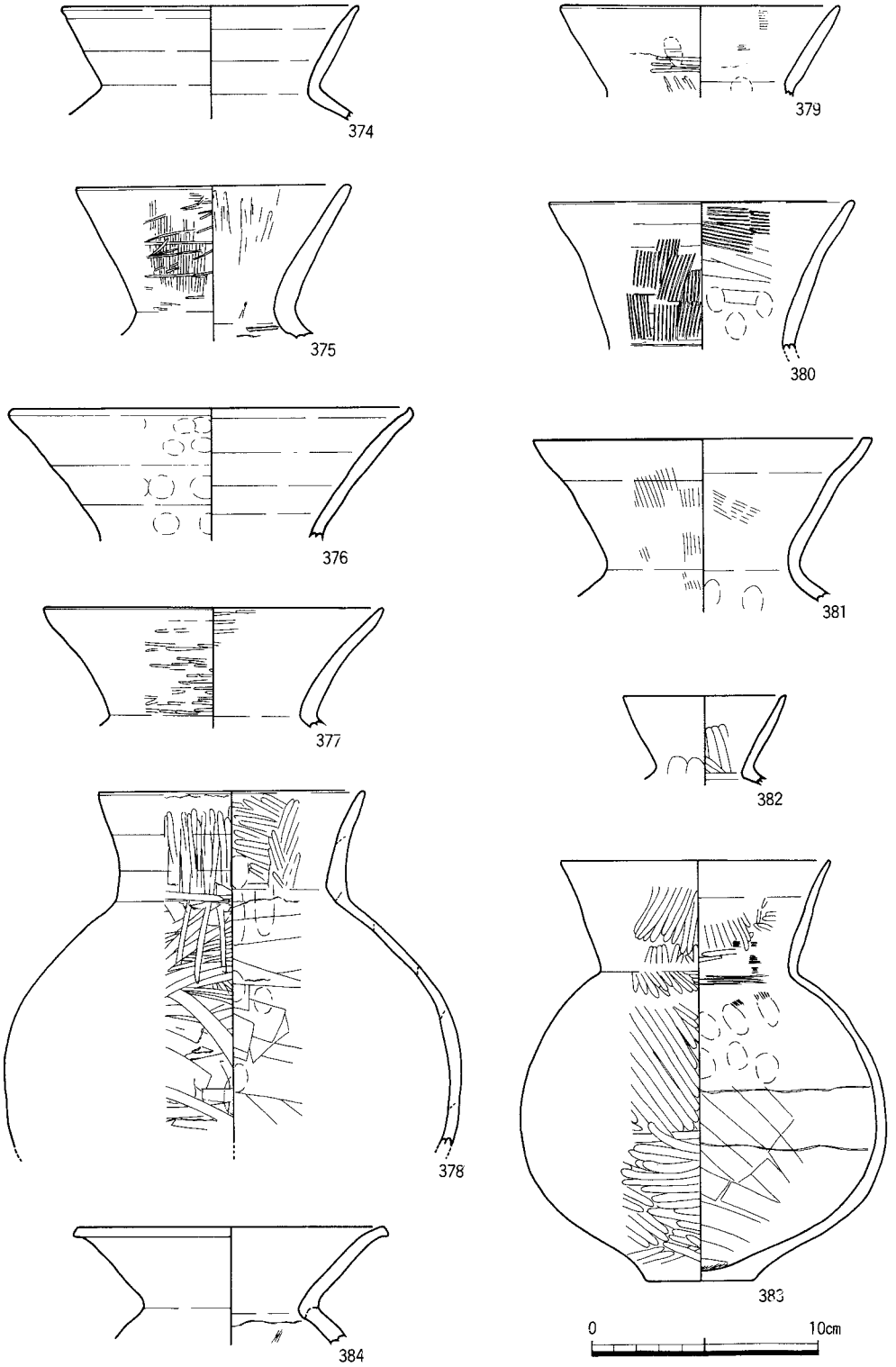


第28図　第１調査区SR－３出土土器実測図

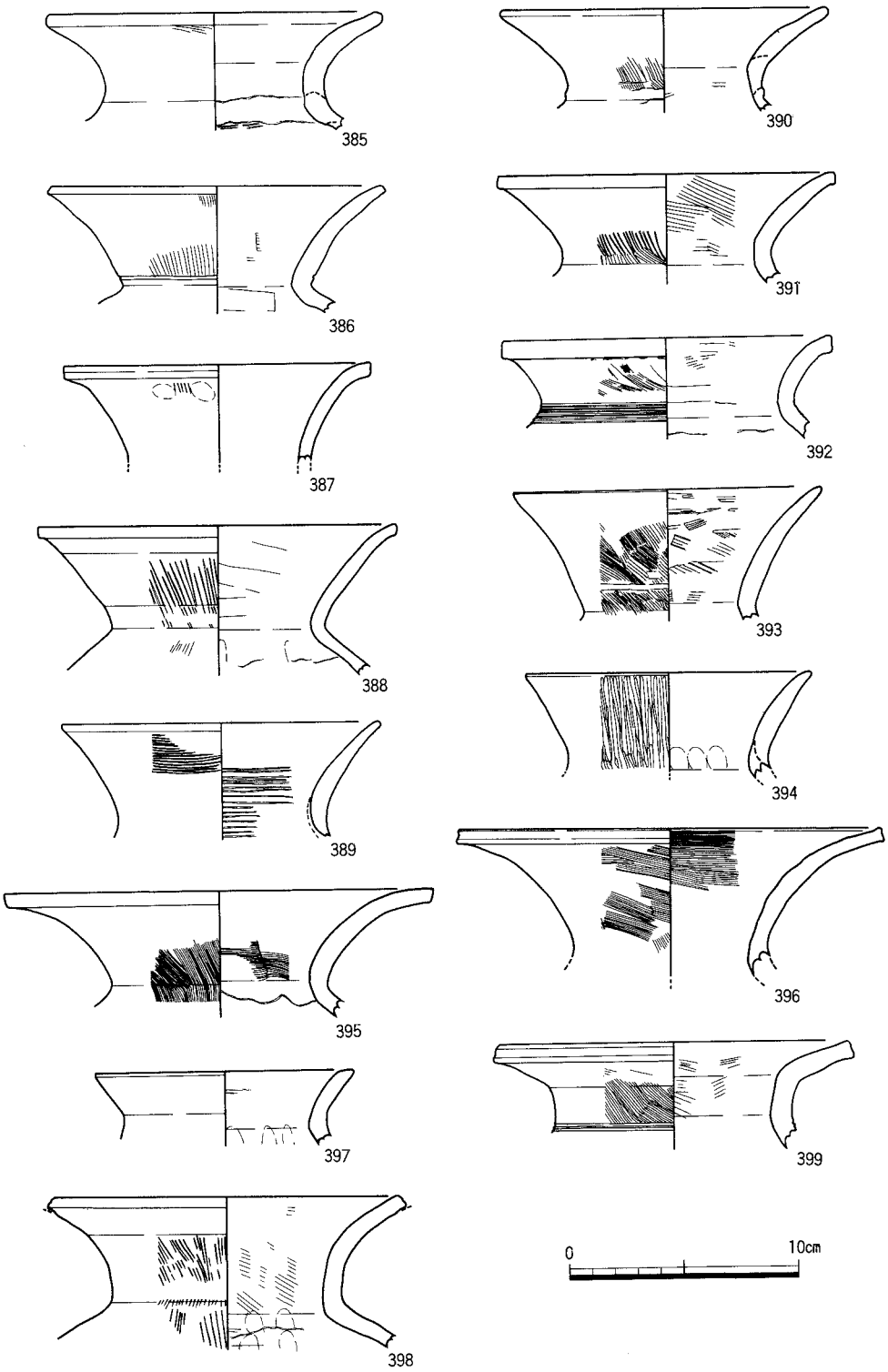
いる。378は口縁は直立に近く立上る。頸部内面は強い稜をなして屈曲する。胴部は倒卵形をなす。口縁部は内・外面ともにヘラ磨きを施し、外面端部をその後にナデている。胴部外面はヘラ磨きと、板状工具でナデている。内面は板状工具でナデている。内面には接合痕が一部に残る。379は短く直線的に開く口縁をもつ。外面はヘラ磨きの後にナデている。内面はハケ目の後にナデている。381は口縁はナデのため若干屈曲しながら立上り、端部は平担な面をもつ。内・外面ともにハケ目を施した後にナデている。382は直線的に開く口縁で、外面はナデ、内面は幅広のヘラ磨きを施している。383は口縁はほぼ直線的に立上り、胴部は最大径が下半にあり、底部はしっかりとした平底をなす。口縁部外面はヘラ磨きの後に、端部をナデている。内面はハケ目の後にヘラ磨きを施し、最後にナデている。胴部外面は一面にヘラ磨きを施している。内面の上半は指頭圧痕が残り、ナデている。下半には接合痕が残り、板状工具でナデている。色調は内・外面とも灰白色である。

壺A-II（第29図377・380、第30図384～399）

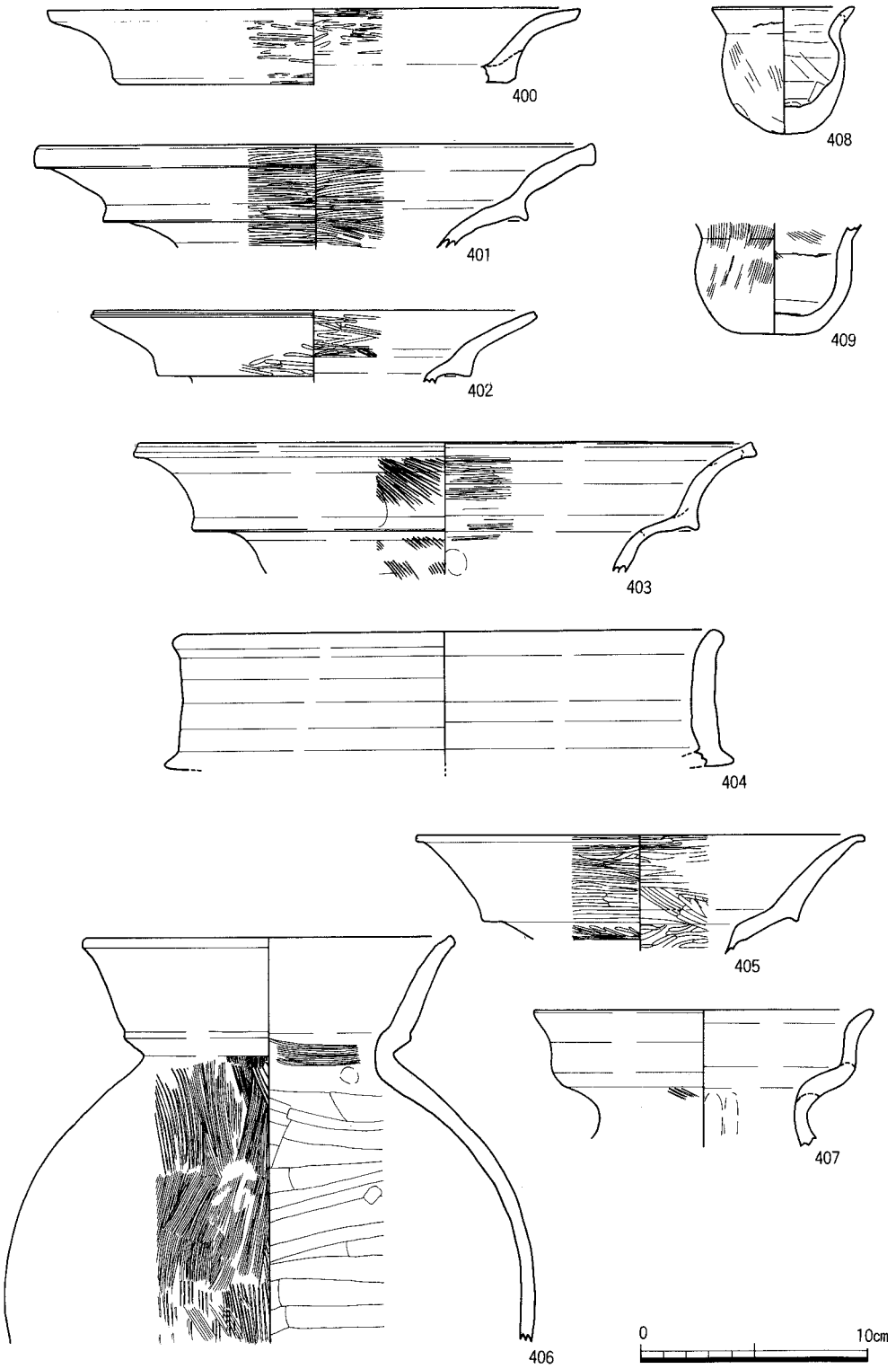
377はゆるく外反気味に開く口縁で、内・外面ともヘラ磨きを施している。内面は磨滅している。380は口縁は中ほどで外方へ屈曲している。外面は縦方向にヘラ磨きを施した後に、端部付近をナデている。内面は端部付近には横方向にハケ目を、下半は板状工具でナデている。384は口縁は直線的に開いた後に屈曲して外反し、外傾する端面をもつ。内・外面ともにナデている。385は大きく外反する口縁をもつ。外面はハケ目を施した後にナデている。内面はナデている。頸部内面に接合痕が残る。口縁部外面に炭化物が、内面には黒斑が見られる。386はゆるく外反する口縁をもち、外傾する端面をもつ。外面は縦方向にハケ目も施した後にナデている。内面は横方向にハケ目を施した後にナデている。頸部外面にはヘラ描沈線が1条巡っている。内面には黒斑が見られる。387は口縁はゆるく外反し、外側に端面をもつ。外面はハケ目の後にナデている。内面はナデている。388は口縁上方で外反し、外側に端面をもつ。口縁部外面は縦方向のハケ目を施した後に、端部と頸部付近をナデている。内面は板状工具でナデている。胴部外面はハケ目の後にナデいる。内面はナデている。389は口縁は外反し端部は丸い。口縁部は内・外面ともに横方向にハケ目を施した後に一部ナデている。390は厚手の口縁をもつ。頸部には削り出し突帯状の隆起が認められる。口縁部外面はハケ目を施した後にナデている。内面はナデている。391は頸部がやや上方に立上った後に外反しながら開く口縁に至り、やや外傾する面をもつ。口縁部外面はナデており頸部はハケ目を施している。内面はハケ目を施している。392は短く外反する



第29図　第１調査区SR－３出土土器実測図



第30図　第１調査区SR－３出土土器実測図

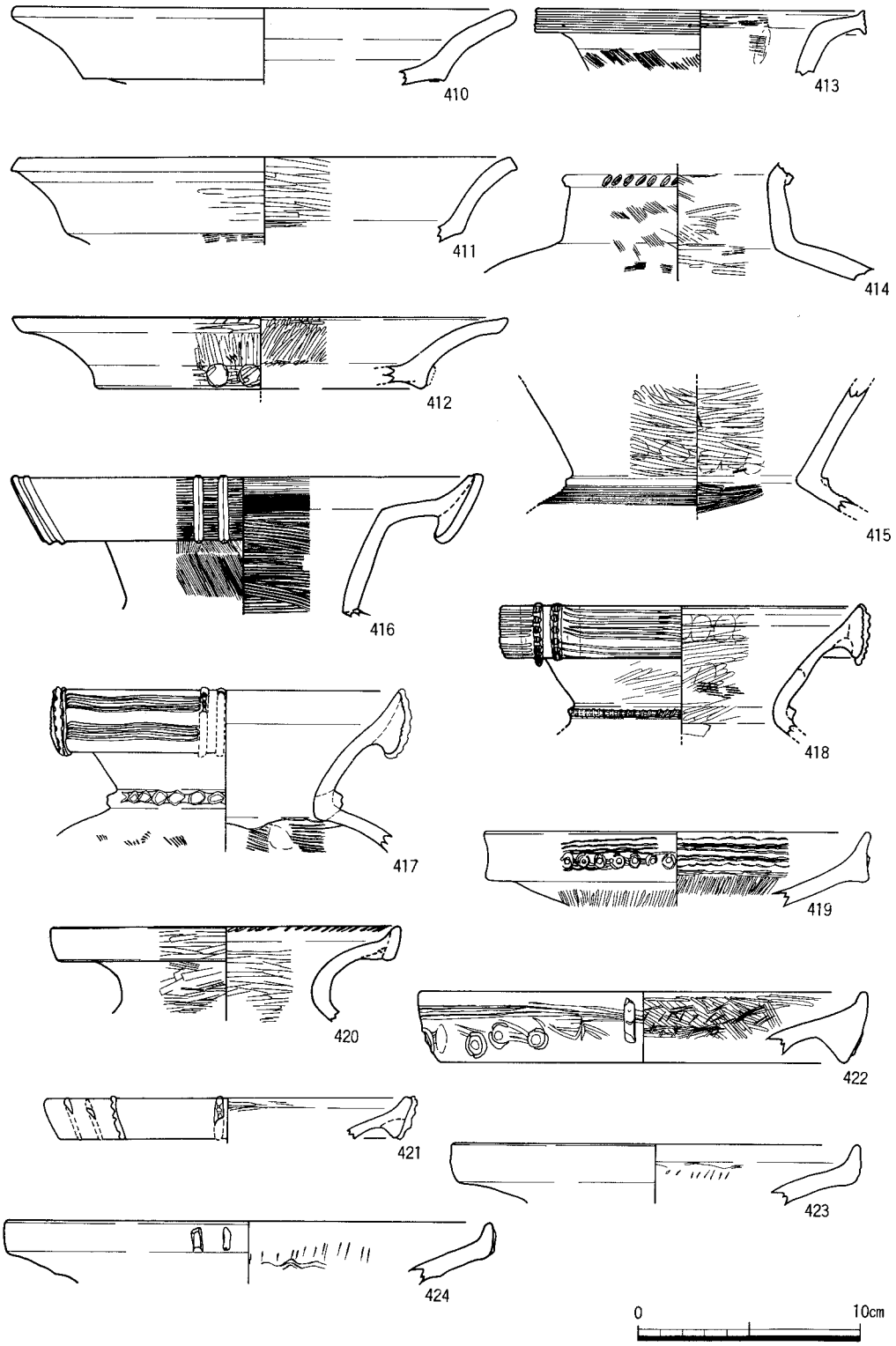


第31図　第１調査区SR－３出土土器実測図

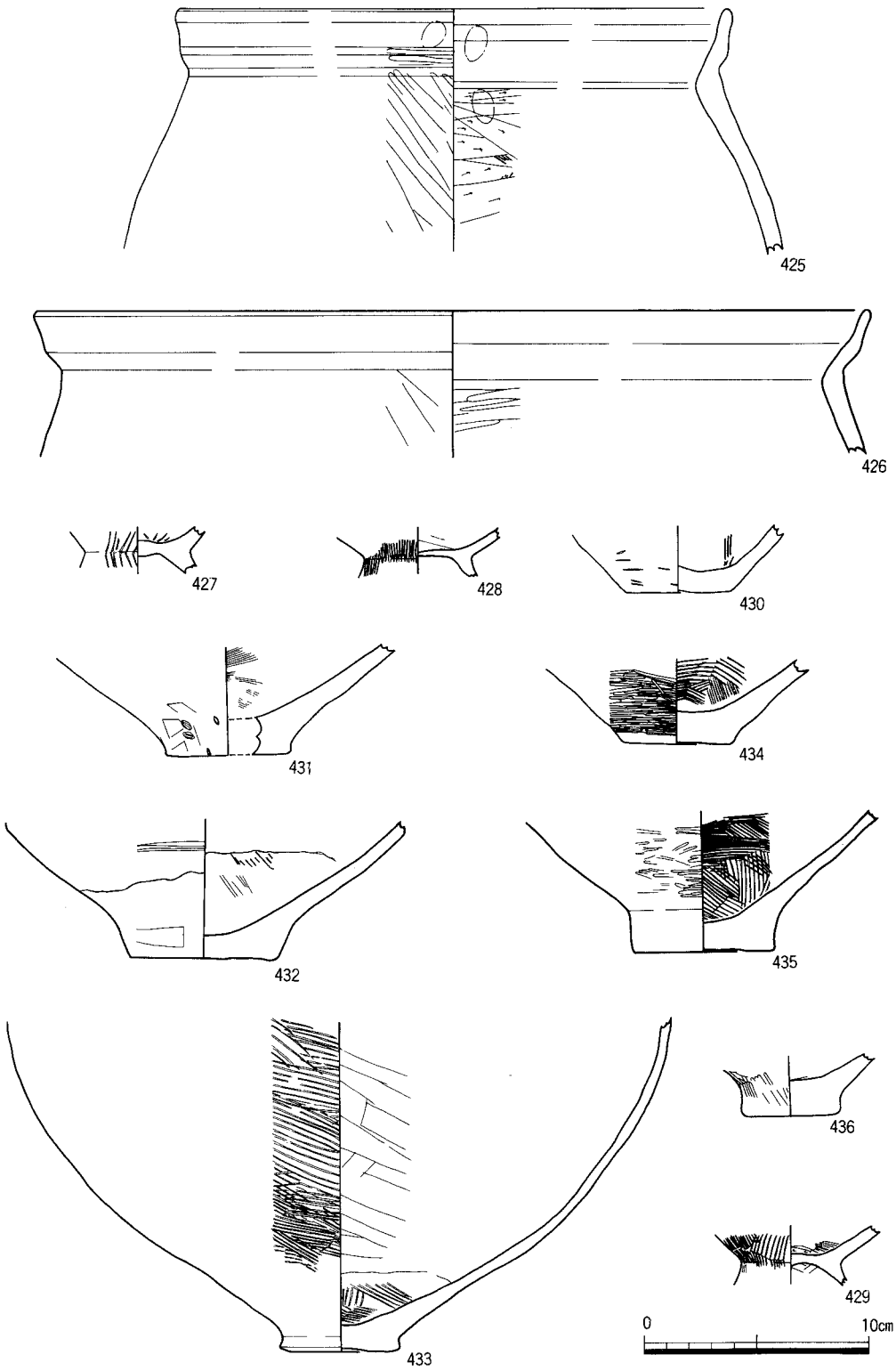
口縁をもち外側に面をもつ。頸部には8条の櫛描直線文が巡っている。口縁部は内・外面ともにハケ目を施した後にナデている。393はゆるやかに外反する口縁をもつ。外面には斜め方向にハケ目を施した後に端部付近をナデている。内面はハケ目を施した後に、一部ヘラ磨きを施している。394はゆるやかに外反する厚手の口縁である。外面は一面に丁寧に縦方向のヘラ磨きを施している。内面はナデている。また内・外面ともに黒斑が見られる。395は大きく外反し、外側に端面をもつ口縁である。外面は口縁部から頸部にかけてハケ目を施している。内面は横方向にハケ目を施した後にナデている。396も大きく外反する口縁をもち、端部は上下にやや拡張し、端面を強くナデている。口縁部は内・外面ともにハケ目を施している。397は外反する短い口縁をもつ。内・外面ともにナデている。398は頸部からほぼ上方に立上った後に外反して開く口縁をもつ。端面には凹線が1条巡る。口縁部外面から頸部にかけてハケ目を施した後に、端部付近をナデている。内面はハケ目を施している。胴部外面はハケ目を、内面はナデている。399はほぼ上方に立上る頸部から外反する口縁に至る。外傾する端面は強いナデが見られる。外面はハケ目が施され、頸部下半にはヘラ描沈線が巡っている。内面にはハケ目が施されている。

壺B（第31図400～405・407、第32図410～412）

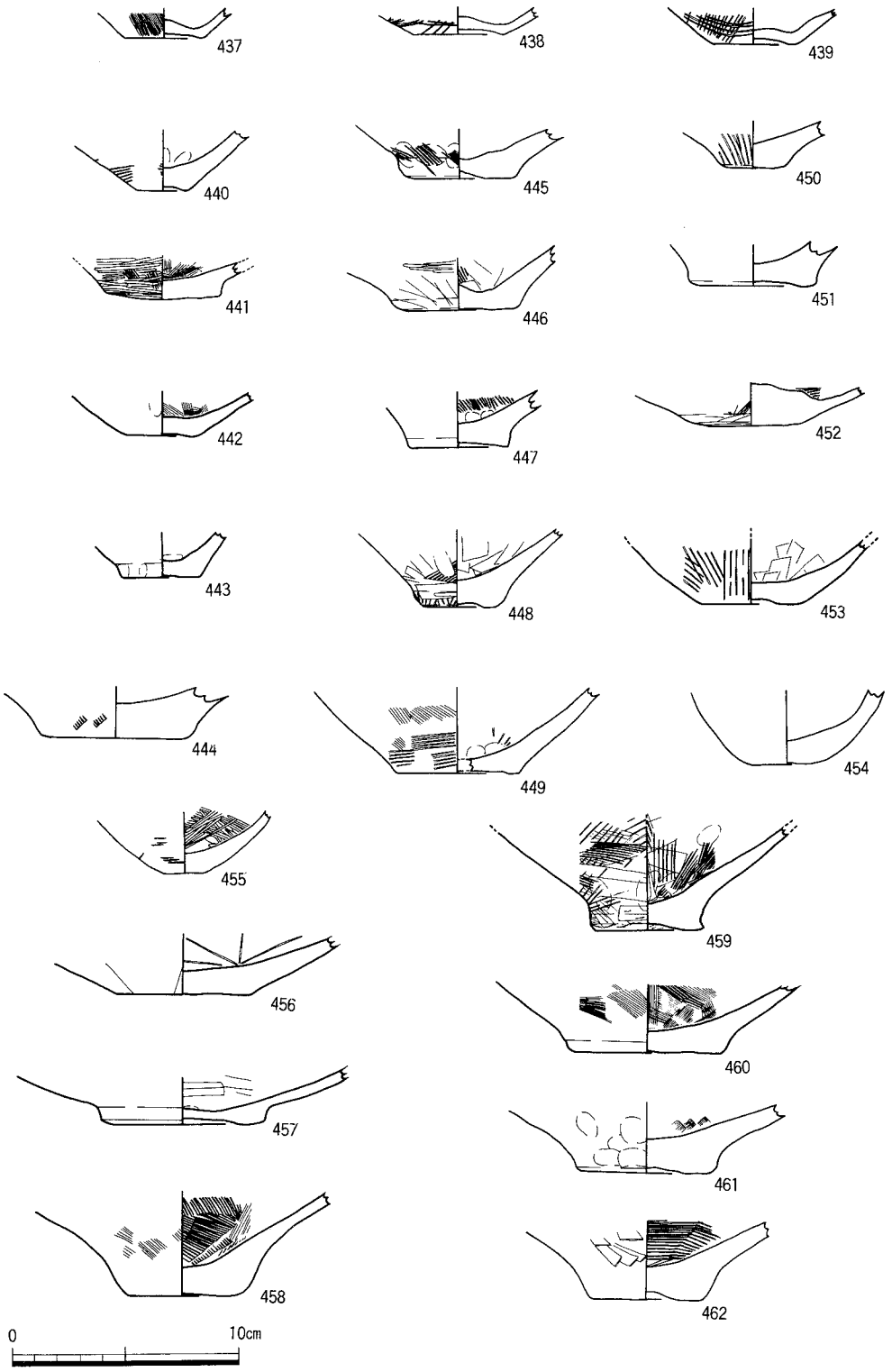
400は大きく外反する二重口縁の壺であり、端部は外側に面をもつ。内・外面ともに横方向にヘラ磨きを施している。401は口縁の屈曲部は下方へ垂下している。端部は若干肥厚している。内・外面ともに横方向にハケ目を施した後に、若干のヘラ磨きを加えている。402は頸部から横へ開いた後に屈曲して直線的に外方に開く二重口縁をなす。端面にはヘラ描沈線が1条巡っている。内・外面ともに横方向にヘラ磨きを施している。403は頸部から外反しながら立上り、屈曲した後にさらに大きく外反して立上る二重口縁である。外面はハケ目を施した後にナデている。内面は横方向にヘラ磨きを行っている。口縁径が27cmの大型の壺である。404は頸部から立上った後にほぼ真上に立上り、端部付近で外反する二重口縁と思われる。口縁部は強くナデている。内面は黒色である。405は口縁部は外方に開いた後に稜をつくりさらに外反して立上る。端部は下方に肥厚している。内・外面とも一面にヘラ磨きを丁寧に施している。407は頸部から斜め上方に立上った後に丸みを帯びて屈曲し上方に外反しながら立上る口縁をもつ。内・外面ともにナデている。410～412はともに屈曲して外反する二重口縁である。411は内・外面ともに横方向にヘラ磨きを施している。屈曲部にはハケ目が認められる。412は内・外面ともにヘラ磨きを施し、二個一単位の円形



第32図　第１調査区SR－３出土土器実測図



第33図　第１調査区SR－３出土土器実測図



第34図　第１調査区SR－３出土土器実測図

浮文を貼付けている。

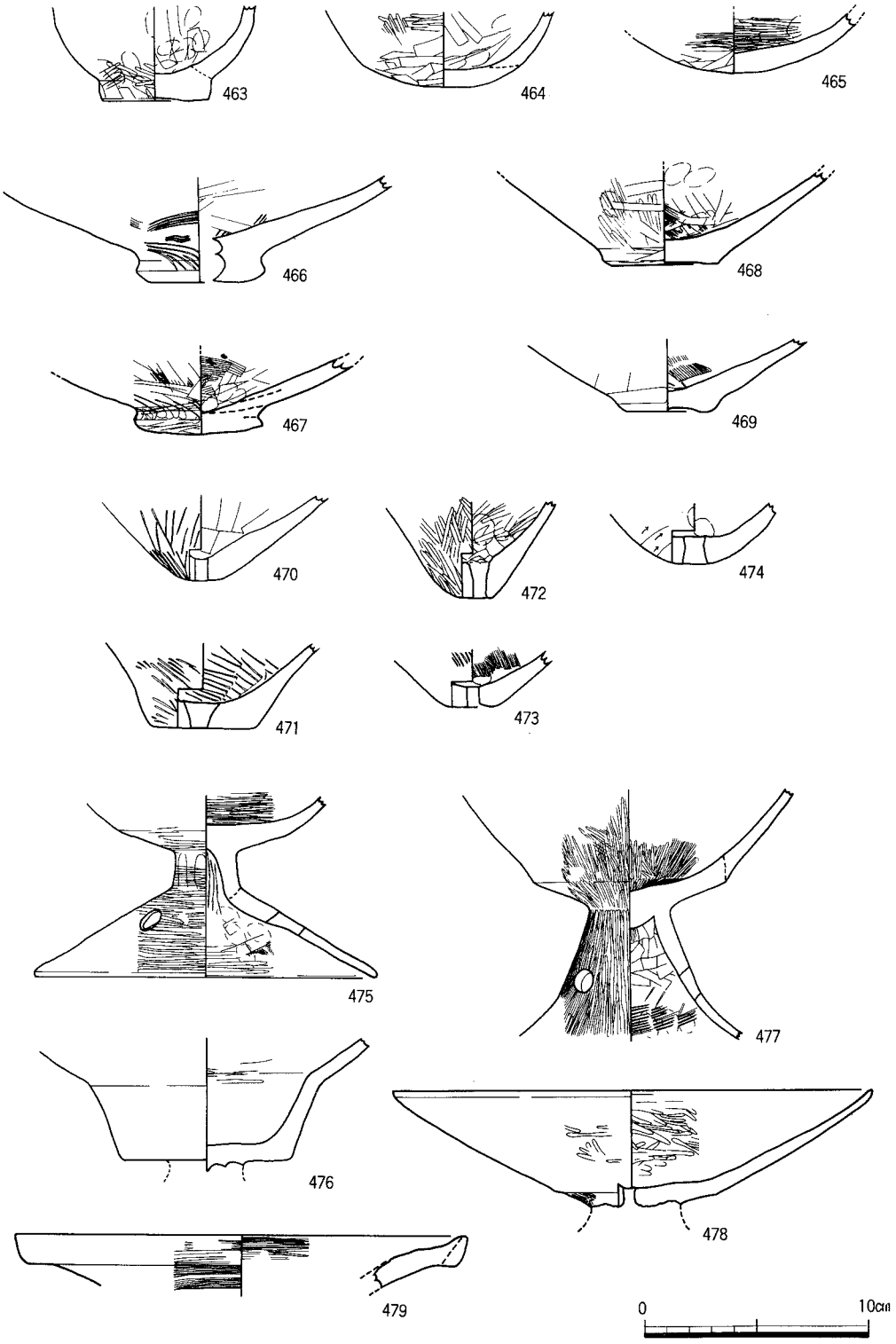
壺C（第32図416～418・420）

416は口縁は直線的に斜め上方に立上った後に屈曲してほぼ横に開き、端部を上下に大きく拡張し、大きな端面をつくり出している。端面には2条1単位の棒状浮文が4単位貼付けられている。端面には横方向にハケ目が施されている。頸部には斜め方向のハケ目が、内面には一面に横方向のハケ目が施されている。417は外反気味に開く口縁の端部に粘土を付加して幅広の面をつくり出している。端面には刻み目の施された棒状浮文が2条1単位で貼付されている。そして棒状浮文が貼付された後に、間に櫛描文を施している。さらに頸部には刻目突帯を貼り付けている。口縁部は内・外面ともにナデている。胴部は外面はハケ目の後にナデている。内面は横方向にハケ目を施している。418もほぼ直線的に開く口縁の端部に粘土を付加して大きな面をつくり出している。そして端面には2条1単位の刻み目棒状浮文を貼り付けている。そして棒状浮文の間に櫛描文を施している。また頸部には刻み目突帯を貼り付けている。内・外面ともにヘラ磨きを施した後にナデている。420は外反しながら立上る口縁の端部に粘土を付加して面をつくり出している。端部内面にヘラ状工具で刻み目を巡らせている。口縁部端面は横方向にヘラ磨きを施している。口縁部から頸部にかけての外面はハケ目の後にヘラ磨きを施している。内面は横方向にヘラ磨きを施している。

その他の壺（第31図406、第32図413・415）

406は口縁は頸部から短く外反した後に屈曲し斜め上方にやや外反して立上る。胴部は楕円形をなすものと思われる。口縁部は内・外面ともにナデている。胴部外面はハケ目が施されている。内面は頸部にハケ目が施されている他は、板状工具でナデている。※413は外反する口縁の端部を上下に拡張し、端面に4条の櫛描沈線を施している。外面はナデた後に、頸部にかけてハケ目を施している。内面は横方向にハケ目を施した後にナデている。器台の口縁部の可能性もある。415は壺の頸部から口縁にかけての破片であるが、形態は不明である。頸部は断面三角形の突帯を1条貼り付けている。肩部には櫛描直線文を施している。口縁部は内・外面ともにヘラ磨きを施している。肩部内面にはハケ目を施している。

ミニチュア土器（第31図408・409）

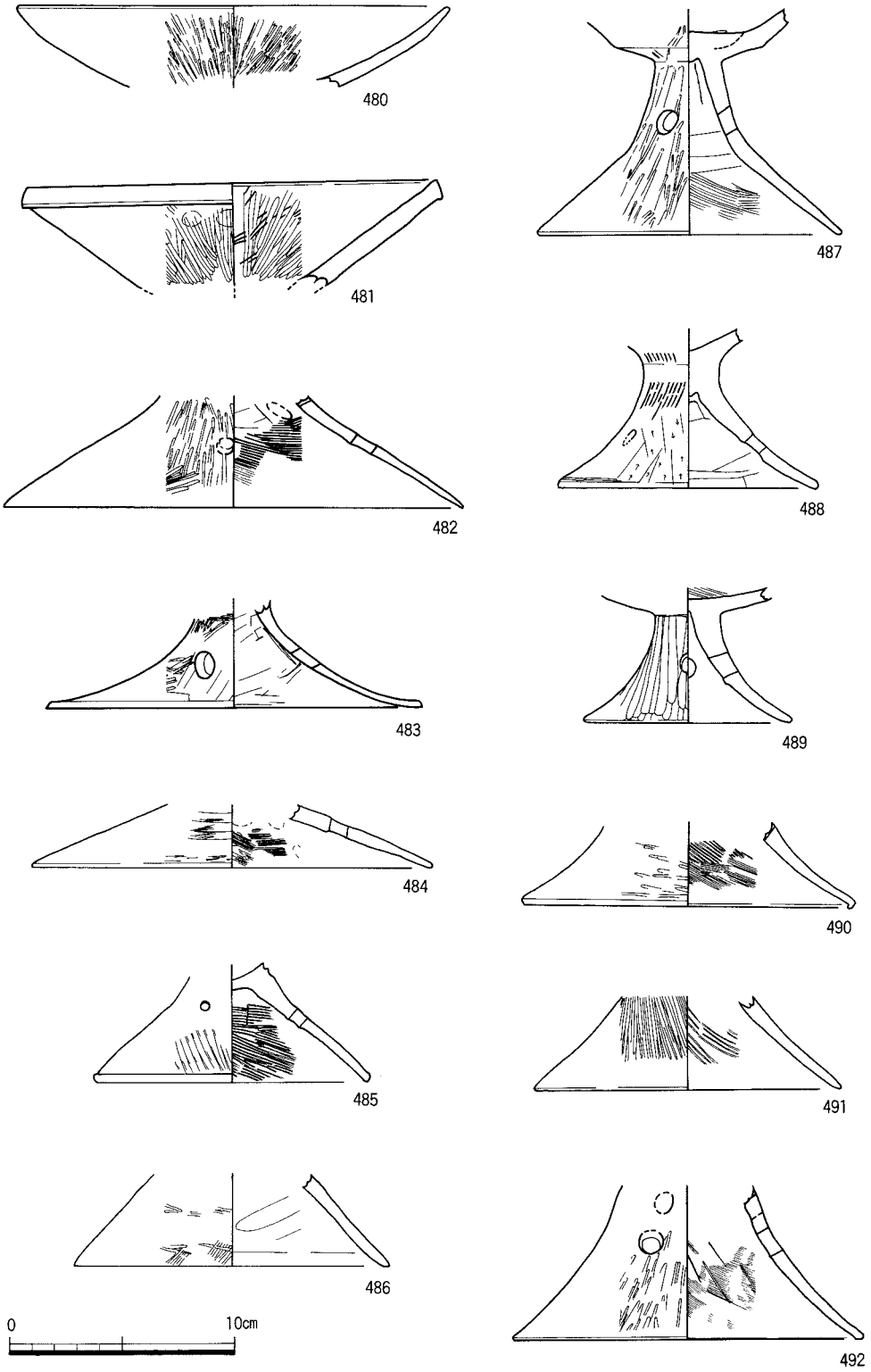


第35図　第１調査区SR－３出土土器実測図

408はミニチュア土器で、口縁部は外方に開き、底部は丸底で厚くなっている。外面はハケ目の後にナデている。内面は板状工具で粘土を削り取って調整している。また底部内面には指押えの痕が見られる。409もミニチュアの壺で底部は平底となっている。外面は縦方向のハケ目を施した後にナデている。内面は頸部付近にハケ目が認められる。底部は板状工具でナデている。

甕及び壺の底部（第33図427～436、第34図437～463、第35図464～469）

427～429は脚台付甕の底部である。いずれも外面にハケ目を施している。428は薄手の底部となっている。430は平底で底部が中央付近で肥厚している。431は平底で、底部外面にモミ痕が残っている。内面にはハケ目を施している。432はしっかりとして平底であり、内面に一部ハケ目が残る。433は胴部から底部にかけての破片である。底部は上げ底気味の平底である。胴部外面にはハケ目を施している。内面は板状工具でナデている。底部内面にはハケ目を施している。434は壺の底部と思われ、外面は横方向のヘラ磨きが、内面にはハケ目が施されている。435は若干上げ底の平底である。外面はヘラ磨きが、内面はハケ目が施されている。底部には黒斑が見られる。436は突出した平底で、外面はヘラ磨きの後にナデている。437～439は甕Aの底部と思われる。いずれも上げ底となっており器壁は薄い。外面はいずれもハケ目を施している。440は外面にタタキ目が残る。 441は壺の底部と思われ、外面は丁寧にヘラ磨きを施している。442･443とも上げ底気味の平底である。444はしっかりとした平底である。445は底部は輪台のようになっている。446は底部は内面が肥厚している。外面にはヘラ磨きが施されている。447は上げ底となっている。内面にはハケ目が施されている。448は底部はくぼみ状の上げ底である。外面はハケ目の後に板状工具でナデている。内面は板状工具でナデている。449は大きな平底である。450は底部の器壁は厚く、小さな平底である。外面には粗いハケ目を施している。451は上げ底気味の平底。452は内面は極端に肥厚している。未調整のものと思われる。453は外面にはハケ目を、内面には板状工具によるナデを施している。454･455は丸底気味の平底である。455は外面はハケ目の後ナデている。内面はヘラ磨きを施している。456は大きなしっかりとした平底である。457は上げ底気味の突出した底部である。458は厚手のしっかりとした平底の底部である。内・外面ともにハケ目を施している。459は突出した底部をもち、上げ底気味の平底となっている。外面はハケ目の後に板状工具でナデている。内面にはハケ目を施している。460はしっかりとした平底で、内・外面ともハケ目を施している。また外面には黒斑が見ら



第36図　第１調査区SR－３出土土器実測図

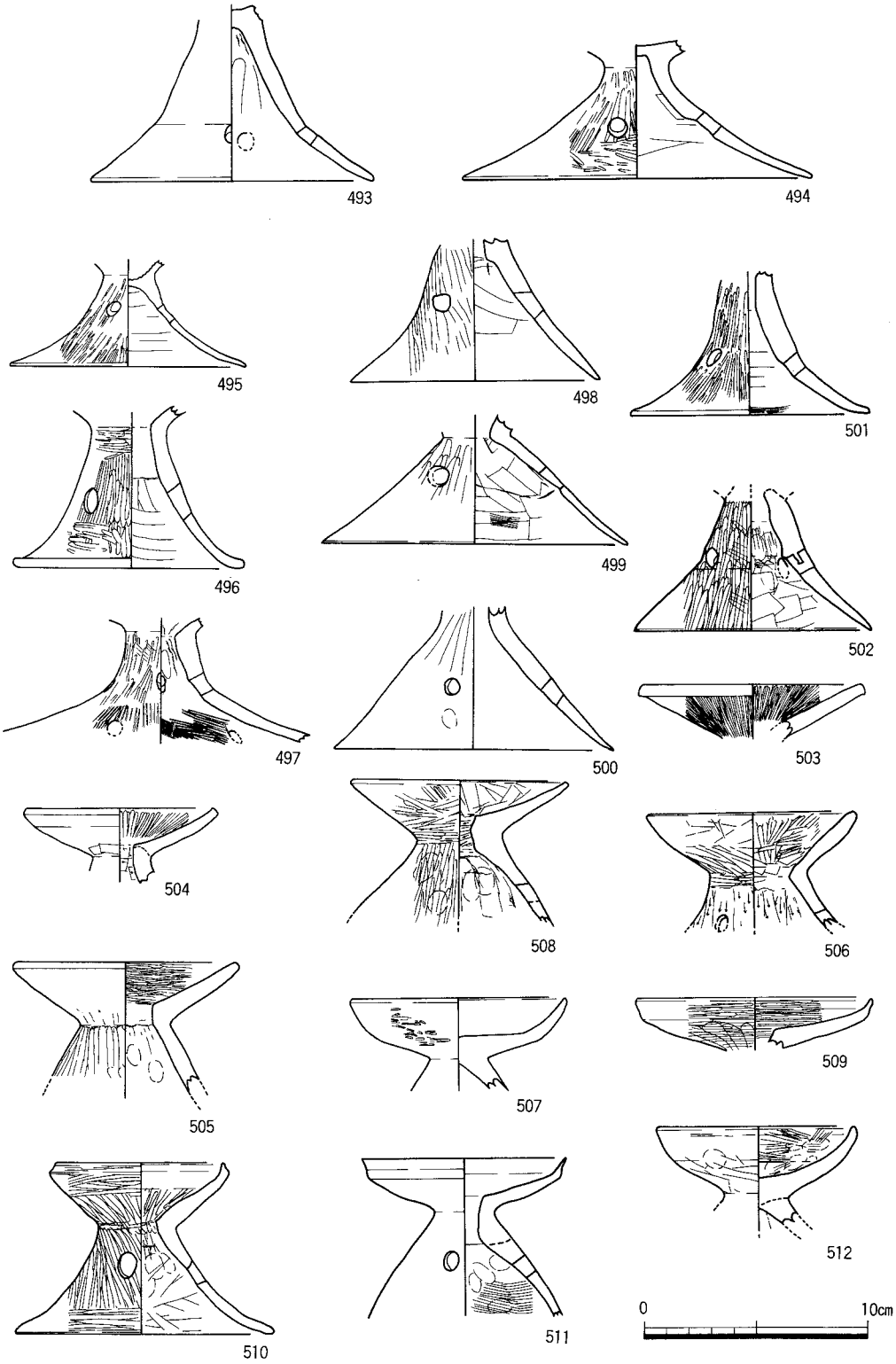
れる。461は外面に煤が付着している。462は厚手の底部で外面は板状工具でナデている。内面にはハケ目を施している。463は突出した、しっかりとした平底の底部から、丸味をもって胴部へと続く。外面にはヘラ磨きが、内面には板状工具でナデており、指頭圧痕も多く残る。464・465は丸底である。466・467は大きく突出した平底の底部をもつ。467は外面は板状工具でナデている。内面はハケ目を施している。468は安定した平底である。469は外面は板状工具によるナデを、内面はハケ目も施している。

有孔鉢（第35図470～474）

470は丸底に近い平底である。外面は粗いハケ目が、内面は板状工具でナデている。外面の穿孔部を中心に黒斑が見られる。471は安定した平底で、中心部に内面に向って大きく穿孔されている。内・外面ともにハケ目が施されている。472は底部外面から内面に向って穿孔しているが貫通していない。473は丸底に近い平底である。内・外面ともにハケ目が施している。474は丸底である。外面にはヘラ削りが見られる。指頭圧痕が内・外面が残っている。

高杯（第35図475～478、第36図480～493、第37図495～503）

475は脚は柱状にのびた後に屈曲して、直線的に開き、端部は丸く収める。杯部は現存では丸く立上る。脚部は現存で2か所に透し穴がある。杯部外面はヘラ磨きの後にナデている。内面はヘラ磨きを施している。脚部外面は横方向のヘラ磨きが、内面はナデており指頭圧痕が残る。476は2段に屈曲しながら立上る杯部である。外面はナデ、内面はヘラ磨きを施している。477は脚部は下半で屈曲した後に直線的に広がる。脚部はゆるやかに外反する。杯部と脚部は円板充塡を行っている。杯部は内・外面ともに丁寧にヘラ磨きを行っている。脚部は外面は縦方向にヘラ磨きを、内面は板状工具でナデている。脚には三方透しが穿たれている。478はゆるく内弯しながら立上る杯部で、杯部の底部には円孔が穿たれている。杯部外面はヘラ磨きの後ナデている。内面はヘラ磨きの後、端部をナデている。480は内弯して開く杯部で、内・外面ともに丁寧にヘラ磨きを施している。482は直線的に開く脚で、端部は尖り気味に終わる。段ちがいの2段の4方透しである。外面は縦方向のヘラ磨きが、内面はハケ目が施されている。483は大きく外反して広がる脚で、端部は外側に面をもつ。3方透しである。外面はヘラ磨きの後にナデ、内面は板状工具でナデている。484は直線的に大きく開く脚部である。外面はヘラ磨きの後にナデている。内面はハケ目である。485はやや内弯して開く脚で、端部は外側に面をなす。3方透しである。内・外面とも

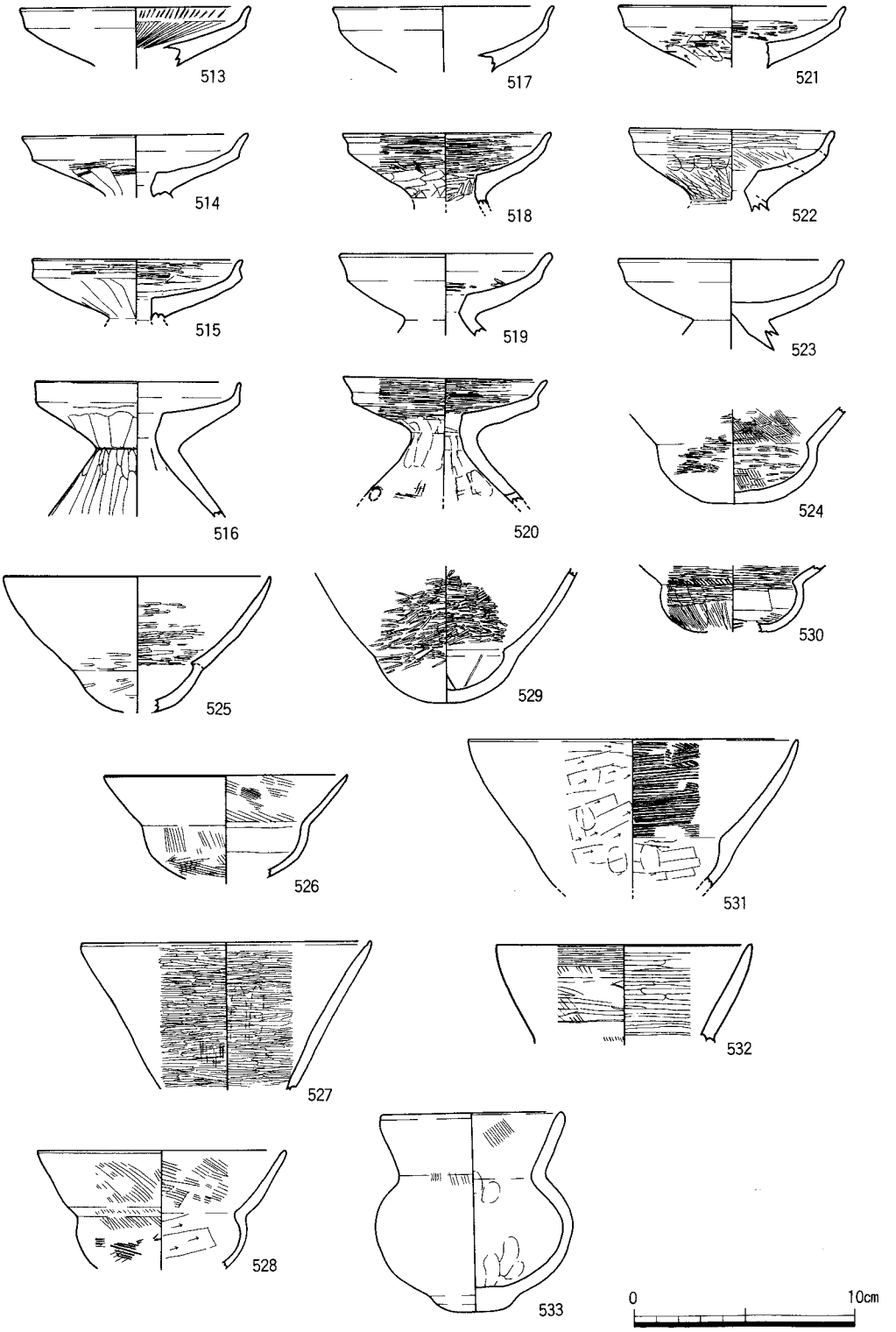


第37図　第１調査区SR－３出土土器実測図

にハケ目を施している。486は脚部はほぼ直線的にのびる。外面はハケ目の後にヘラ磨きを行っている。内面はナデている。487は杯部は底部から稜をなして屈曲して開く。脚部は外反して開き、3方透しである。杯部と脚部とは円板充塡を行っている。外面は縦方向にヘラ磨きを施している。内面は、ハケ目としぼり痕が認められる。488は脚はゆるやかに外反しながら開き、4方透しをもつ。外面は端部付近にヘラ磨きを、下半にヘラ削りを施している。内面は板状工具でナデている。端部の一部には黒斑が見られる。489は短く外反する脚で4方透しをもつ。外面は太いヘラ磨きを施している。490は脚端部を内傾させている。外面はヘラ磨き、内面はハケ目を施している。491は直線的に開く脚の内・外面にハケ目を施している。492はゆるやかに外反する脚で、端部は平坦な面をもつ。2段の3方透しをもつ。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はハケ目を施している。493は外反しながら開く脚で、4方透しをもつ。494は大きく開く脚で3方透しをもつ。端部は丸く収まる。外面はヘラ磨きを、内面は板状工具でナデている。495も大きく開く脚をもち端部は丸く収まる。3方透しをもつ。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は板状工具でナデている。496は裾部が外反しながら広がる脚で、端部は外側に面をもつ。3方透しである。外面はヘラ磨き、内面は板状工具でナデている。497は大きく外反して広がる脚で4方透しが2段穿たれている。外面はハケ目を施した後にヘラ磨きを行っている。内面はハケ目を施している。498はほぼ直線的に開く脚で3方透しである。杯部と脚部は貫通しており器台の脚の可能性がある。499・500も同様である。501は外反しながら開く脚で、端部は外側に丸い面をもつ。3方透しをもち厚手の器壁をもつ。外面は縦方向にヘラ磨きを、内面の端部は横方向にハケ目を施している。502は若干外反して開く脚で端部先細りとなる。近接して2個、計4個の穿孔がある。杯部とは差し込み式となっている。外面は縦方向にヘラ磨きが、内面はヘラ削りの後に板状工具でナデている。

器台A（第37図503～506・508）

503は直線的に開く受部で外傾する端面をもつ。内・外面ともに丁寧にヘラ磨きを施している。504はほぼ直線的に開き外傾する端面をもつ。外面はナデている。内面は受部はヘラ磨き、脚部はヘラ削りを行っている。505は直線的に開く受部と脚部をもち、受部と脚部は中空となっている。受部は外面はヘラ磨きの後にナデ、内面は横方向にヘラ磨きを施している。脚部外面は縦方向のヘラ磨き、内面はナデている。506は直線的にのびる受部の端部は丸く収める。受部は内・外面ともにヘラ磨きを施している。脚部は内・外面ともにヘラ



第38図　第１調査区SR－３出土土器実測図

削りを行っている。508は受部は直線的に開き外傾する端面をもつ。脚部はやや内弯しながら開く。受部外面はヘラ磨き、内面は板状工具でナデている。脚部外面は縦方向にヘラ磨きを、内面はヘラ削りを施している。

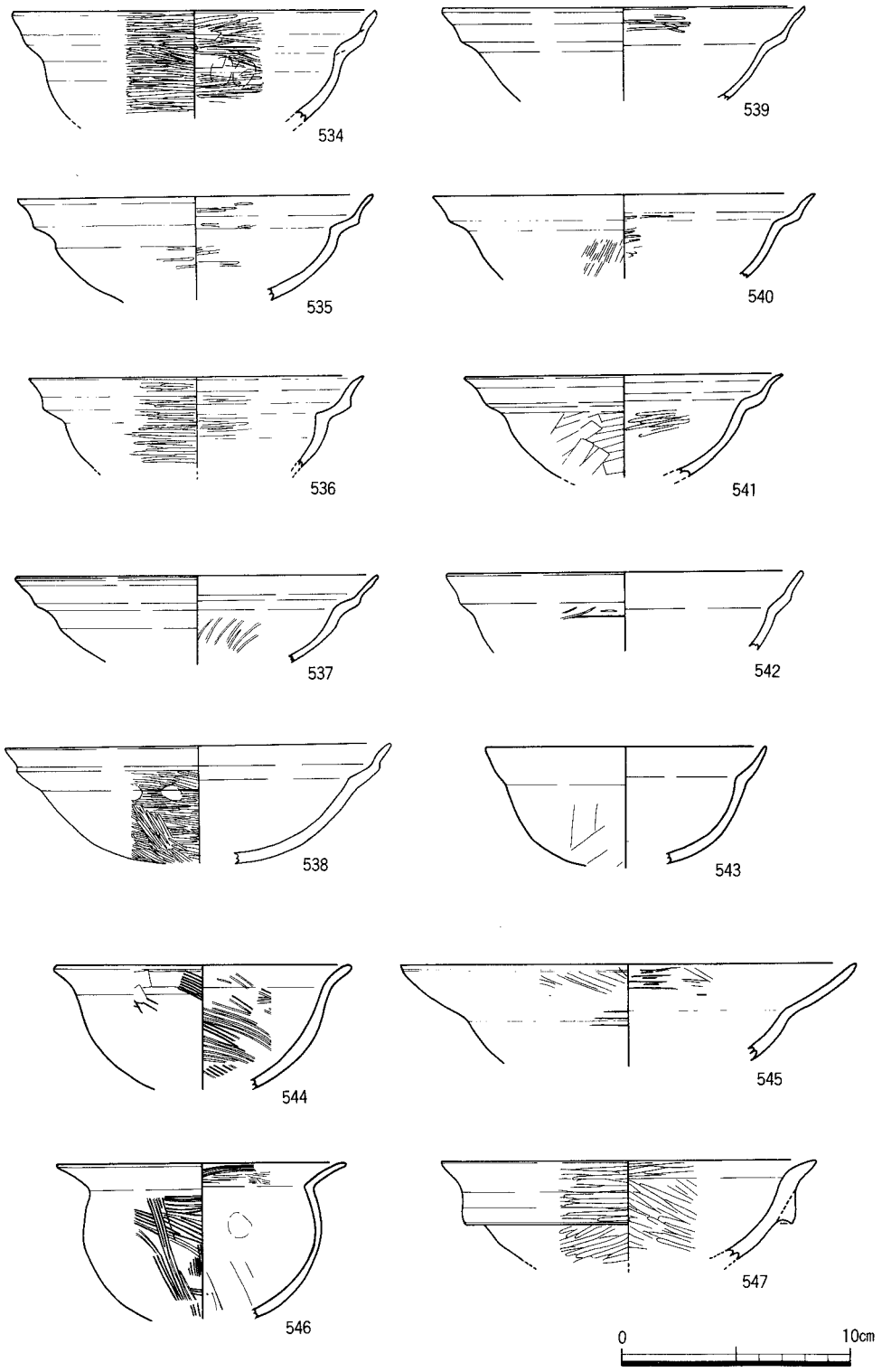
器台B（第37図509～511、第38図513～523）

509は受部は端部の斜め上方につまみ上げる。外面は面取りの後に横方向にヘラ磨きを、内面は横方向にヘラ磨きを施している。501は受部は直線的に開いた後に、端部を内傾させてつまみ上げている。脚部は外反しながら広がり、3方透しをもつ。受部と脚部とは中空になっている。受部上半は横方向のヘラ磨きの後にナデている。下半は縦方向のヘラ磨きである。内面も同様である。脚部外面は端部は横方向のヘラ磨き、それ以外は縦方向のヘラ磨きとなっている。内面は板状工具でナデている。511は受部端部を斜め上方につまみ出している。脚部は内弯している。穿孔は現存では1孔であるが、3孔と思われる。脚部内面にはハケ目が施されている。513は外面はナデ、内面はヘラ磨きの後にナデている。514は受部端部を斜め上方に大きくつまみ出す。外面はヘラ削りの後にヘラ磨きを行い、最後にナデている。515は受部端部を屈曲させるようにつまみ上げている。外面は端部をヘラ磨き、下半を板状工具でナデている。内面はヘラ磨きを施している。516は受部端部を上方に大きくつまみ上げている。外面は受部、脚部ともに板状工具でナデている。外面には黒斑が付着している。 517は受部端部のつまみ出しは、ゆるく外反させている。外面に黒斑が付着している。518は受部はやや内弯気味に立上り、端部のつまみ出しは甘くなっている。外面はヘラ削りの後にヘラ磨きを、内面はヘラ磨きを施している。519は外面はナデ、内面はヘラ磨きの後にナデている。502は受部端部を斜め上方に細長くつまみ出している。受部は内・外面ともに横方向にヘラ磨きを丁寧に施している。脚内面にはしぼり痕が見られる。3方透しである。521・522は受部外面はヘラ削りの後に横方向にヘラ磨きを、内面は横方向のヘラ磨きの後にナデている。523は受部と脚部とが貫通していない。

器台C（第37図507・512）

507は受部は内弯しながら立上る。受部と脚部は貫通しない。受部外面にはヘラ磨きが認められる。512は受部は内弯しながら立上る。これも受部と脚部とは貫通しない。

器台D（第32図419・421～424、第35図479、第36図481）



第39図　第１調査区SR－３出土土器実測図

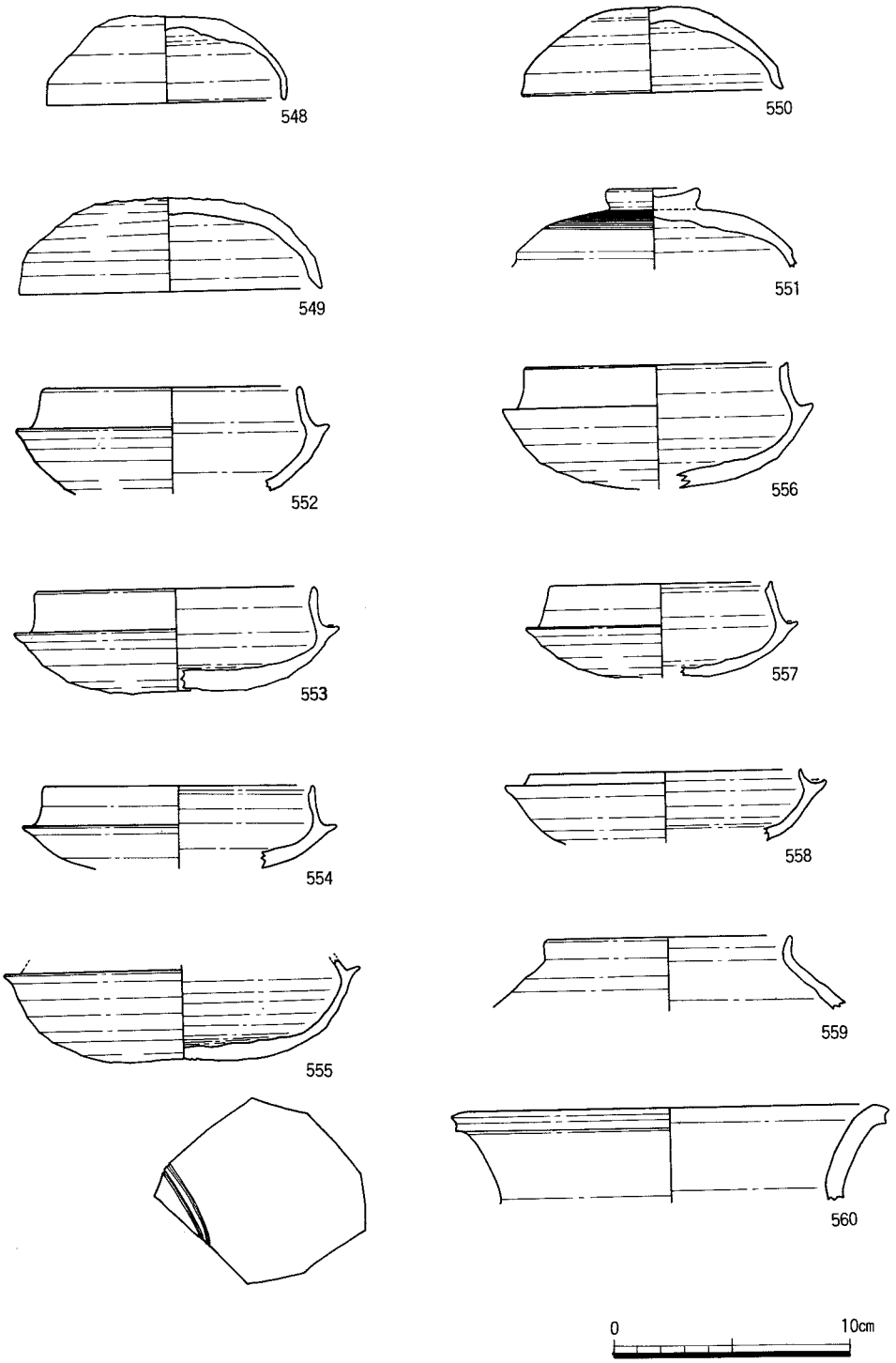
419は口縁端部を上方へ拡張して幅広の面を作り出す。端面外面にヘラ描で施文を行った後に円形浮文を貼り付けている。口縁部内面にもヘラ描で施文されている。受部の内・外面にはヘラ磨きが施されている。421は口縁部の端部下半に粘土を貼り付け、端面を作り出している。端面をナデた後に刻み目棒状浮文を貼り付けている。口縁部内面は横方向にヘラ磨きを施している。422は粘土を貼り付けて作り出した端面に、円形浮文を貼り付けている。外面はさらにヘラ描で施文している。内面はヘラ磨きを施した後に、ヘラ状工具で施文している。423･424とも口縁端部を上方につまみ上げて端面を作り出している。424はその端面に棒状浮文を貼り付けている。479は口縁端部を粘土に貼り付けている。外面はハケ目を、内面はヘラ磨きの後にナデている。481は直線的に開いた受部の端面はそのまま外傾する面をなしている。内・外面ともにヘラ磨きを施している。

小型丸底壺A（第38図524～532）

524は外面は横方向のヘラ磨きを、内面はハケ目の後にヘラ磨きを施している。525は小さな半球形の胴部に大きく内弯気味に開く口縁をもつ。内面の体部と口縁部の境には稜がつく。外面はヘラ磨き、口縁部内面はヘラ磨き、胴部内面はナデている。526は口縁部外面はナデ、内面はハケ目を施している。胴部外面はハケ目、内面は板状工具でナデている。527は胴部は欠損しているが、口縁部は発達し、直線的に開き、端部を上方へ小さくつまみ出している。口縁部は内・外面とも横方向に丁寧にヘラ磨きを施している。528は口縁部と胴部の境が大きくくびれている。外面と口縁部内面にはハケ目が施されている。胴部内面はヘラ削りが施されている。529は小さな半球形の体部に大きく開いた口縁をもつ。内・外面とも丁寧にヘラ磨きを施している。530は扁平な胴部から外方に開く口縁をもつ。外面はハケ目の後にヘラ磨きを施している。口縁部内面はヘラ磨きを施している。胴部内面は板状工具でナデている。531は外面は胴部と口縁部の境は不明瞭であるが、内面は境に稜をなしている。外面はヘラ削りを行っている。口縁部内面は横方向にハケ目を施し、胴部内面は板状工具でナデている。532は外面はハケ目の後に横方向にヘラ磨きを施している。内面は横方向にヘラ磨きを行っている。

小型丸底壺B（第38図533）

533は球形の胴部から直線的にのびる口縁をもち、底部はやや突出している。底部の形態



第40図　第１調査区SR－３出土土器実測図

はやや異なるが、全体の形から小型丸底壺に入れた。口縁径と胴部最大径がほぼ等しい。内・外面ともにハケ目がわずかに残る。胴部外面に黒斑が見られる。

鉢A（第39図543～547）

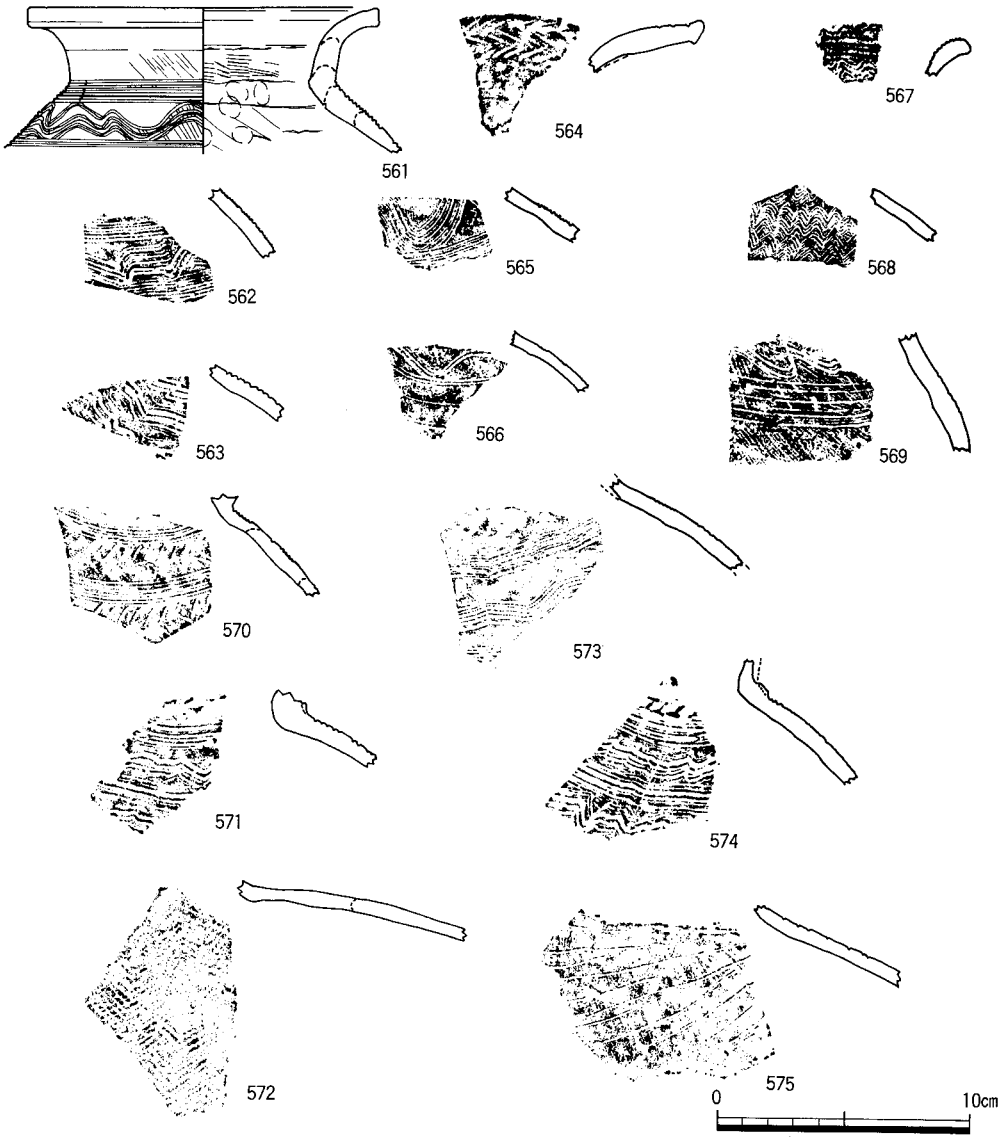
543は大きな胴部からやや内弯気味の口縁へ続く。胴部外面は板状工具でナデている。内面は全体的にナデている。544は胴部からそのまま外反する口縁へ続く。外面は板状工具でナデた後にハケ目を施している。内面はハケ目である。545は胴部から大きく開く先細りの口縁をもつ。内・外面ともにハケ目が見られる。546は丸みのある法量のある胴部から外反気味に口縁が開く。口縁部外面はナデ、内面はハケ目である。胴部外面はハケ目で、内面はナデている。547は口縁部に粘土を付加して面を作り出している。内・外面ともにヘラ磨きが施されている。

鉢B（第39図534～542）

534は内・外面ともに丁寧に横方向にヘラ磨きを施している。535は口縁は2段に屈曲し、端部を大きくつまみ出している。内・外面ともにヘラ磨きを施している。536は口縁部は大きく2段に屈曲している。537は口縁は外方に開きながら2段に屈曲する。538は外面はヘラ磨きを施し、内面はナデている。539･540は口縁は2段に屈曲し、先細りとなる。541は内・外面ともに板状工具でナデている。542も内・外面ともにナデている。

須恵器（第40図548～560）

548は杯蓋で天井部はほぼ平らである。口径は10cmでやや小型である。外面はヘラ削りの後ナデであるが天井部は未調整である。内面は強くナデている。549はなだらかで丸みを帯びた杯蓋で口縁部は屈曲している。外面は回転ヘラ削りであるが口縁部はナデている。内面はナデている。550は杯蓋で天井部はほぼ平らで、口縁部はあまい稜をなし、端部は内面に面をもつ。外面は口縁部は横ナデ、他は回転ヘラ削りである。内面はナデている。551は有蓋高杯の蓋である。天井部はやや丸味をおび、天井部のほぼ中央に、中くぼみの扁平なつまみがつく。口縁部と体部との境にはあまい稜をなす。外面はつまみは貼り付け、その後ヘラでナデている。体部はカキ目調整である。内面は横ナデである。552は杯身で立上りは内傾している。外面は回転ヘラ削り、立上り部はナデている。内面はナデている。553は立上りはほぼ真上にのびる。受け部はしっかりとしており、体部はやや扁平である。体部外



第41図　第１調査区SR－３出土土器実測図

面はヘラ削りで、立上りはナデている。内面は全体にナデている。554は立上りは内傾し端部には内傾する面をもつ。555は体部は底部から大きく内弯して立上り、受け部は斜め上方にのびる。立上りは内傾する。底部にはヘラ記号と思われるものが2条残っている。外面は底部はヘラ削り、それ以外はナデている。内面はすべて横ナデとなっている。556は立上りは内傾し、端部は内傾する面をもつ。底部外面は時計回りのヘラ削りであるが、それ以外はナデている。557は、立上りは内傾して直線的にのび、端部には内傾する面をもつ。底部外面はヘラ削りであるが、それ以外はナデている。558は立上りは短く内傾する。受け部はやや内弯気味に外上方につまみ上げる。現存では内・外面ともナデている。559は短頸壺で、短く上方に立上る口縁をもつ。内・外面ともにナデている。560は甕の口縁で、外反して上方に開き、端部は外側に面をもつ。端面は凹線がめぐる。内・外面ともにナデている。

弥生土器（第41図561～575）

561は壺で、胴部から頸部にかけて強く屈曲した後に外反して開く口縁をもち、端部は外側に面をもつ。口縁部は内・外面ともナデている。頸部は内・外面ともハケ目を施すが、外面はその後にナデている。胴部外面はハケ目を施した後に、上から櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文の順に施文する。562・563・565・566は壺の胴部片である。562は櫛描直線文の間に櫛描波状文を施す。563は櫛描波状文を、565・566は櫛描波状文の後に櫛描直線文を施している。564は壺の口縁部で、内面にヘラ磨きの後に列点文を施している。また内面に一部朱が付着している。567は甕の口縁部で、外面に粗い縦方向のハケ目を施し、内面には櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文の順に施文している。568～575はいずれも壺の胴部片である。568は櫛描波状文を、569は櫛描波状文・櫛描直線文を施す。570はヘラ磨きの後に、櫛描直線文と列点文が綾杉状に施される。571は櫛描直線文と櫛描波状文が施される。573はヘラ磨きの後に上から櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文の順に施文している。574は頸部に貼り付けの刻み目突帯がある。胴部は櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施している。575はハケ目を施した後にヘラ描の斜線文を施している。

(ⅱ)木製品（第42図～第48図）

農具（第43図578・579）

578は竪杵で下端部はやや磨滅している。現存で長さは37.6cmである。全体に粗い加工を施している。芯持材を使用している。SR-1 の出土である。579はナスビ形着柄鍬である。

先端が欠損しているため、刃部が二又か一枚作りかは不明である。着柄部はかまぼこ形をなし、身部の方に向って幅を広げ、山形に突起をつくる。着柄部は幅2.4cmである。SR-1 の出土である。

労働具（第43図580）

580はヨコヅチである。頭部から削り出して柄をつくっている。柄の端部は丸くつくっている。全長28.8cmである。SR-1 の出土である。

紡織具（第43図582、第44図587）

582は布巻具で断面は半円形をしている。細長い棒の端部に握部をつくり出している。SR-3 の出土である。587は編み用木錘である。全長16.8cm、径8.4cmである。円柱形の木材の中央部を両方向から斜めに削り、くびれを半周させている。SR-3 の出土である。

容器（第42図576）

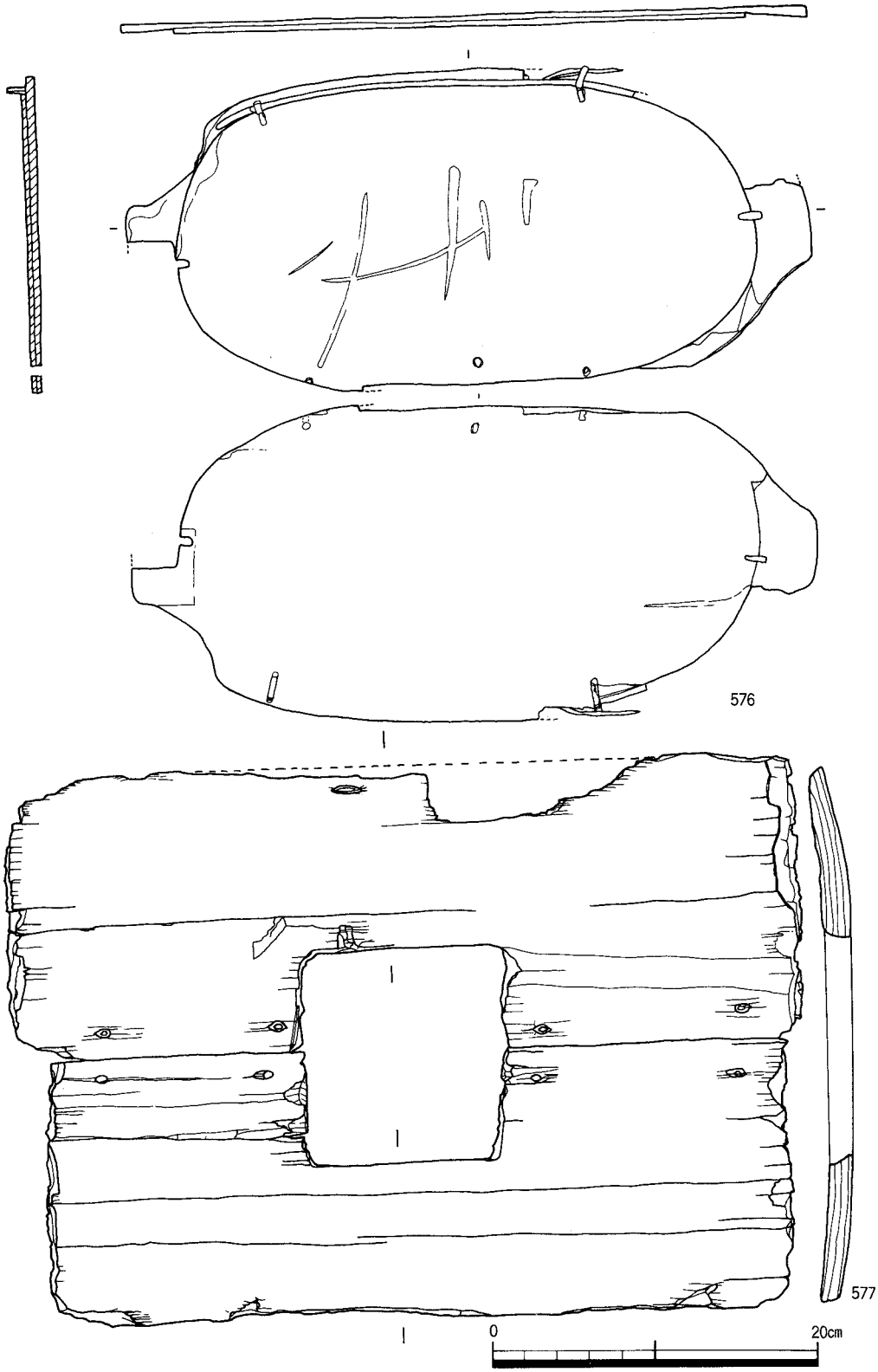
576はだ円形曲物と考えられる。長径35.8cm、短径は18.2cmのだ円形の板材の周囲に 7 ヶ所の穴をあけ、周囲にうすい板材の側板を木製のひもで結んでいる。長径側の端部は、とっ手状に突出させている。内面の一部には焼けた痕がある。SR-1 の出土である。

祭祀用品（第43図581）

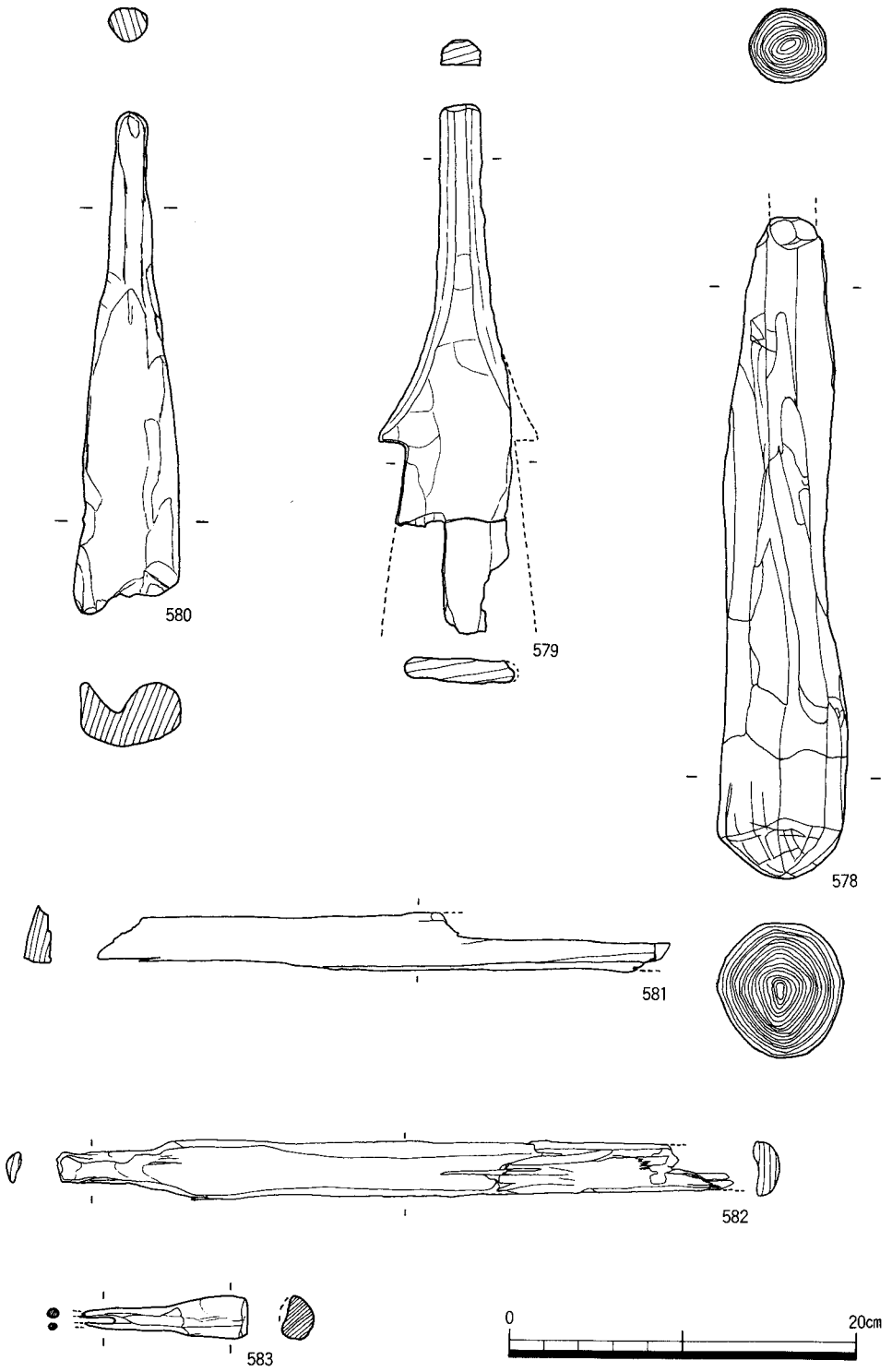
581は刀形である。現存長33cm、幅3.3cmである。端部を斜めに切り落している。SR-2 の出土である。

建築部材（第42図577、第45図590・593・596、第46図598～602、第47図603～609、第48図610～616・620・621）

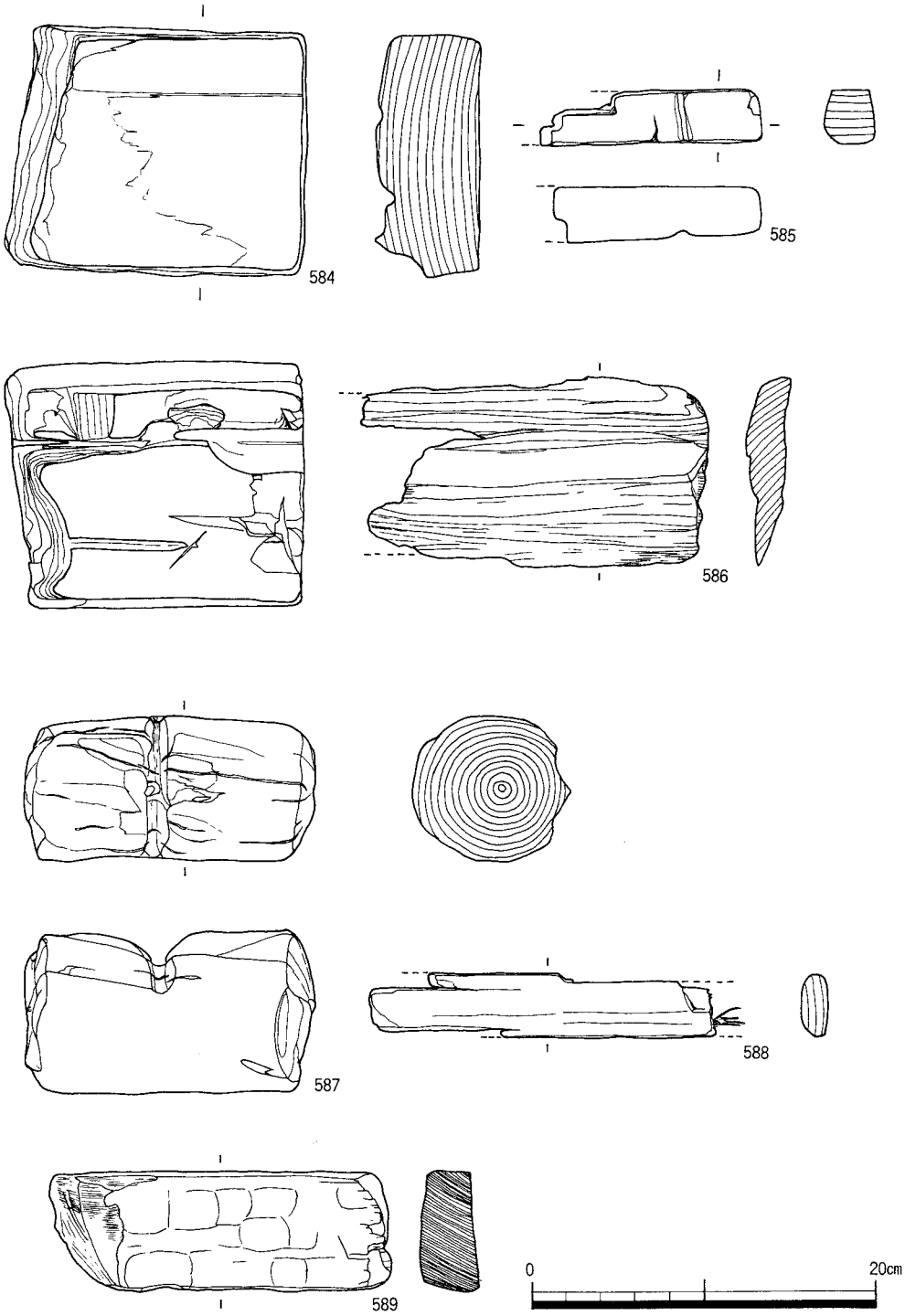
577は凹状に加工したものが、2枚近接した位置で出土したが、方形のえぐりを入れた辺に 2 ヶ所ずつ、計 4 ヶ所に穴をあけている。 2 枚とも方形のえぐりや穴の位置がほぼ同じため、図のように組合せて角材にはめこんで使用するものと思われる。 1 枚の長辺46cm～48.9cm、短辺15.2cm～17.2cm、方形えぐり幅は12.5cmである。この建築部材を図のように組合せると、11.5cm×13cmの角材を通すことが出来る。SR-1 の出土である。590は細身の杭、593は釘痕のある板材、596は釘の先端部である。いずれも SR-3 の出土である。



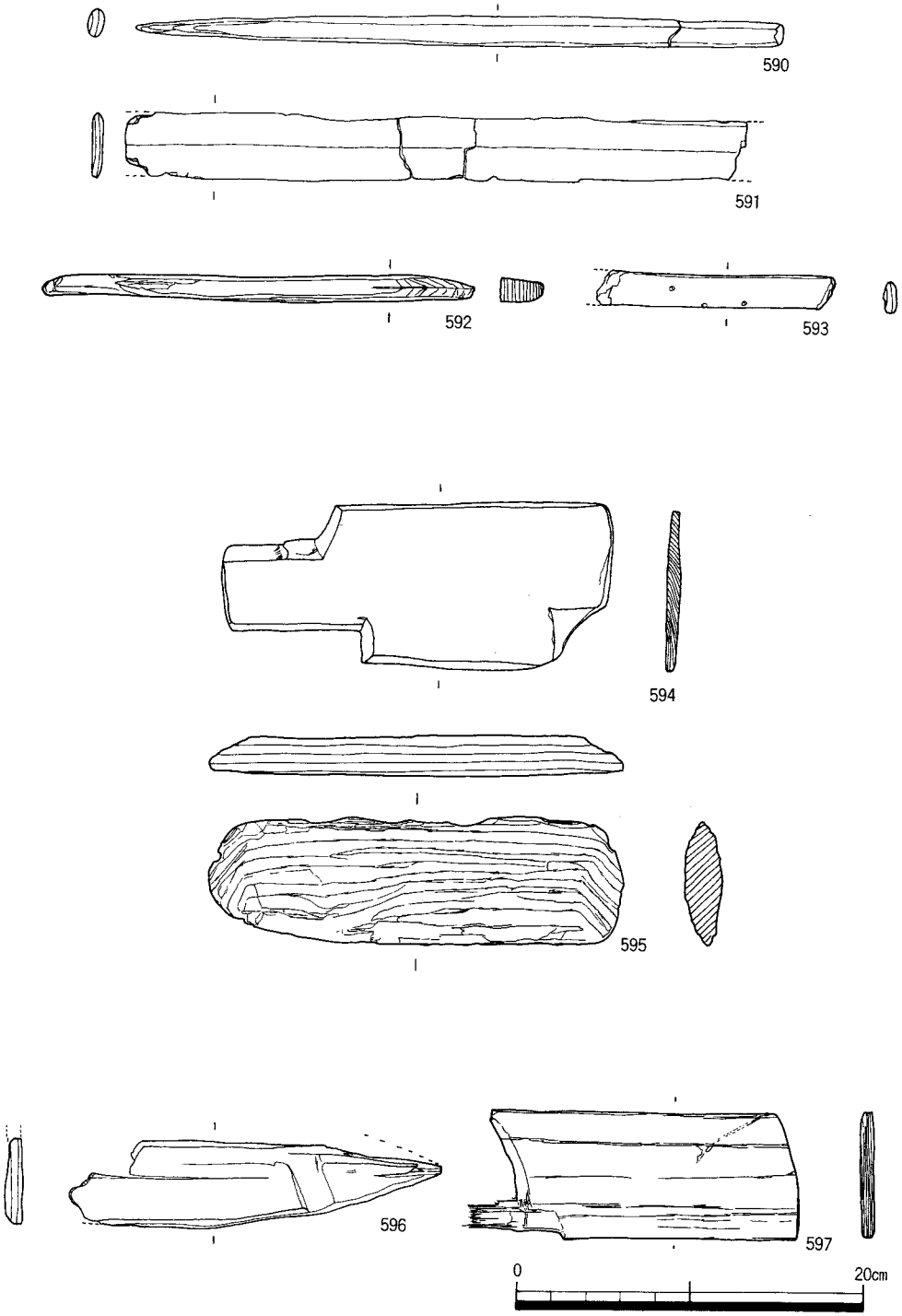
第42図　第１調査区SR－１出土土器実測図



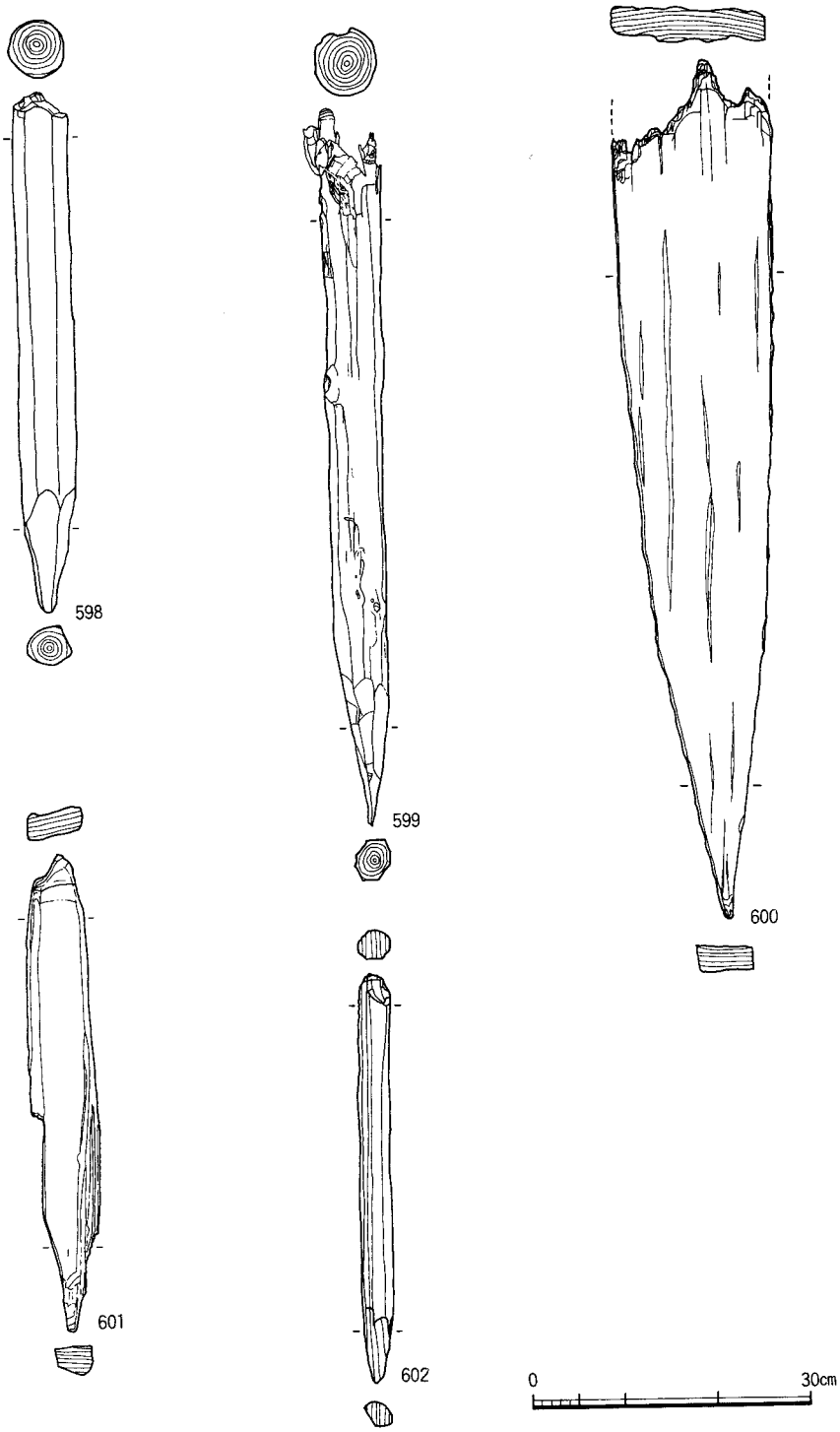
第43図　第１調査区SR－１・３出土木器実測図



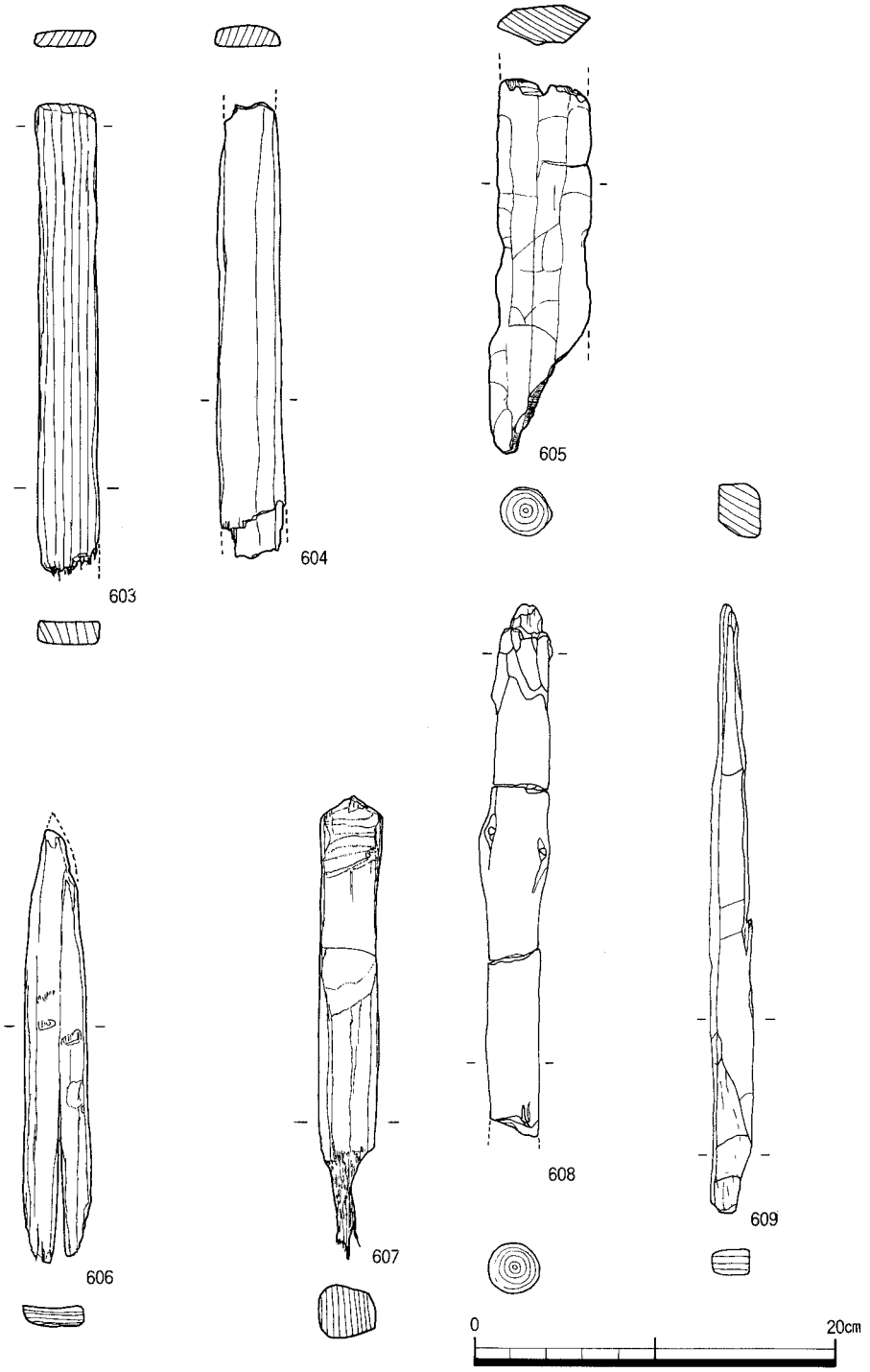
第44図　第１調査区SR－３出土木器実測図



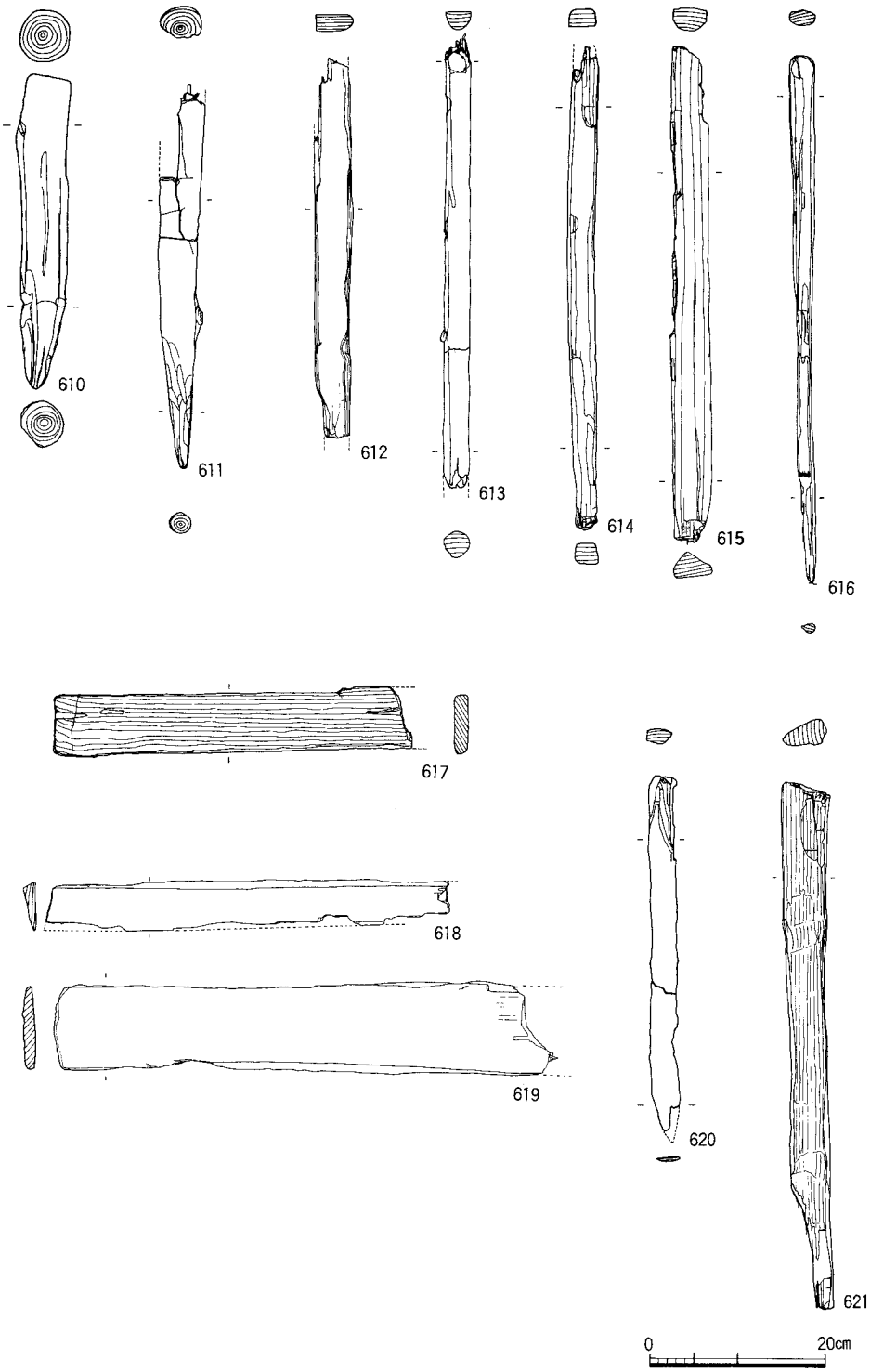
第45図　第１調査区SR－３出土木器実測図



第46図　第１調査区SR－３出土木器実測図



第47図　第１調査区SR－３出土木器実測図



第48図　第１調査区SR－３出土木器実測図

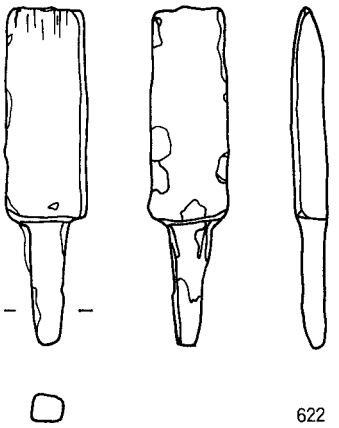
598～609・610～616・620・621は SR-3 の杭列の杭である。先端部は鉄器で鋭く加工している。

その他（第43図583、第44図584～586・588・589、第45図591・592・594・595・597）

583は端部が欠損しているが、穴があいている。ほぞ穴部に向って先細りとなる。頭部幅2.5cm、 現存長9.5cmの小型品である。 漁撈用の浮きの可能性もある。 SR-3 の出土である。584～586・588・589は加工痕は認められるが用途不明である。591は細長い板状の木製品である。592も加工痕がある。594は板材に 2 ヶ所えぐりを入れている。595・597も加工痕がある。

(iii)鉄器 （第49図622）

SR-3 出土の、のみ形鏃である。刃部には使用痕があり、若干の歯こぼれが見られる。刃部幅は1.0cm、茎0.3cm～0.5cm、長さ1.6cmである。茎の断面は方形となっている。

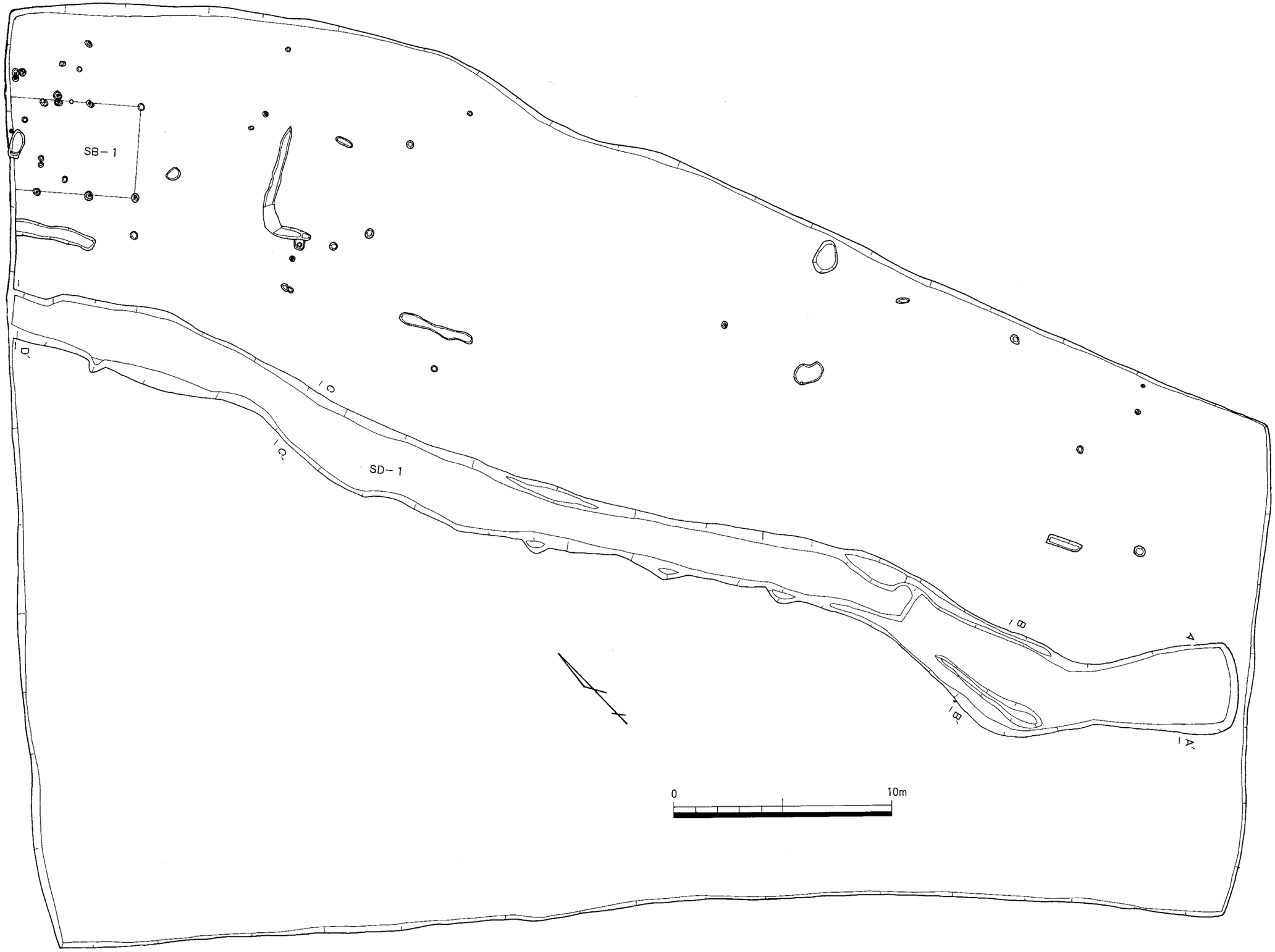


第49図　第１調査区SR－３
出土鉄器実測図（S＝1/1）

(3)　小結

第１調査区は遺構としては旧河道が検出されたぐらいであるが、この旧河道中より古式土師器が多量出土した。古式土師器は旧河道出土ながらローリングを受けておらず、残りは非常に良好であった。土器は旧河道の砂層から出土したが、その上層に粒土層があり、旧河道が一気に埋った状況を示しているため、土器が投棄された後に短時間で埋没したと考えられる。従って出土した古式土師器は旧河道出土ながら、一括性が高いものと思われる。古式土師器に特徴的な小型三種精製土器群が量的に出土したことは特筆される。土器は各器種が豊富に出土しており、古式土師器の土器群を考える上で、良好な資料になろう。

（森）



第50図　第２調査区遺構図

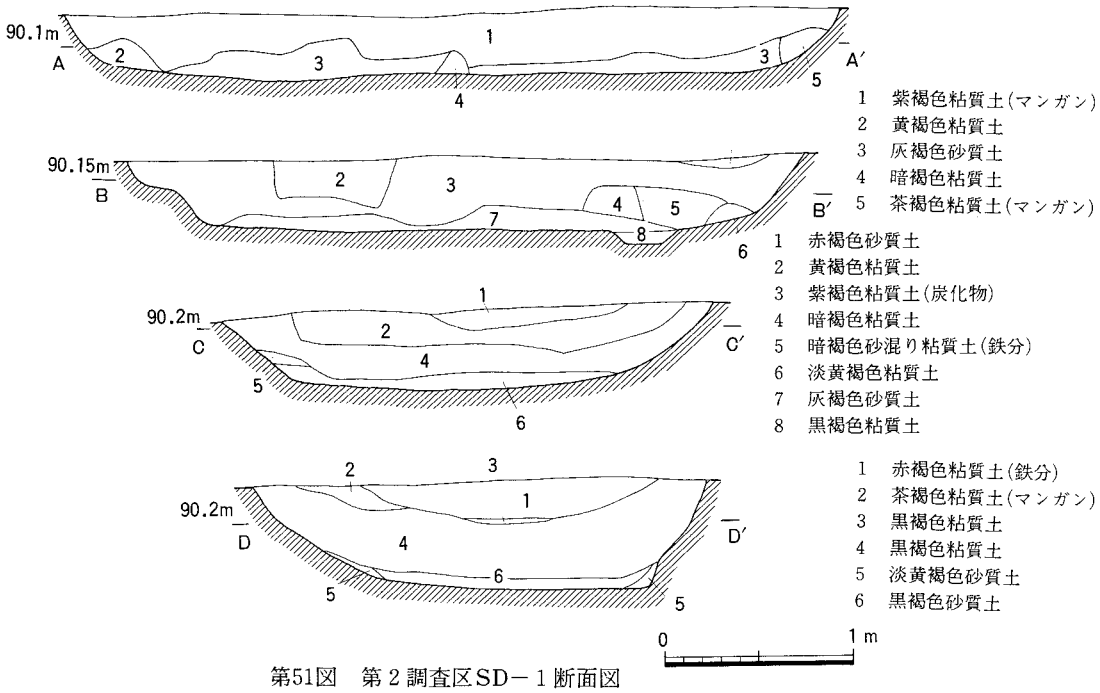
2．第２調査区（第50図）

第１調査区の西隣に設定した調査区である。この調査区の周囲には、水田や農道の関係で排土を置くことが出来なかったので、第１調査区と同様に、調査区の半分を調査してから排土を反転して残り半分を調査する方法をとった。この調査区の遺構面は耕作土直下であり、褐色粘質土となっている。

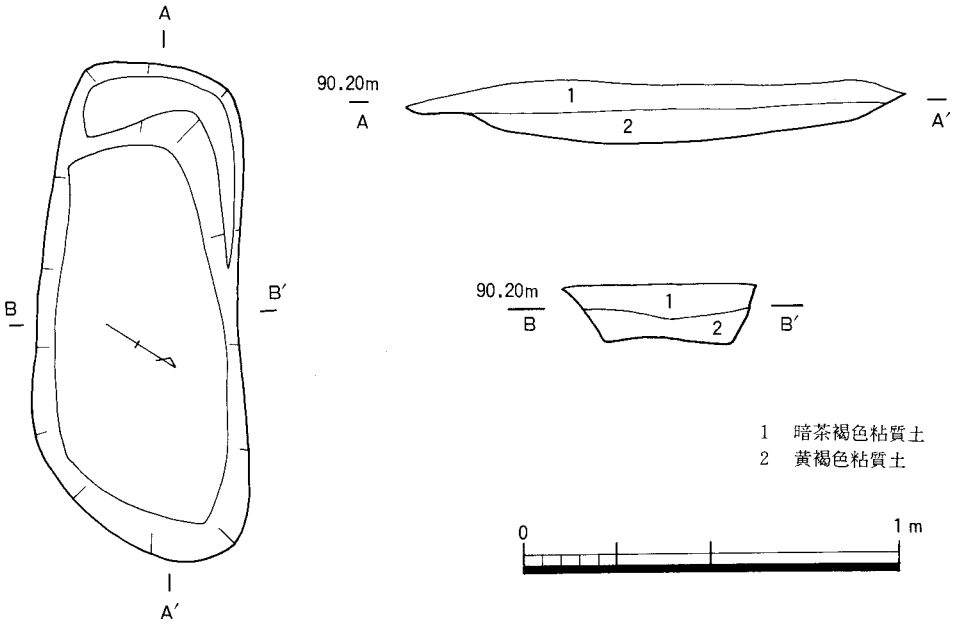
(1) 遺構

SD-1（第50・51図）

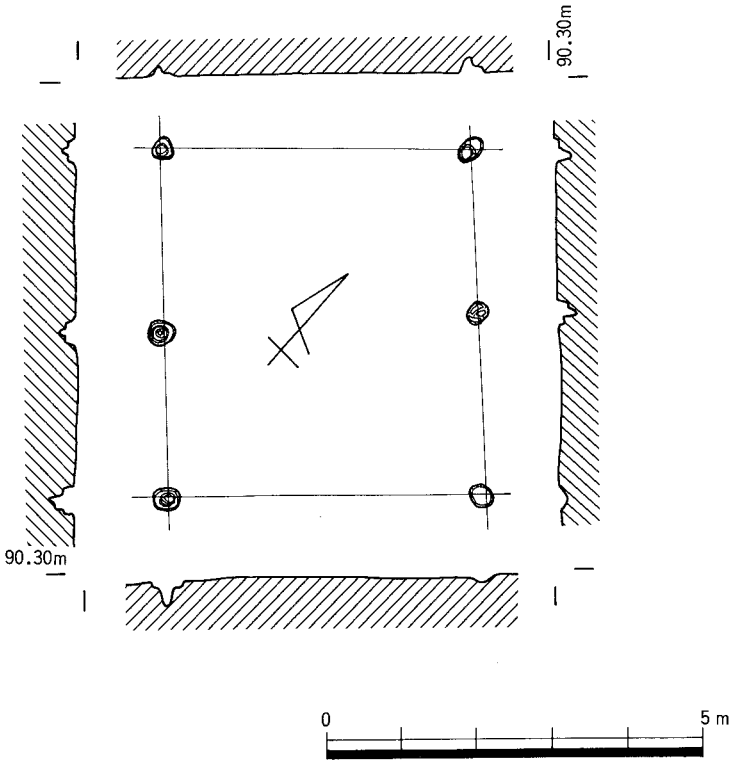
調査区の中央を南から北へ延びる溝である。幅は平均３ｍで深さは40～60cmである。埋土は基本的に黒褐色粘質土であるが、この層の上部にレンズ状に鉄分やマンガンが沈着していて赤褐色と茶褐色に見える。底面には黒褐色砂土が堆積していて、遺物を含んでいる。溝の断面は幅広のＵ字形を呈する。この溝は調査区の南東側で切れる。これは試掘調査の時にもすぐ横の田でトレンチを入れてみたが続かなかったので、第２調査区内で切れている。この溝は後述する第３調査区のSD-1に農道をはさんで続いていくものである。遺物は、溝の最下層の砂層中に底にはりついて出土した。遺物として弥生時代中期の土器と石



第51図　第２調査区SD－１断面図



第52図　第２調査区SK－１平面図



第53図　第２調査区SB－１平面図

斧が出土したことから弥生時代中期に限られた溝といえる。

SK-1（第52図）

調査区の北側で農道に接した場所で検出した土壙である。長辺130cm、短辺50cm強、深さ約15cmのほぼ長方形をした土壙である。西側が二段掘りとなっているが、他は素掘りとなっている。埋土は上下２層に分かれ、上層は暗茶褐色粘質土で、下層は黄褐色粘質土となっている。遺物は出土しなかったので時期は不明である。

SB-1（第53図）

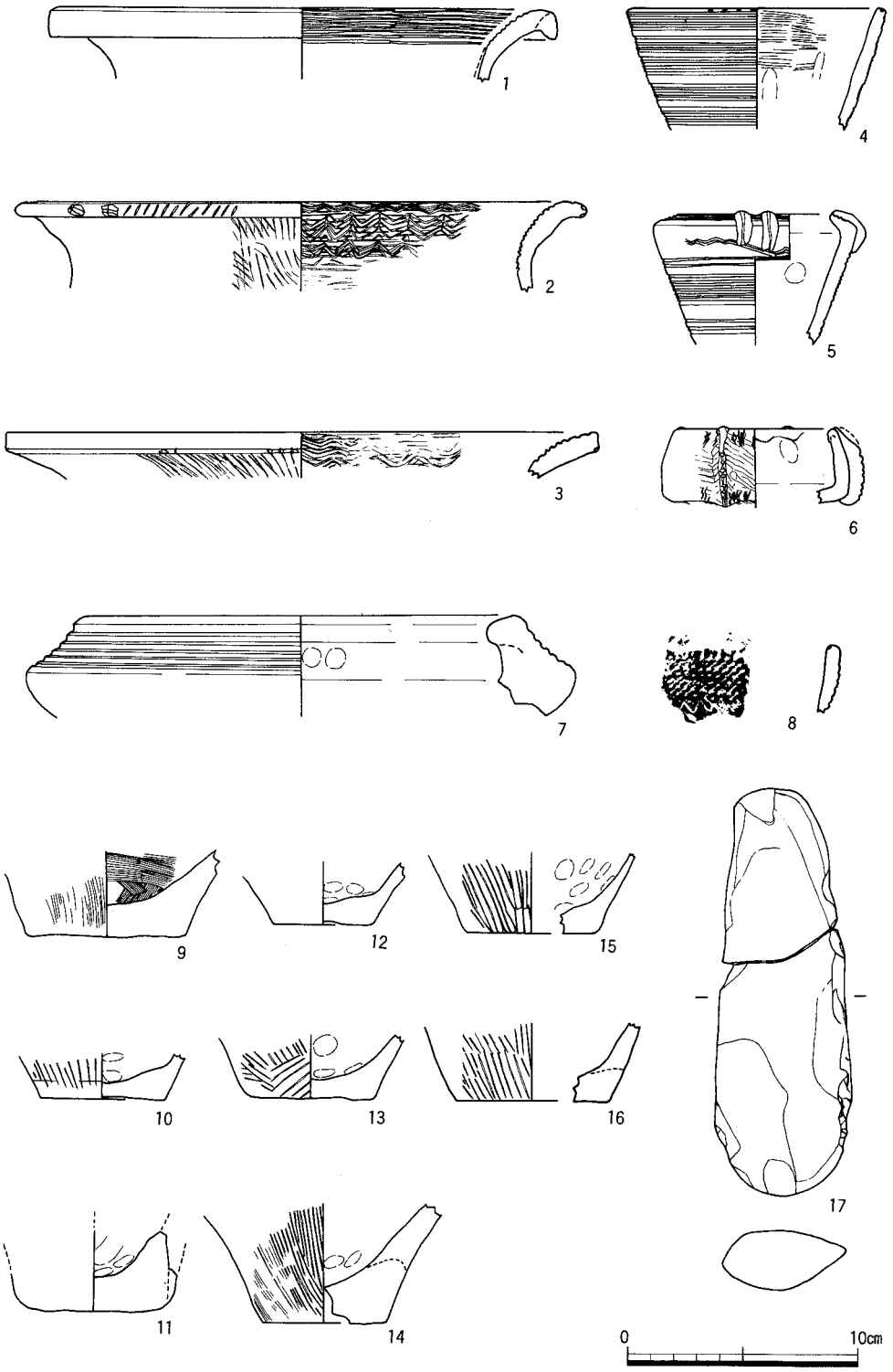
調査区の北側で検出された掘立柱建物である。農道により建物の全部は検出できなかったが、第３調査区でこの建物の続きと考えられるピットが検出されていることから、農道の下にも建物の柱穴があるものと予想される。建物の規模は第２調査区内では１間（４m）×２間（4.6m）であるが、第３調査区で検出した柱穴まで考えると、１間（４m）×４間（9.2m）と考えられる。桁行４m、梁行2.3mである。建物の主軸方位はN－43°－Wである。柱穴内より土器の細片が出土したが時期・器種等は不明である。しかし第３調査区の建物と主軸方位が同じであることから11C前後ではないかと思われる。

(2)　遺物

第２調査区の遺物は、SD-1 と SB-1 の柱穴から出土したが、SB-1 の柱穴出土の土器は細片であり、図化できずまた時期・器種も不明である。SD-1 から弥生時代中期の土器と石器が出土した。

SD-1 出土遺物（第54図１～14）

すべて底面直上の黒褐色砂土中より出土している。甕３点（１～３）、壺５点（４～８）、壺の底部８点（９～14）である。その他に胴部破片等が出土しているが図示出来なかった。１は口縁部が大きく外反し端部は下方に垂下し外面に面をもつ甕である。口縁部の内面には櫛描平行文を施している。２は口縁部が強く外反し端部は丸く収める甕である。口縁端部には刻み目を施し部分的に押圧が施される。調整は内外面ともに粗いハケ目で、口縁内面に３段の櫛描波状文が施される。３は口縁部が真直に外方に延び端部外側に面を持つ。口縁帯下部に刻み目を施し外面はハケ目である。口縁内面には横方向へのハケ目を施した後に櫛描波状文を施している。４はほぼ直線的に外方へ開き、端部は丸く納める壺である。口縁部には６条の櫛描直線文が現存で５段施されている。内面は横方向のハケ目



第54図　第２調査区SD－１出土土器・石器実測図

である。5は袋状口縁の細頸壺である。頸部は直線で外方にひらき、端部付近で内側に屈曲し、外側に面をつくる。そして口縁端部から屈曲部をおおうように棒状浮文を2条施している。頸部と屈曲した口縁外面には櫛描直線文が施されている。内面はナデている。6も袋状口縁壺である。頸部から内傾して立上る口縁をもち、端部は内側に折り返して丸める。刻目のついた棒状浮文が施されていて、現存では1条だが4条施されていた思われる。棒状浮文の両側はヘラ磨きされている。7は条痕文系土器の鉢と思われる。口縁部は内傾し端部は平らに面をもつ。体部は口縁部に比べ薄くなっている。内傾した口縁外面には凹線が6条めぐっていて、口縁部内面に粘土をはり付けその後指押えをしている。色調は内面は黒褐色で外面は鈍い黄褐色である。8は細頸壺の口縁部で端部は丸く収める。端部の内・外に刻目を施す。外面は6個1単位の櫛描列点文と櫛描波状文が施されている。9～14は壺の底部で、すべてしっかりとした平底で、外面はハケ目である。9は内面もハケ目である。

1は「大和型」、2・3は「近江型」、5～7は東海系の土器である。褐色SD-1の土器群は凹線文がまだ出現しておらず、櫛描文を多用している。甕でみると2・3のように口縁部内面に粗い横方向のハケ目の後に、同一原体で波状文を施す「近江型」甕である。2のように口縁端部に押圧を施すのも近江地方の特徴である。「大和型」・「近江型」の甕、さらには東海西部系の壺、条痕文系土器が共伴している点で注目されるものである。時期としては諸説分れるところだが、一応弥生第II様式終末ごろとしておく。

他に石器としては打製石斧が一点出土した。これは土器と共に出土したが、胴部中央で2つに折れ、それぞれが1mぐらいはなれた状態で出土したものである。長さ17.5cm、厚さ2.5cmの両刃石斧で刃部は一部刃こぼれをして使用痕がみられる。樹木伐採用の縦斧として使用されていたと思われる。

(3) 小結

第2調査区は弥生中期と平安時代のものとに大別できた。弥生中期の溝（SD-1）からは興味ある組合せの土器群が出土した。しかしこの溝の性格は不明である。他に当該期の遺構は検出されていない。試掘等で周囲は低湿地や沼、さらには河川がみられることからも当時は水との闘いであったと思われる。そこであるいは灌漑用の溝であった可能性もある。

また掘立柱建物（SB-1）は農道により全部は検出できなかったが、その端が第３調査区で検出されている。これは遺跡全体としてみると第３調査区の中で考えるべき建物である。

全体として第２調査区は遺構、遺物ともに疎であった。

（森）

3　第３調査区

第３調査区は天神川の左岸、第２調査区と農道をはさみ接している。調査区は南北55m、東西70mを設定した。検出した遺構には弥生時代中期の溝や平安時代中期～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡・溝・土壙がある。遺構は中央部から北及び西の密度が濃く、南辺及び東辺は希薄である。

(1)　遺構

（ｉ）. 弥生時代中期

SD－1

第２調査区から延長する溝で、調査区北辺を東西に走る。幅は３～４m、深さは50～70cmを測り、断面はＵ字形を呈す。埋土はおおよそ３～４層のレンズ状堆積を示していた。遺物は弥生時代中期の壺と甕の小破片が底面直上から出土した。

（ii）. 平安時代以降

a. 掘立柱建物（SB-１～６）

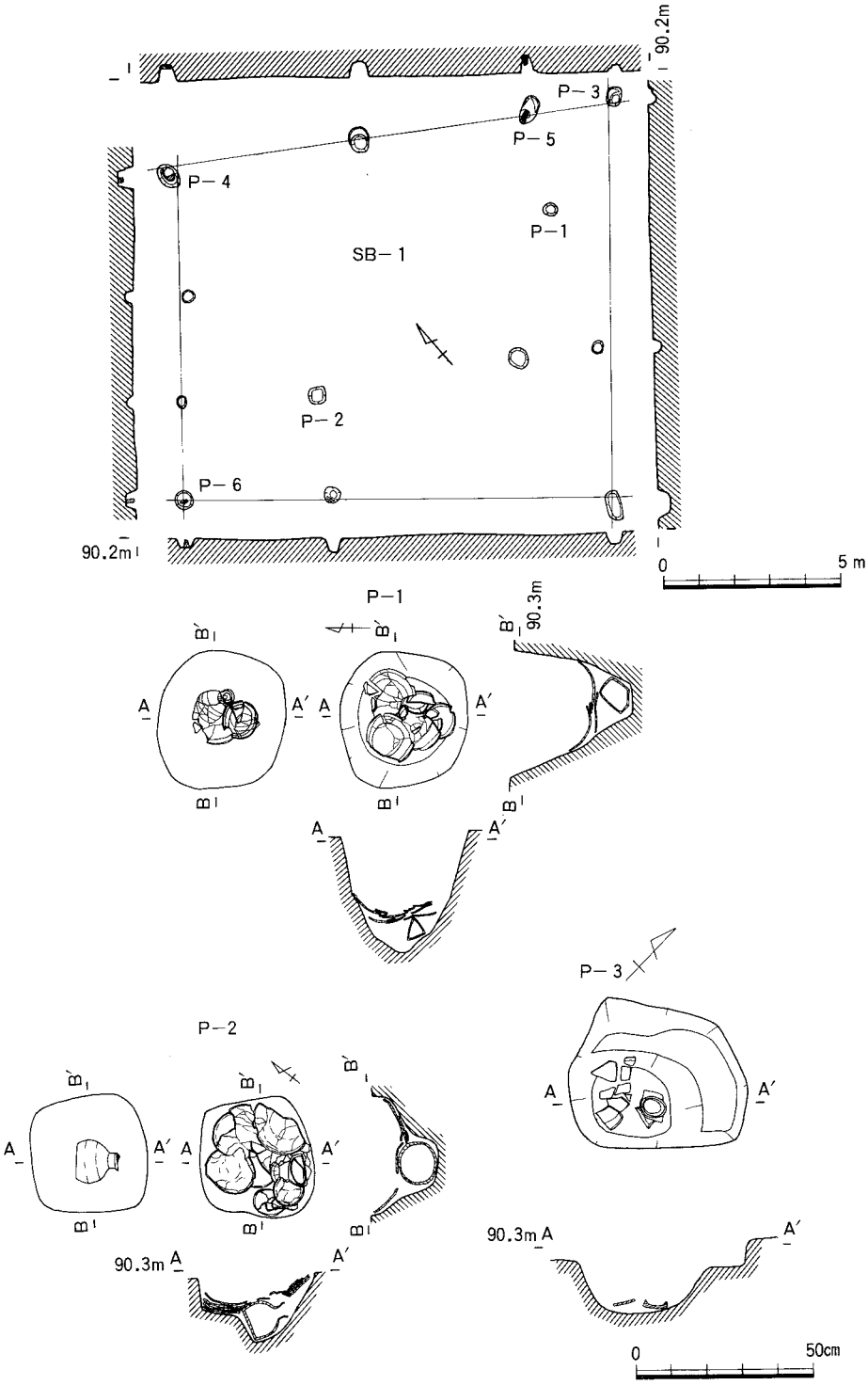
本調査区からは400以上の柱穴を検出したが復元できたのは６棟であった。

SB-1（第55図）

調査区のほぼ中央で検出した大型の建物であるが、柱間距離や柱穴の規模・形状にはかなりのばらつきがみられる。P-4 底面には根石とみられる面取りした石が、P-5、P-6 には直径30cm程の柱根が遺存していた。遺物は P-1・P-2 から土師器大皿・小皿と須恵器の瓶子があたかも埋納されたがごとくの状況で出土した。時期は11Ｃ初頭頃と考えられる。建物の主軸方位はＮ－50°－Ｗをさす。

SB-2（第56図）

SB-1 の北西約９mの地点で検出した３間×３間の建物である。主軸方位はＮ－40°－Ｅ



第55図　SB－1平面図，柱穴内遺物出土状況図

を示し、柱間距離は桁行2.2m、梁行2.1mを測る。柱穴は長径30～60cmの楕円形もしくは直径40cmの円形を呈し、深さは20～40cmである。埋土はおおむね褐灰色土・暗灰色粘質土の上下二層が堆積する。遺物はほぼすべての柱穴から土師器・黒色土器の小片が出土したが細かな時期は不明である。

SB-3（第56図）

SB-2 の南西10mの地点で検出した。建物の規模は３間×２間であるが南側梁行中央穴は検出できなかった。主軸方位はN－40°－Eを示し、柱間距離は桁行２m、梁行2.1mを測る。柱穴は30～40cm、楕円形を呈し、埋土はおおむね褐灰色土の単層である。柱穴には切り合いがみられ、建物の建てかえが想定される。

SB-4（第56図）

調査区南辺で検出した２間×２間の建物であるが北東梁行中央穴は検出できなかった。主軸方位は他の建物より10°東へふり、N－30°－Eを示す。柱間距離は桁行2.1m、梁行1.5mを測る。柱穴は長径は30～40cmの楕円形もしくは直径35cmの円形のもので構成されていた。埋土はおおむね茶灰色土の単層である。柱穴内から遺物の出土はなく、詳細な時期については不明である。

SB-5（第56図）

調査地西端で検出した。２間×２間の総柱建物と考えられるが北側梁行中央穴が攪乱のため遺存しない。主軸方位はN-40°-Eを示し、柱間距離は桁行2.7m、梁行2.1mを測る。柱穴は40～70cmの楕円形を呈し、深さは20～50cmである。埋土はおおむね褐灰色土の単層である。遺物は P-1 より土師器小皿（第56図）が出土した。時期は11C初頭と思われる。

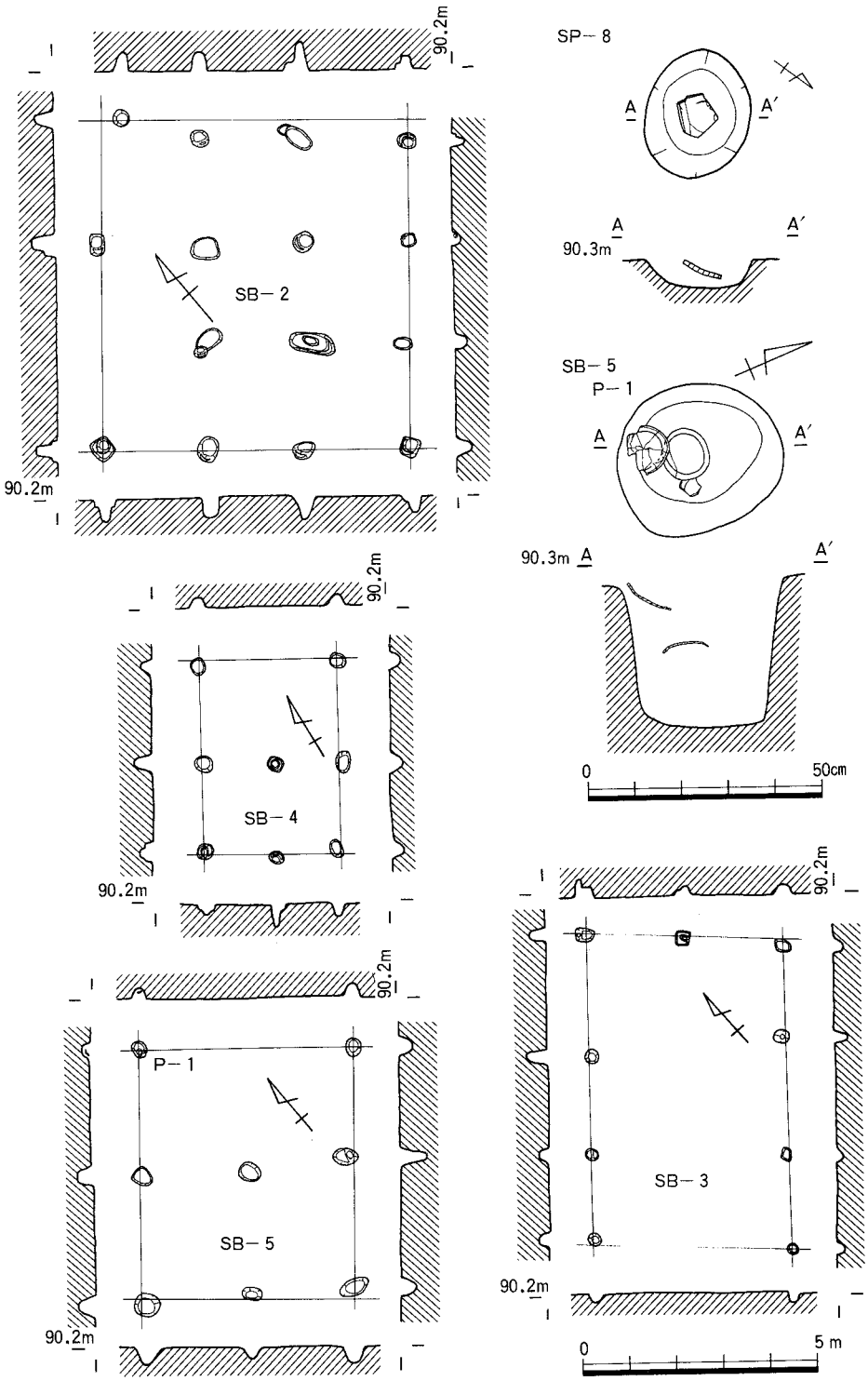
SB-6

調査区東端で検出した。建物の大部分が調査区外にあるため全容は明らかでないが、現状で２間×１間以上の規模である。主軸方位はN－38°－Eを示し、柱間距離は2.1mを測る。検出した３穴の柱穴にはそれぞれ隣接する、あるいは切り合った柱穴が１穴ずつあり、この建物が一度建てかえを行っていることが推定される。

b. 井戸（SE-1･2）

SE-1

調査区の南西辺で検出した。掘方の直径2.3mの円形を呈する井戸と考えられるが、曲物等の施設は検出されなかった。深さは1.3mを測り、湧水点に達している。埋土は６層がほぼ水平に堆積する。



第56図　建物平面図（SB－３～５）・柱穴内遺物出土状況図

SE-2

SB-1 の南側で検出した。井戸と考えられるが SE-1 同様曲物等の施設は検出できなかった。掘方は直径3mの円形を呈し、深さは1mと湧水点に達している。埋土は6層がほぼ水平に堆積する。遺物は6層中より黒色土器椀と土師質羽釜の小片が出土した。13C頃の廃棄とみられる。

c. 土壙（SK-1～13）

SK-1

SB-1 の東側で検出した不定形な土壙である。長径3.7m、短径2.1m、深さ0.7mを測る遺物は須恵器と黒色土器の小片が出土しているだけで詳細な時期については不明である。

SK-2

SK-1 の西に隣接して検出した円形の土壙である。直径1.6m、深さ80cmを測り、底面は鍋底状を呈する。埋土は7層がほぼ水平に堆積する。遺物は乏しく、土師器片が若干出土した程度である。

SK-3

調査地東端で検出した長方形の土壙である。長径1.3m、短径1m、深さ30cmを測り南側に平坦面を有する。埋土は明灰色土の単層である。

SK-4

SK-2 の南側で検出した楕円形の土壙である。長径3m、短径1.5m、深さ30cmを測り、底面は皿状を呈する。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は土師器片が少量出土しているだけである。

SK-5

調査区北東辺で検出した長方形状の土壙である。長径1.9m、短径1m、深さ30cmを測り、東側及び南側に平坦面を有する。埋土は褐灰色粘質土の単層で、埋土中から黒色土器の小破片が出土した。

SK-6

SK-5 の西に隣接する楕円形の土壙である。長径1m、短径50cm、深さ20cmを測る。いわゆる焼土壙といわれるもので、底面は火熱をうけ固くしまっており、埋土中には焼土や炭化物が多量に認められた。

SK-7

調査区ほぼ中央で検出したやや不定形な土壙である。長径2.6m、短径1.8m、深さ40cm

を測り、東側に平坦面を有す。埋土は褐灰色粘質土の単層である。

SK-8

SK-7 の北側で検出した楕円形を呈する土壙である。長径3.5m、短径80cm、深さ30cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で、埋土中から須恵器の小破片が出土した。

SK-9

調査区南東辺で検出した。長径2.4m、短径1.1m、深さ10cmを測る長方形の土壙で、底面は鍋底状を呈する。埋土は灰褐色土の単層である。

SK-10

SK-9 の北東で検出した長方形の土壙で、SK-11 に南側コーナーを切られている。底面は平坦で鍋底状を呈する。埋土は灰褐色土の単層である。

SK-12

調査区南側で検出した。楕円形状の土壙と考えられるが、調査区外へ伸展するため全容は明らかでない。現状では長径2.2m、短径2m・深さ50cmを測る。暗褐灰色粘質土の単層で、土師器の小破片の出土が少量あった。

SK-13

SK-6 の北西に隣接して検出した長方形状の土壙である。長径1.5m、短径1.3m、深さ10cmを測る。底面は平坦で鍋底状を呈する。埋土は灰褐色土の単層である。

d. 溝（SD-2～12）

SD-2

SB-2 と重複したL字状の溝である。幅50cm、深さ10cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土はマンガンを多く含有した灰褐色土である。埋土中から灰釉陶器椀・須恵器椀の底部（第64図㊴～㊶）が出土した。

SD-3

調査区東辺で検出した溝で東側は調査区外に伸びる。幅は30cm～1.6m、深さは20cm～50cmと東側にかけて広く、深くなる。遺物は土師器小皿、大皿、緑釉陶器椀（第64図㊷～㊺）が出土した。

SD-4～7

SD-3 の西に隣接する溝である。調査区の南東辺から北東端に向って約27m程まっすぐ伸び、北東端で北西方向に90度屈曲する。後世の削平のため途中が切れ、独立した溝のように見えるが元は先述した建物群の北及び東側を囲む一本の溝であったと考えられる。幅

は50cm～１m、深さは10～30cmを測る。埋土はマンガンを多量に含有した褐灰色土の単層である。遺物は土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器の小破片が出土した。

SD-9・10

調査区西端で検出したSB-5の雨落ち溝と考えられる。現状ではL字状を呈する独立した溝と思われるが、後述するSD-13と同一溝である可能性がある。幅は50～80cm、深さは20cm程である。埋土は灰褐色の単層で、土師器・須恵器片が少量出土した。

SD-11

調査区北辺で検出した溝でSD-2と切り合い関係にある。全長20m、幅は30～50cm、深さ10cmを測る。埋土は明灰色土の単層である。

SD-12

SD-11の西に隣接する小溝で、全長12m、幅30～90cm、深さ10cmを測る。埋土はSD-11同様明灰色土の単層である。

e. その他の遺構（SX-1～3）

SX-1（第57図）

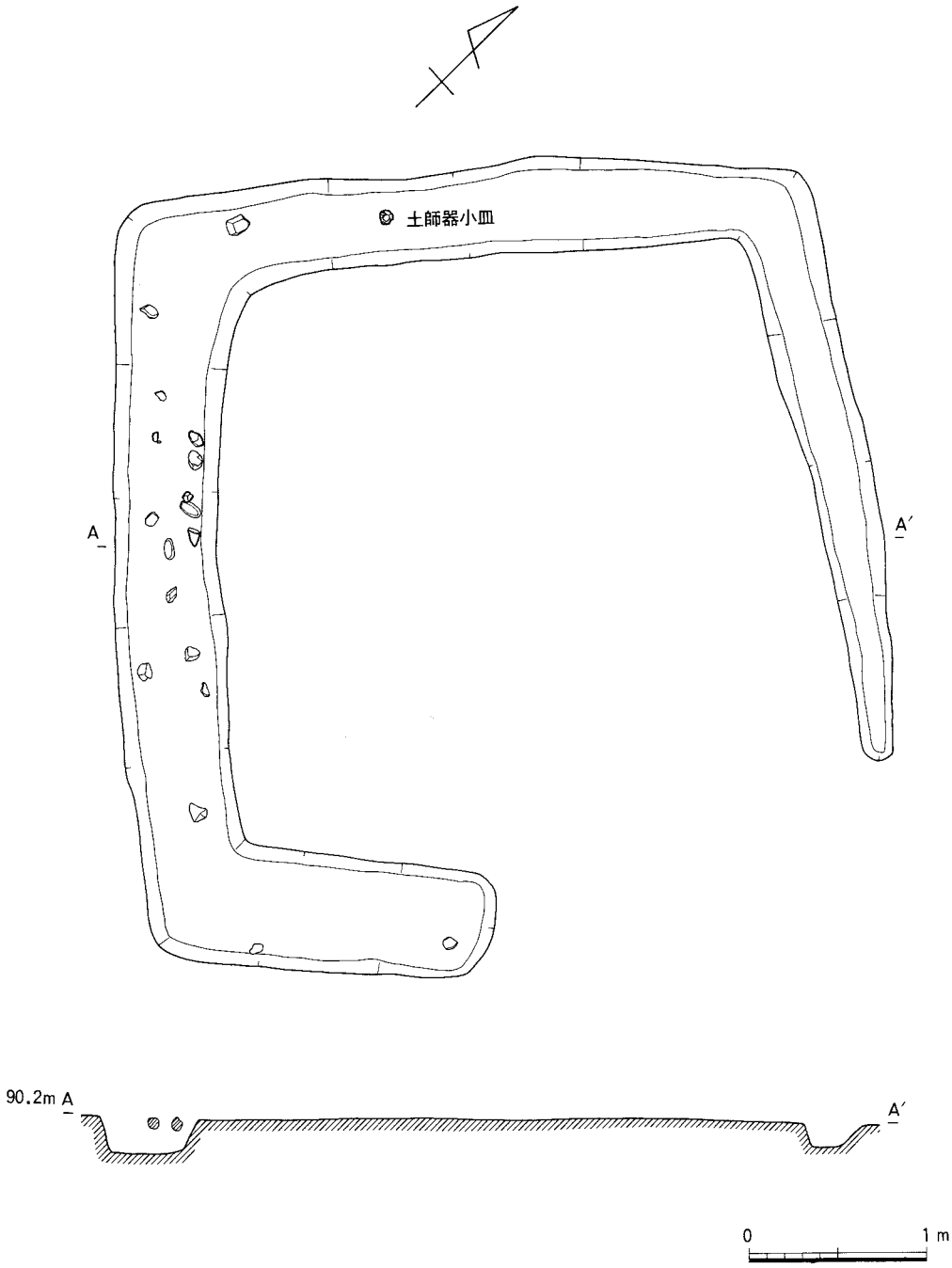
中央部やや南側、SE-2に隣接して検出した周溝状遺構で中世墓と考えられる。周溝は一辺４mの正方形状を呈するが四周はせず東隅が切れている。溝幅は40～60cm、深さは20～30cmを測り、底面は平坦で鍋底状を呈する。溝内からは長径５～15cmの多量の礫と土師器小皿一枚が出土した。小皿は残存状態が非常に悪く、実測図示はできなかったが14C代のものと考えられる。埋土は灰色粘質土の単層である。

SX-2（第58図）

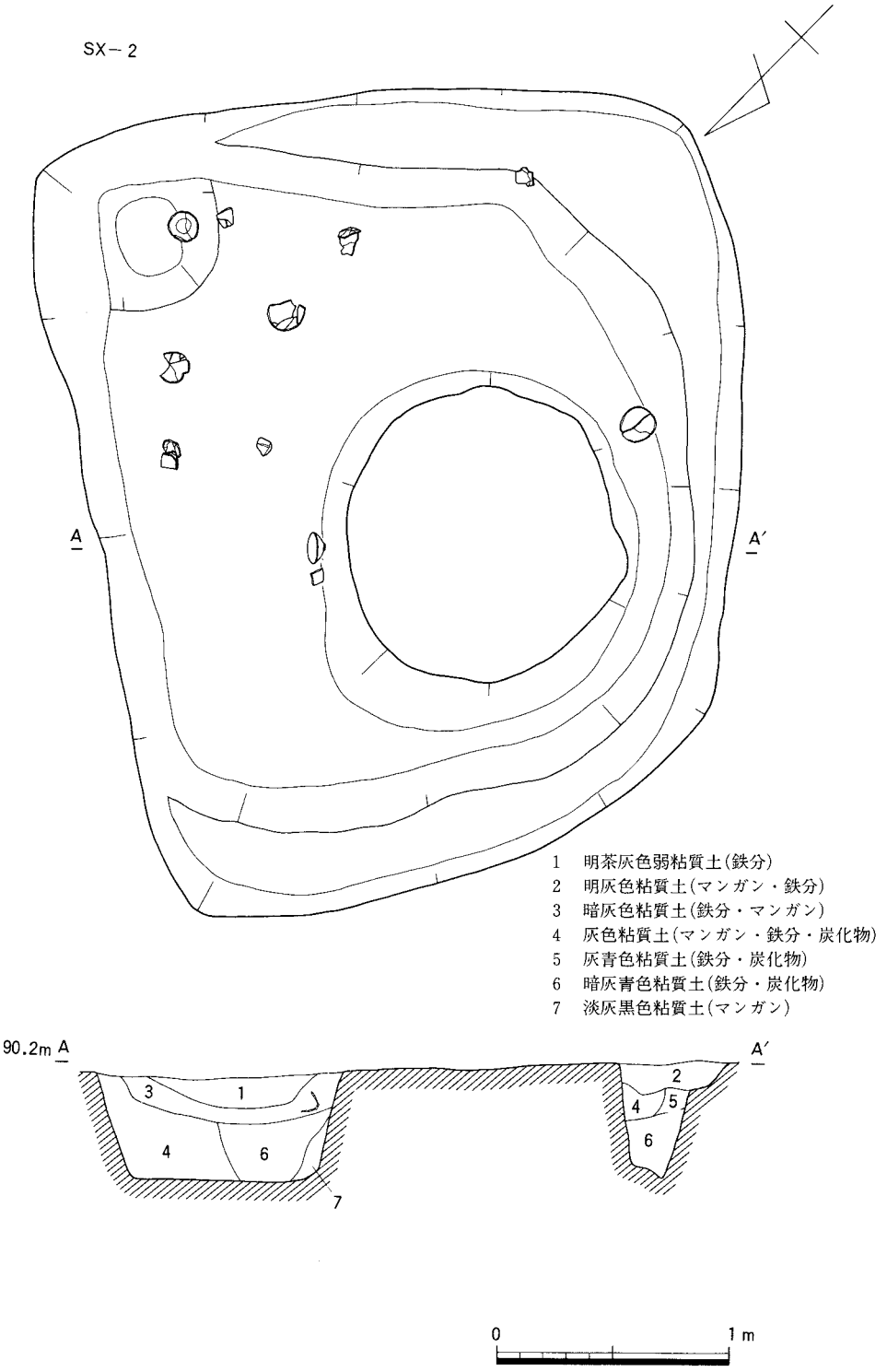
SX-1の西側に隣接して検出した。平面形は方形状を呈する周溝のやや西よりを円形状に掘り残すという特異な形状を示す。周溝は長径3.5m、短径３m、深さ45cmを測り、東、西及び南側にテラス状の段を、さらに東隅にピット状の凹みを有す。台部の直径は1.2mで柱穴等の遺構は検出されなかった。周溝の埋土は７層からの堆積でなるが、北東側約60cm四方に焼石を含む薄い炭化物層（第４層上面）が認められ、何らかの意図で一時的に火を焚いた跡であると考えられる。遺物は土壙北東側を中心に完形３個を含む10個体の黒色土器椀が出土した。東隅の１個を除き、いずれも３層ないし４層上面のほぼ同じレベルでの出土である。時期は出土した黒色土器椀から13C後半は下らないと考えられる。

SX-3

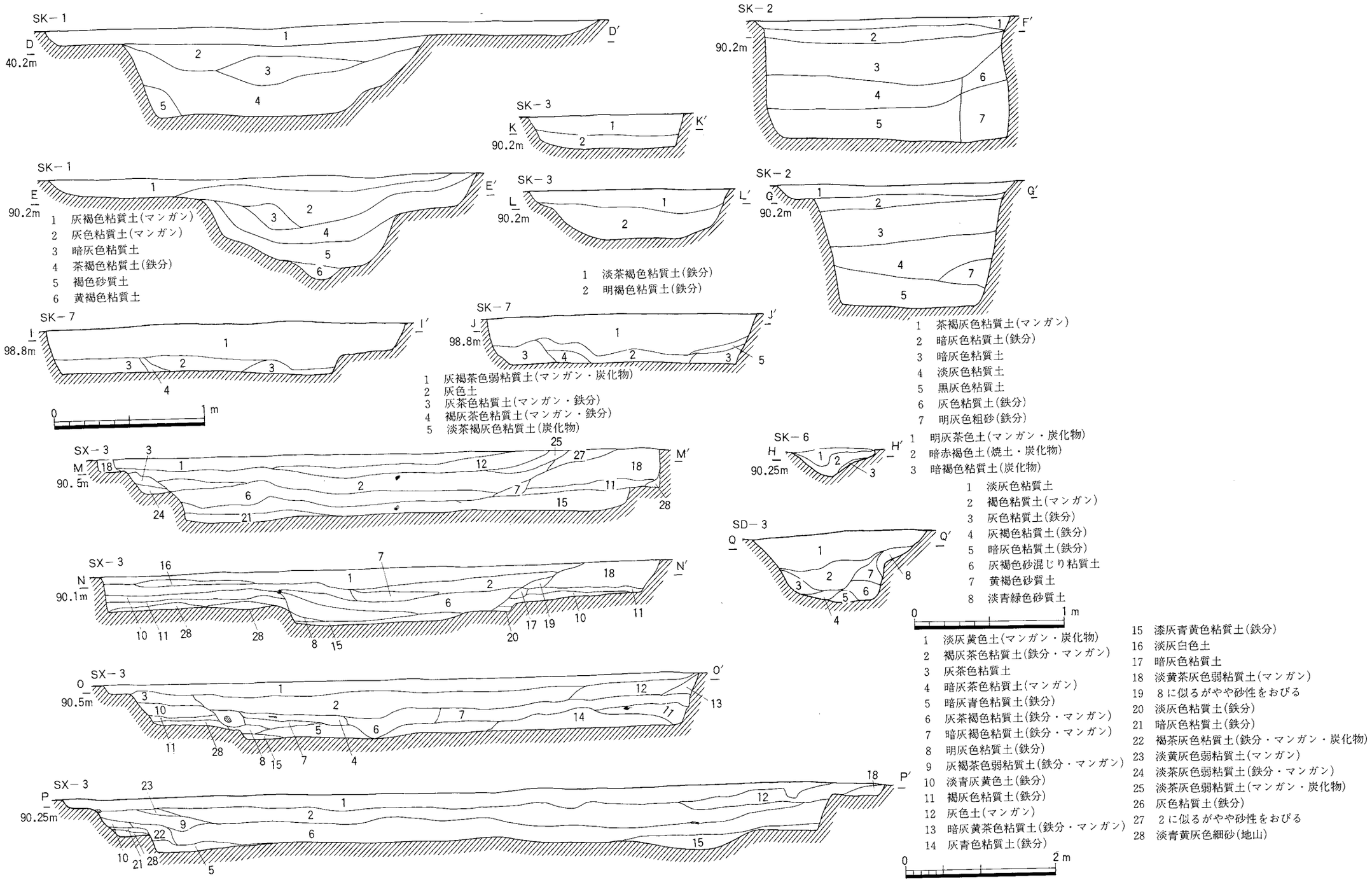
SX-2の南西部を一部切る不定形で大型の落込み状遺構である。長径11m、短径７m、深



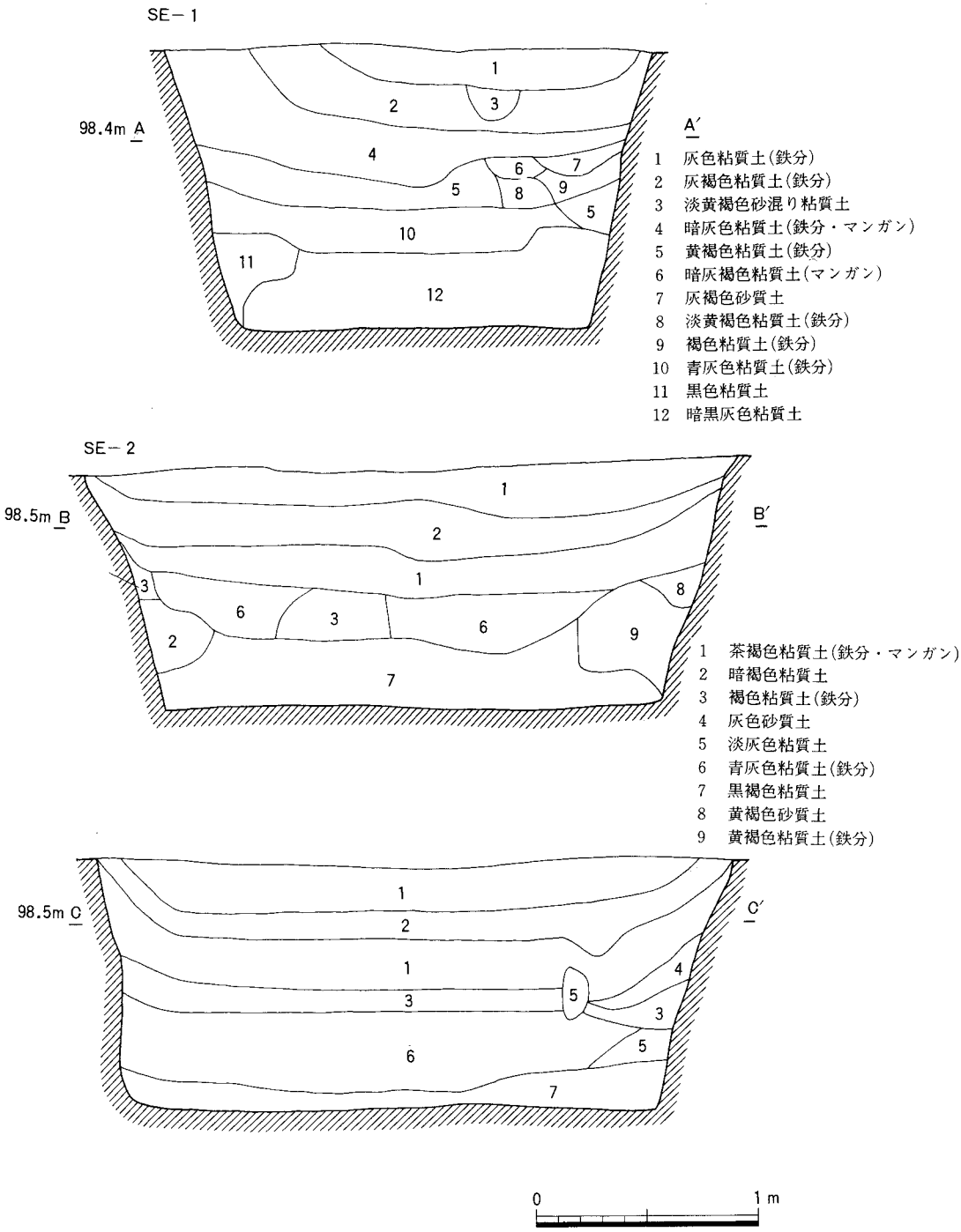
第57図　SX－１遺物出土状況図



第58図　SX－2遺物出土状況図・断面図


SK－1
D
D′
40.2m
SK－2
F
F′
90.2m
SK－3
K
K′
90.2m
SK－1
E
E′
90.2m
1 灰褐色粘質土(マンガン)
2 灰色粘質土(マンガン)
3 暗灰色粘質土
4 茶褐色粘質土(鉄分)
5 褐色砂質土
6 黄褐色粘質土
SK－3
L
L′
90.2m
1 淡茶褐色粘質土(鉄分)
2 明褐色粘質土(鉄分)
SK－2
G
G′
90.2m
1 茶褐灰色粘質土(マンガン)
2 暗灰色粘質土(鉄分)
3 暗灰色粘質土
4 淡灰色粘質土
5 黒灰色粘質土
6 灰色粘質土(鉄分)
7 明灰色粗砂(鉄分)
SK－7
I
I′
98.8m
SK－7
J
J′
98.8m
1 灰褐茶色弱粘質土(マンガン・炭化物)
2 灰色土
3 灰茶色粘質土(マンガン・鉄分)
4 褐灰茶色粘質土(マンガン・鉄分)
5 淡茶褐灰色粘質土(炭化物)
0
1 m
SX－3
M
M′
90.5m
SX－3
N
N′
90.1m
SX－3
O
O′
90.5m
SX－3
P
P′
90.25m
SK－6
H
H′
90.25m
1 明灰茶色土(マンガン・炭化物)
2 暗赤褐色土(焼土・炭化物)
3 暗褐色粘質土(炭化物)
SD－3
Q
Q′
1 淡灰色粘質土
2 褐色粘質土(マンガン)
3 灰色粘質土(鉄分)
4 灰褐色粘質土(鉄分)
5 暗灰色粘質土(鉄分)
6 灰褐色砂混じり粘質土
7 黄褐色砂質土
8 淡青緑色砂質土
0
1 m
1 淡灰黄色土(マンガン・炭化物)
2 褐灰茶色粘質土(鉄分・マンガン)
3 灰茶色粘質土
4 暗灰茶色粘質土(マンガン)
5 暗灰青色粘質土(鉄分)
6 灰茶褐色粘質土(鉄分・マンガン)
7 暗灰褐色粘質土(鉄分・マンガン)
8 明灰色粘質土(鉄分)
9 灰褐茶色弱粘質土(鉄分・マンガン)
10 淡青灰黄色土(鉄分)
11 褐灰色粘質土(鉄分)
12 灰色土(マンガン)
13 暗灰黄茶色粘質土(鉄分・マンガン)
14 灰青色粘質土(鉄分)
15 漆灰青黄色粘質土(鉄分)
16 淡灰白色土
17 暗灰色粘質土
18 淡黄茶灰色弱粘質土(マンガン)
19 8に似るがやや砂性をおびる
20 淡灰色粘質土(鉄分)
21 暗灰色粘質土(鉄分)
22 褐茶灰色粘質土(鉄分・マンガン・炭化物)
23 淡黄灰色弱粘質土(マンガン)
24 淡茶灰色弱粘質土(鉄分・マンガン)
25 淡茶灰色弱粘質土(マンガン・炭化物)
26 灰色粘質土(鉄分)
27 2に似るがやや砂性をおびる
28 淡青黄灰色細砂(地山)
0
2 m

第59図　断　面　図



第60図　SE－1・SE－2断面図

さ80cmを測る。埋土は肩部でやや複雑な堆積をみせるが、中央部は3層がほぼ水平に堆積する。

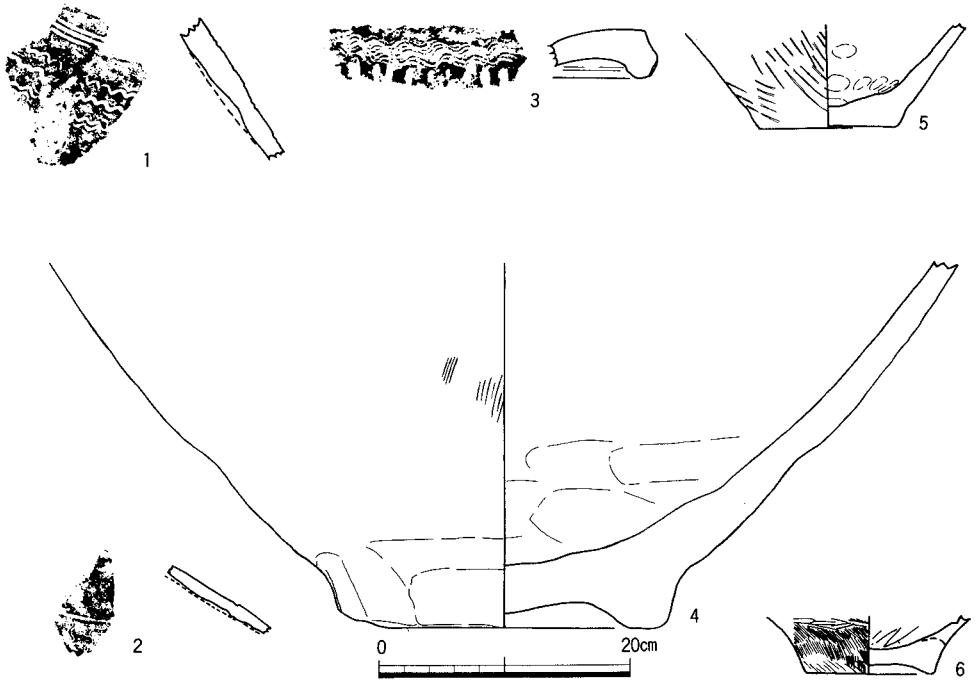
(2) 遺物

(i). 弥生時代中期の遺物

SD-1 (1～6)

壺 (1～4)

1・2は肩部の破片である。1は3条の櫛描直線文の下に櫛描波状文を施す。胎土は1～2㎜の礫を多量に含み、焼成は甘い。色調は内・外面とも灰黄色である。2は多条の細い横櫛描線文に縦波状文を施す。いわゆる東海系の文様である。調整は内面が剝離のため不明であるが、外面には横方向の研磨が施されている。胎土は1㎜大の礫を含み、焼成はやや甘い。色調は外面が淡橙色、内面は灰色である。3は大きく外反する口縁部の破片である。斜下方に垂下する口縁端部下半に刻目文、上半に櫛描波状文を施す。調整は内・外面ハケの後ヨコナデで仕上げる。胎土は1～3㎜の礫を多量に含み、焼成は甘い。色調は外面が淡黄色、内面が灰白色である。4はあげ底の底部である。調整は磨滅のため明瞭で



第61図　SD－1出土土器実測図

ないが体部下半外面がハケの後ナデ、底部内・外面はナデで仕上げる。胎土は１～５㎜大の砂粒を多量に含み、焼成は甘い。色調は外面が淡黄橙色、内面が灰白色である。

甕（５・６）

５は安定した平底からほぼ直線的に外方にひらく底部である。調整は外面が粗いハケ目、内面は指ナデを施す。胎土は１～３㎜大の砂粒を含み、焼成は良い。色調は外面が灰色、内面が灰褐色である。６はあげ底の底部で、外面はハケ、内面はナデで仕上げる。胎土は１～２㎜大の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面は黒色、内面が暗灰色を呈す。

（ⅱ）．平安時代以降の遺物

SB-1　P-1（７～15）、P-2（16～24）、P-3（25）

７～23はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。口径が10cm前後のもの（７～10・16～23）、13～14cmのもの（11・12）、16cm以上のもの（14・15）がある。口縁外面を横ナデし、体部外面は未調整のものがほとんどであるが、体部外面に横ナデを施すものもある（11・12）。25は黒色土器椀で、内弯する体部に断面台形のしっかりした高台がつく。器面の磨滅が著しく、調整等は明瞭でないが、内面は見込から体部にかけてわずかにラセン状暗文が観察できる。内面及び口縁部外面には炭素の吸着がみられ、口縁端部には沈線がめぐる。口径は16.1cm、器高は６cmとやや深椀の形態である。13・24は須恵器の瓶子である。13はやや球形の体部から口縁部は外反しながら開き、端部を丸くおさめる。底部は平底で回転糸切痕が明瞭に残る。24はゆるやかに外反する口縁部の外面を玉縁状に肥厚させ、端部を丸くおさめる。体部はなで肩で最大径は胴部中位より下方にある。底部は安定した平底で回転糸切痕が残る。両者とも器高と胴部最大径がほぼ同じで扁平な器形である。

SB-4（29～32）

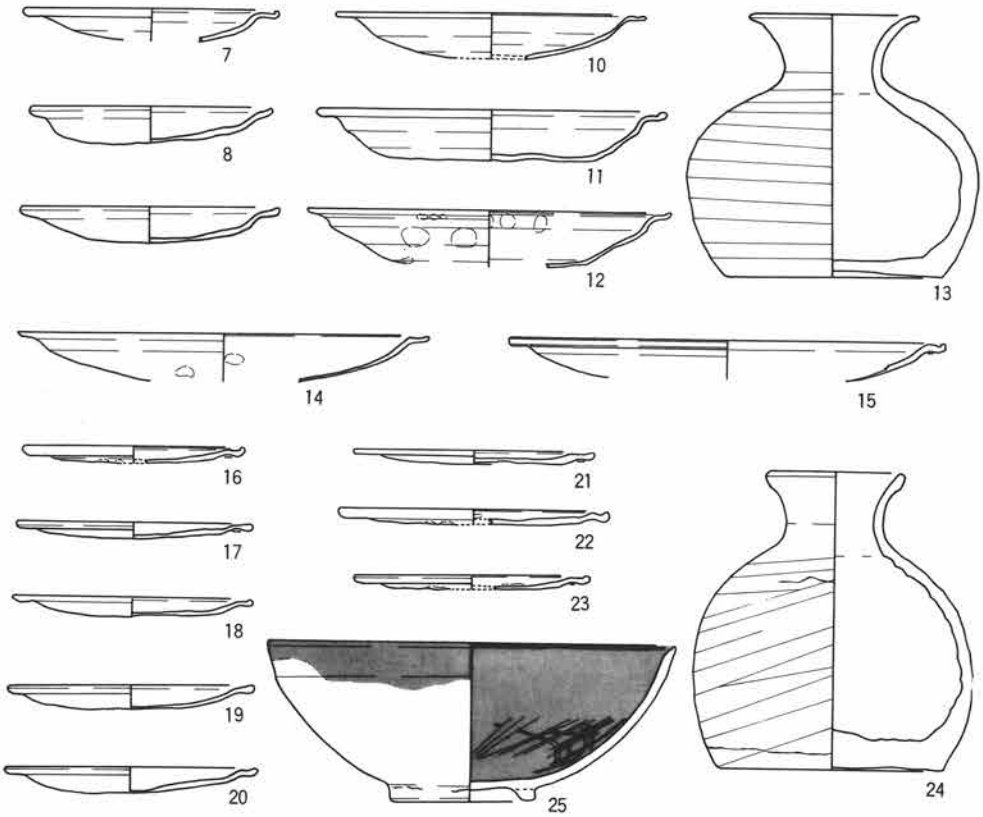
29～31はいずれも「て」字状口縁土師器皿である。29・30は口縁部の巻き込みが弱く、端部を丸くおさめる。31は口縁端部外面に面をもつ。口径は９～10cm、器高は５～６㎜を計る。32はいわゆるコースター状の厚手の土師器皿で口縁部は内側にやや折り込み肥厚させる。口径は8.2cm、器高５㎜を計る。

SP-1（26、27）

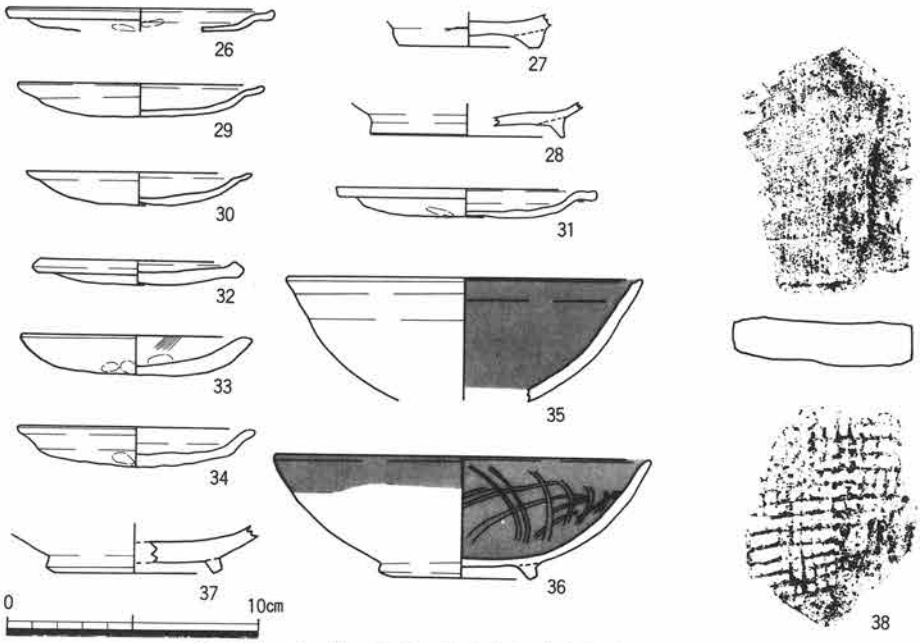
26は「て」字状口縁土師器皿で口縁端部に面をもつ。口径10.3cm、器高５㎜を計る。27は黒色土器椀の底部で断面台形の厚手の高台がつく。

SP-2（28）

黒色土器椀の底部である。高台は断面台形で外方へ踏張るやや薄手のものがつく。



第62図　SB－１出土遺物実測図Ｐ－1　7～13，Ｐ－2　14～24，Ｐ－3　25



第63図　その他の建物・柱穴出土遺物実測図

SB－5　P－1　29～32，SP－1　26・27，SP－2　28，SP－3　33，SP－4　34，SP－5　35，SP－6　36，SP－7　37，SP－8　38

SP-3 (33)

平坦な底部から口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部外面中位まで一度だけ横ナデを施す。

SP-4 (34)

「て」字状口縁の土師器皿であるが、口縁部の巻き込みは弱く、端部を丸くおさめる。

SP-5 (35)

内弯する体部から口縁部が直線的にのびる黒色土器椀で、口縁端部には沈線がめぐる。器面の磨滅が著しく、調整や内面の暗文は不明瞭である。口径は13.3cmを計る。

SP-6 (36)

ゆるやかに内弯する体部に断面台形でやや厚手の高台がつく完形の黒色土器椀である。口縁端部は丸くおさめ、沈線はみられない。器面の磨滅のため調整等は明瞭でないが、口縁部外面にヘラ研磨、内面にラセン状暗文が認められる。口径は15cm、器高は4.9cmを計る。

SP-7 (37)

灰釉陶器椀の底部である。断面台形状の高台を貼りつけ、回転ナデで仕上げる。胎土は緻密で焼成も良好である。

SP-8 (38)

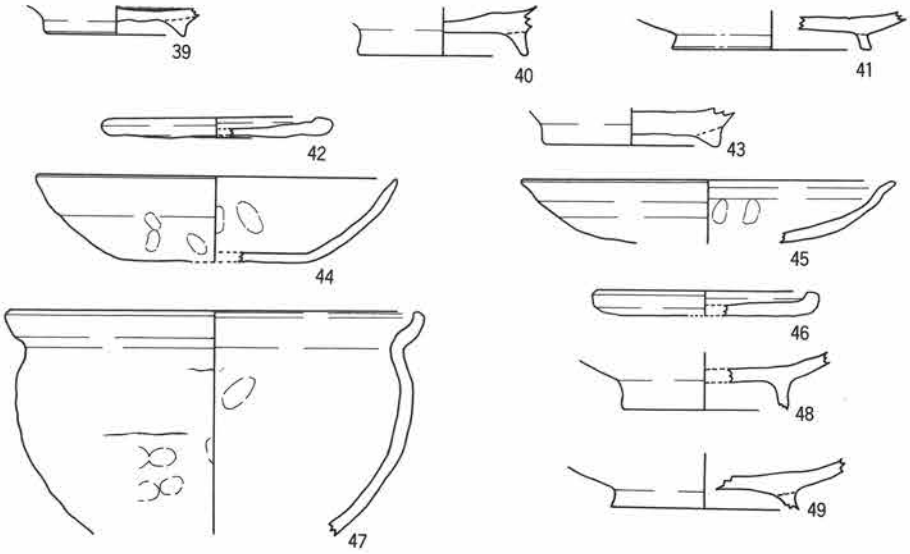
須恵質の平瓦片である。凸面は格子叩きを施した後、一部ナデ消しているが、凹面は未調整で布目がそのまま残る。

SD-2 (39～41)

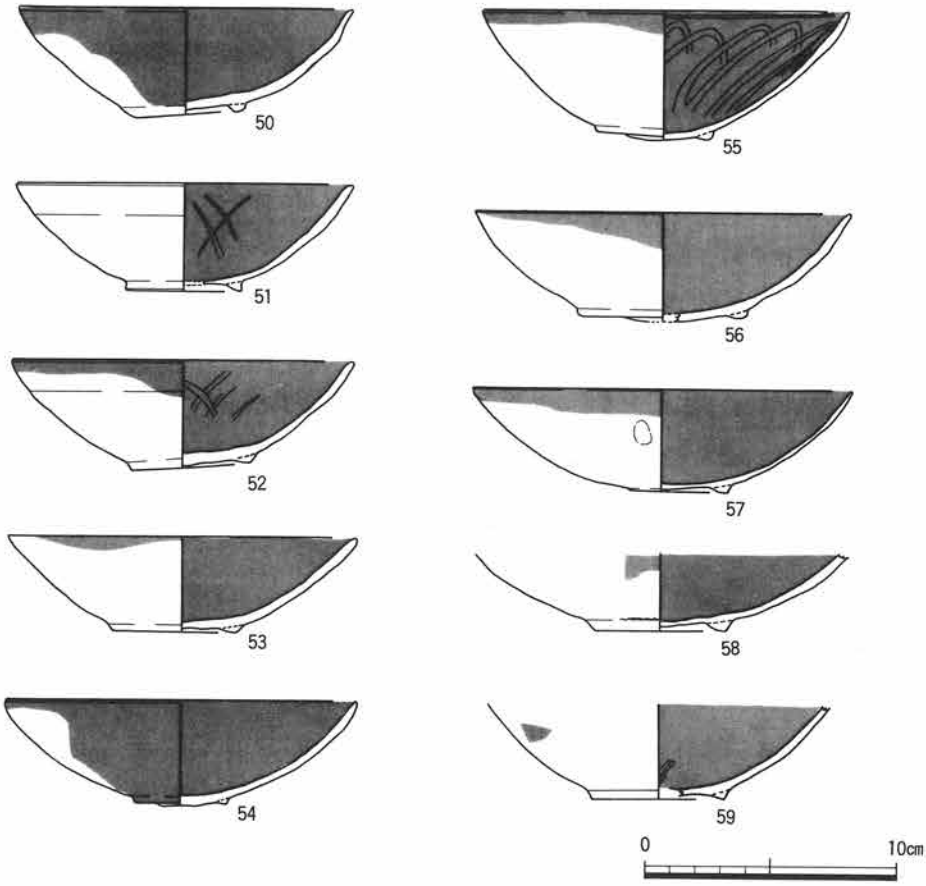
49は黒色土器椀の底部である。高台はやや外方へ踏張る断面台形状のものを貼りつける。48は灰釉陶器椀の底部である。高い薄手の高台を貼りつけ、回転ナデで仕上げる。胎土は3㎜～5㎜大の礫を含み、焼成もやや甘いといえる。41は須恵器杯の底部で、高台は断面方形状を呈す。内・外面共、回転ナデで仕上げるが、見込みに沈線上の凹みが一条めぐる。

SD-3 (42～45)

42・44・45は土師器皿である。42はコースター状を呈するもので、平坦な底部から口縁部を内側に折り込み端部を肥厚させる。口径は9cm、器高は4㎜を計る。44は平坦な底部から内弯して立ち上がるもので、口縁部外面に一段の横ナデを施す。口径は14.1cm、器高は4.1cmを計る。45は内弯する体部から口縁部が外反気味に屈曲するもので、口縁部外面の横ナデは二段に施す。口径14.6cmを計る。43は軟質緑釉椀の底部である。地は淡赤褐色を呈し、暗濃緑色の釉がかかる。高台径7cmを計る。



第64図　SD－２・３，遺構面出土遺物実測図，SD－２　39～41，SD－３　42～45，遺構面46～49



第65図　SX－２出土遺物実測図

遺構面（46～49）

表土掘削時に遺構検出面で出土した土器である。

46はコースター状を呈する土師器皿である。平坦な底部から口縁部を内側に折り込む。口径9㎝、器高5㎜を計る。47は土師質の鍋である。ボール状の体部から口縁部は内弯して立ち上がり、端部は内面に肥厚し、外面に面をもつ。体部外面に煤の付着が認められる。48・49は灰釉陶器椀の底部である。高台は48が直立気味で薄手のもの、49は外方へ踏張るやや厚手のものが貼りつけられている。回転ナデによって仕上げるが、共に底部の糸切り痕は残す。

SX-2（50～59）

すべて黒色土器椀の出土である。

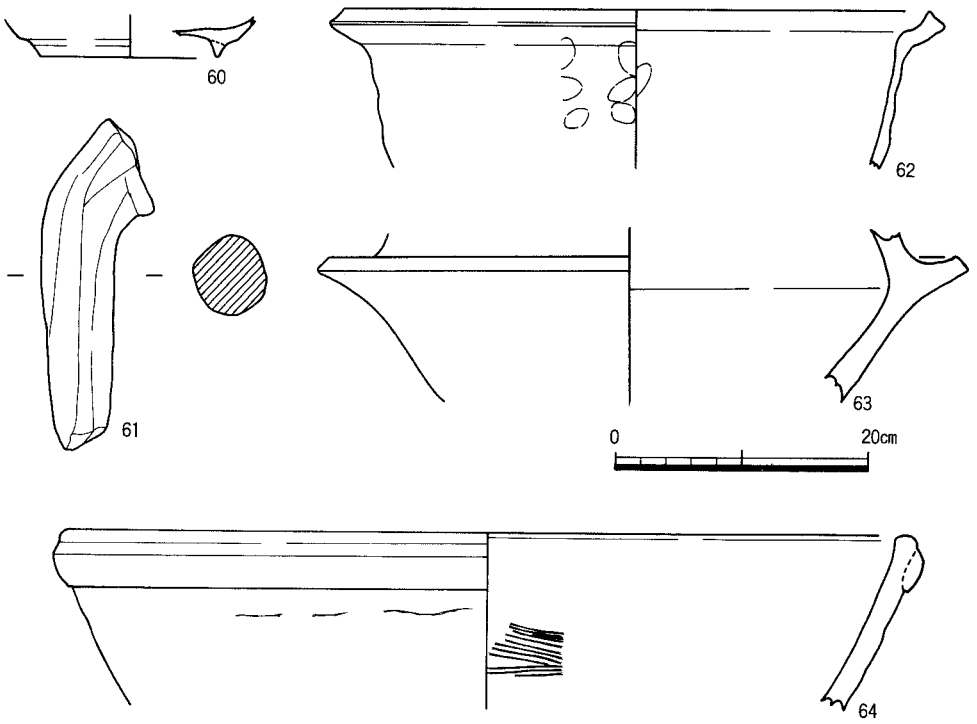
50～54・56～59は口縁部が内弯気味に立ち上がるやや浅い椀で、高台は低い断面三角形状、又は台形上のものを貼りつける。内面全体と外面口縁部から体部の一部にかけて炭素を吸着させている。器面の磨滅のため調整等は著しく不明瞭であるが、内面にラセン状暗文が認められる。いずれも口縁端部の沈線はみられない。55はやや丸い底部から内弯して立ち上がる口縁部をもつ深い椀である。高台は断面三角形状のものを貼りつけるが不安定である。口縁部外面にヘラ研磨、内面は見込み中央を中心にラセン状暗文が丁寧に施されている。口縁端部内面には沈線がめぐる。口径は50～53は13.3㎝～13.8㎝・54～57は14～15㎝、器高は50～54・56・57は4～4.4㎝、55は5.5㎝を計る。

SX-3

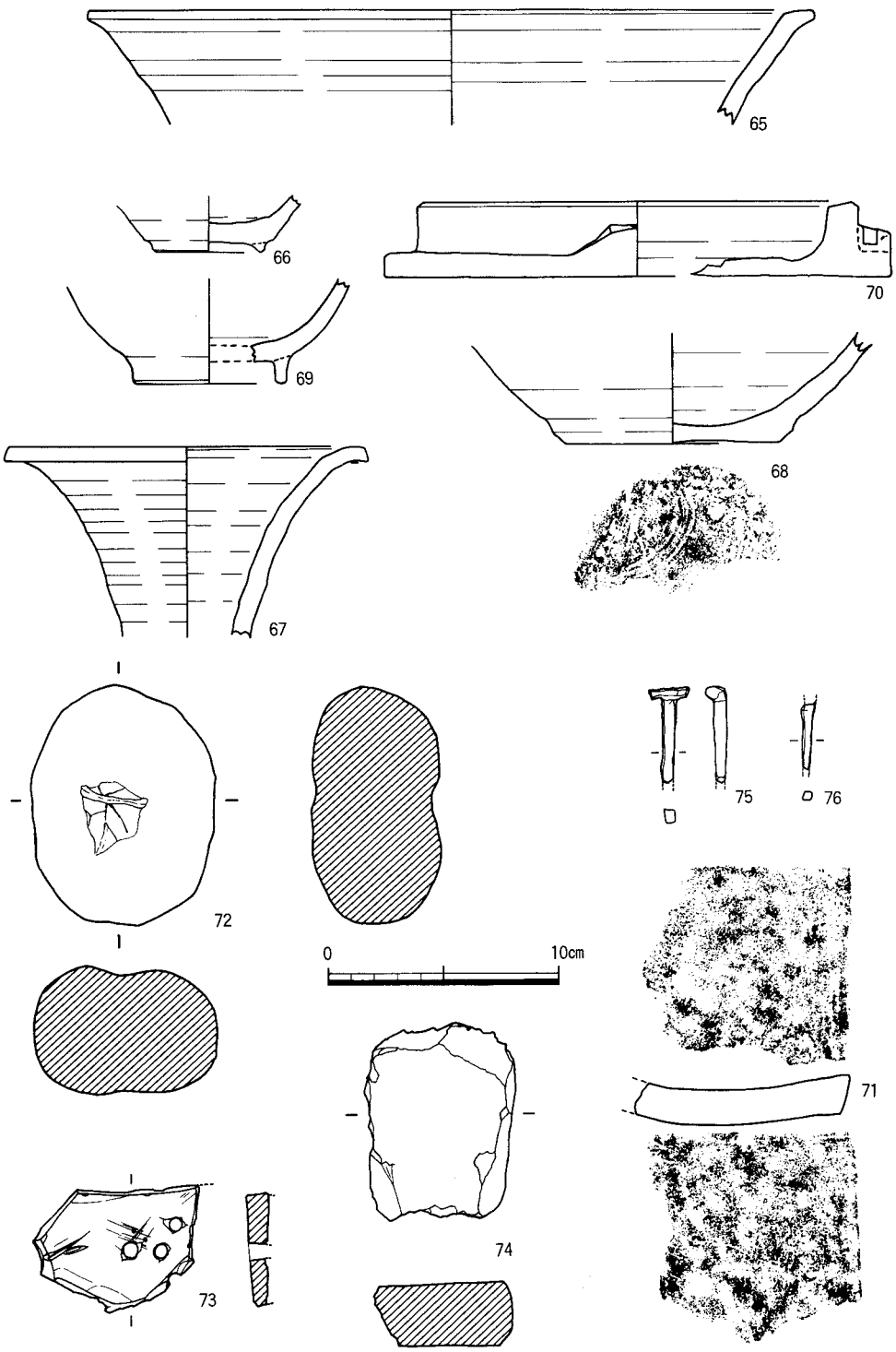
出土量は比較的多いといえるが小破片がほとんどで、実測図示できたものはわずかに17点にすぎない。

60は土師器椀の底部で、断面三角形状の高台が貼りつく。磨滅が著しく調整は不明である。61は瓦質足釜の脚である。62は口縁部が受口状を呈する瓦質の鍋で、体部外面上に指頭圧痕が明瞭に残る。63は瓦質の羽釜の体部片と考えられる。鍔は比較的長く外方にのびる。焼成はやや甘く、胎土に炭化した植物繊維がまじる。64は土師質焙烙と考えられる。口縁部内・外面ナデ、内面体部は粗いハケを施す。65は中世須恵器こね鉢の口縁部片である。口縁部は外方へ開き、端部は内傾する面をもつ。調整は回転ナデによる。胎土は長石や石英を含み、断面の色調は中が淡灰色、外側が淡青灰色のサンドイッチ状を呈す。66は山茶椀の底部で、断面台形の小さな高台を貼りつける。調整は回転ナデによるがつくりは悪い。67は瀬戸灰釉の花瓶と思われる。口縁部は外反してのび、端部は外傾する面をもつ。

地は灰白色を呈し、淡緑色の釉がかかる。68は東播系こね鉢の底部である。内面はよく使用されており磨滅している。底部には糸切り痕が残る。69は内弯気味にゆるやかなカーブで立ち上がる体部に細く高い高台がつく青磁椀である。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は緑灰色に発色する。施釉は底部のみ施釉されないが、露胎部分と施釉された境の部分は赤茶色に発色する。横田・森田氏分類のIII類[注1]に相当し、龍泉窯系と考えられる。70は瓦質の土製品である。周縁突起部に径6㎜、深さ7㎜の穿穴がある。棒状のものをさし、回転させる軸穴のようなものと考えられる。小片のため器形は不明であるが、草戸千軒町[注2]遺跡出土の瓦製燈籠の底部に類似していると思われる。71は厚さ1.5cmの平瓦である。凹・凸両面ともナデで仕上げる。胎土は2～5㎜の礫を含み、灰褐色を呈する。72は凹石で両方の面の中央に凹みをもつ。長径10cm、短径7.5cm、厚さ5cmを計る。石質は花崗岩である。73は途中から欠損しており、形状・用途は不明である。表面・縁は研磨され滑らかで、中央付近に4つの円孔が穿たれている。石質は凝灰質泥岩と考えられる。74は長方形状の砥石で、砥ぎ面は3面にみられる。75・76は鉄釘である。75は和釘と呼ばれる角釘で、頭部を平たくたたき伸ばして、内側へ巻き込むように丸めている。断面はいずれも長方形を呈する。



第66図　SX－3出土遺物(1)



第67図　SX－3出土遺物実測図(2)

(3) 小結

ここでは第3調査区の調査で得られた成果を以下に簡単にまとめる。

古いところでは縄文時代の遺物としての凹石と弥生時代中期の溝があげられる。今回の調査ではこれらに伴なう集落遺構は検出できなかったが、今後周辺の調査で発見される可能性は十分にあるといえる。

平安時代の遺構は掘立柱建物と井戸・建物を囲む溝がある。建物は遺物から11C初頭から12C代のものと考えられ、6棟のうち5棟が南北30m、東西45mの溝(SD-4～7)に囲まれていた。溝より内側の区域は一軒の屋敷と考えられ、ほぼ中央に住居と思われる大型の建物(SB-1)、その西にやや小型の建物2棟(SB-2・3)、さらに南には倉庫状の建物2棟(SB-4・5)が整然と配置されており、他の調査区で検出した建物群と比較するとかなりの優位性を指摘することができる。又、SB-1に伴なって検出したP-1・2はいわゆる土器埋納壙であり、他の類[注3]例から地鎮等の祭儀にかかわるものと考えられる。

中世の遺構では周溝をもつ中世墓とみられるSX-1・2が注目される。SX-1は溝内から出土した多量の礫群から溝の内側に盛土（塚）の存在を推定することができ、餓鬼草子にある中世墓の景観を想像することができる。当時は盛土の上に卒塔婆のような墓塔が立っていたのであろうか。SX-2は周溝北側で検出した焼石を含む炭化物層から火葬墓の可能性を指摘することができる。炭化物とほぼ同レベルで出土した黒色土器椀はそのおりに供献されたものであろう。本調査区ではこれ以外に土壙墓の可能性をもつものが若干あり、当地が中世においては小規模な墓地を形成していたことがうかがえる。

注① 横田賢次郎、森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』1978年

注② 草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡－発掘調査十年の成果』1983年

注③ 平良泰久他「平安京跡（右京一条三坊九・十町）昭和55年発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1981年

（宮下）

4　第4調査区

第4調査区は第3調査区の西に接した東西60m、南北32mの区域に調査区を設定した。検出した遺構には弥生時代後期の溝1条、古墳時代の溝6条、平安時代中期～中世の掘立柱建物7棟・土壙・溝・柱穴群がある。

(1)　遺構

(ⅰ). 弥生時代後期

SD-15

調査区南西端から中央部にかけて検出した直径14mの半円形の溝である。溝幅は30～50cm、深さ20cmを測る。埋土は黒灰色粘質土の単層である。広口壺の口縁部（第76図17）が出土した。

(ⅱ). 古墳時代

SD-16（第69図）

調査区の中央を西流する溝である。溝幅は4m、深さは90cmを測る。段掘され、断面は⊓状を呈する。SD-17との合流点には堰が築かれ、北東からの流水をSD-16に引水していたと考えられる。堰は東側が調査区外へ伸びるため規模は明確でないが、現状では長さ2m、幅70cmにわたって矢板や杭（長さ50cm～1m）が密に打ち込まれていた。溝底近くから古墳時代前期の受口状口縁甕（第74図1）が出土した。

SD-17

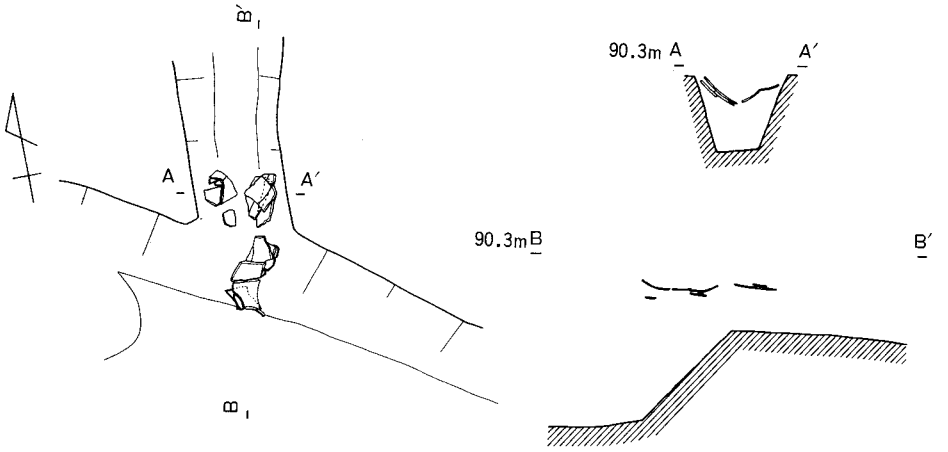
調査区の北端で蛇行し西流する自然流路で、第2・3調査区で検出したSD-1の延長とも考えられる。溝幅は最大で7m、深さ70cmを測る。埋土は流路特有な複雑な堆積を示す。遺物の出土はほとんどないが、上層で古墳時後期の長甕（第76図18）が出土した。

SD-18

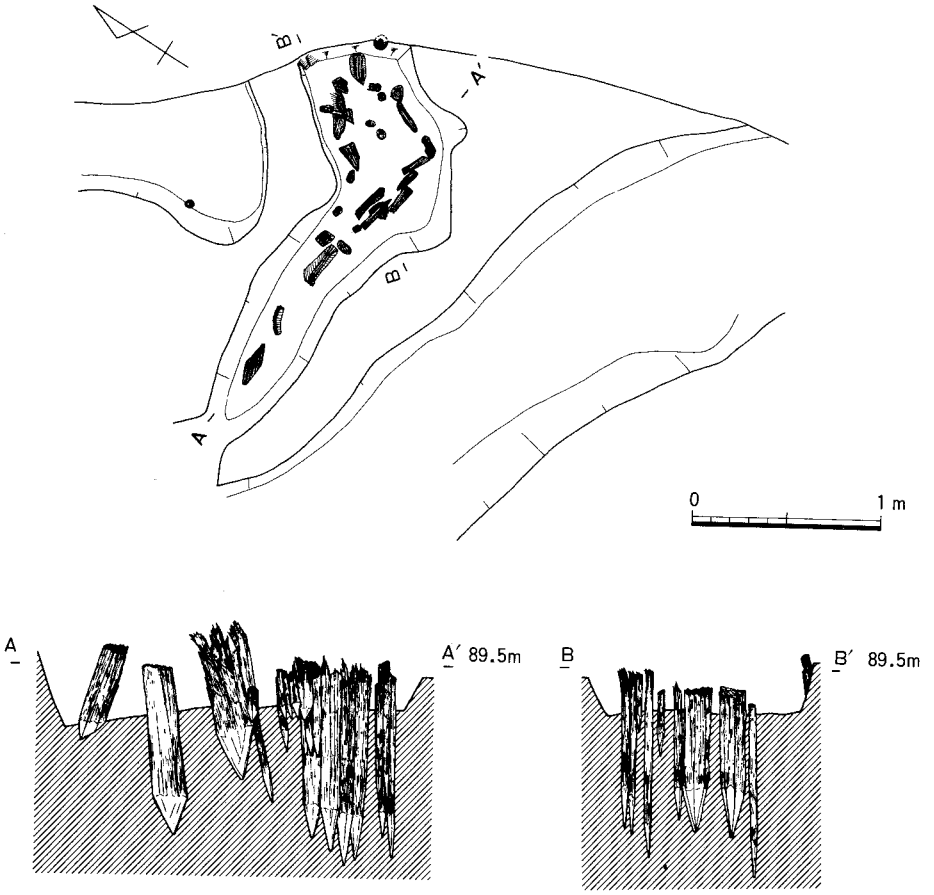
SD-18として一括したが4本の溝が切り合って平行に走る。明確な切り合い関係は断面観察からも見い出すことはできなかった。おそらく短期間のうちに継続して掘削されたものと考えられる。埋土は黒褐色粘質土と暗灰色粘質土の上下二層が堆積する。

SD-19

調査区東側で検出した東西溝である。西側で二又に分かれ、それぞれSD-16とSD-17に切られている。幅は40cm～1m、深さは30～50cmを測る。埋土は黒灰色土の単層である。土師器の小破片が少量出土した。



第68図　SD－15遺物出土状況図



第69図　SD－16堰出土状況図

(iii) 平安時代以降

a. 掘立柱建物 (SB-7～13)

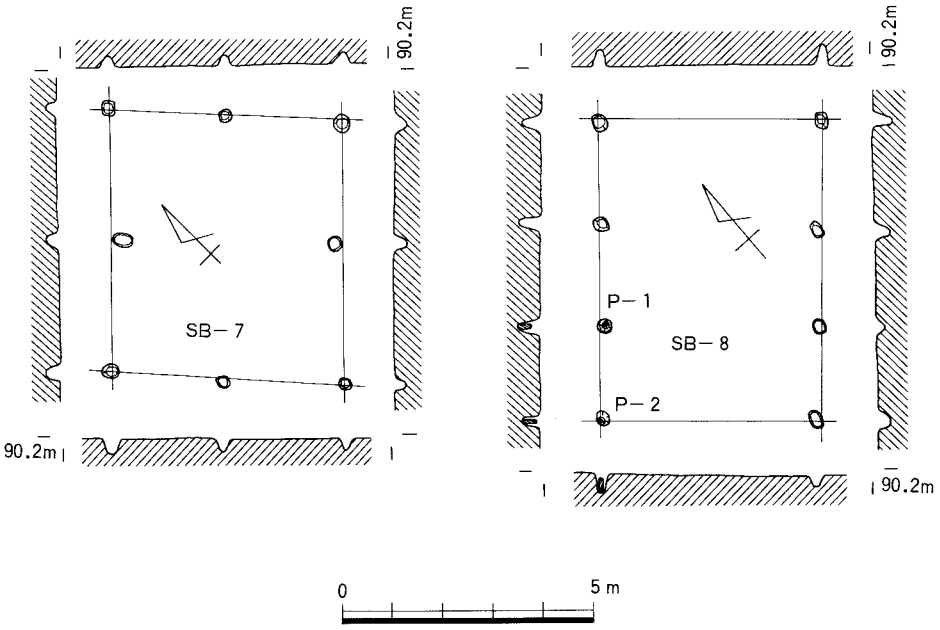
本調査区からは、約300穴の柱穴群を検出したが建物として復元できたのは7棟にすぎない。

SB-7 (第70図)

調査区南東で検出した2間×2間の建物である。主軸方位はN-43°-Eを示し、柱間距離は桁行2.6m、梁行2.4mを測る。柱穴は長径30～40cmの楕円形状を呈し、深さは20cm程度である。埋土はおおむね灰褐色土の単層である。

SB-18 (第70図)

SB-7の北東に位置する4間×1間の建物である。主軸方位はN－40°－Eを示し、柱間距離は桁行2m、梁行4.2mを測る。柱穴は直径30cmもしくは長径30～40cmの楕円形を呈し、深さは20～40cmである。柱穴埋土はおおむね灰褐色土の単層である。P-1・2に直径30cm程の柱根が遺存していた。遺物はP-1から土師器大皿(第77図21)が出土した。



第70図　建物平面図(SB－7・8)

SB-9

SB-8 の北東に近接して検出した。4間×1間と細長い建物で、主軸方位はN－50°－Wを示す。柱間距離は桁行が2m前後とややばらつきがみられ、梁行は2mを測る。柱穴は直径30～40cmの円形もしくは長径40cmの楕円状を呈し、深さは20～40cmを測る。埋土は灰褐色土の単層である。

SB-10

調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の建物である。主軸方位はN－56°－Wを示し、柱間距離は桁行2.4m前後、梁行1.8m前後とややばらつきがみられる。柱穴はおおむね灰褐色土の単層である。遺物はP-1・2から土師器小皿・黒色土器椀（第77図22～25）を出土した。

SB-11

SB-10 の北に位置する1間×1間の小規模の建物である。主軸方位はN－53°－Wを示し、柱間距離は2.4m前後である。柱穴は長径40～50cmの楕円形で、深さは30～50cmである。

SB-12

SB-10の北に近接して検出した3間×1間の建物である。主軸方位はN－50°－Wを示し、柱間距離は桁行2～2.4m、梁行2mを測る。柱穴は長径40cmの長方形もしくは長径20～50cmの楕円形を呈し、深さは10～30cmを測る。埋土はマンガンを含む褐灰色土の単層である。P-1から須恵器杯身（第77図26）が出土した。

SB-13

調査区西端で検出した1間×1間の建物である。主軸方位はN－41°－Wを呈し、柱間距離は2mを測る。柱穴は長径30～40cmの楕円形で、深さは20cm程度である。埋土は暗褐灰色土の単層である。

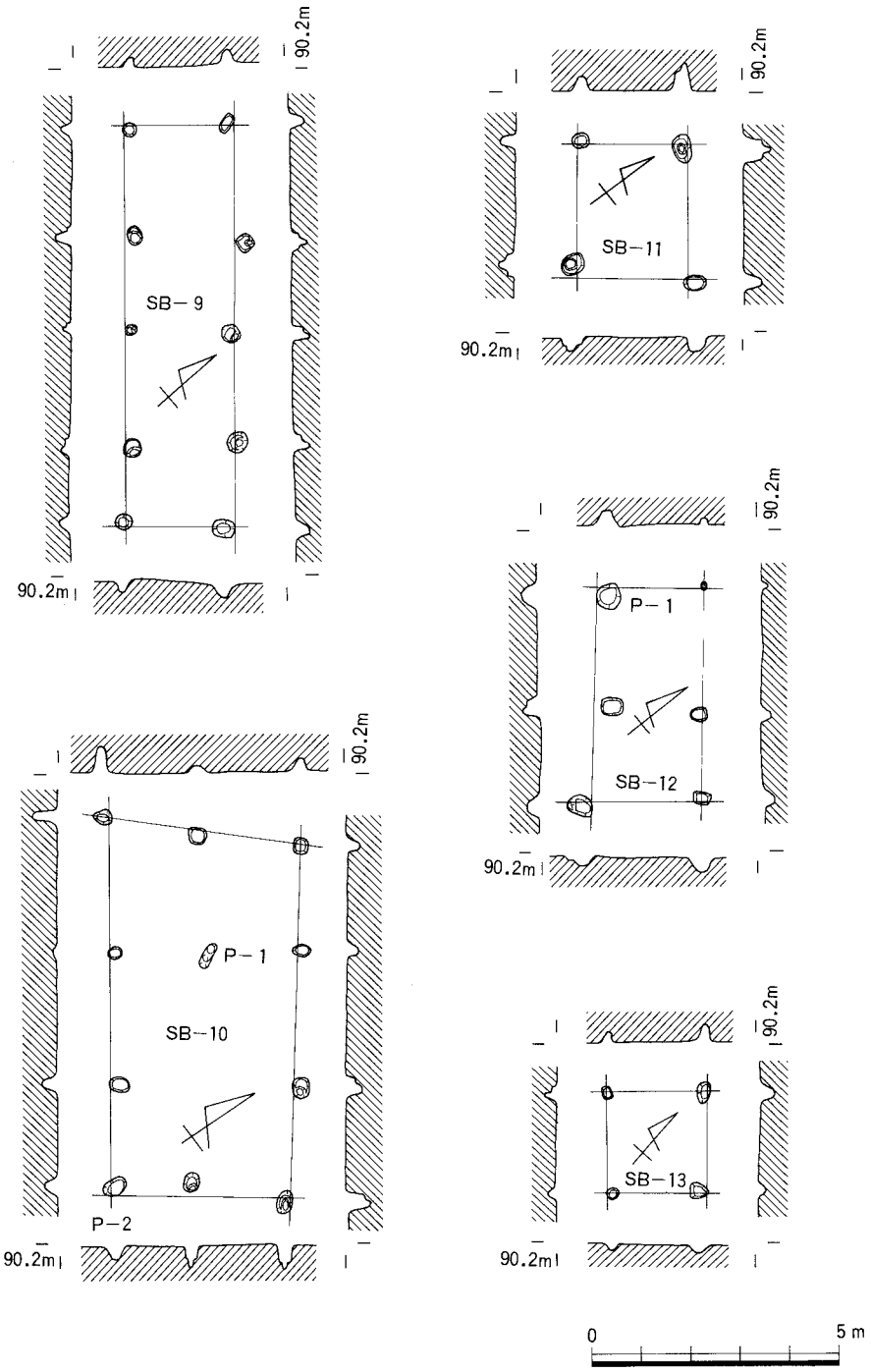
b. 土壙（SK-14～19）

SK-14

調査区東辺で検出した不定形の土壙で、SB-8の東コーナーの柱穴を切っている。長径2m、短径1m、深さ20cmを測る。埋土は明灰茶色土の単層である。

SK-15

SK-14の南に隣接して検出した。長径1.7m、短径1m、深さ10cmを測り、底面は平坦である。埋土はマンガンを多く含有した灰褐色土の単層である。



第71図　建物平面図(SB－9～13)

SK-16

調査区北東端で検出した。調査区外へ伸びるため規模・形状は明らかでない。直径1.2mの円形かもしくは楕円形を呈すると思われる。深さは40cmを測り、断面は「U」字形を呈する。埋土は黄褐色粘質土（地山）が混入した灰褐色土の単層である。埋土中より土師器と黒色土器の小片が少量みられた。

SK-17

調査区中央で検出した方形状の土壙である。長径1.7m、短径1.4m、深さ15cmを測る。埋土は明灰褐色土の単層である。

SK-18

調査区南西端で検出した長方形状の土壙である。長径1.7m、短径70cm、深さ30cmを測り、底面は鍋底状を呈する。埋土は少量の炭化物を含有した暗褐灰色土の単層である。埋土中から須恵器片が出土した。

SK-19

調査区西端で検出した長方形の土壙である。長径2m、短径1.1m、深さ25cmを測る。底面は平坦で鍋底状を呈する。埋土は褐灰色土の単層である。

c. 溝（SD-13・14・20）

SD-13

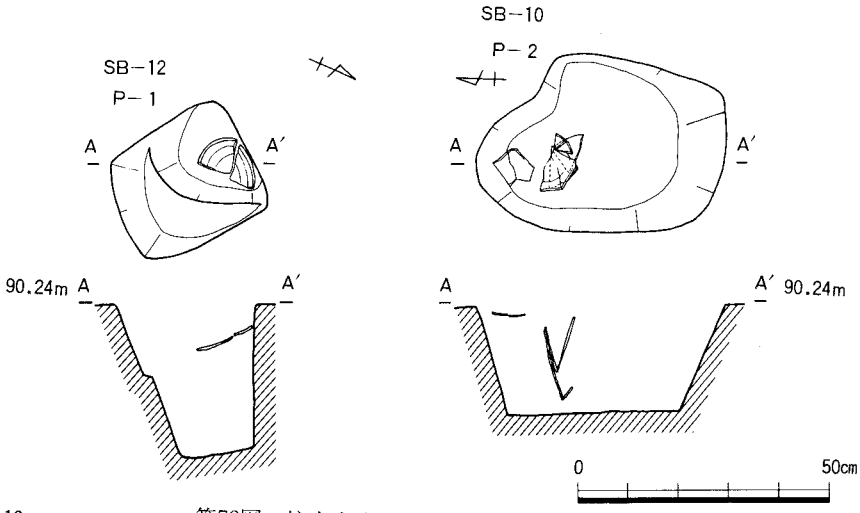
調査区東端で検出した。第3調査区で検出したSD-4～7と同様、SB-1～5の建物群を囲む溝と考えられる。溝幅は70cm、深さ50cmを測り、底面は鍋底状に落ち込む。遺物は埋土中から黒色土器椀、灰釉陶器椀、砥石（第79図41～45）が出土した。

SD-14

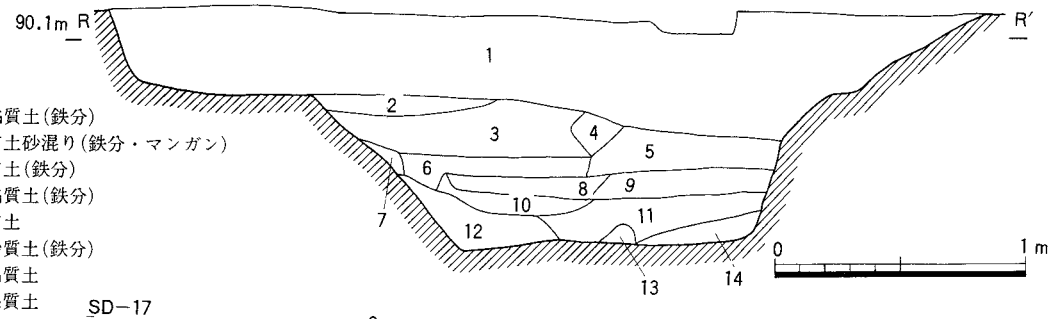
SD-13と平行して走る溝で北東端をSD-13に切られている。溝幅は1.3m、深さ75cmを測り、底面は鍋底状に落ち込む。遺物は埋土中から土師器小皿・黒色土器椀・緑釉陶器・灰釉陶器・陶器壺（第79図46～52）が出土した。

SD-20

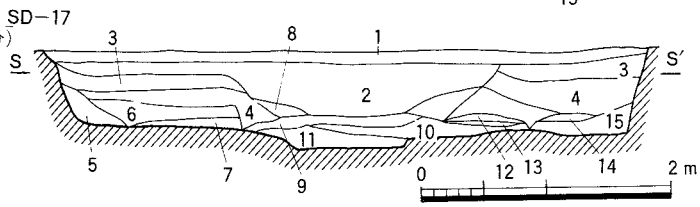
調査区北東端で検出したが溝の大部分が調査外にあり規模は明確でない。現状で最大幅2m、深さ30cmを測り底面は皿状にゆるやかに落ち込む。遺物は埋土中からの出土で、土師器大皿・甕・須恵器杯身・甕・灰釉陶器椀（第78図35～39）がある。



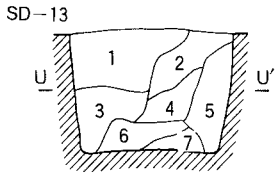
第72図　柱穴内遺物出土状況図



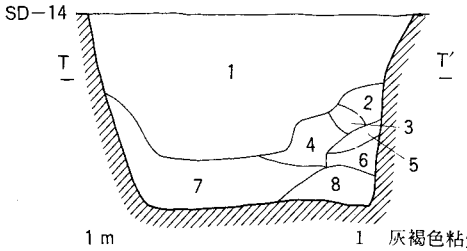
1　灰褐色粘質土(鉄分)
2　灰色粘質土砂混り(鉄分・マンガン)
3　灰色粘質土(鉄分)
4　灰褐色粘質土(鉄分)
5　灰色砂質土
6　青褐色砂質土(鉄分)
7　暗褐色粘質土
8　暗灰色粘質土
9　灰褐色粘質土(鉄分)
10　青灰色粘質土



1　暗茶褐色粘質土(鉄分)
2　褐色粘質土(鉄分)
3　明褐色砂混り粘質土(鉄分・炭)
4　茶褐色砂質土
5　暗褐色粘質土(鉄分・木炭)
6　褐色粘質土(鉄分)
7　茶褐色砂質土
8　黄褐色粘質土(鉄分)
9　茶褐色砂混り粘質土(鉄分)
10　灰色粘質土(鉄分)
11　灰色砂混り粘質土
12　青灰色粘質土
13　青灰色粘質土
14　暗灰色粘質土



1　灰褐色粘質土(鉄分)
2　灰褐色砂混り粘質土(鉄分・マンガン)
3　灰色粘土質土
4　茶灰色粘土(鉄分・マンガン・砂)
5　灰色砂質土(鉄分)
6　青灰色砂混り粘質土(鉄分)
7　灰色粘質土



1　灰褐色粘質土(鉄分)
2　褐色砂混り粘質土
3　茶褐色粘質土(鉄分)
4　灰褐色砂質土(鉄分)
5　暗褐色砂混り粘質土
6　褐色砂混り粘質土
7　灰褐色砂混り粘質土
8　暗褐色砂混り粘質土

第73図　断　面　図

(2) 遺物

（ｉ）弥生時代後期

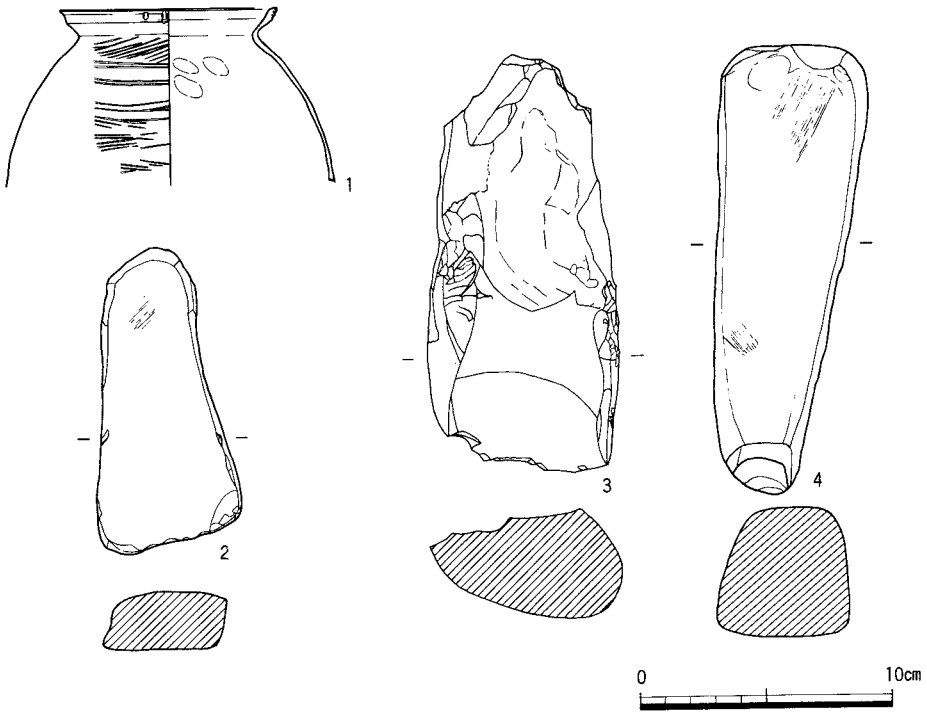
SD-15（第76図17）

17は広口壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、端部は上下に肥厚する。口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施す。胎土は淡黄褐色を呈し、２～３㎜大の礫を多く含有する。

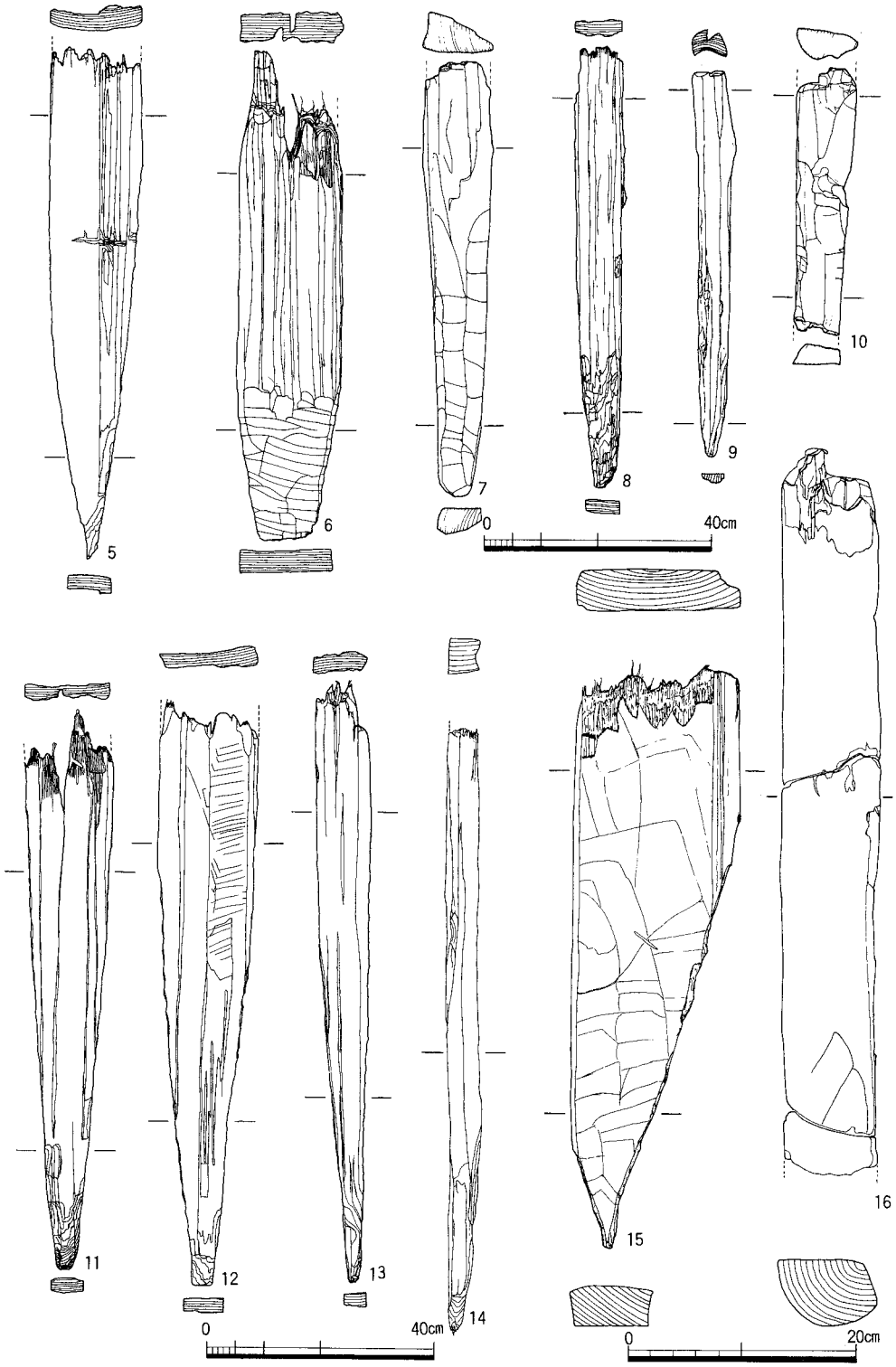
（ii）. 古墳時代

SD-16（第74図１～４、第75図５～16）

１は受口状口縁甕である。口縁部外面に棒状浮文、肩部に櫛描平行文を施す。体部外面はハケ、内面はナデで仕上げ、器壁は薄い。胎土は淡黄灰色を呈し、１㎜程度のレキを多量に含む。２・４は砥石でいずれも砥ぎ面は一面である。３は破損が著しいが弥生時代の太型蛤刃石斧と考えられる。5～16は堰の矢板と杭である。矢板（５・６・８・11～13・15）はいずれも板目に木取りした板材の先端を鋭利な鉄製工具により丁寧に削り仕上げている。杭（７・９・10・14・16・19）は柾目及び辺材を木取りし、先端を削る。



第74図　SD－16出土遺物実測図



第75図　SD－16(堰)出土木製品実測図

SD-17（第76図18）

18は長胴甕の口縁部である。口縁部はやや内弯し、受口状に立ち上がる。口縁部外面横ナデ、体部外面は縦ハケ、口縁部～頸部内面に横ハケ、体部内面はナデを施す。胎土は粗く茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。外面体部には煤の付着が見著である。

SP-9（第77図27）

27は高杯の杯部である。口縁部はゆるやかに外反し、端部を丸くおさめる。胎土は比較的良好で赤褐色を呈する。

SP-10（第77図29）

口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は内傾する面をもつ甕である。。胎土は砂粒を多く含む黄褐色である。

(iii). 平安時代以降

SB-8（第77図21）

21は土師器皿である。平坦な底部から口縁部は内弯して立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁部外面に１回だけ横ナデを施す。口径13.5cm・器高2.8cmを計る。

SB-10（第77図22～25）

22は「て」字状口縁の土師器皿である。口径10.2cm・器高５mmを計る。23～25は黒色土器椀である。いずれも内弯して立ち上がる口縁部をもつやや深い椀である。25は断面台形状を呈する細く高い高台がつく。器面の磨滅が著しく、調整等は不明である。口径は23が16cm・24が14cm・25が15cmで器高は25が６cmを計る。

SB-12（第77図26）

26は高台を付す須恵器の杯身で、調整は回転ナデによる。胎土は緻密で灰青色を呈し、焼成も良好である。

SP-9（第77図28）

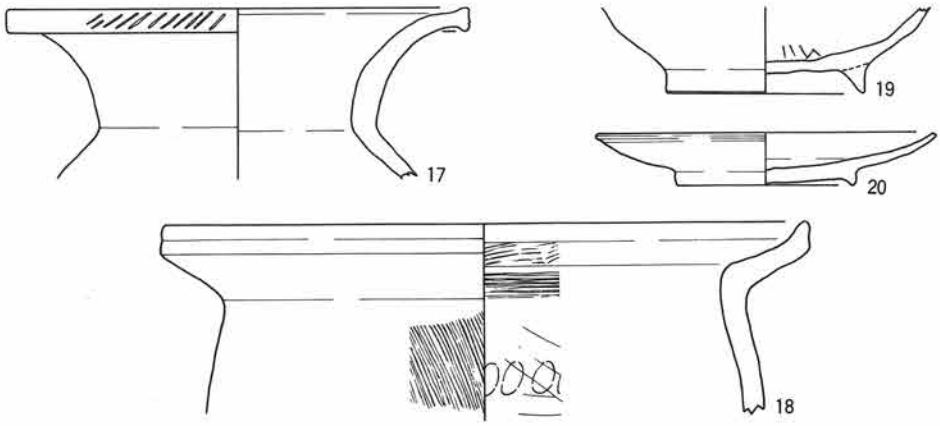
28は土師器台付皿の脚台である。内外面ナデで仕上げる。

SP-11（第77図30）

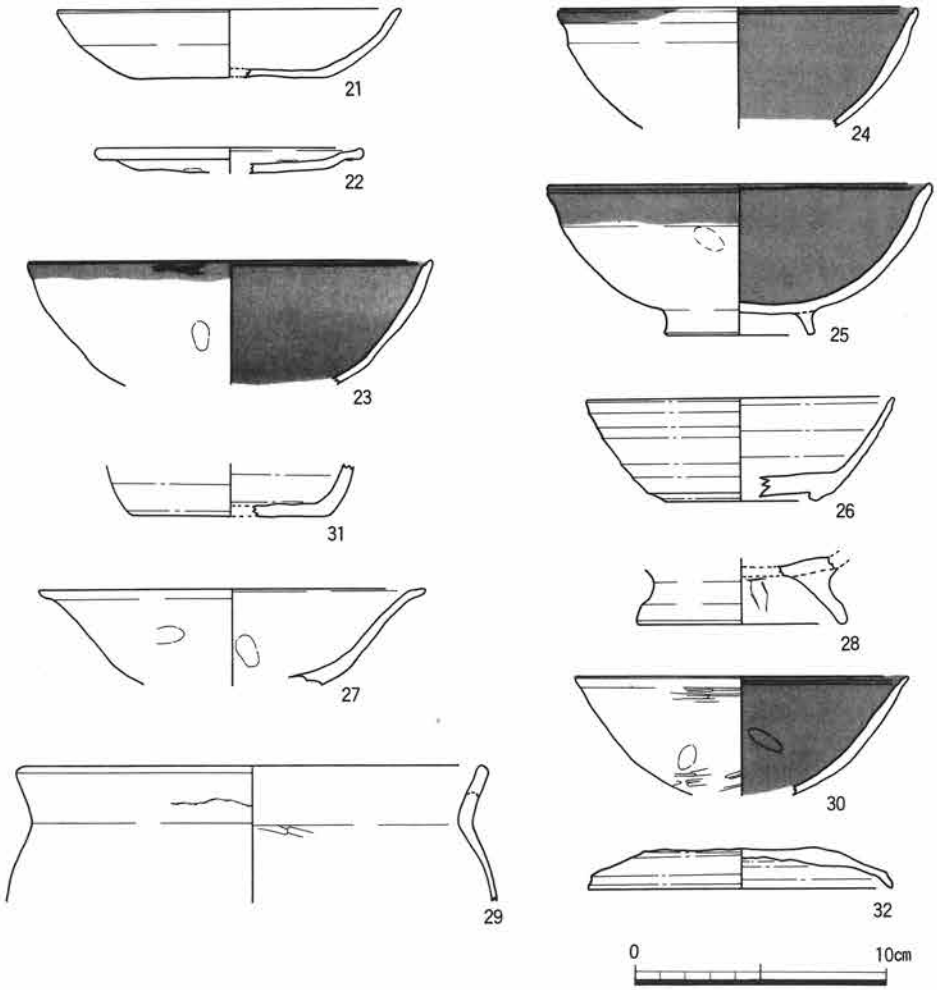
口縁部が内弯気味に立ち上がる黒色土器椀で端部に一条の沈線がみられる。器面の磨滅のために調整は明確でないが口縁部外面と体部にヘラ研磨が認められる。口径は13cmを計る。

SP-12（第77図31）

31は無高台の須恵器の杯である。調整は回転ナデ、胎土は精良で青灰色を呈する。



第76図　SD−15・SD−17遺構面出土遺物実測図，SD−15 17，SD−17 18，遺構面19・20



第77図　建物・柱穴出土遺物実測図
SB−8　21，SB−10 22〜25，SB−12 26，SP−9　27・28，SP−10 29，SP−11 30，SP−12 31，SP−13 32

SP-13（第77図32）

32は須恵器の蓋杯である。天井部と口縁部の境は大きく屈曲し、端部は下方に突出する。調整は回転ナデによるが天井部は未調整である。

SD-13（第79図41～45）

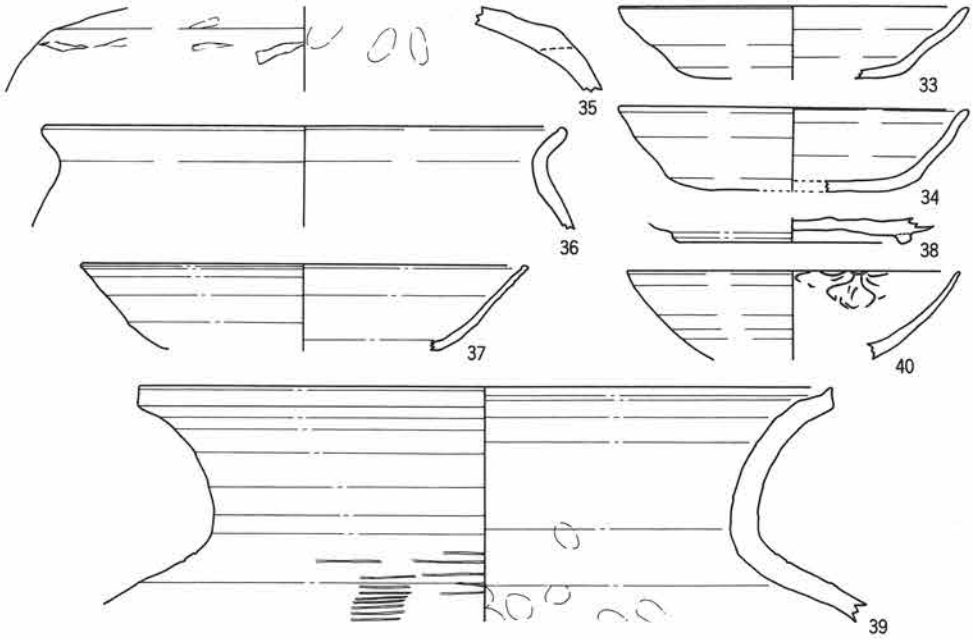
41～44は黒色土器椀である。41は口縁部が内弯して立ち上がる深椀で断面方形の厚手の高台がつく。器面の磨滅が著しく調整は明瞭でないが、わずかに高台接合付近にヘラ研磨が認められる。口径15.4cm・器高6.5cmを計る。42・43は内縁部が内弯気味に立ち上がる浅椀で断面三角形の高台がつく。口径は42が13.8cm、43が14.4cm、器高は4.4cmを計る。45は砥石で両端を欠損する。砥ぎ面は6面あり、それぞれ使用頻度は高い。

SD-14（第79図46～53）

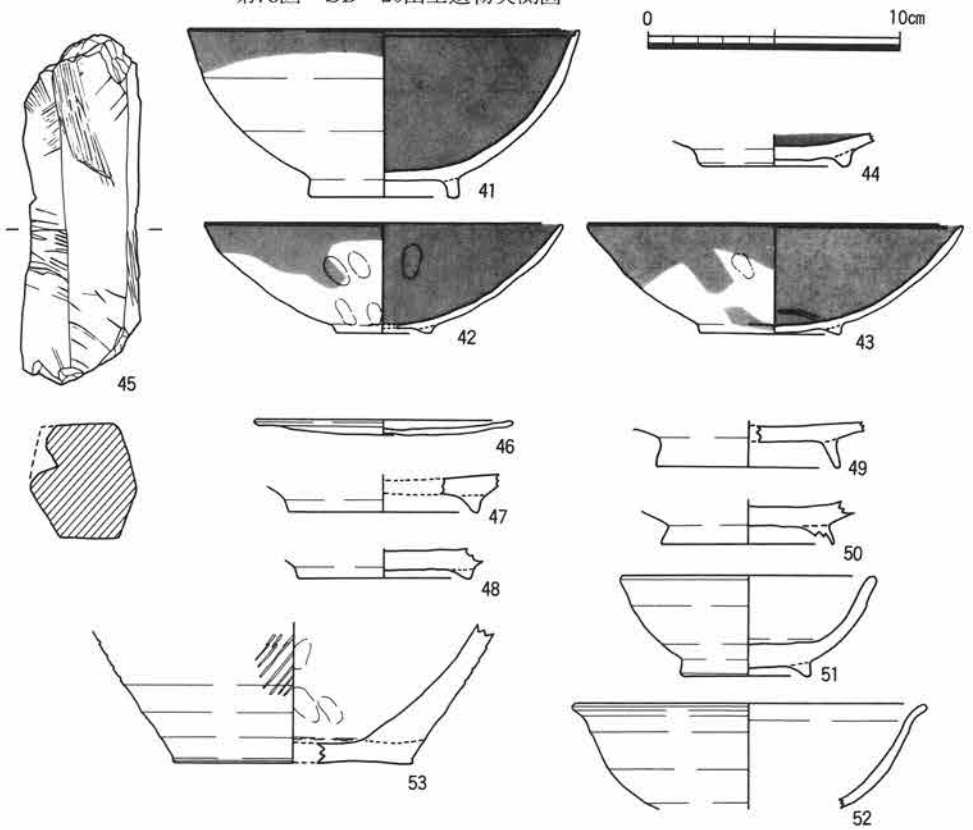
46はコースター状を呈する土師器皿で口縁部の巻き込みは弱い。口径10cm・器高4mmを計る。47・48は土師器椀の底部で断面三角形の高台がつく。49・52は灰釉陶器椀である。49は底部で細く高い高台がつく。52は口縁部片で、内弯する体部から口縁部は外反気味に開く。調整は回転ナデによりいずれも丁寧に仕上げられている。50・51は緑釉陶器椀である。51は口縁部が内弯して立ち上がる小型の椀で、外方へ踏張る断面台形の高台がつく。素地は軟質で淡黄褐色を呈し、暗濃緑色の釉がかかる。53は陶器の壺の底部で、外面体部に斜めの平行叩きを施す。色調は外面が暗紫灰色、内面が明灰褐色である。胎土は灰白色を呈し、1mm程度の長石を少量含む。

SD-19（第78図33～40）

33・34は土師器皿である。33は体部が強い横ナデにより屈曲し、口縁部は内弯して立ち上がる。口径13.6cm、器高2.8cmを計る。34は口縁部が外反気味に立ち上がるもので、横ナデは二段を施す。口径は13.6cm、器高は3.4cmを計る。35は土師質の羽釜である。外面体部に煤の付着が見著である。37・38は須恵器の杯身である。37は直線的に外上方へ立ち上がる口縁部で回転ナデで丁寧に仕上げている。39は底部片で調整は回転ナデによるが底部は未調整である。39は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反して開き端部は上方へつまみ上げる。口縁部内外面ナデ、体部外面横方行の平行叩き、体部内面はナデを施す。胎土は明灰青色を呈し、1～2mmの長石を若干含む。40は灰釉陶器椀である。内弯して立ち上がる口縁部の内面に印刻花文が施されている。



第78図　SD－20出土遺物実測図



第79図　SD－13・SD－14出土遺物実測図，SD－13 41～45，SD－14 46～53

遺構面（第76図19・20）

表土掘削時に遺構に伴なわない土器が少量あった。19は黒色土器椀の底部である。内弯して立ち上がる体部に断面三角状のしっかりした高台がつく。器面の磨滅が著しく、調整等は不明である。高台径は8㎝を計る。20は灰釉陶器皿である。内弯気味に立ち上がる体部に断面台形の高台を貼り付ける。調整は回転ナデにより、口縁部から体部の内外面に施釉が見られる。口径13㎝、器高2㎝を計る。

(3) 小結

ここでは第4調査区の調査で得られた成果を以下に簡単にまとめる。

古墳時代ではSD-16で検出された堰がある。堰は北東からの流水をSD-16に引水して西流させるものである。おそらく西側に存在していたであろう水田に水を供給する灌漑用の施設であると考えられる。

平安時代以降の遺構では掘立柱建物7棟がある。第3調査区で検出した建物群のように溝で囲むことはなく、散在的に検出した。年代は11C～12Cと考えられる。

（宮下）

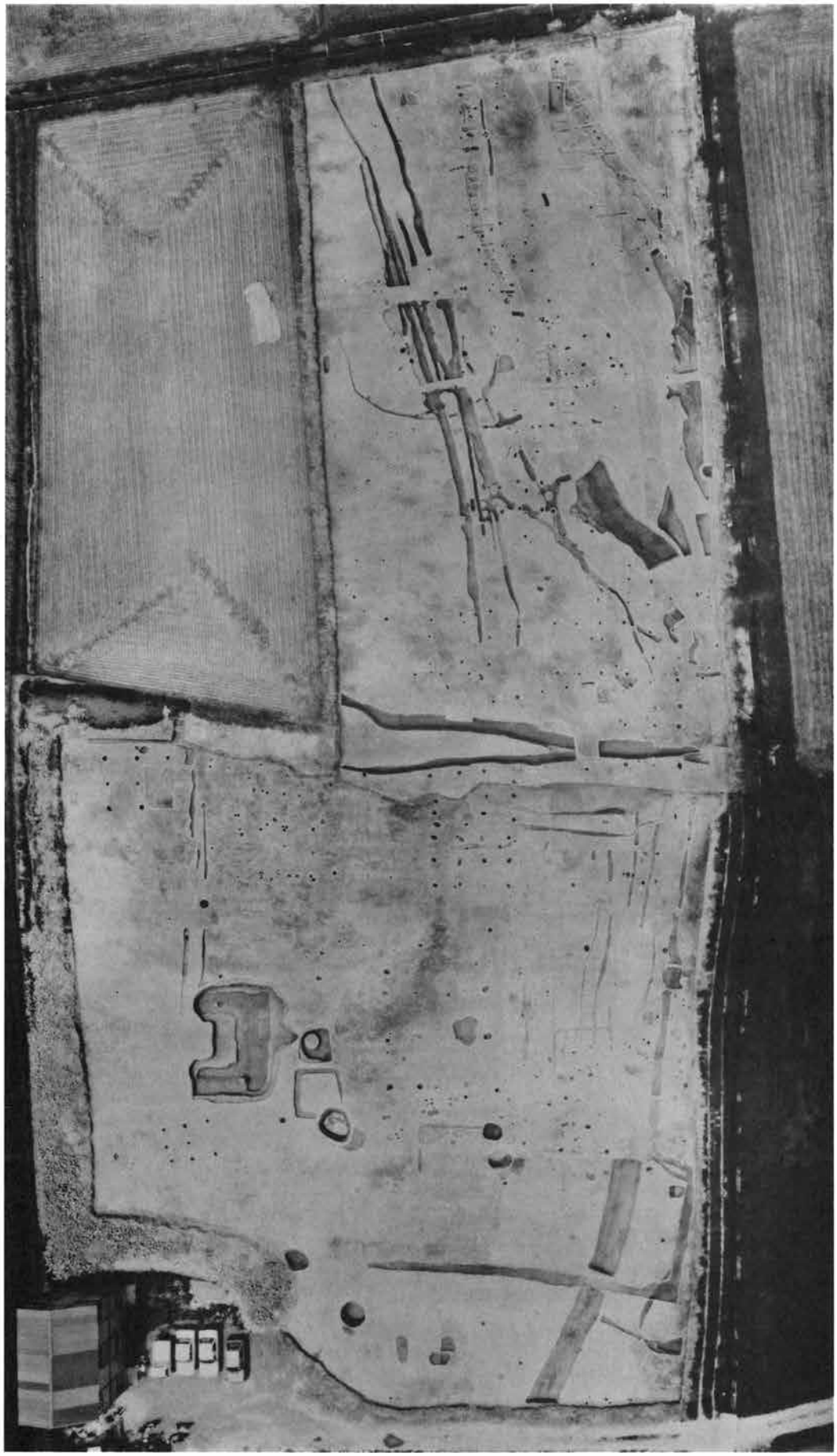
V　おわりに

以上石田三宅遺跡を概観してきたが、今回の調査でまた新たな歴史的事実が浮び上がってきたといえる。まず弥生時代の遺物は多くなかったが、中には中期中葉に属する土器がかなり含まれており、この頃隆盛を迎える拠点集落寺中遺跡やそこから分かれた金森西・金森東・中島遺跡との関係が注目される。古墳時代については第1調査区の自然流路で出土した前期の多量の土器群からすぐ近くに大規模な集落の存在が予想される。第4調査区で発見された堰と水路はこの集落内部の集団の手によるものであり、そこには水の制抑に対する執念さえも感じとることができる。集落は古墳時代後期には衰退し途絶えるが平安時代後期に新たな集落の形成をみる。この集落内には溝で囲まれた内側に整然とした建物群があり、庄園制の中で成長してきた有力農民層の姿をかいまみることができる。中世には墓が築かれ小さな墓地を形成するが、まだ集落は存続していると考えられ、集落内での葬送の事実が認められるのである。「死」を不浄なものとして忌嫌った中世社会において築かれた中世墓と集落の関係の解明が今後の課題となろう。

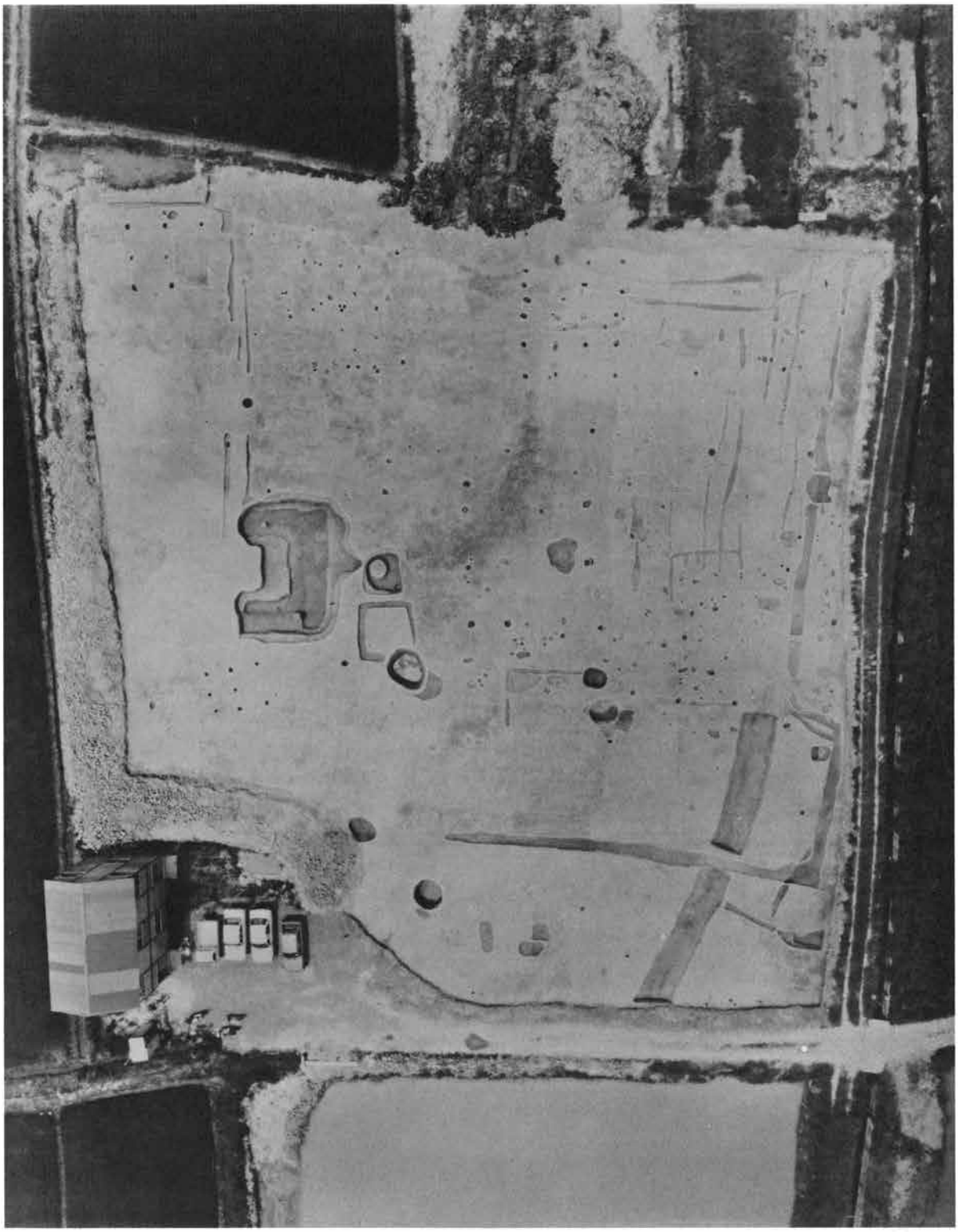
石田三宅遺跡は新しく発見された遺跡であり、今回はその全容を明らかにし得なかった。現在、調査地の東方で第二期造成予定地の調査が進められており、その結果と今回の成果を合わせれば石田三宅遺跡の実態がより明確になってくると考える。

（宮下）

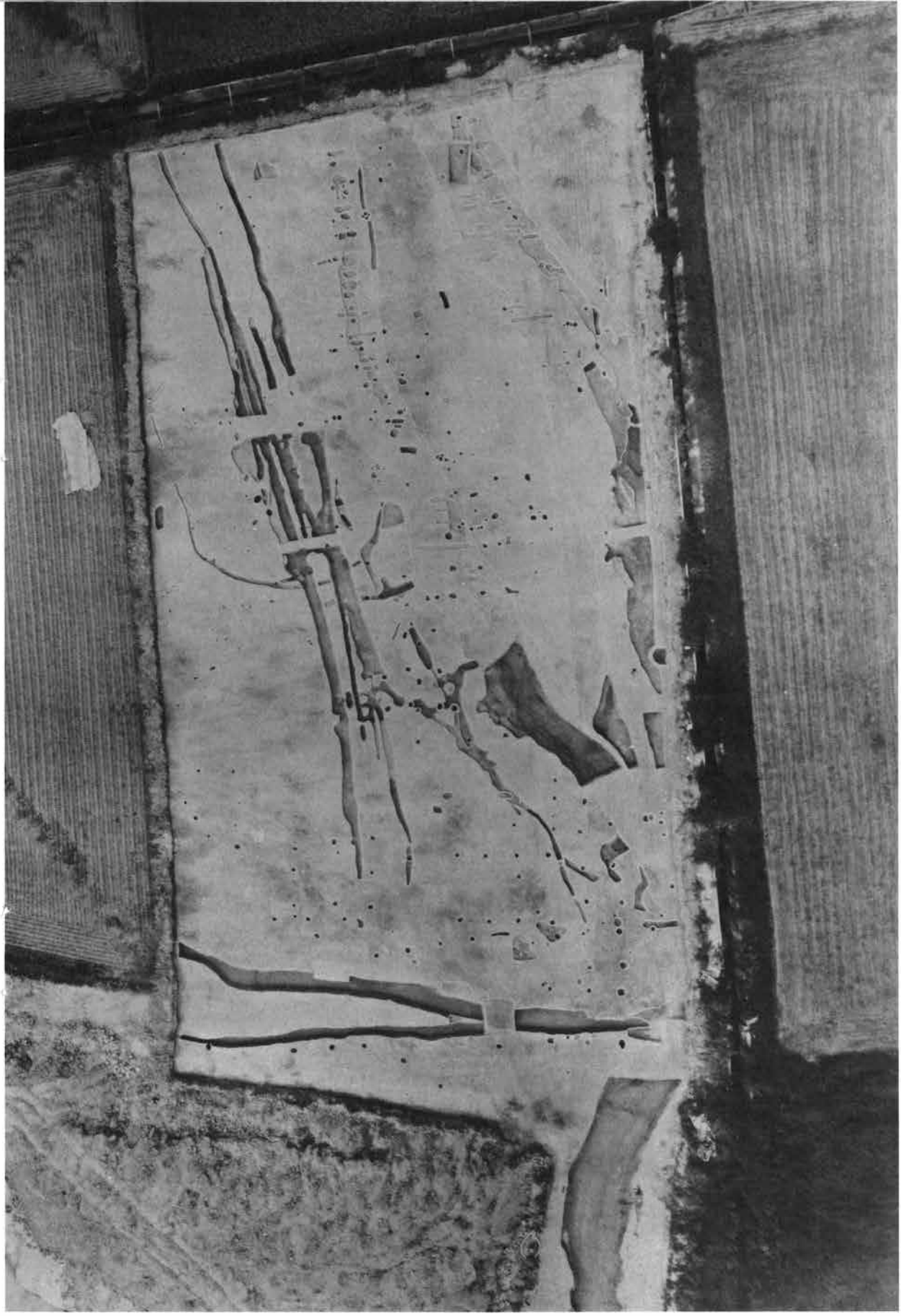
図　　版



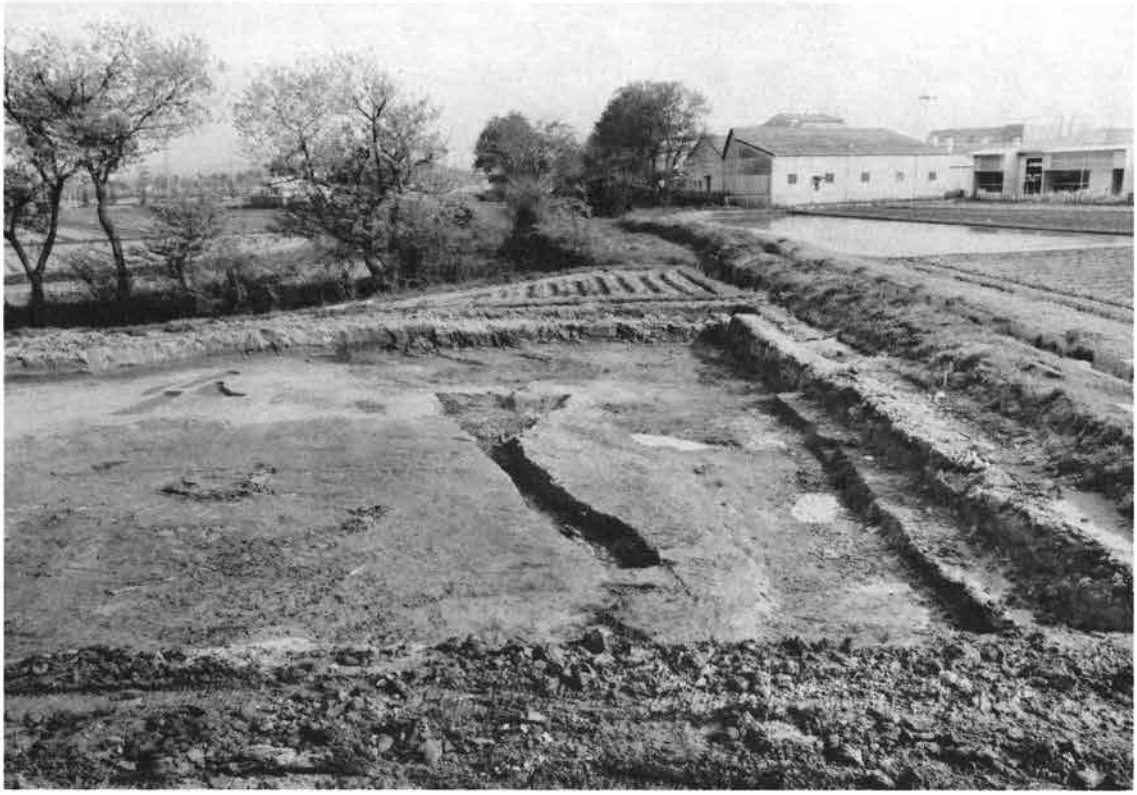
第３・４調査区航空写真



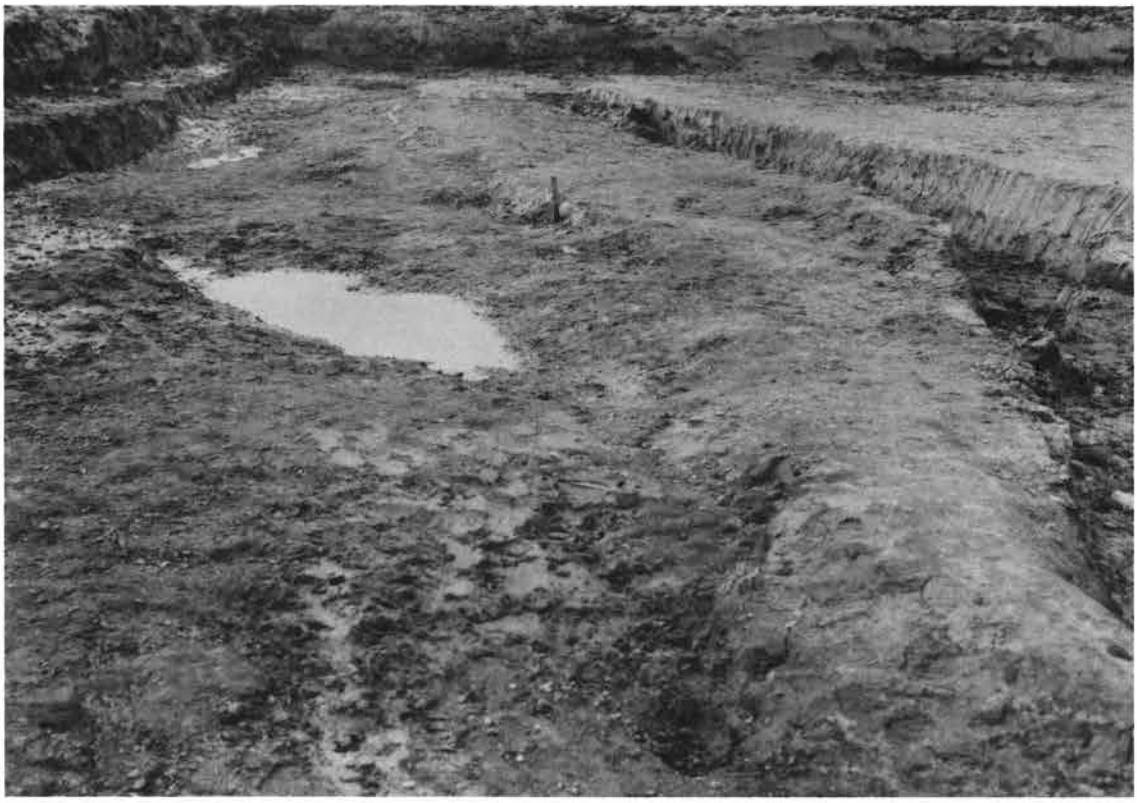
第３地調査区航空写真



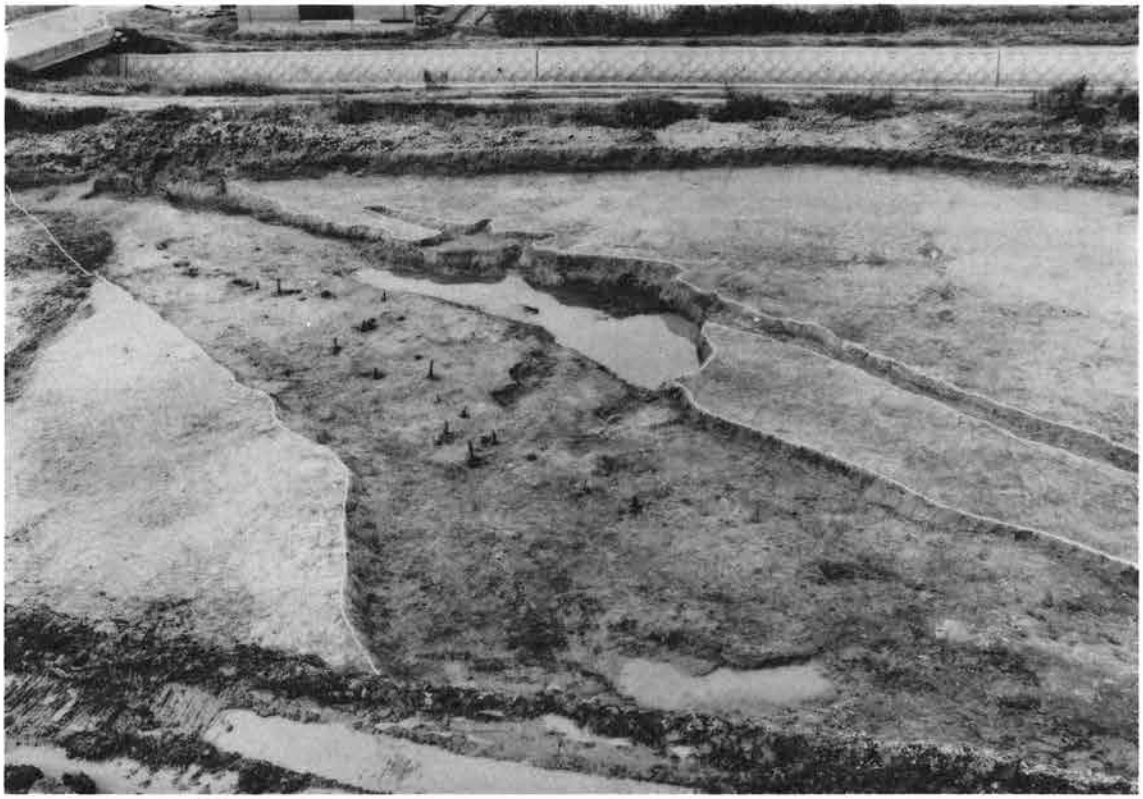
第４調査区航空写真



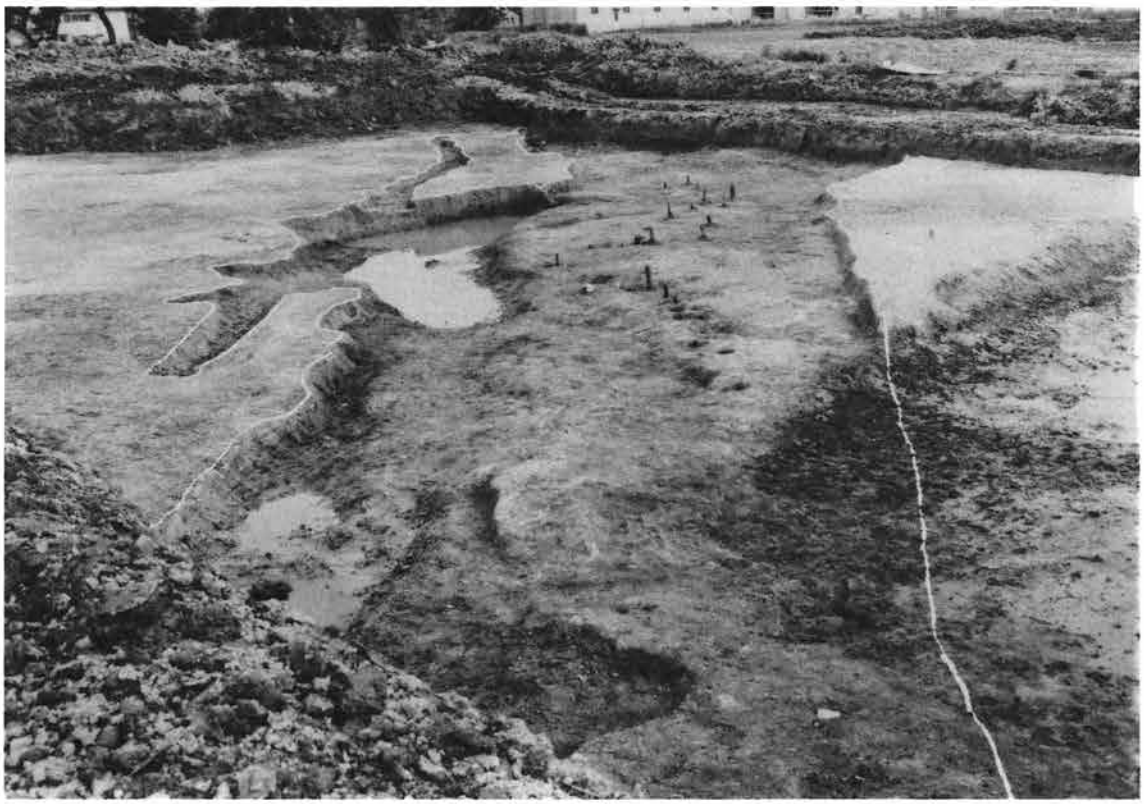
1　SR－1、SR－2



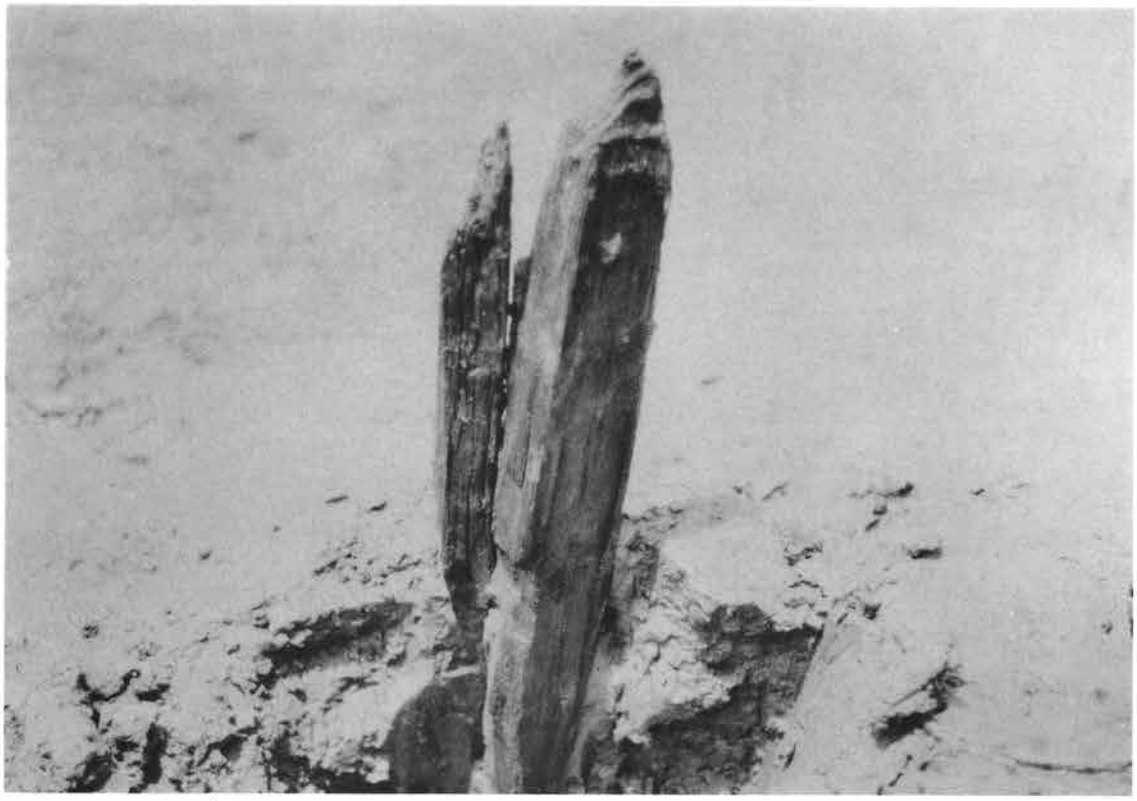
2　SR－1、SR－2



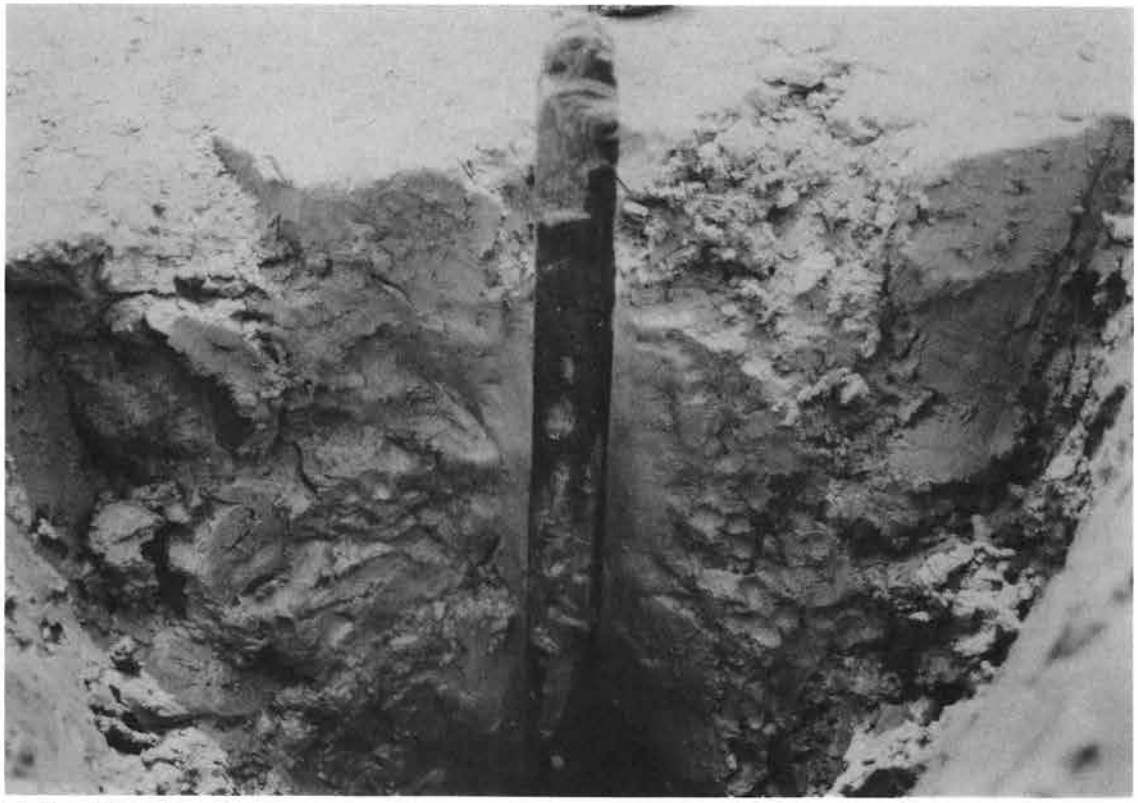
1　ＳＲ－３（南西から）



2　ＳＲ－３　杭列

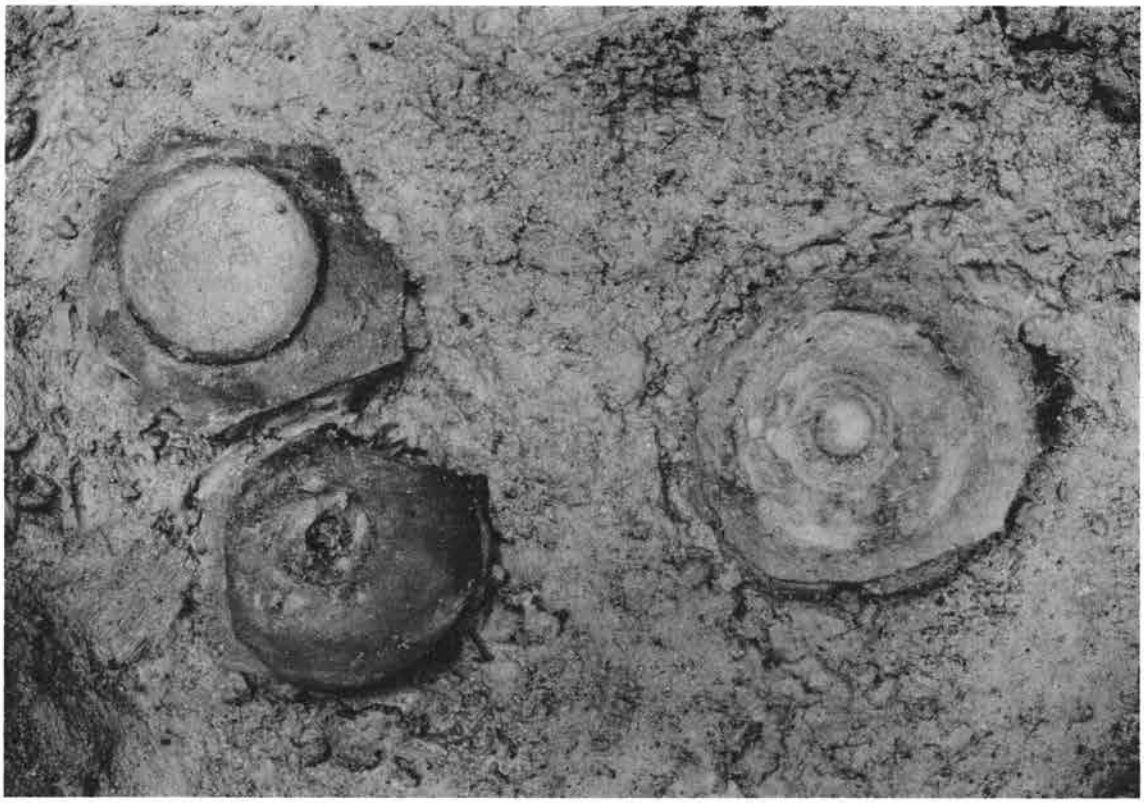


1　SR－3　杭

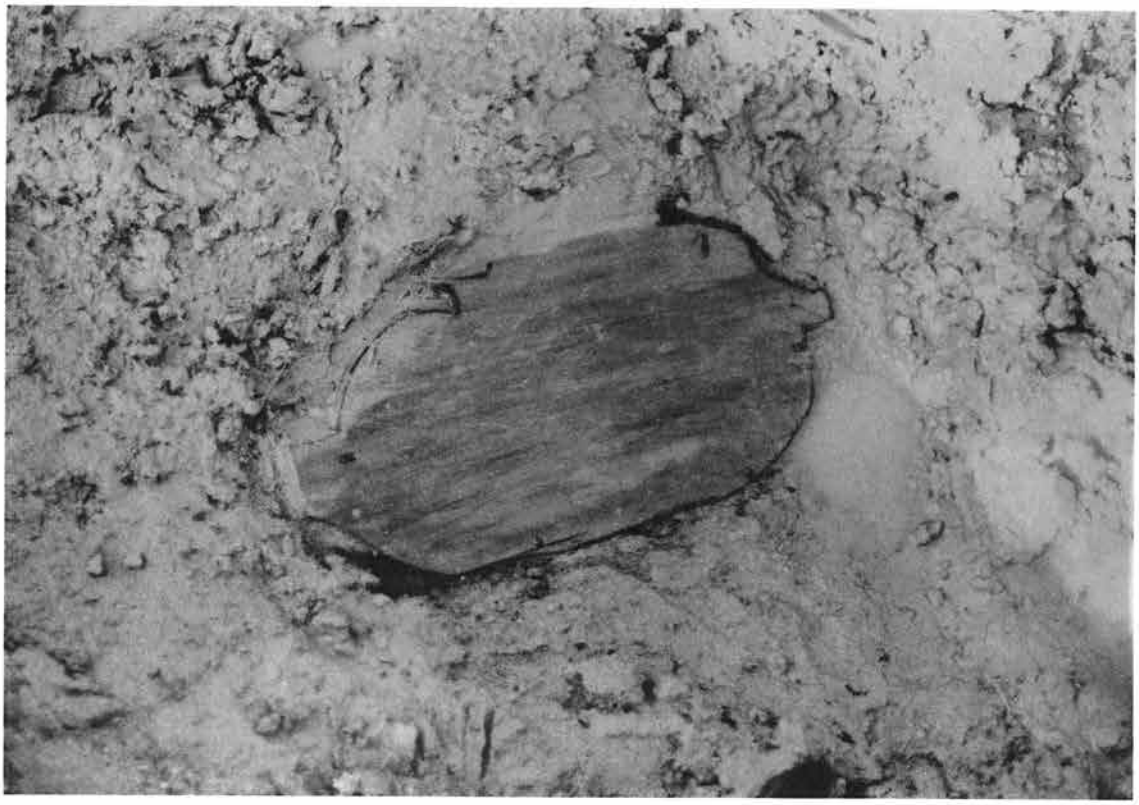


2　SR－3　杭

1　ＳＲ－１　土器出土状況

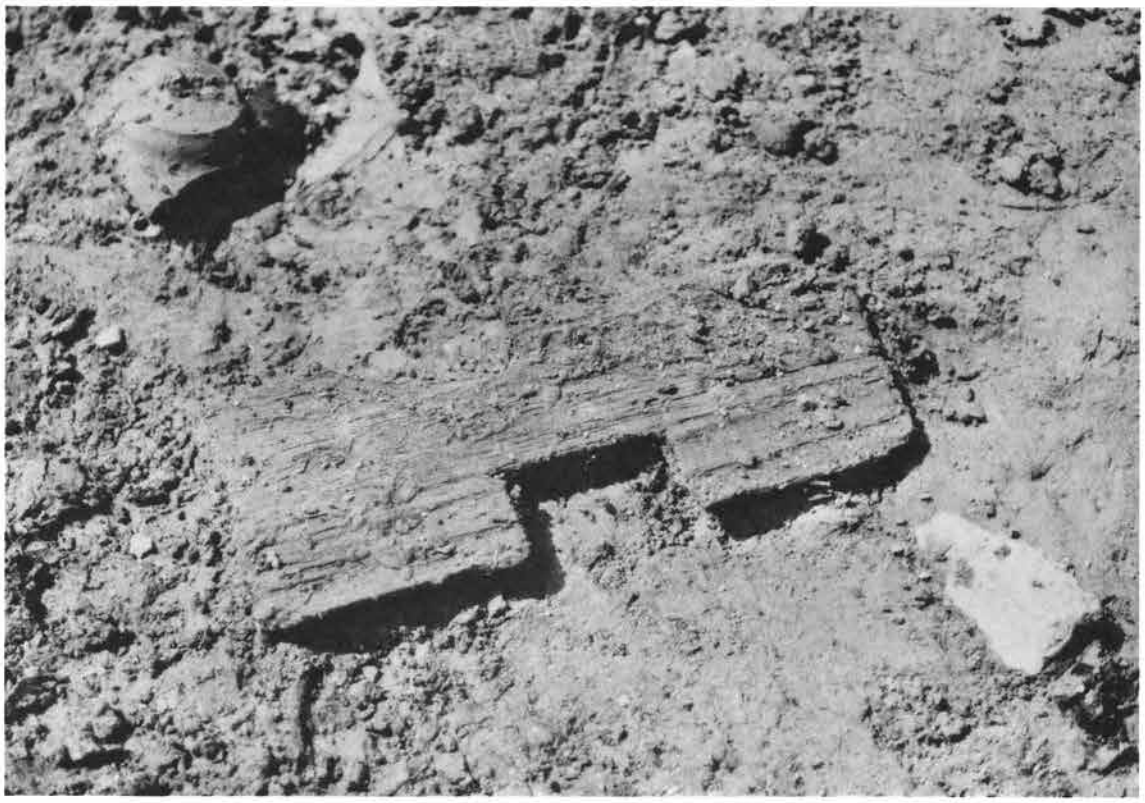


1　ＳＲ－１　土器出土状況

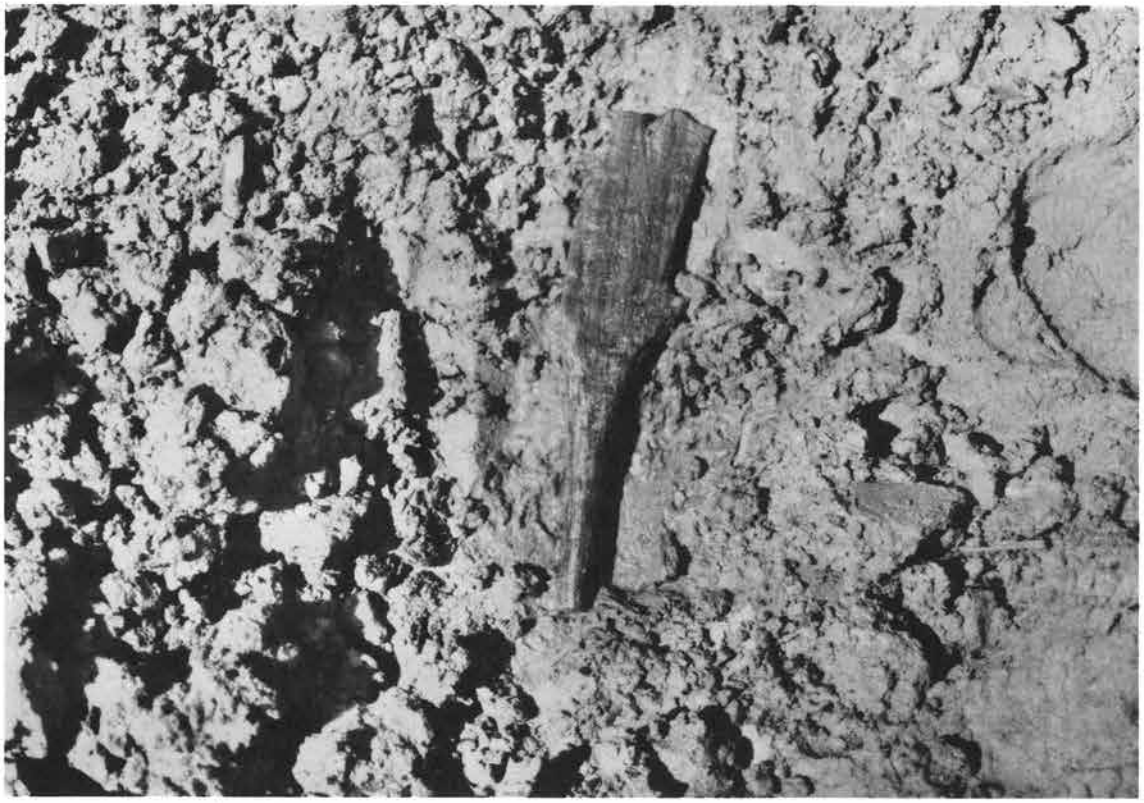


1　ＳＲ－１　木器出土状況

2　ＳＲ－１　土器出土状況



1　ＳＲ－１　木器出土状況



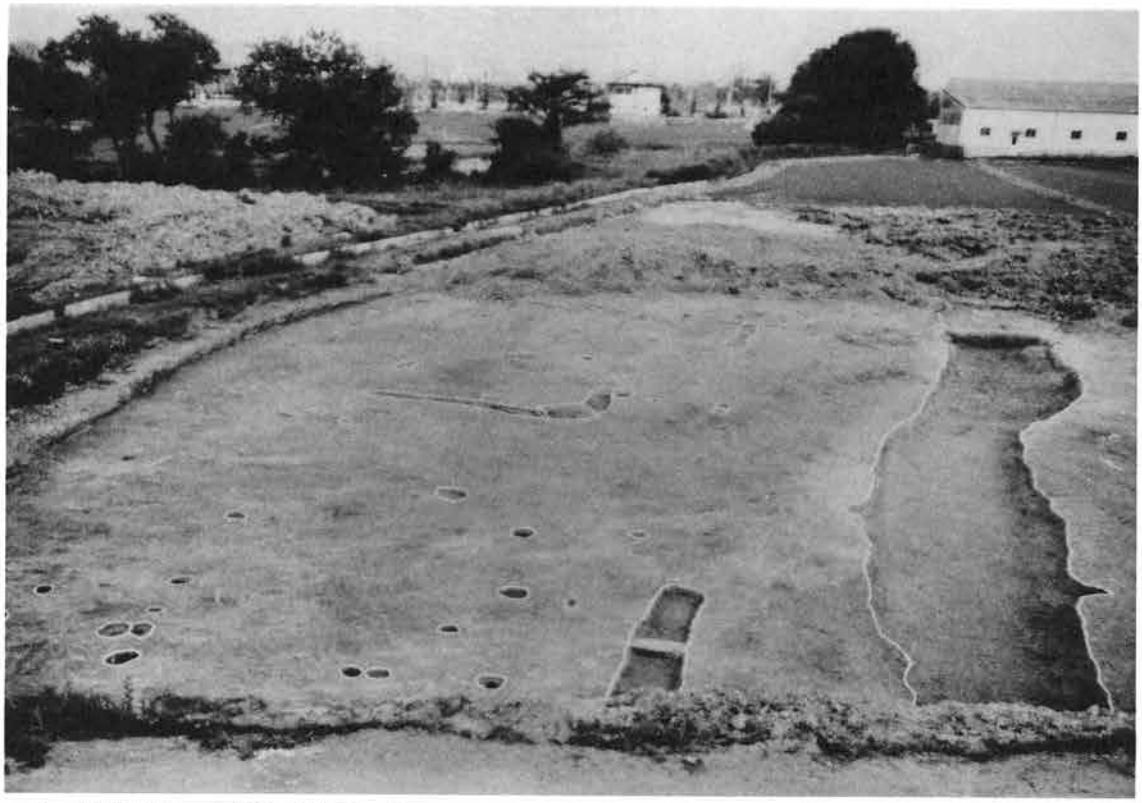
2　ＳＲ－１　木器出土状況

1　ＳＲ－３　鉄器出土状況

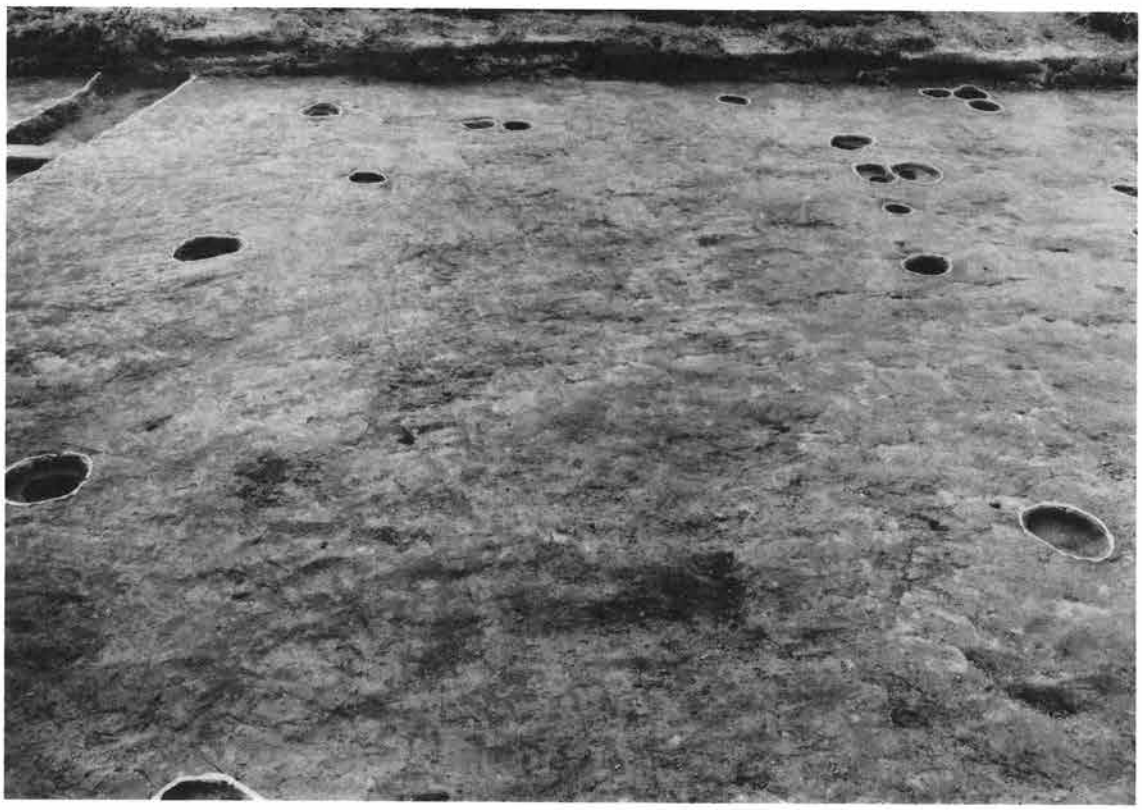
2　ＳＲ－３　土器出土状況

1　第２地区　南半分（東から）

2　ＳＤ－１

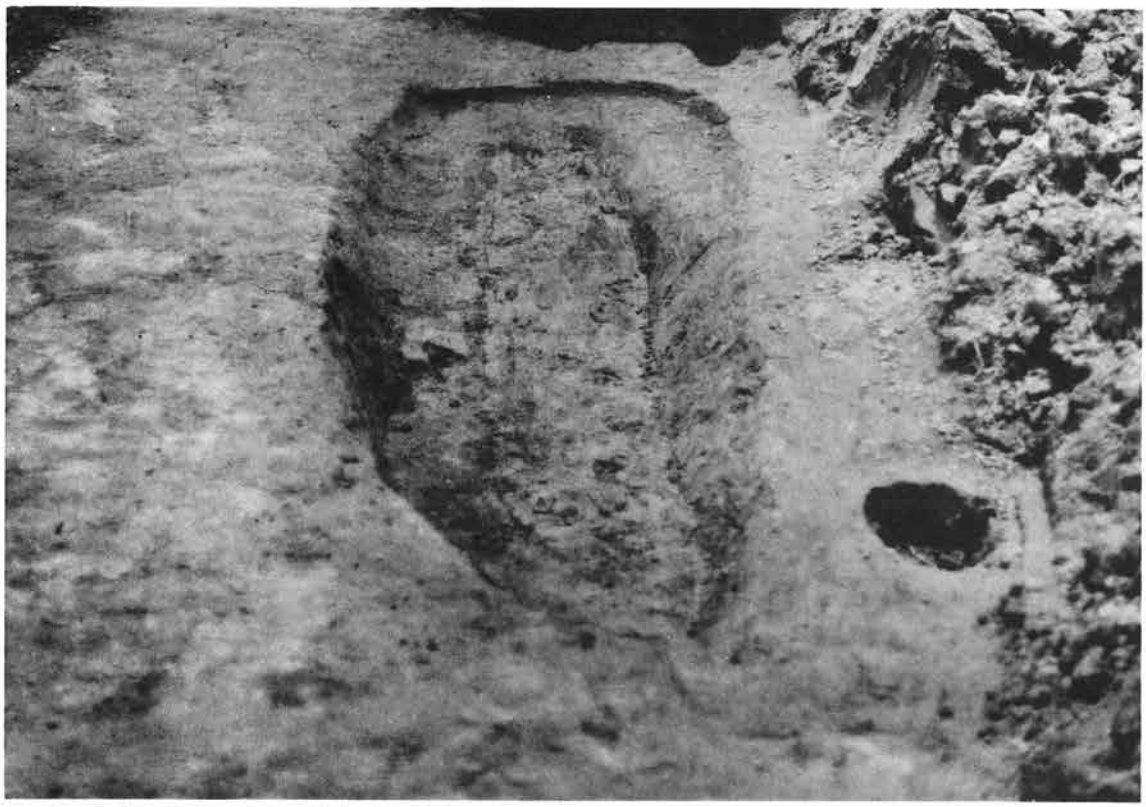


1　第２地区　北半分（北西から）



2　ＳＢ－１

1　SD－1



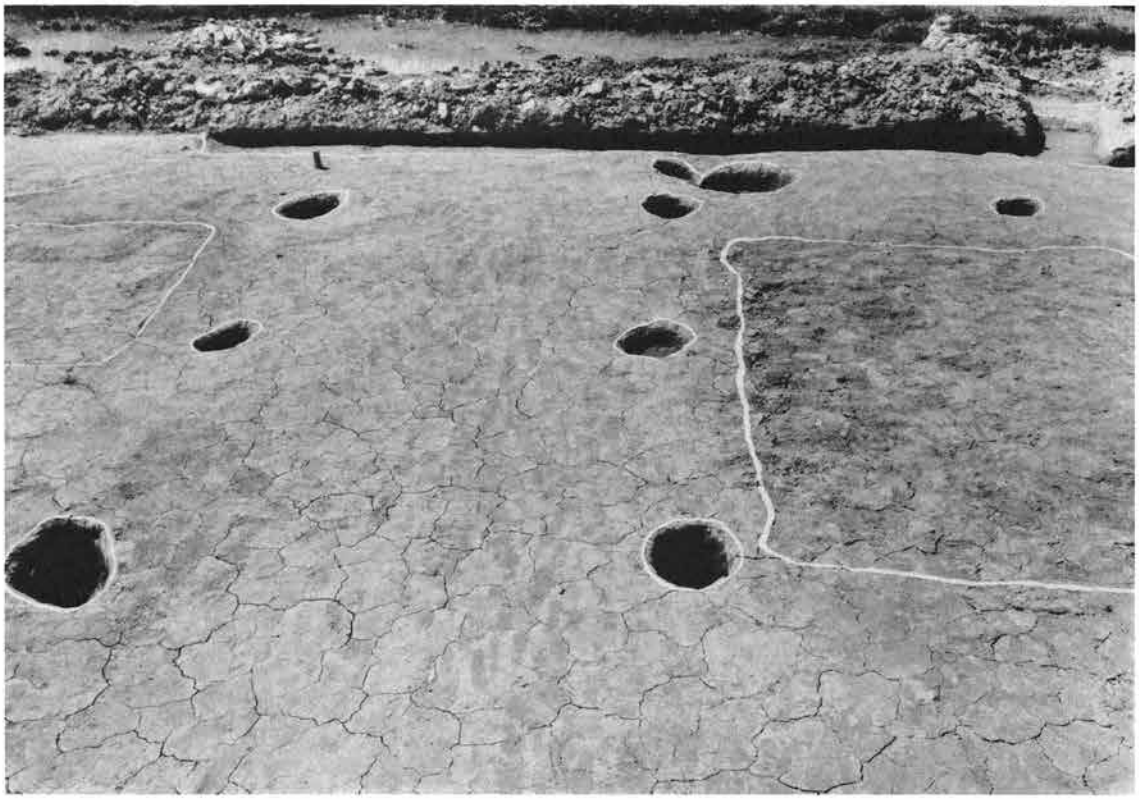
2　SK－1

1　ＳＤ－１　土器出土状況

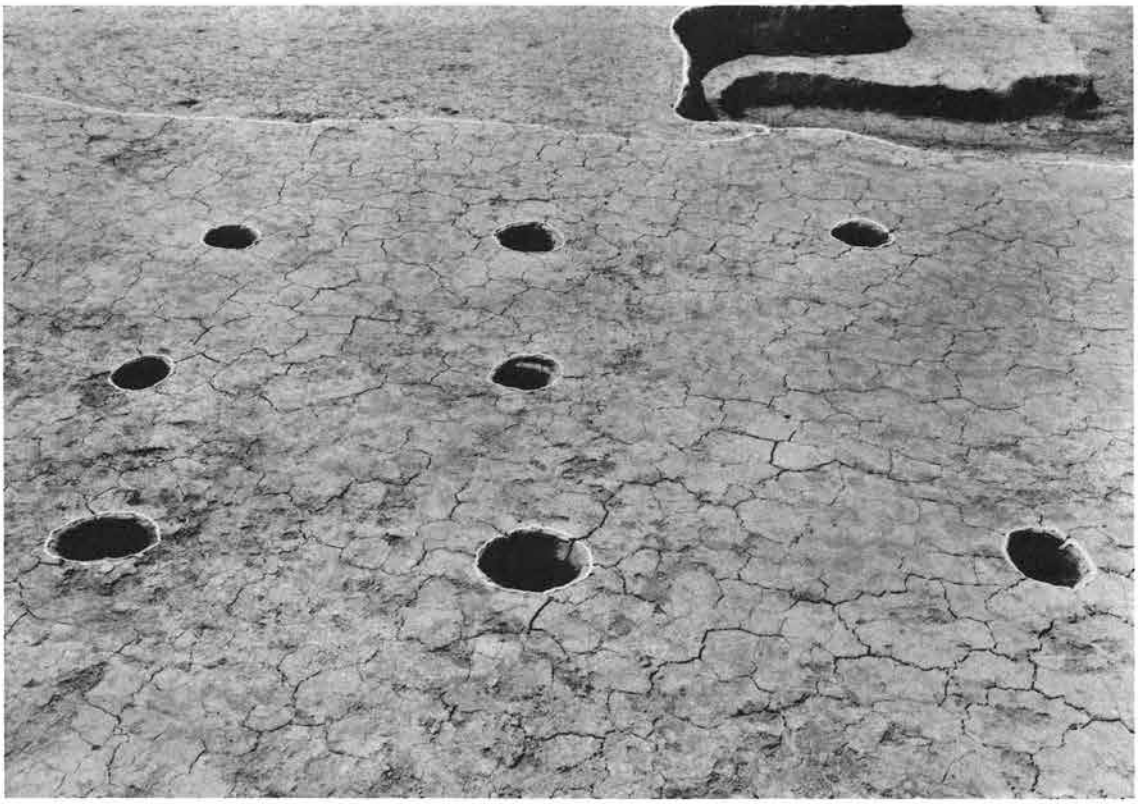
2　ＳＤ－１　石器出土状況

1　第３調査区　全景（東から）

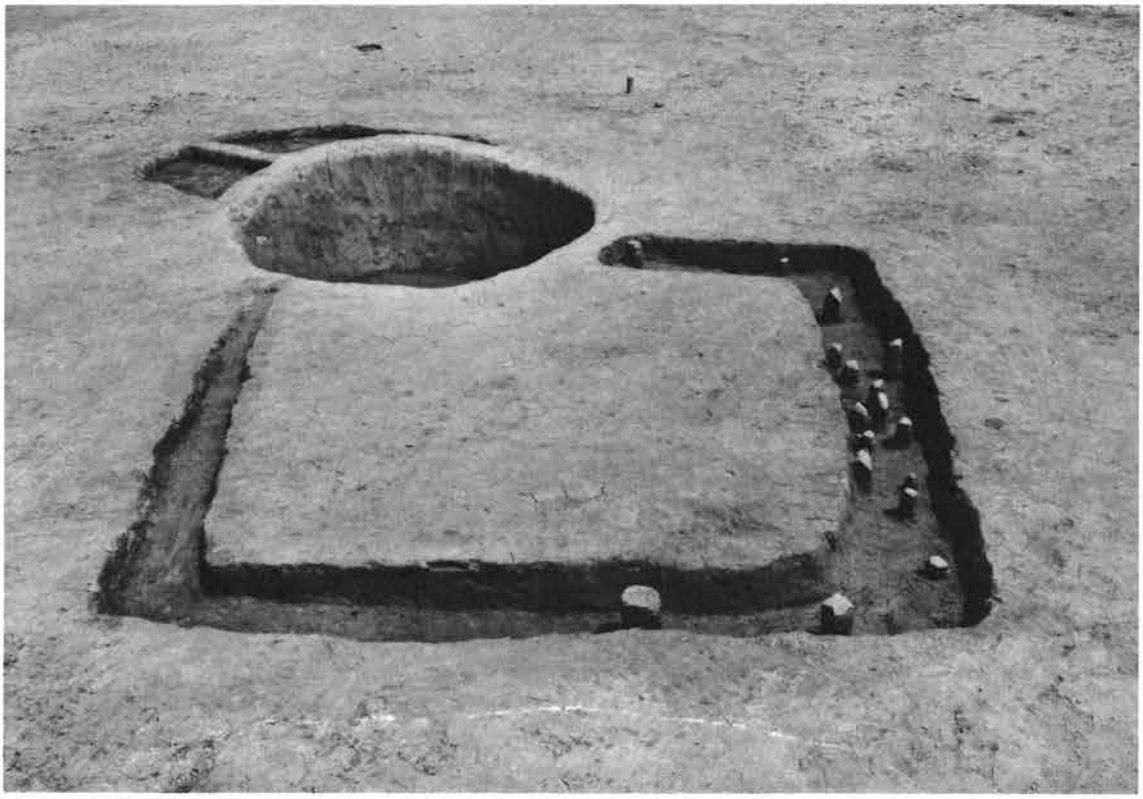
2　ＳＢ－２



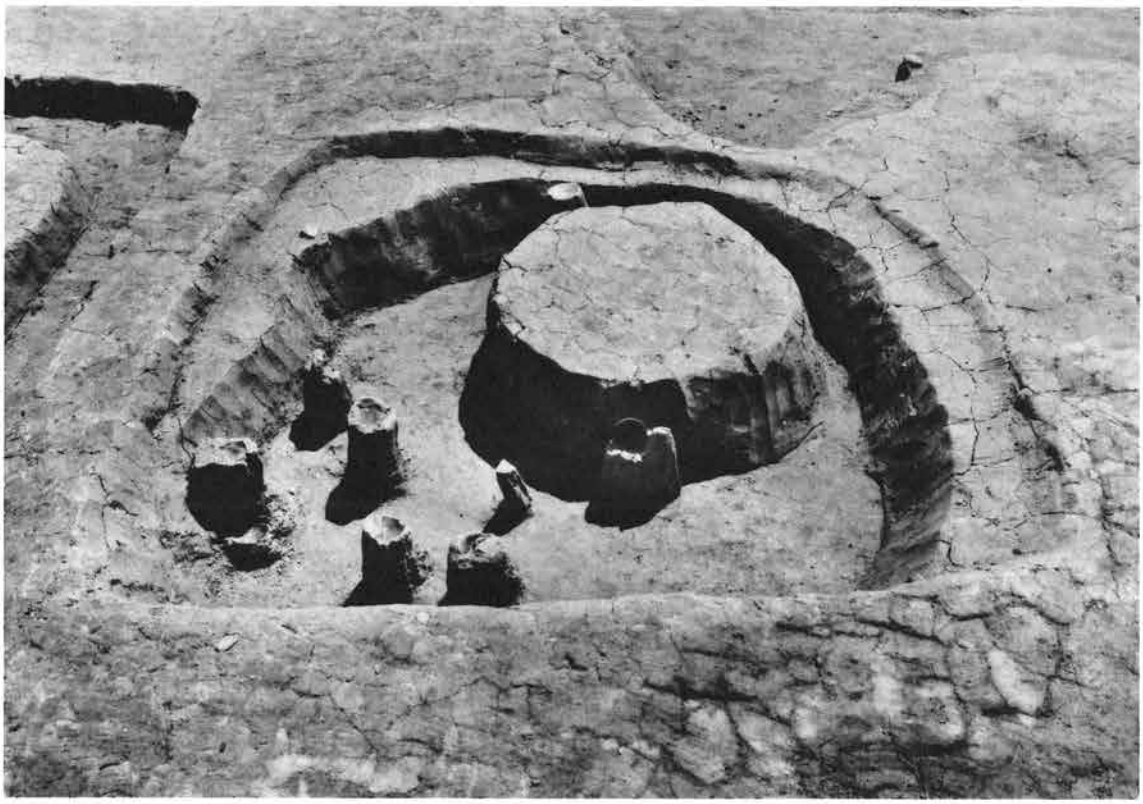
1　SB－5



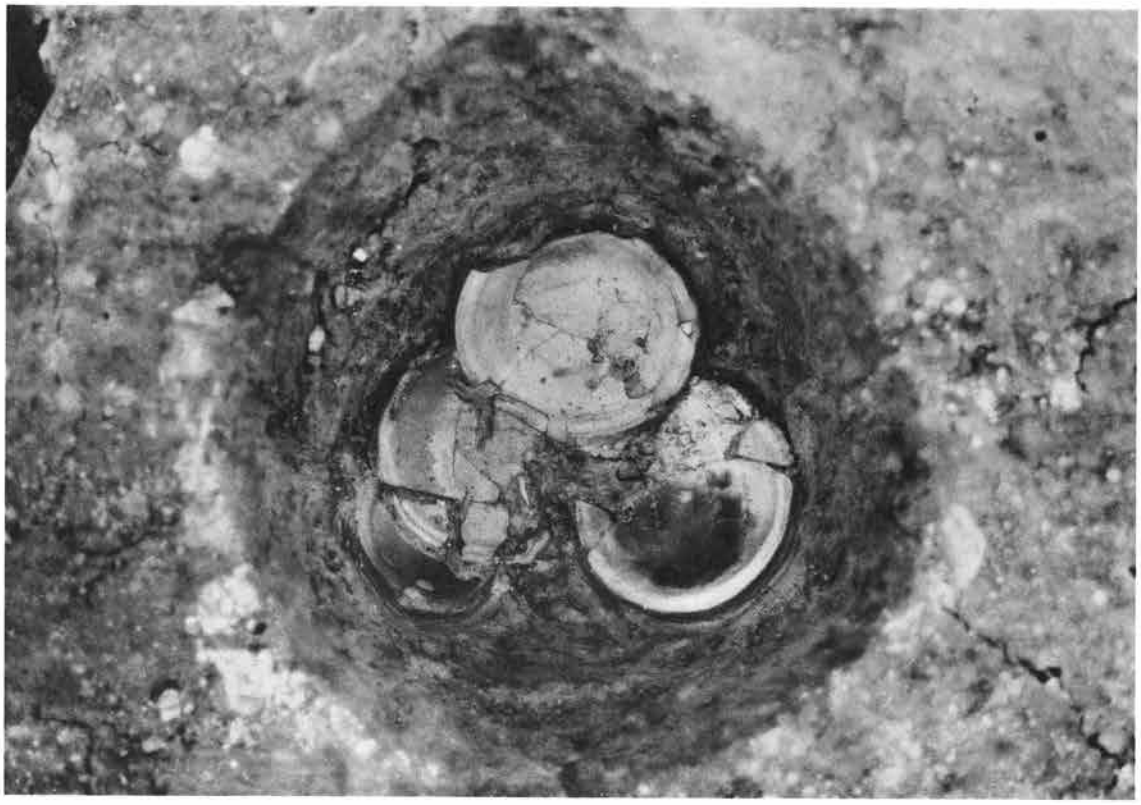
2　SB－4



1　SX－1

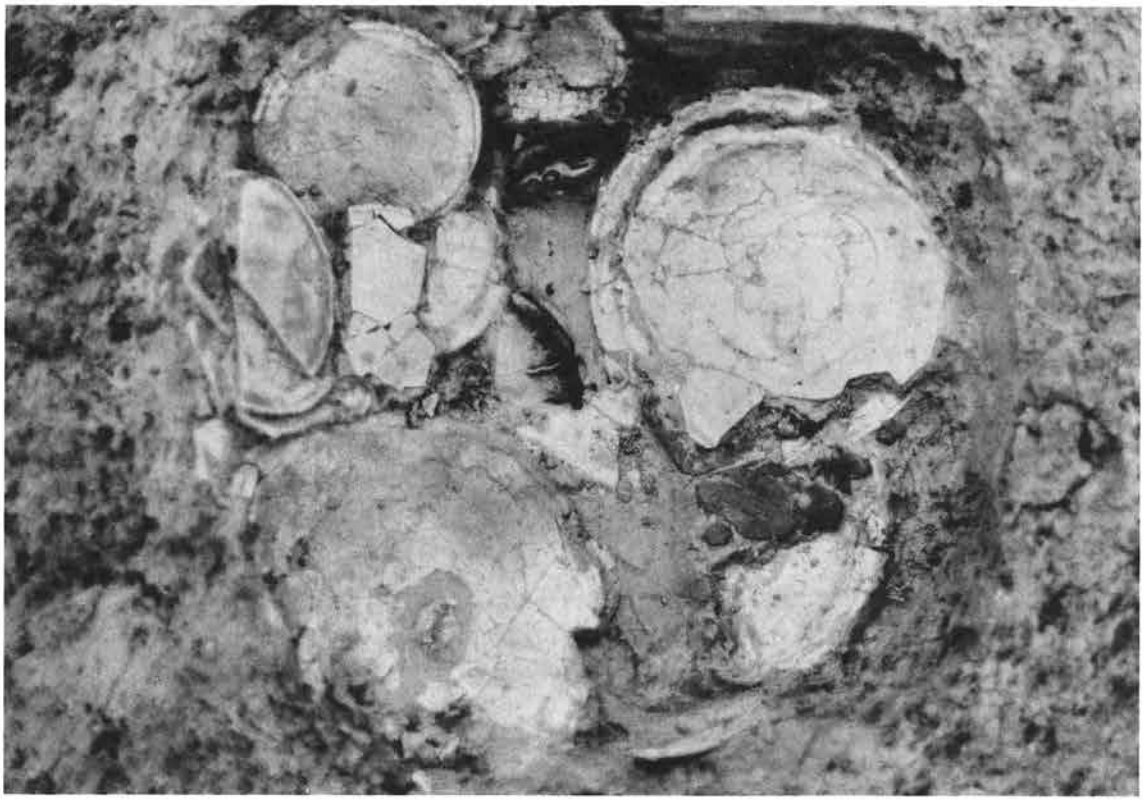


2　SX－2

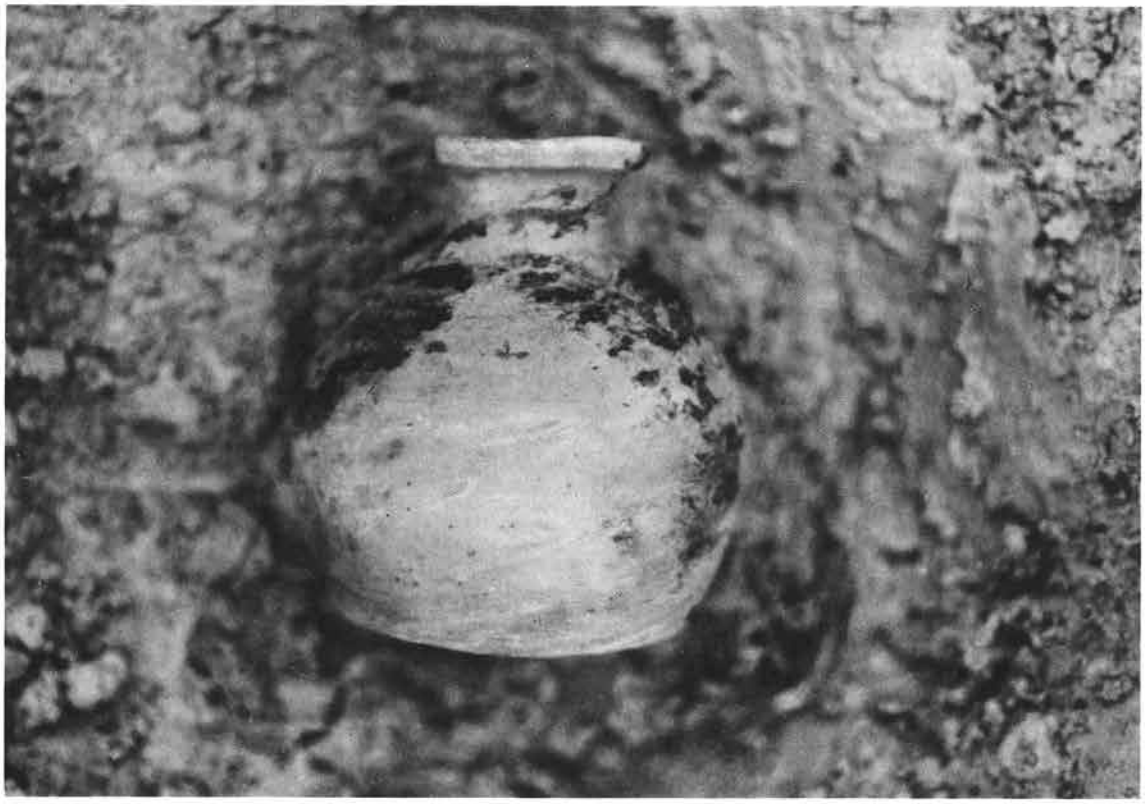


1　ＳＢ－１・Ｐ－１　土師器皿出土状況

2　ＳＢ－１・Ｐ－１　須恵器瓶子出土状況

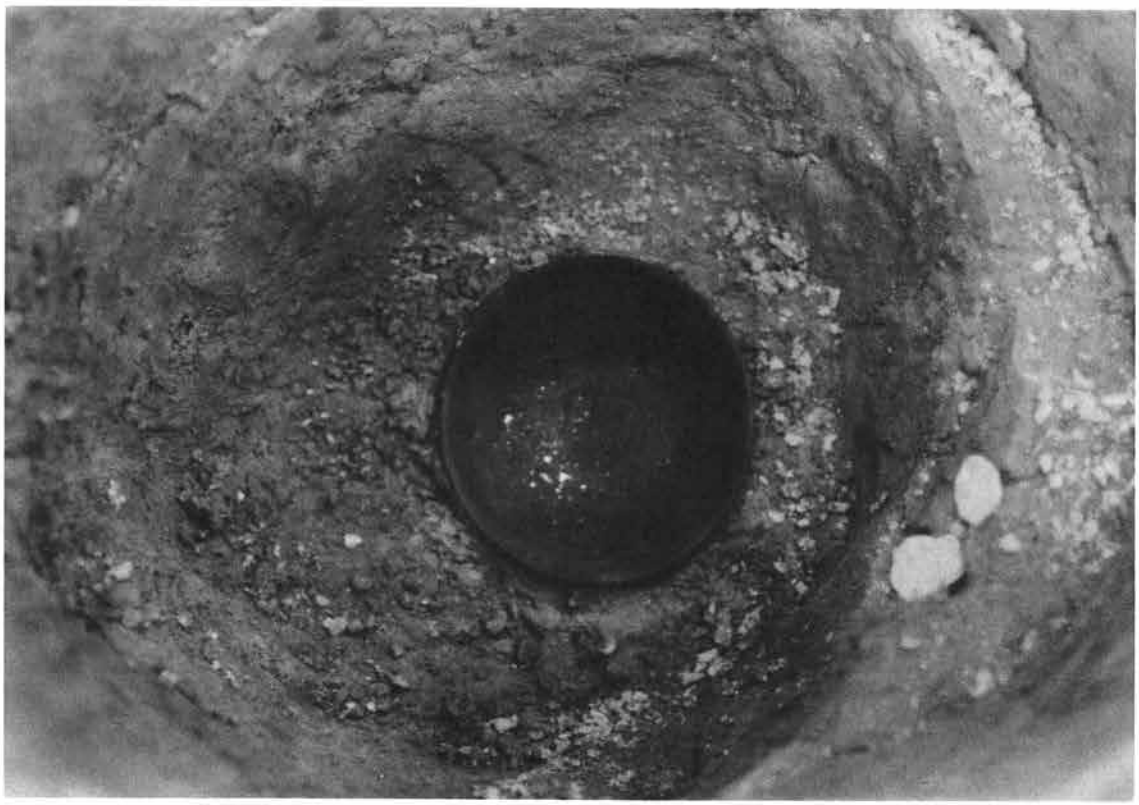


1　ＳＢ－１・Ｐ－２　土師器皿出土状況

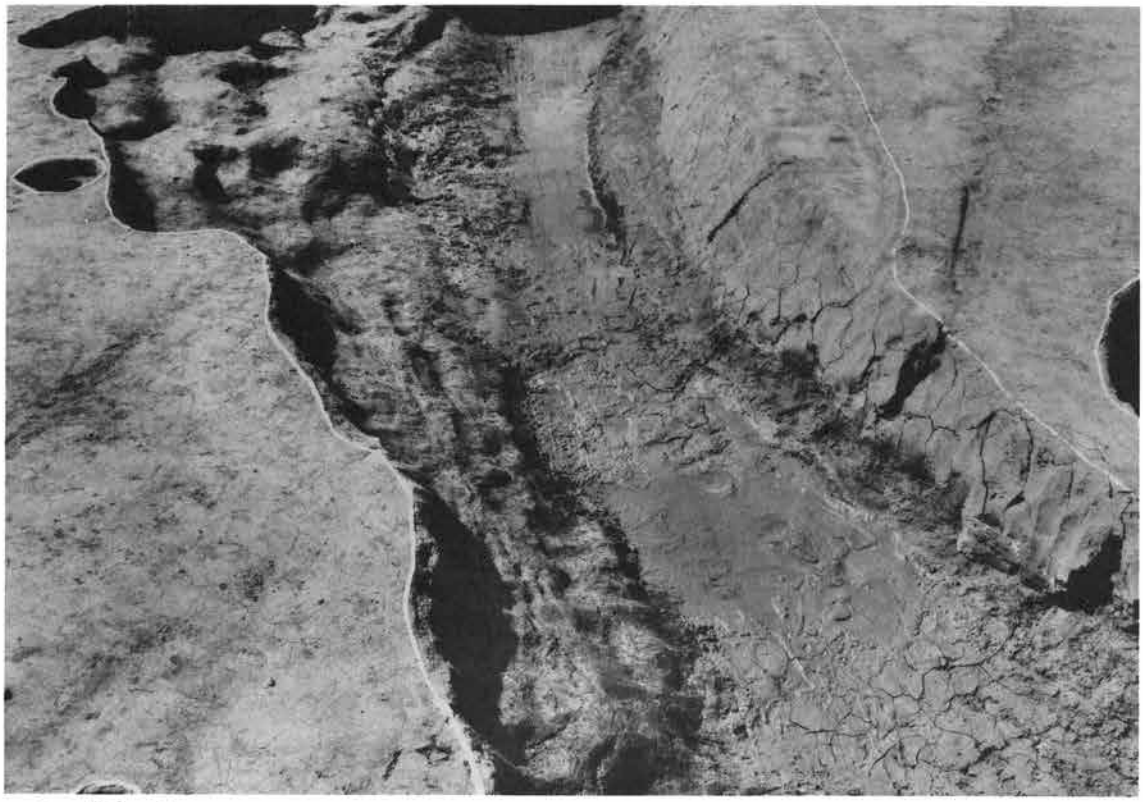


2　ＳＢ－１・Ｐ－２　須恵器瓶子出土状況

1　ＳＢ－４・Ｐ－１　土師器皿出土状況

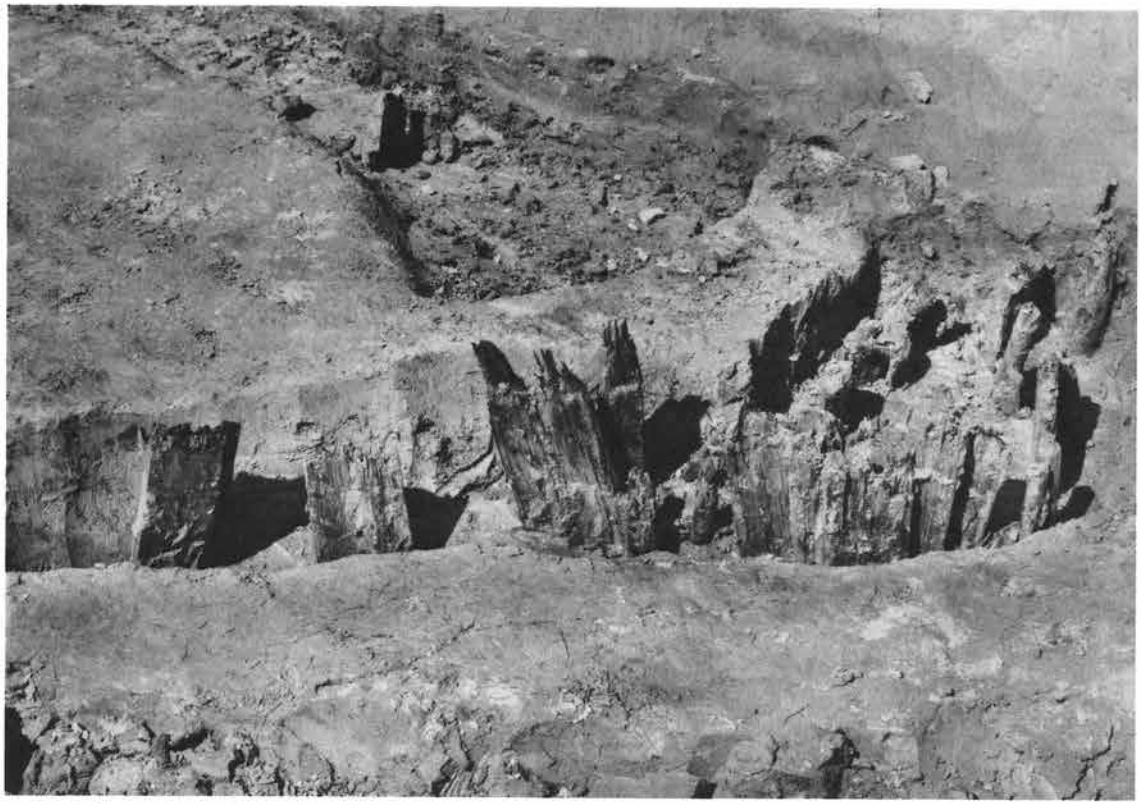


2　ＳＰ－７　黒色土器椀出土状況



1　SD—16

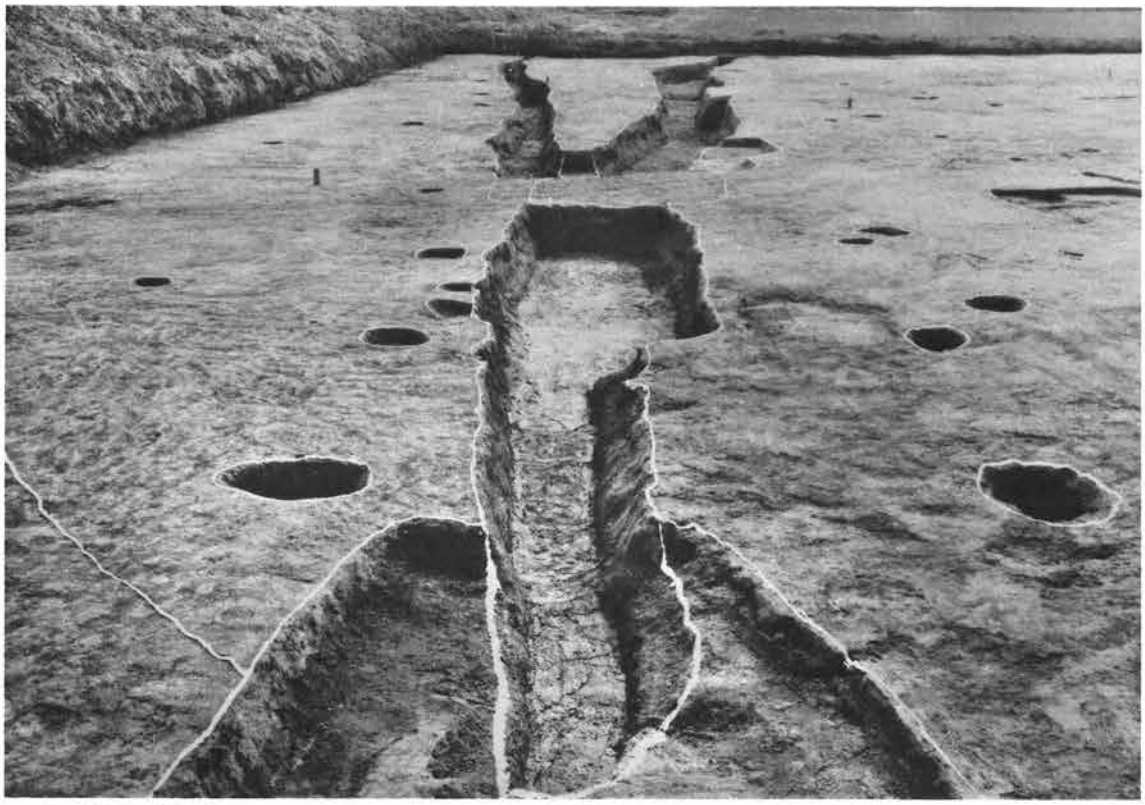
2　SD—18・19・20



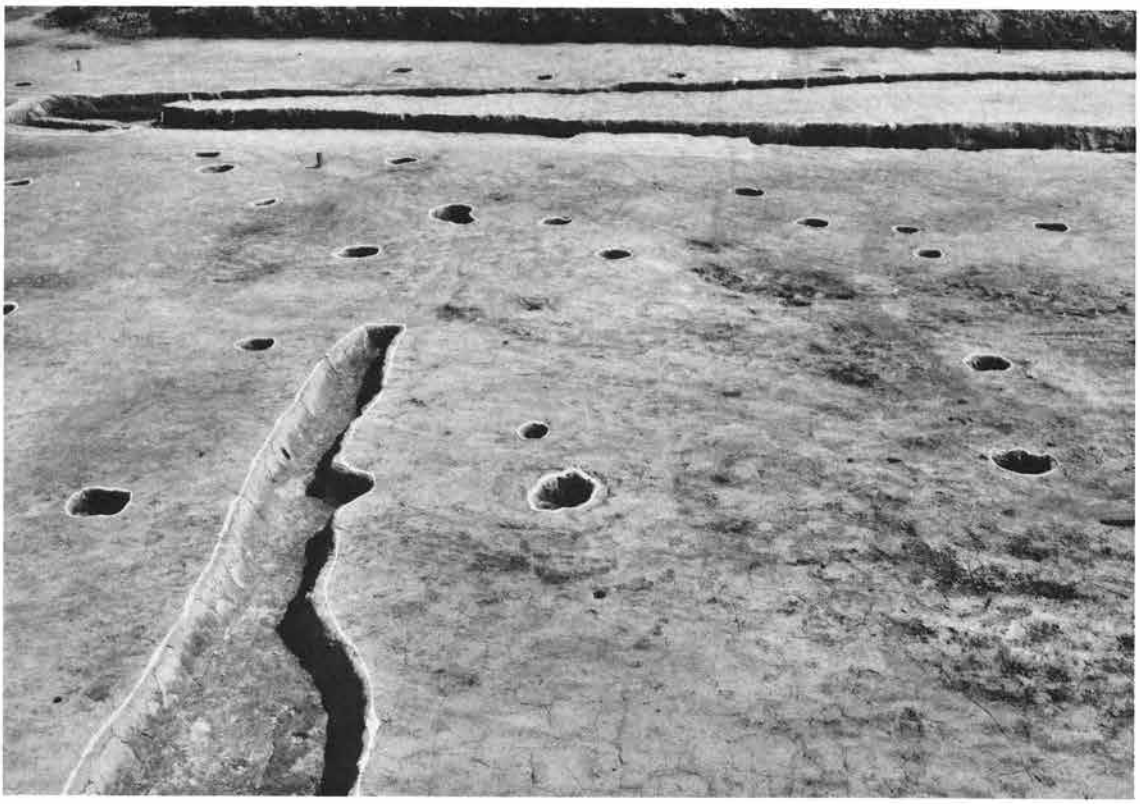
1　ＳＤ—16　堰

2　ＳＤ—16　遺物出土状況

1　SD—17



2　SD—13・14



1　SB－7

2　SB－13

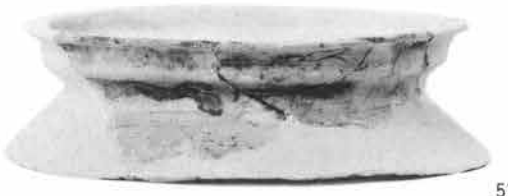
10

28

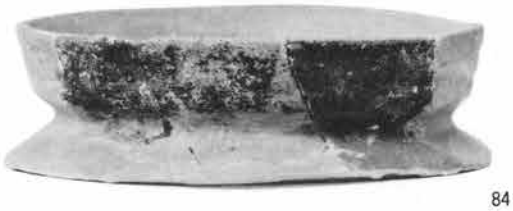
9

6

38


51

78


84

73

67

86

SR－1

89

87

102

111

105

99

118

120

125

SR－1

162

161

160

163

164

433

165

166

171

167

194

199

198

196

197

195

175

191

SR－1

174

193

181

188

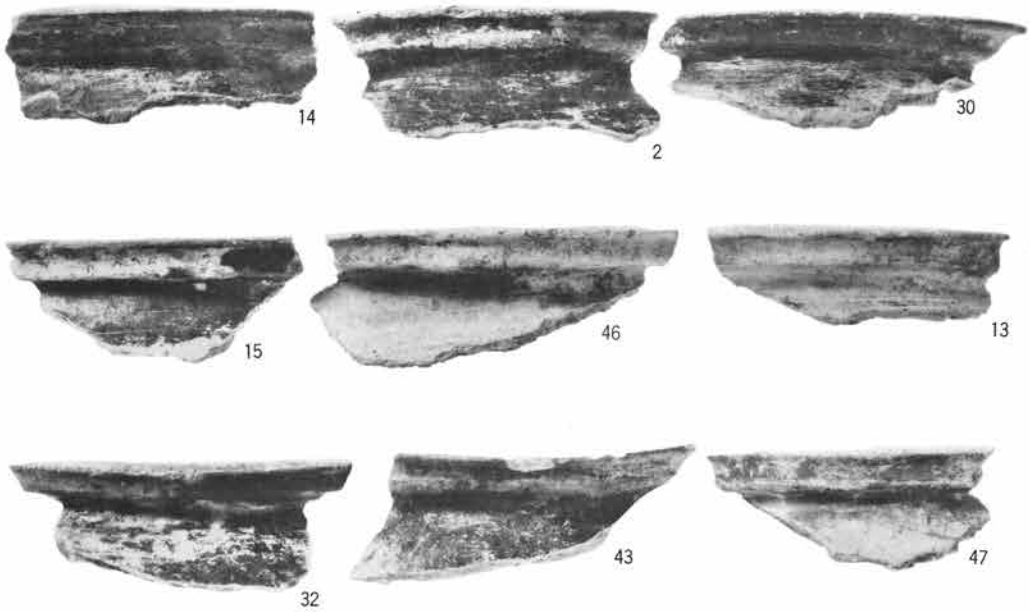
189

177

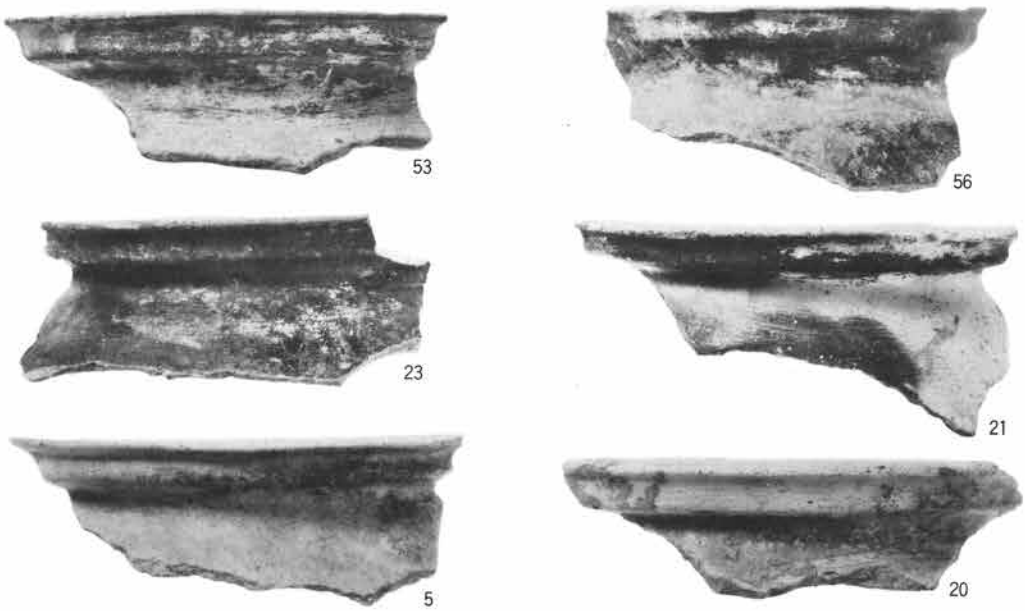
184

176

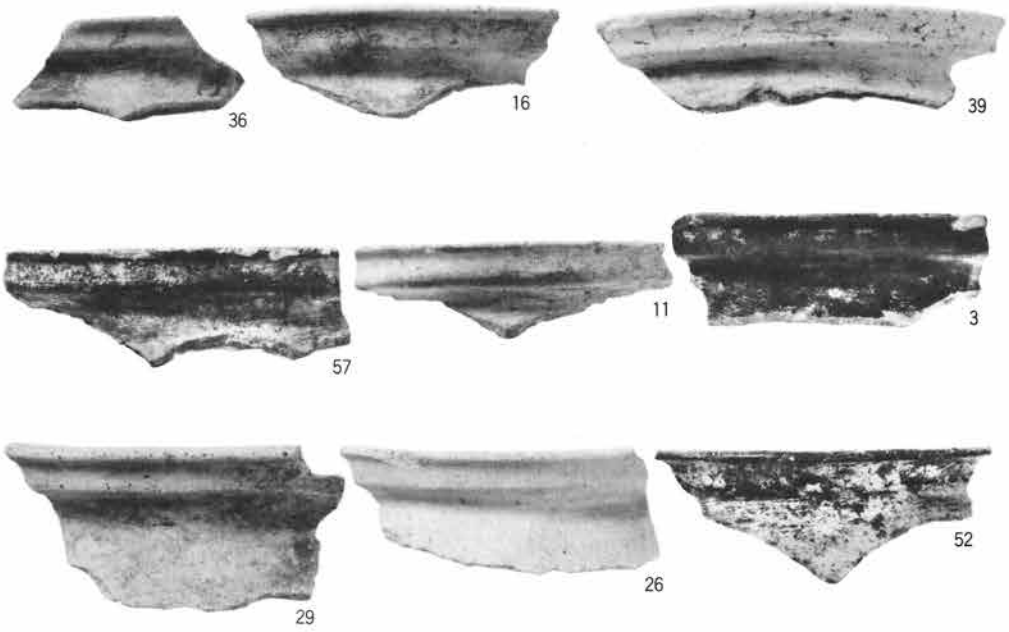
SR－1



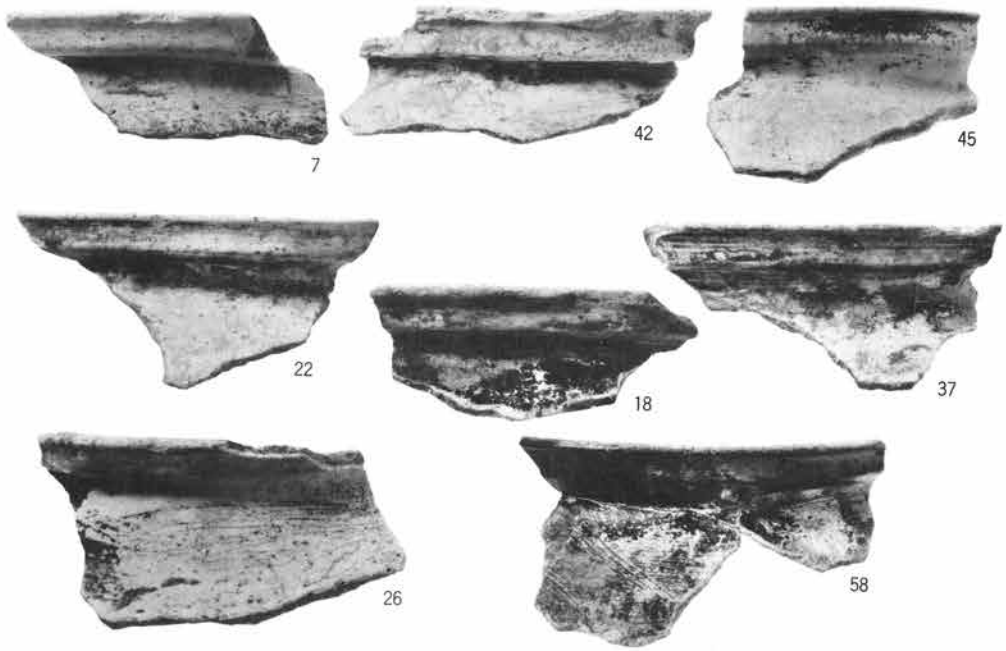
1　SR－1



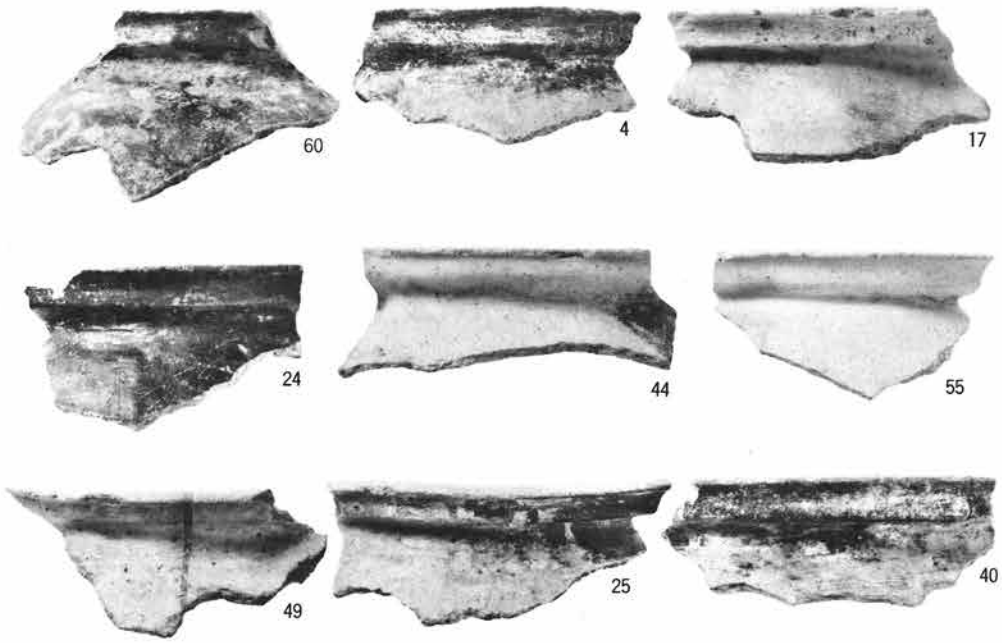
2　SR－1



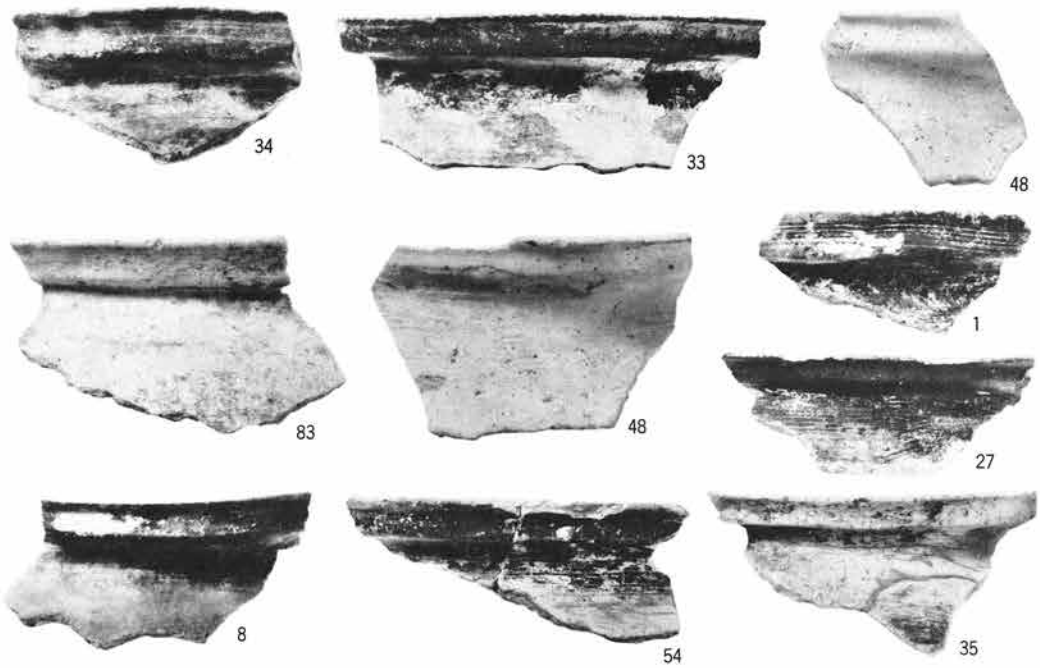
1　SR－1



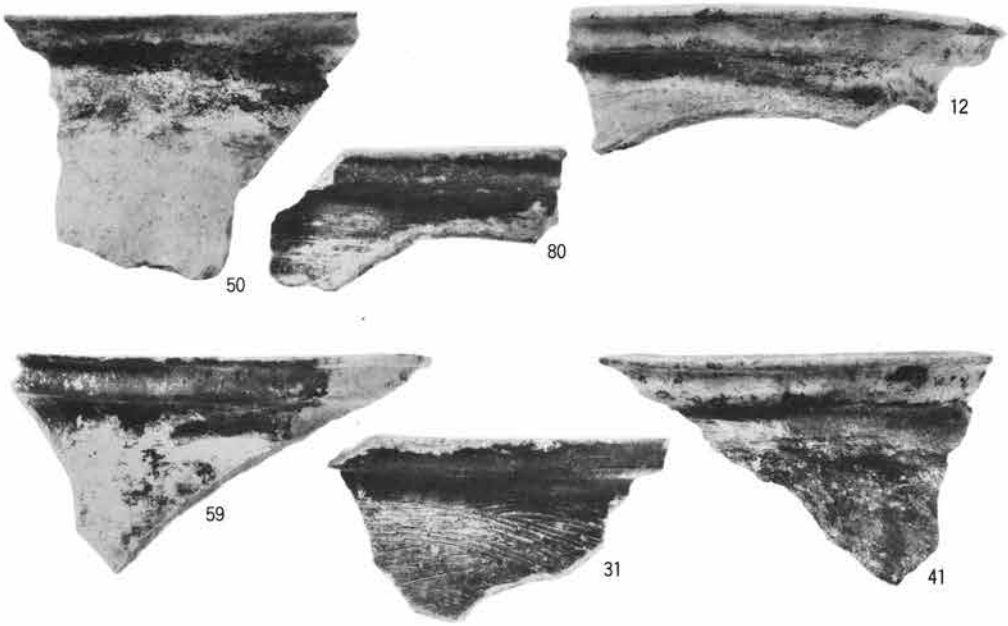
2　SR－1



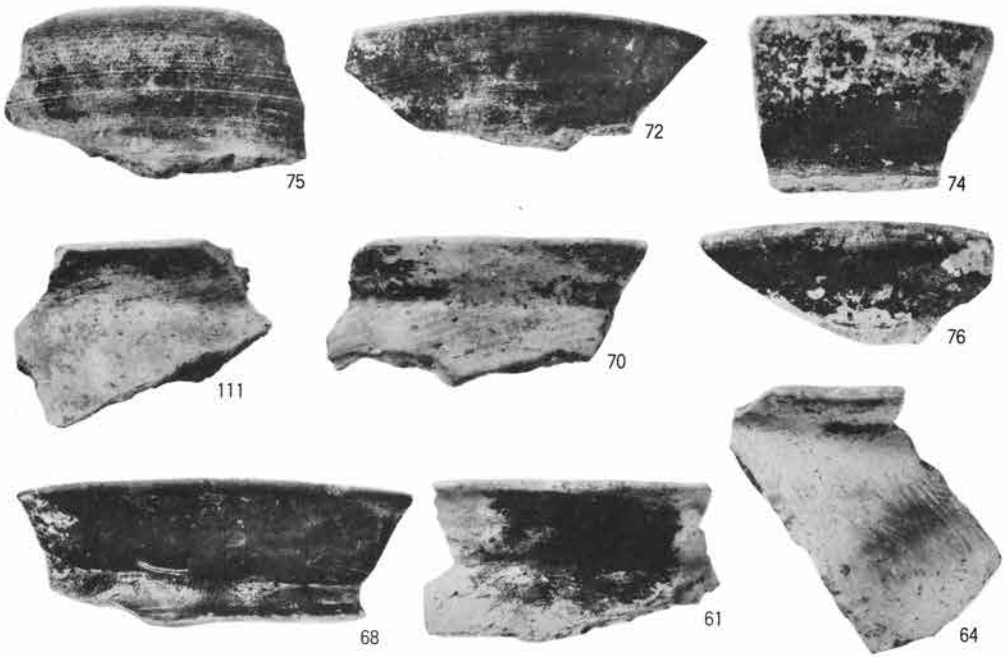
1　SR－1



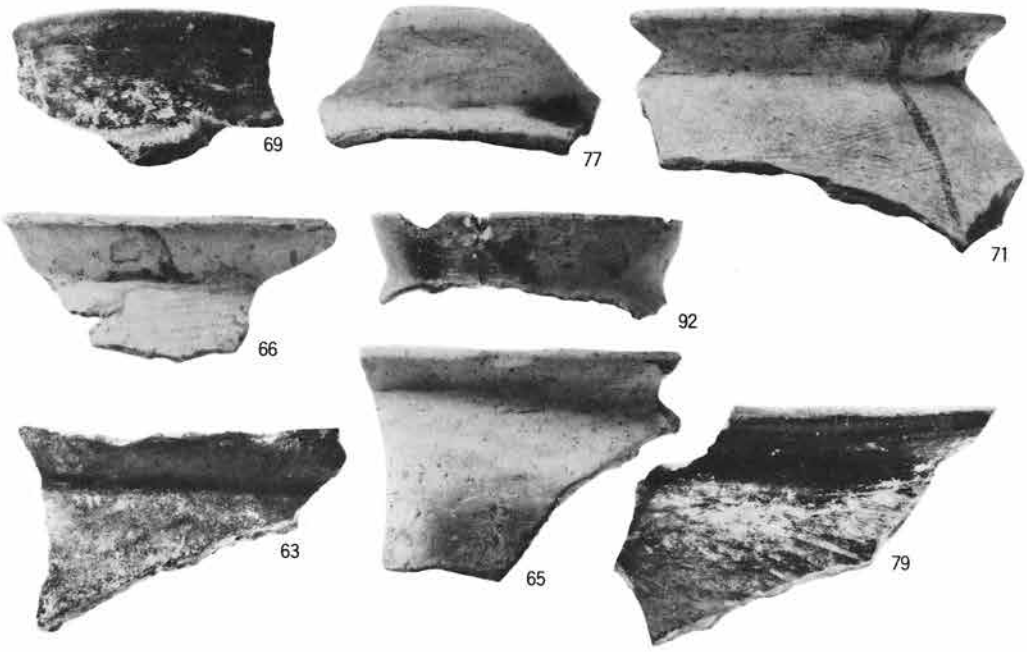
2　SR－1



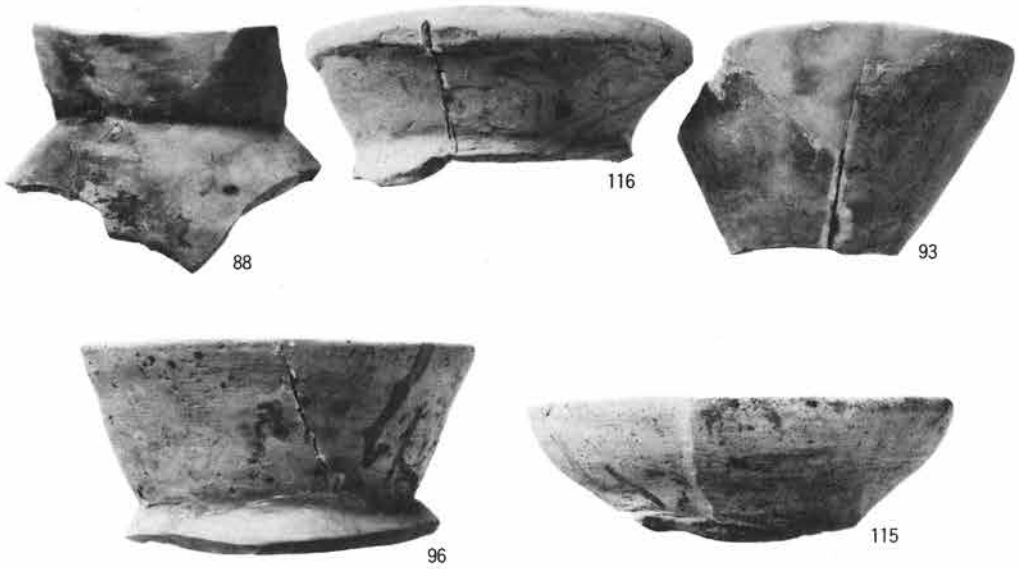
1　SR－1



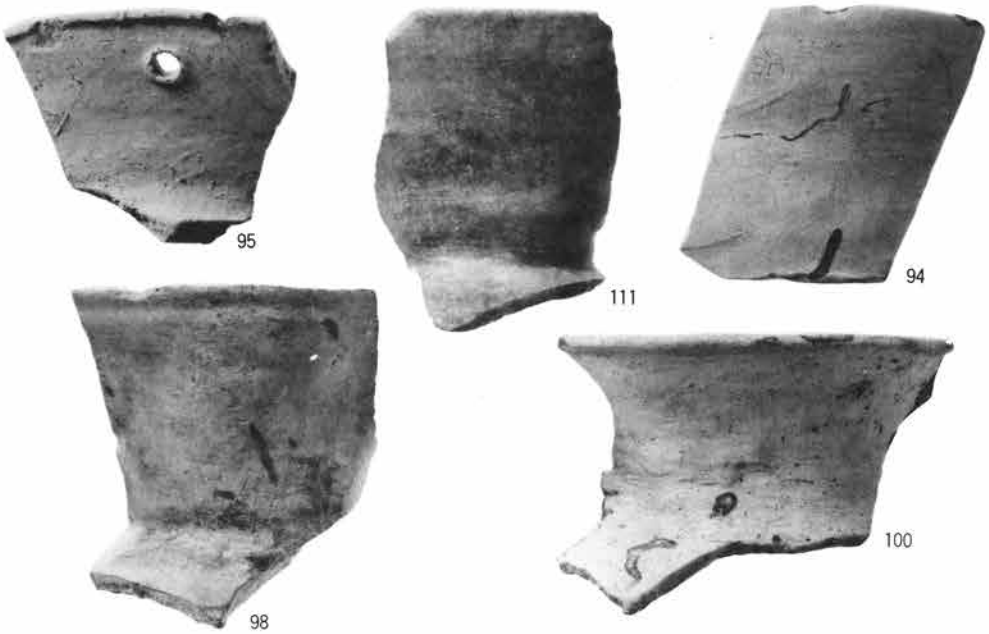
2　SR－1



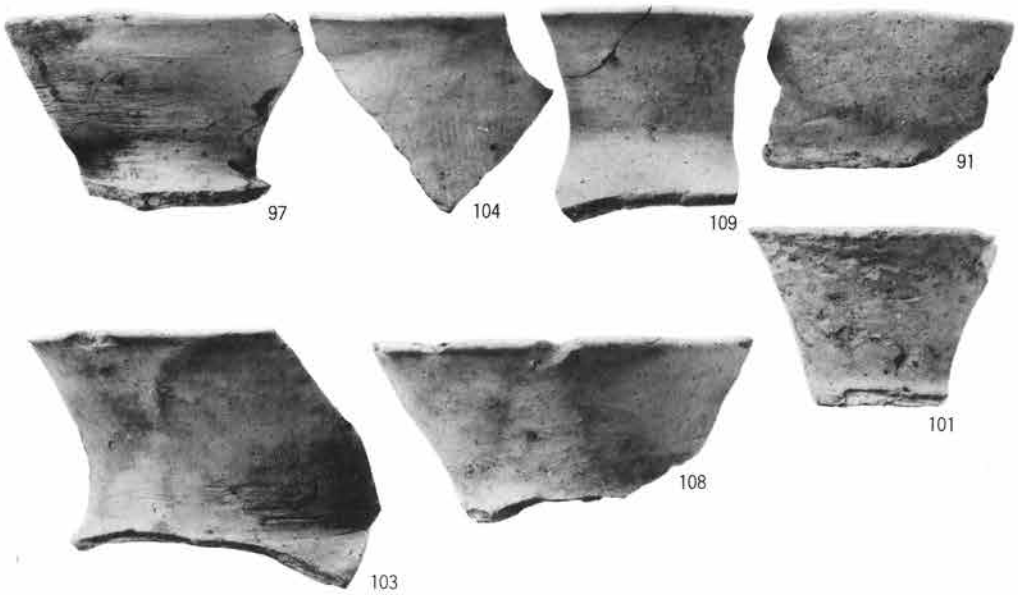
1　SR－1



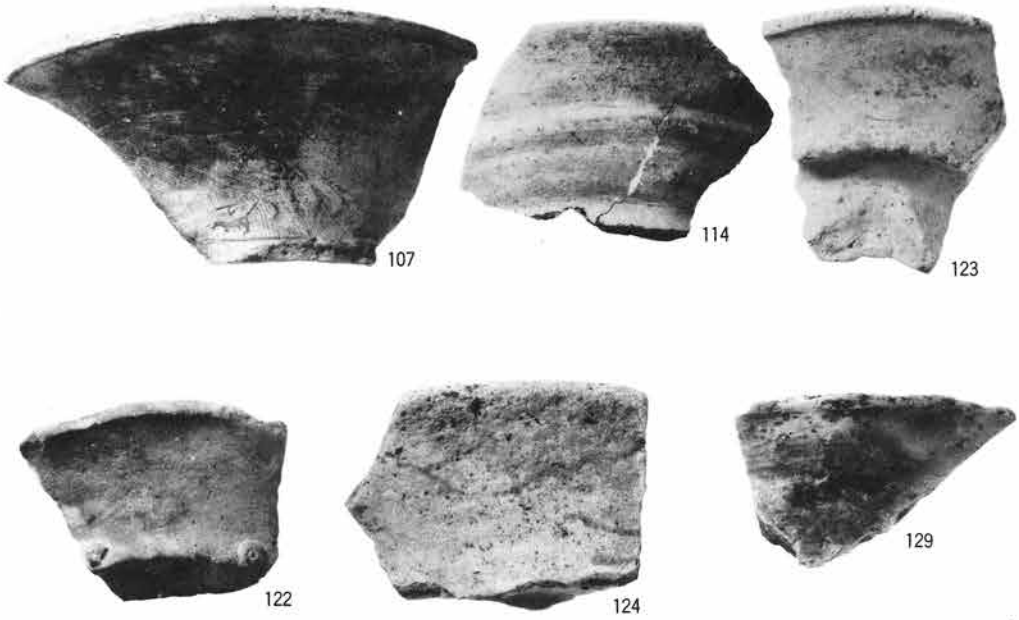
2　SR－1



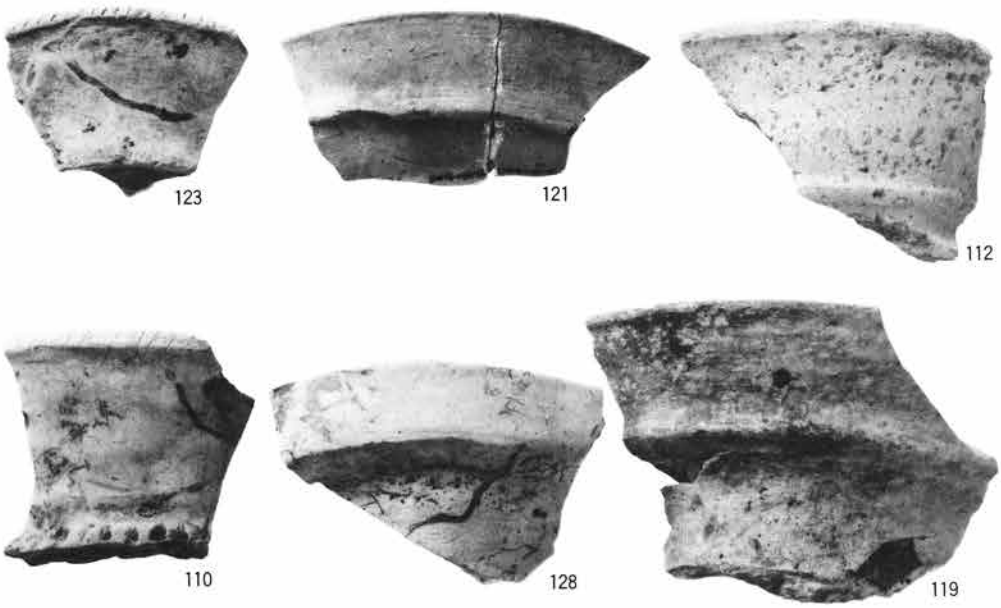
1　SR－1



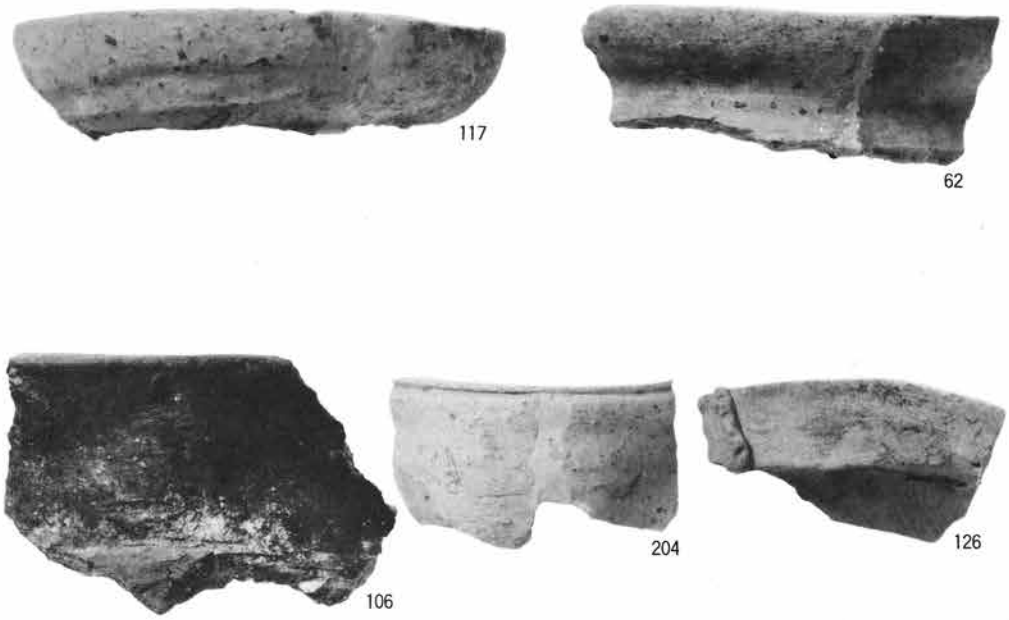
2　SR－1



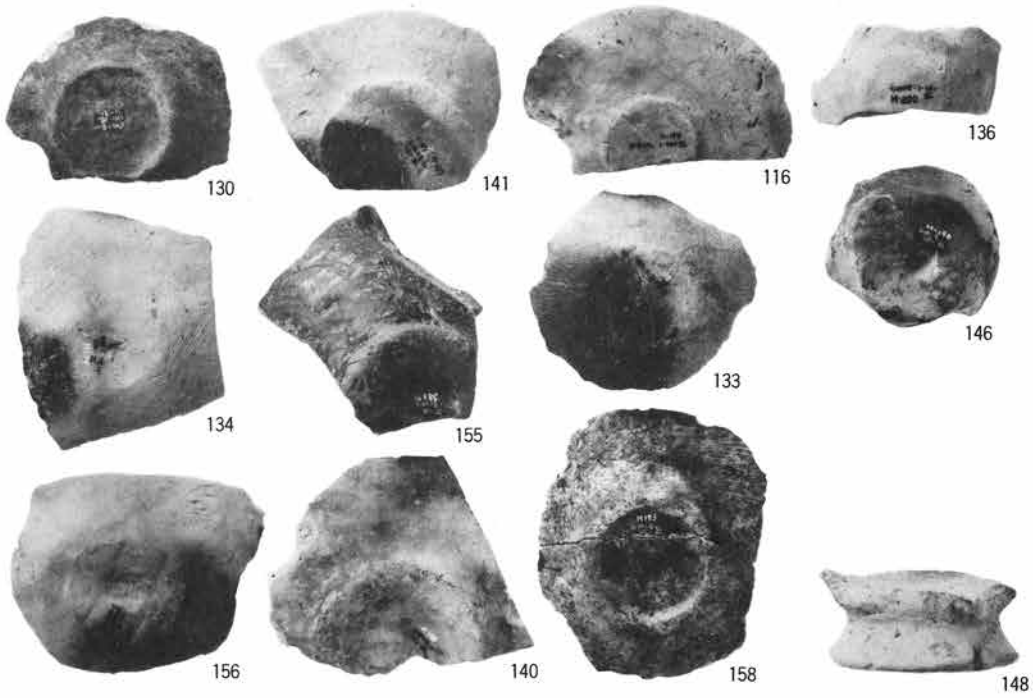
1　SR－1



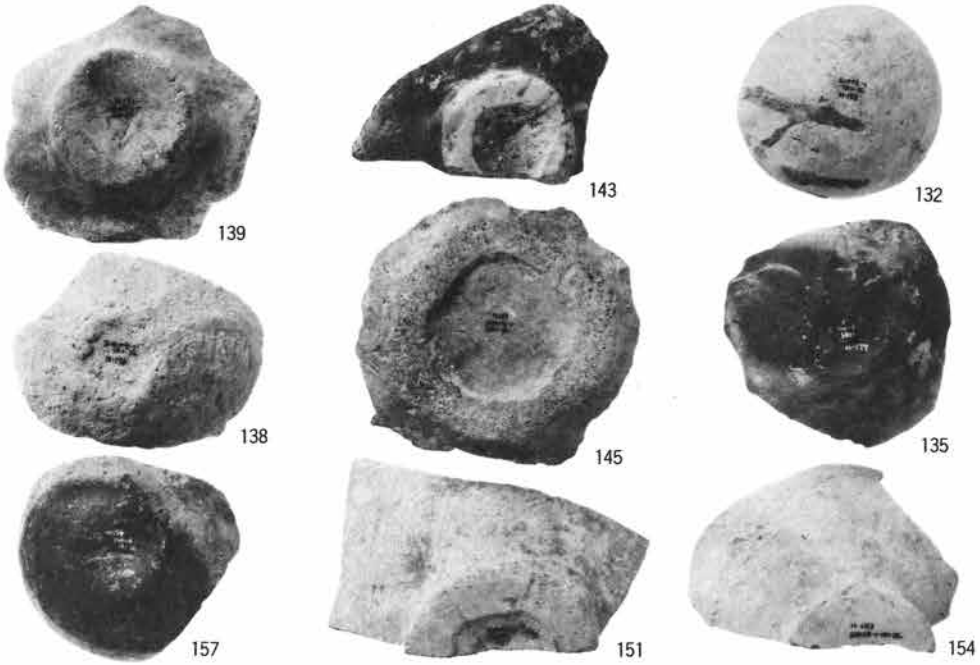
2　SR－1


117
62
106
204
126

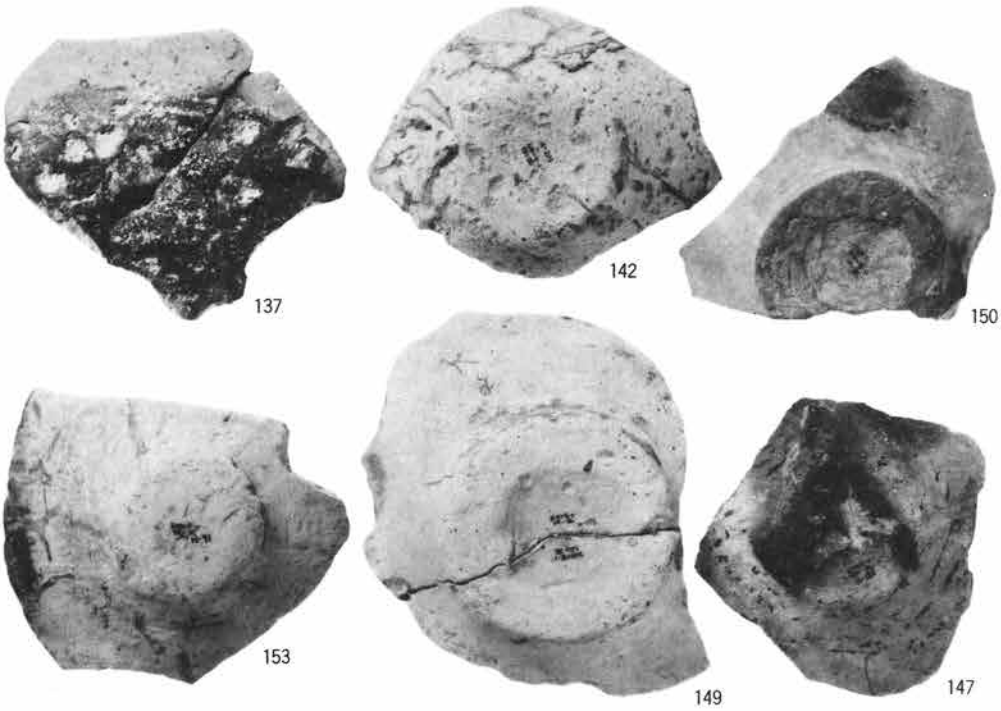
1　SR－1


130
141
116
136
134
155
133
146
156
140
158
148

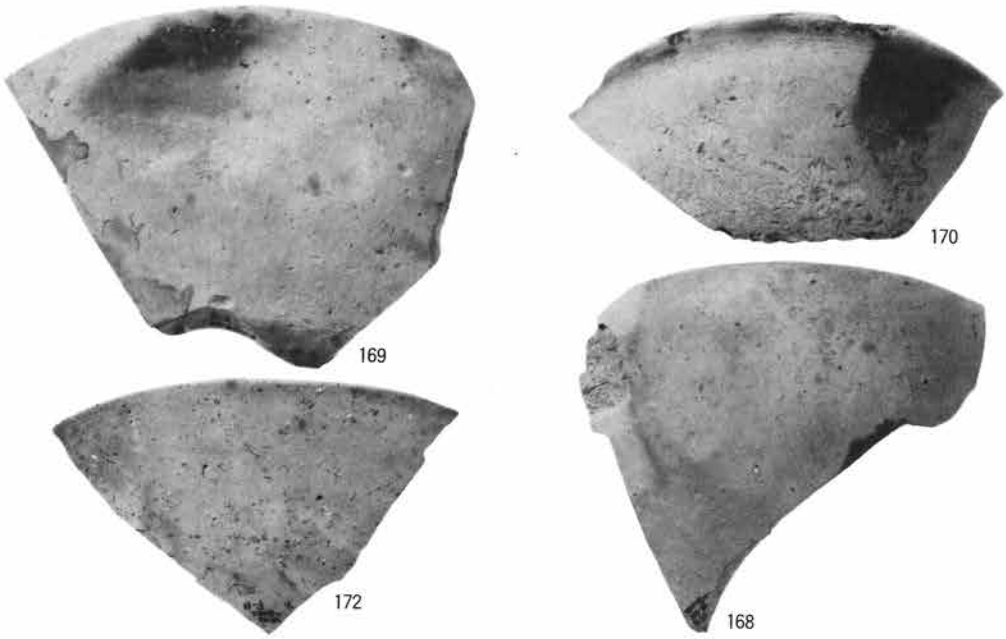
2　SR－1



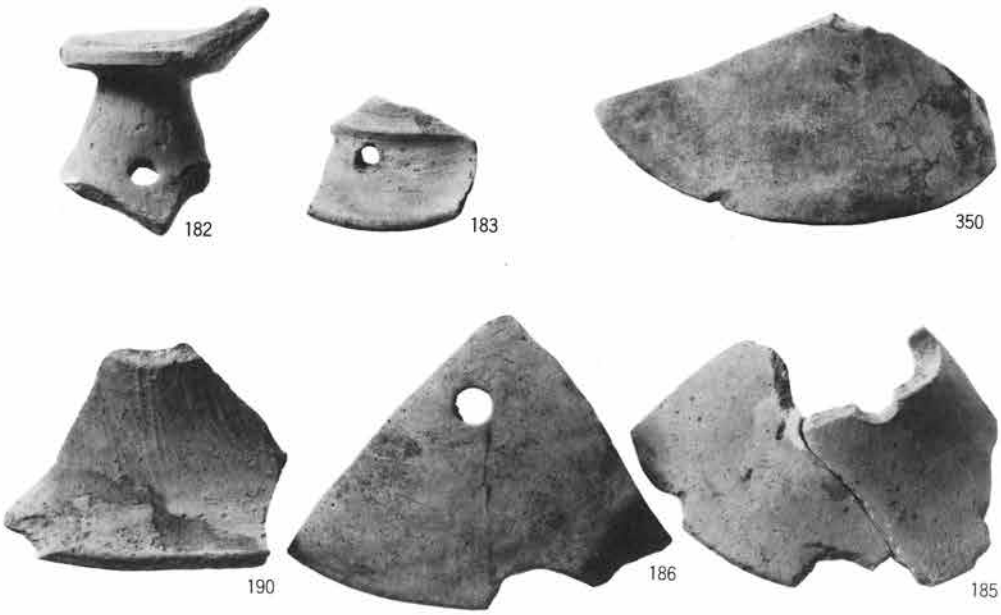
1　SR－1



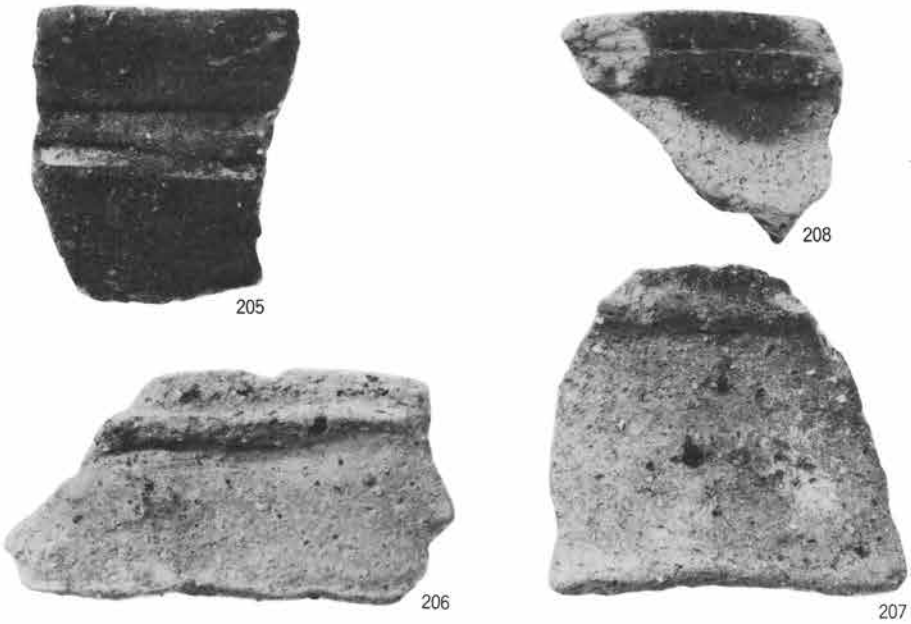
2　SR－1



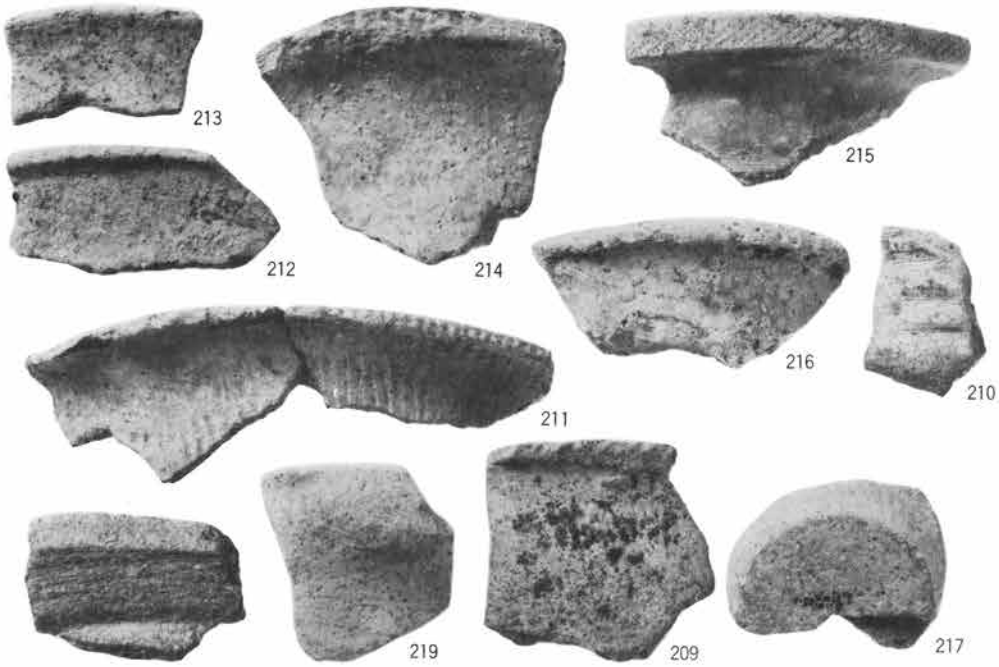
1　SR－1



2　SR－1



1　SR－1



2　SR－1

247

252

253

260

263

262

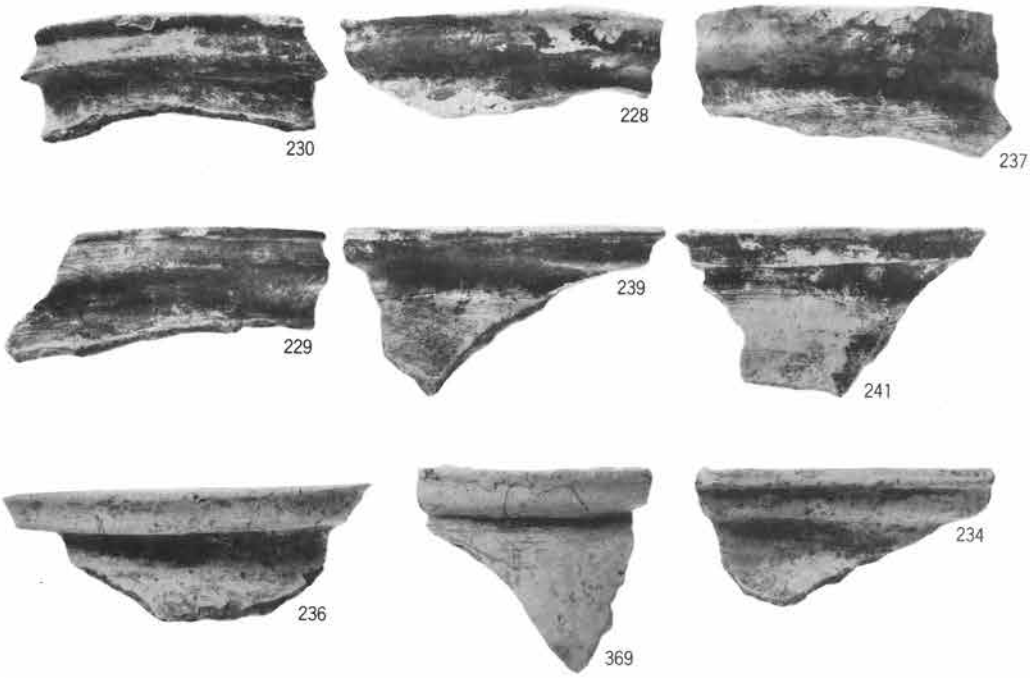
261

269

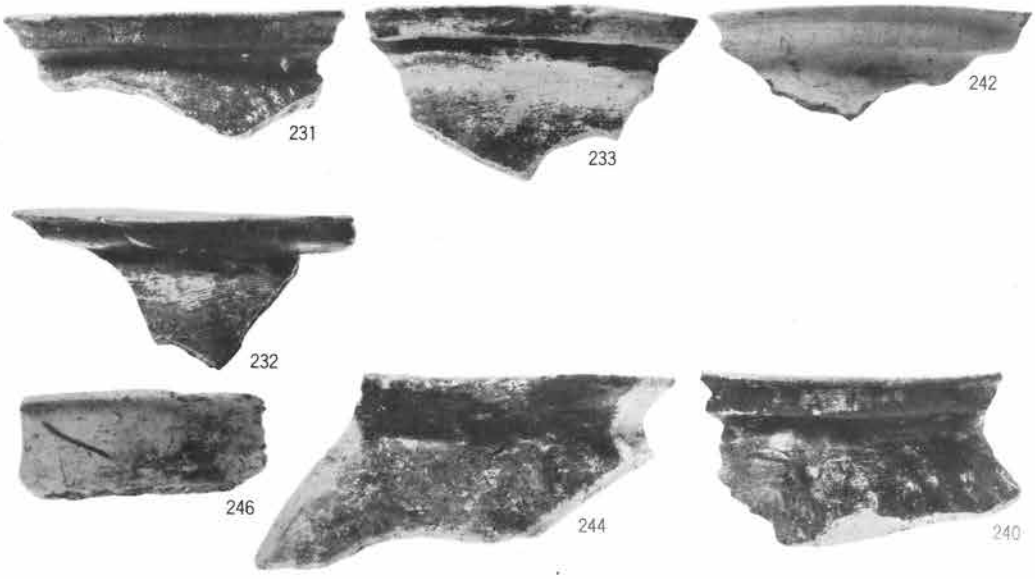
270

271

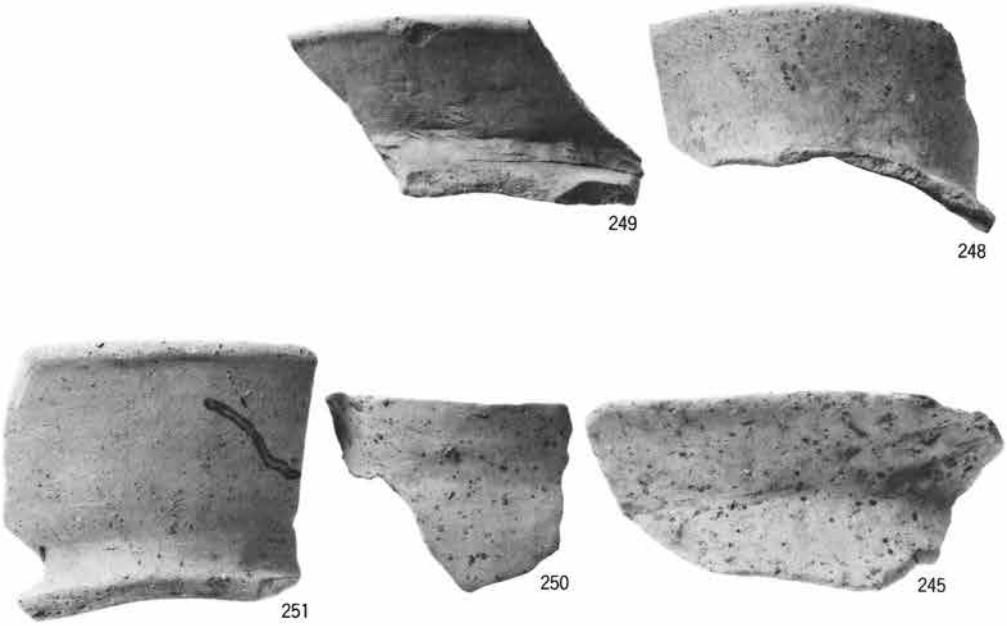
SR－2



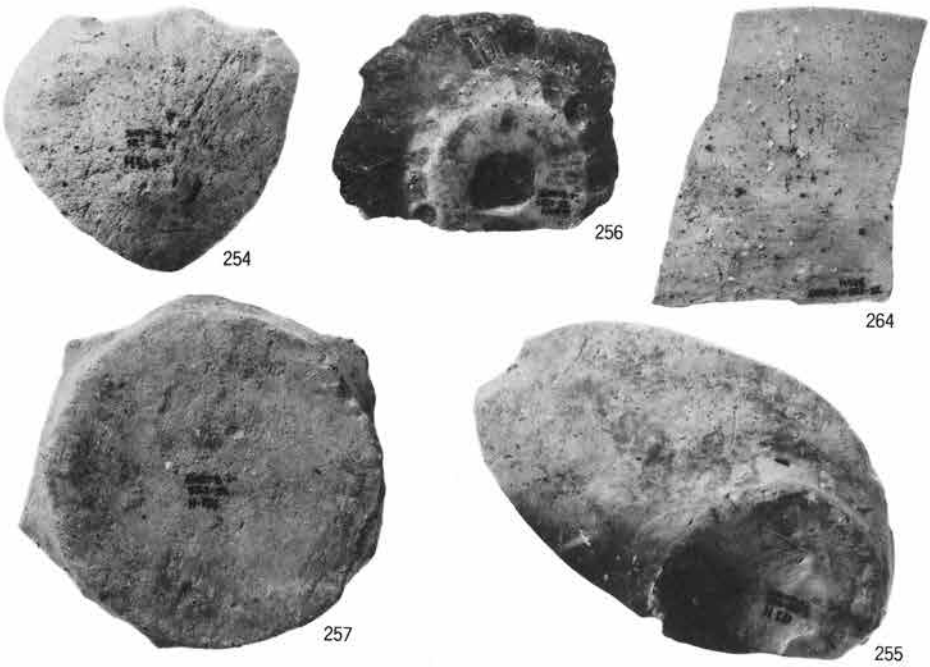
1　ＳＲ－２



2　ＳＲ－２



1　ＳＲ－２



2　ＳＲ－２

1　SR－2

2　SR－2

309

352

420

385

399

421

380

375

378

406

SR－1

416

402

418

407

417

383

408

409

533

435

527

201

524

522

517

515

514

513

513

519

518

504

503

512

506

507

505

489

475

476

480

523

521

520

511

519

510

487

508

SR－3

477

501

496

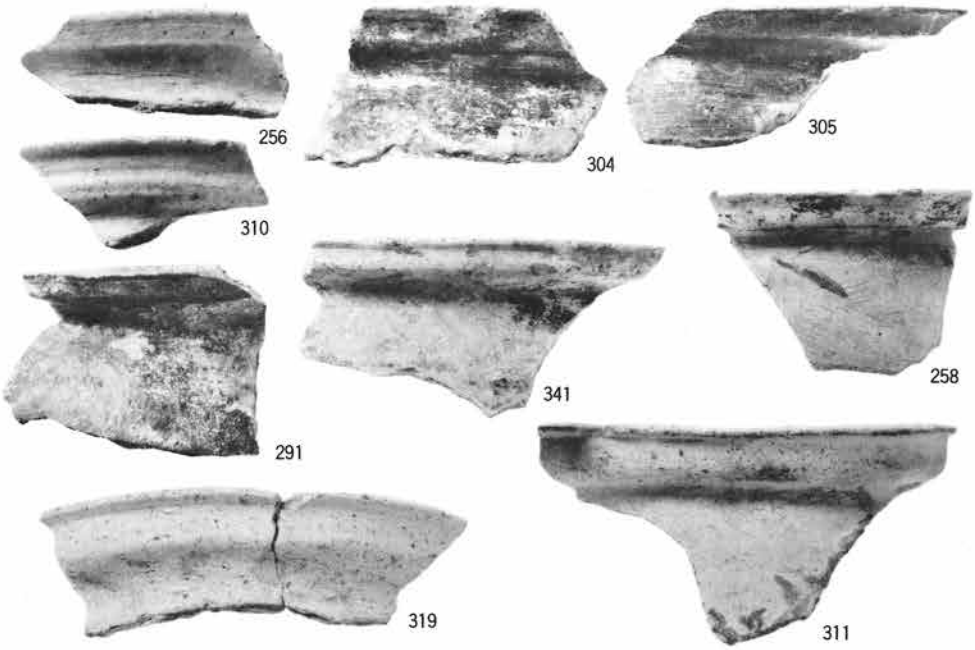
488

495

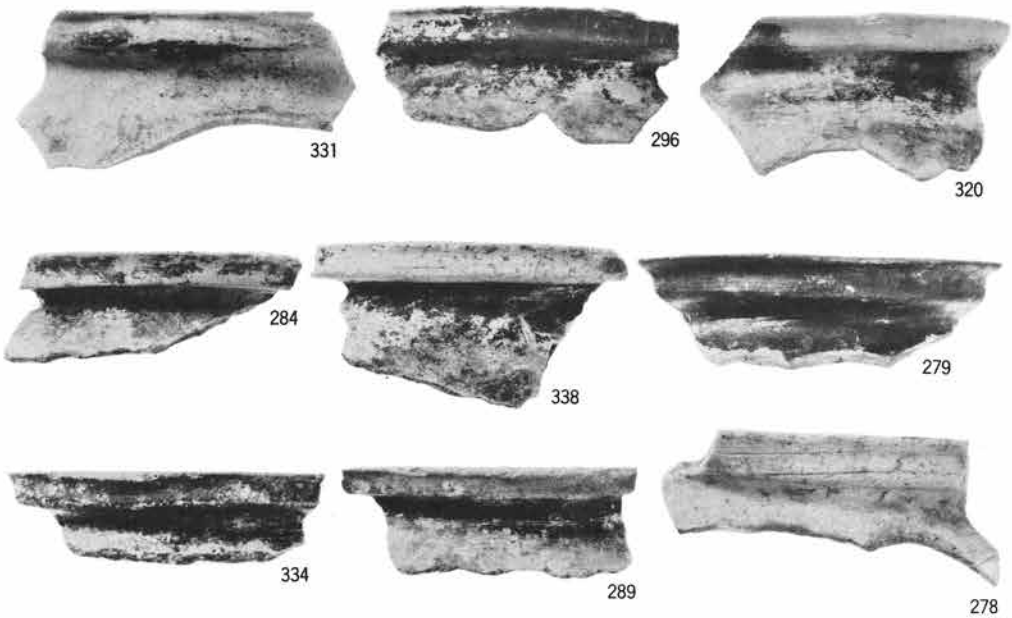
483

502

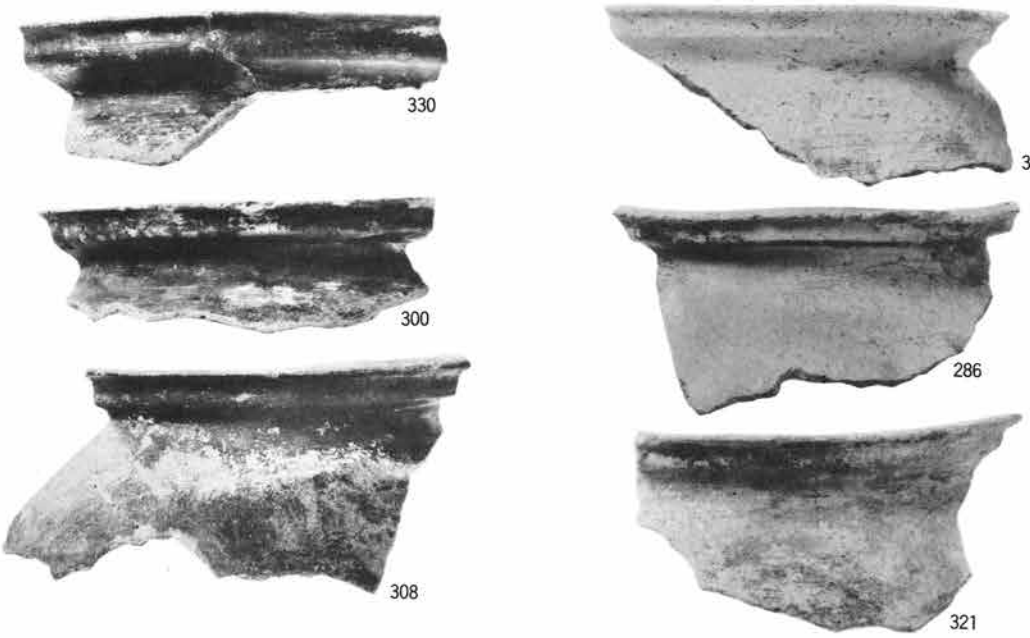
561


256
304
305
310
258
341
291
319
311

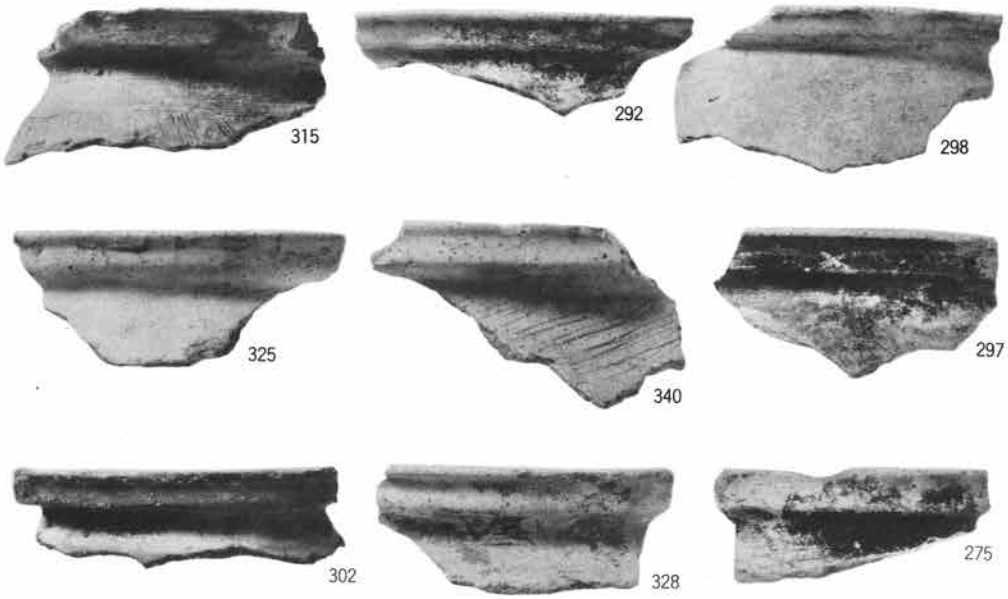
1　ＳＲ－３


331
296
320
284
338
279
334
289
278

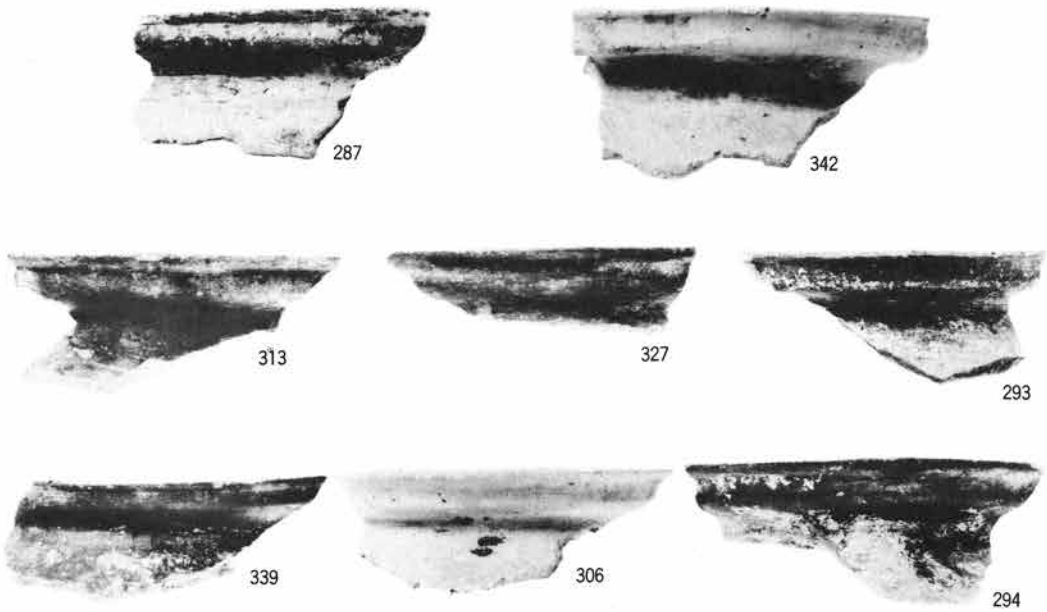
2　ＳＲ－３



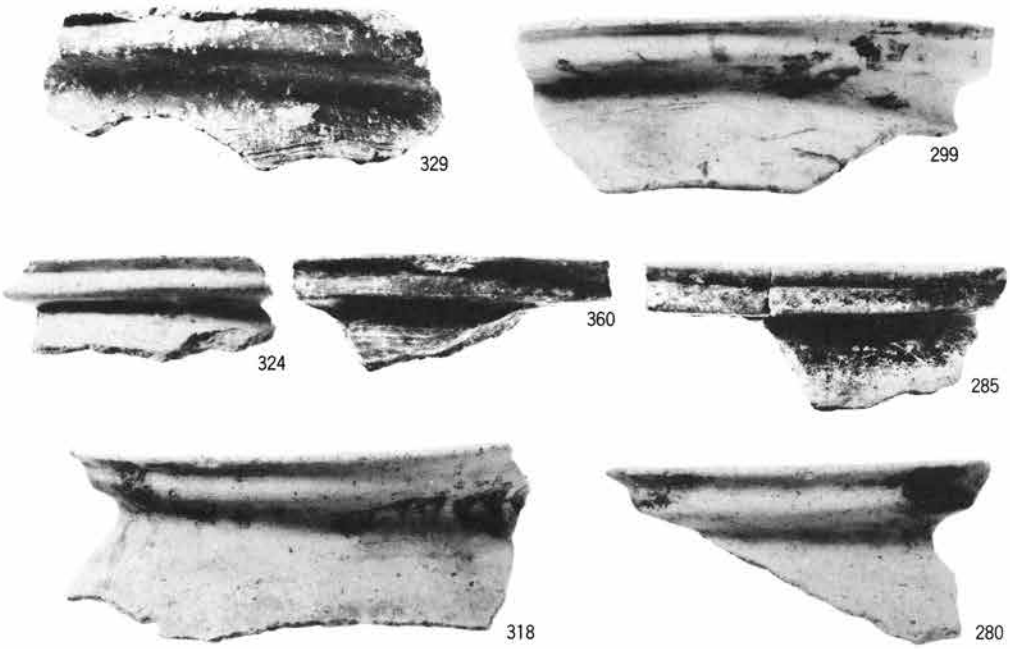
1　SR－3



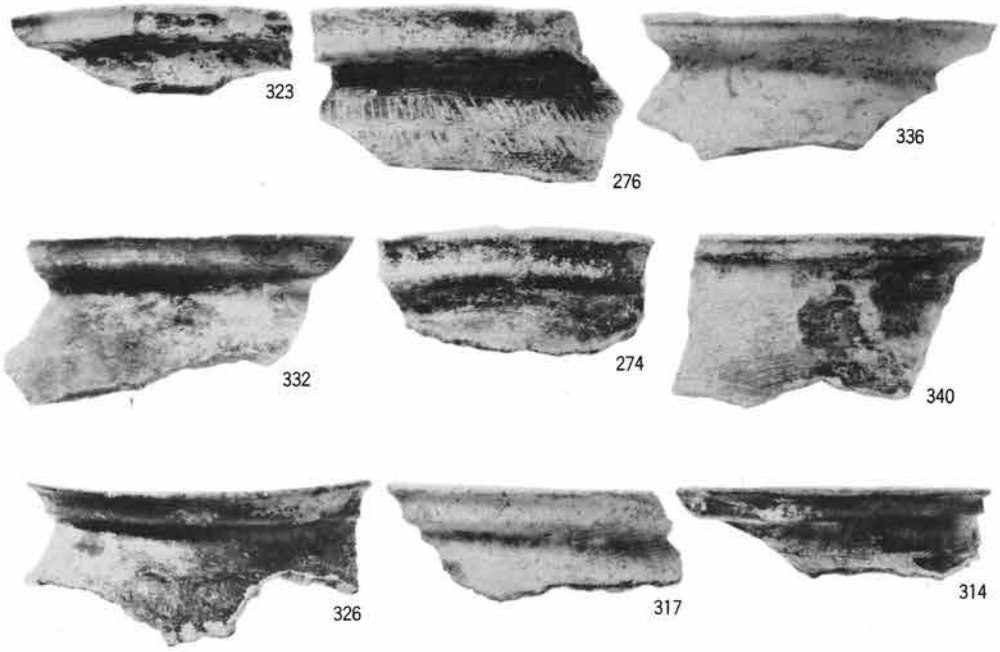
2　SR－3



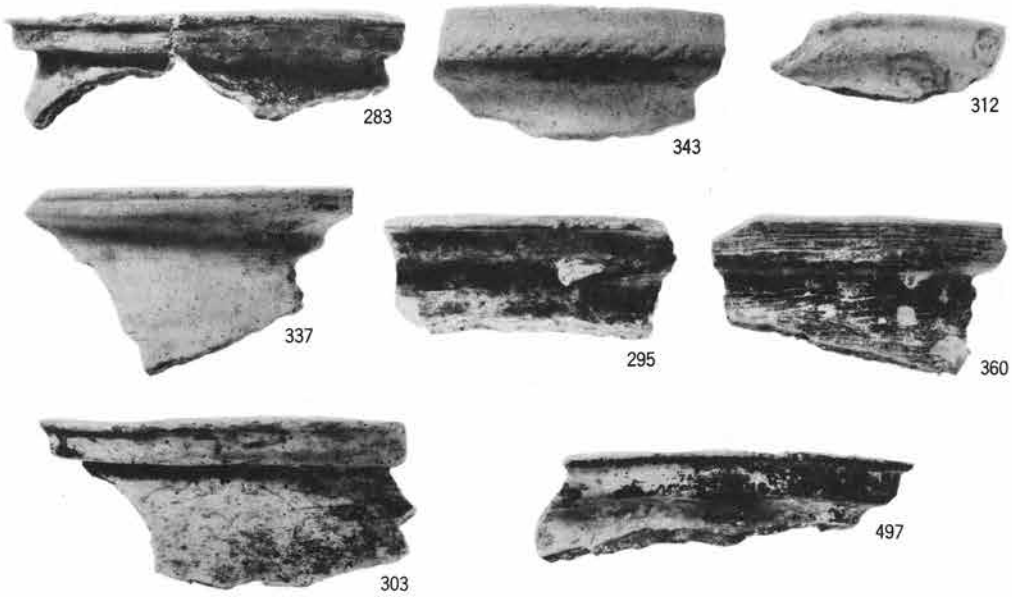
1　ＳＲ－３



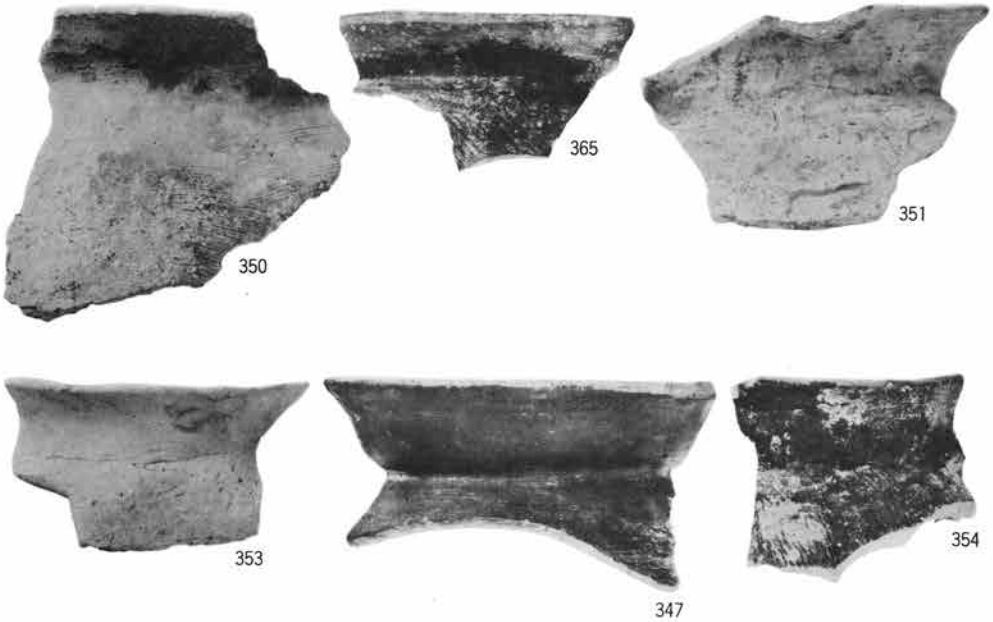
2　ＳＲ－３


323
276
336
332
274
340
326
317
314

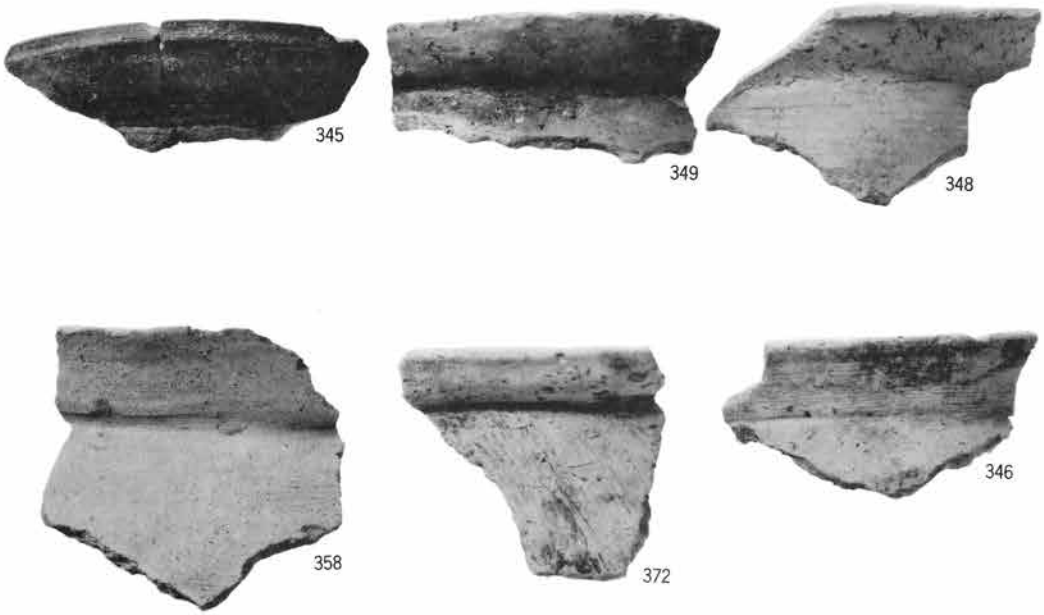
1　SR－3


283
343
312
337
295
360
303
497

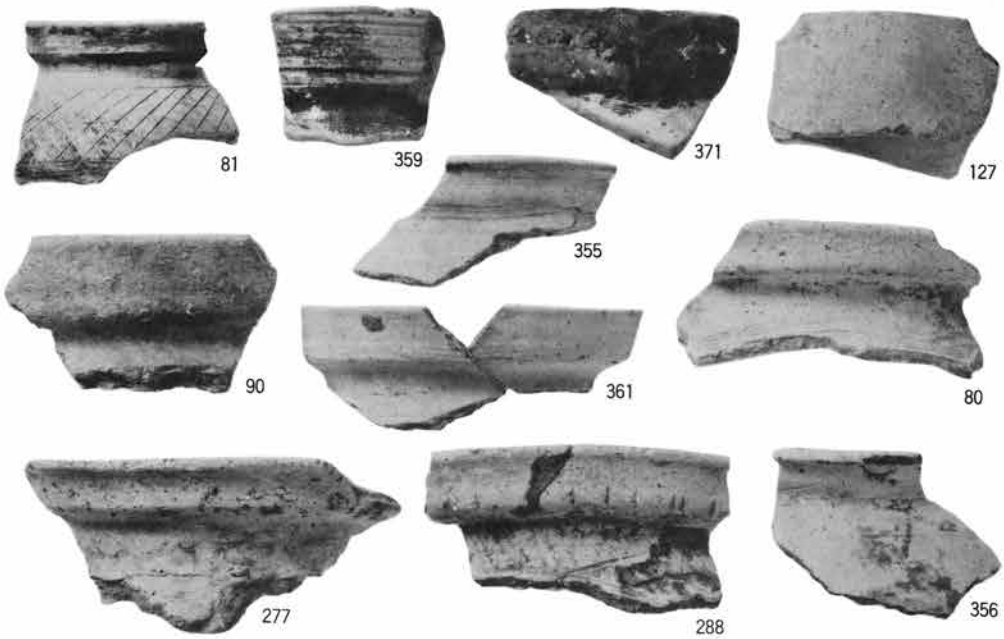
2　SR－3



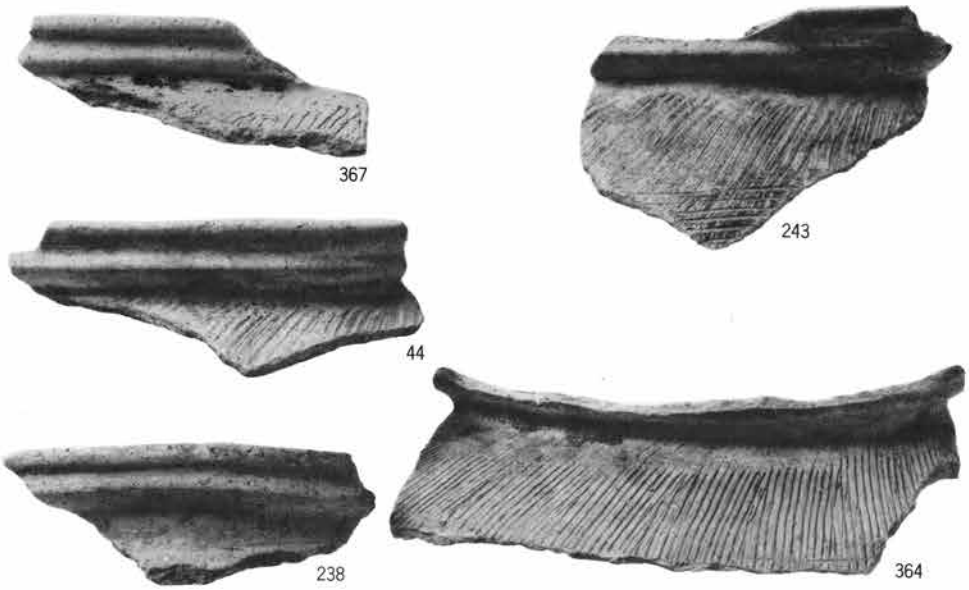
1　SR－3



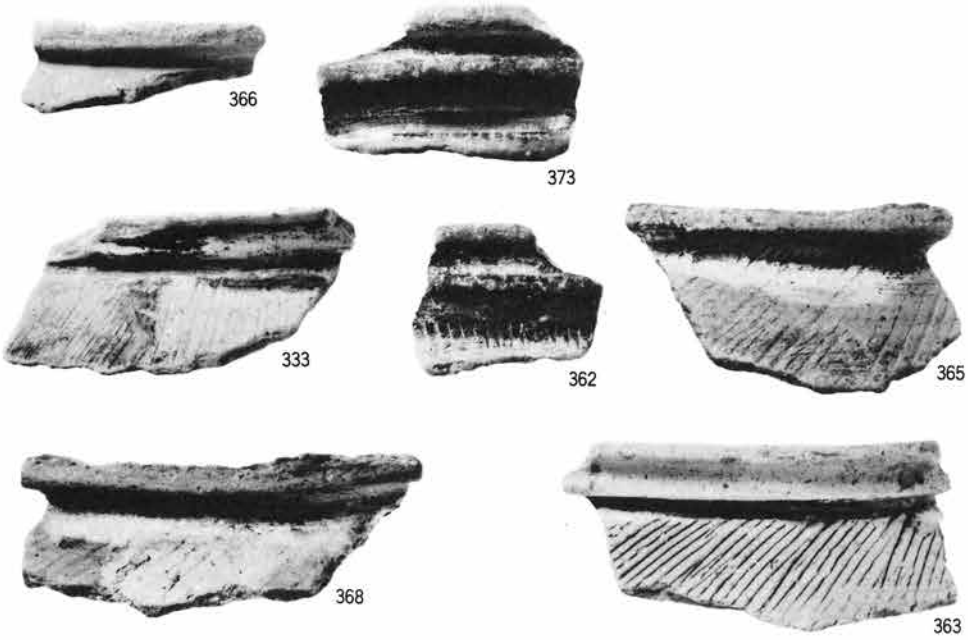
2　SR－3



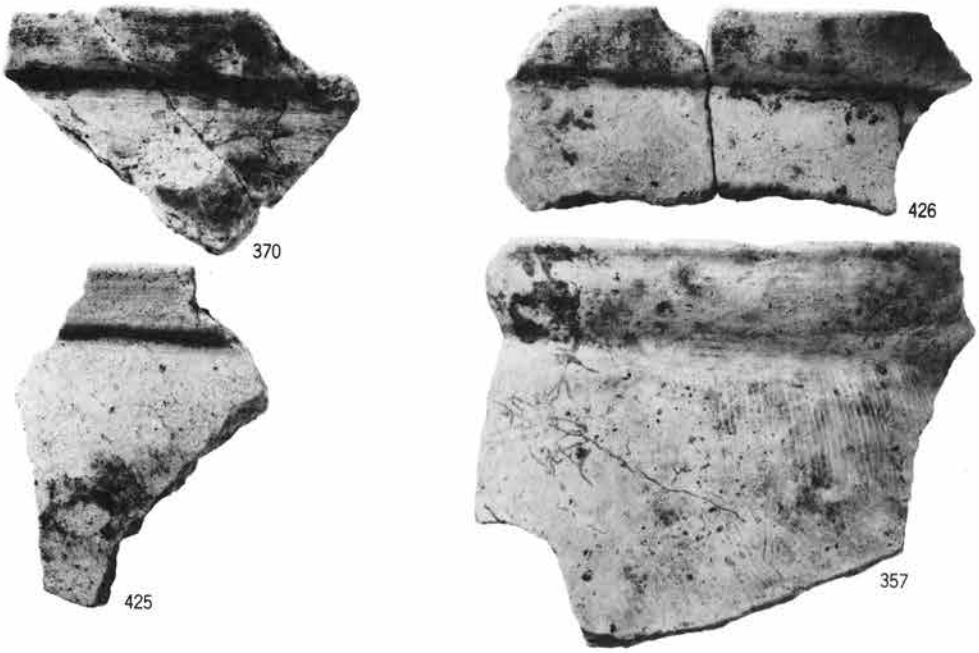
1　ＳＲ－３



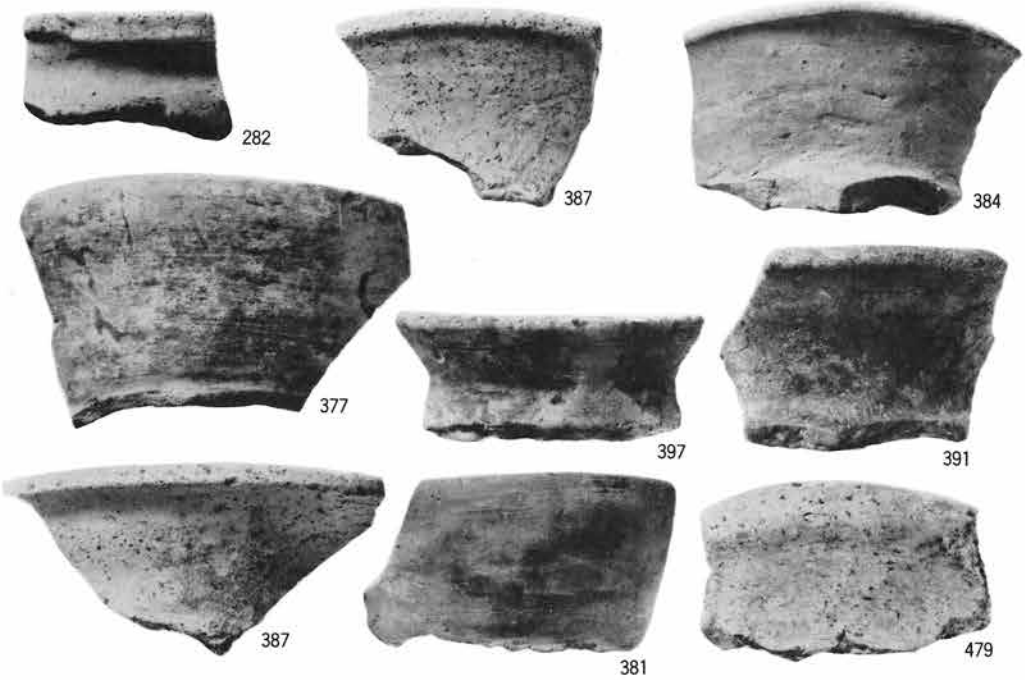
2　ＳＲ－３



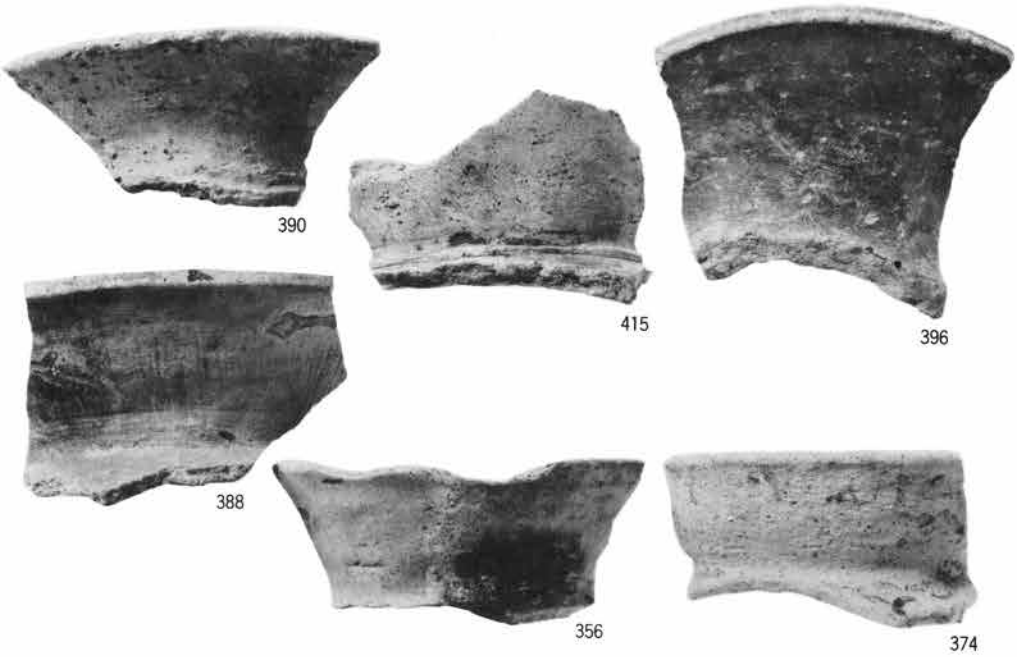
1　SR－3



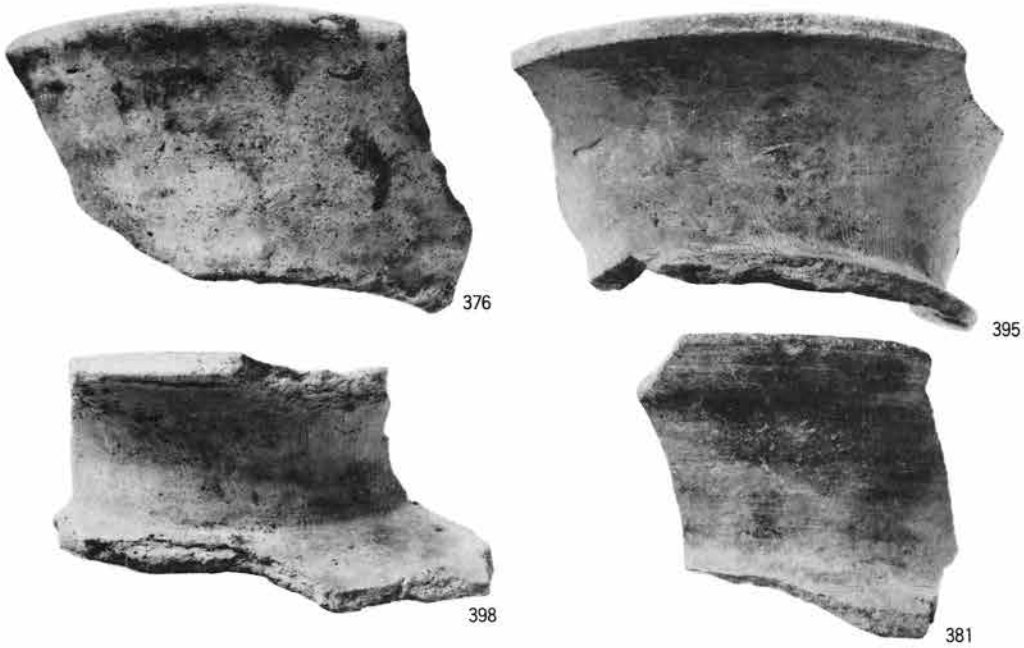
2　SR－3



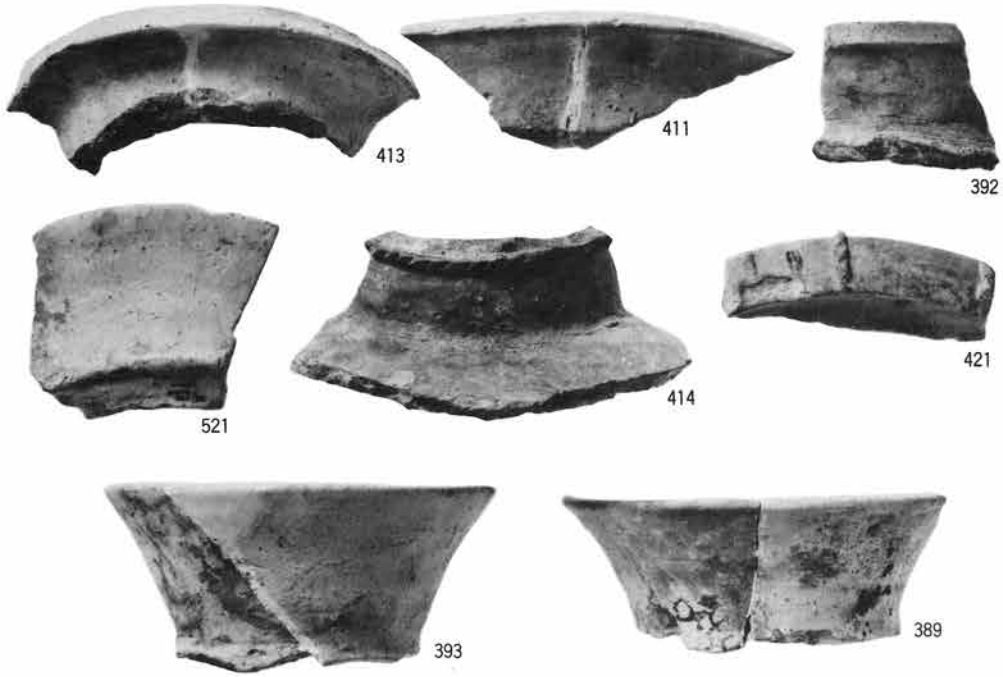
1　SR－3



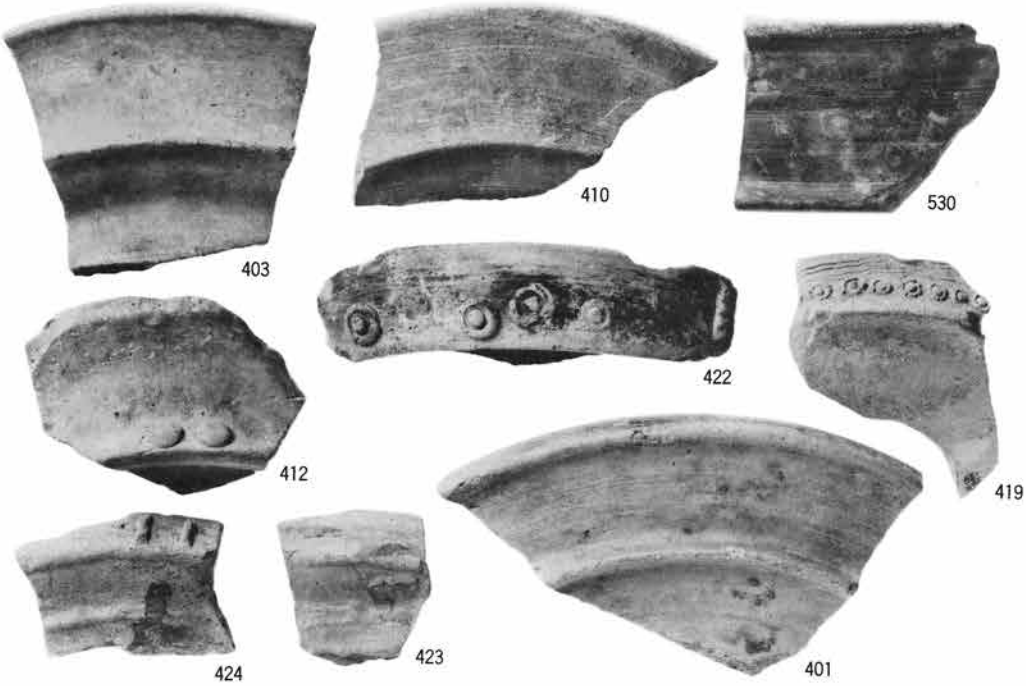
2　SR－3



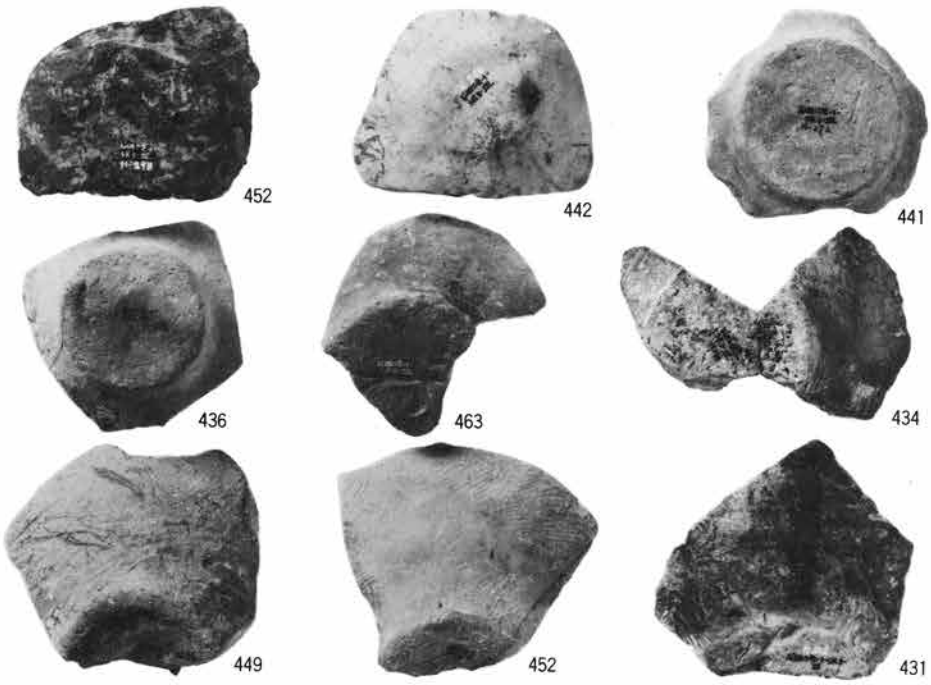
1　SR－3



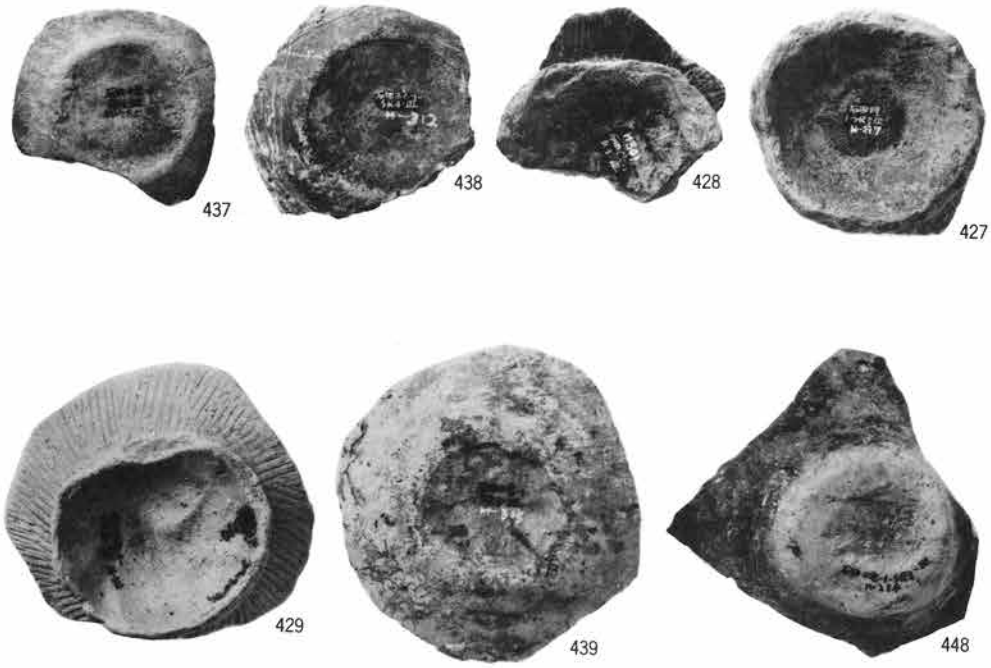
2　SR－3


403
410
530
422
412
419
424
423
401

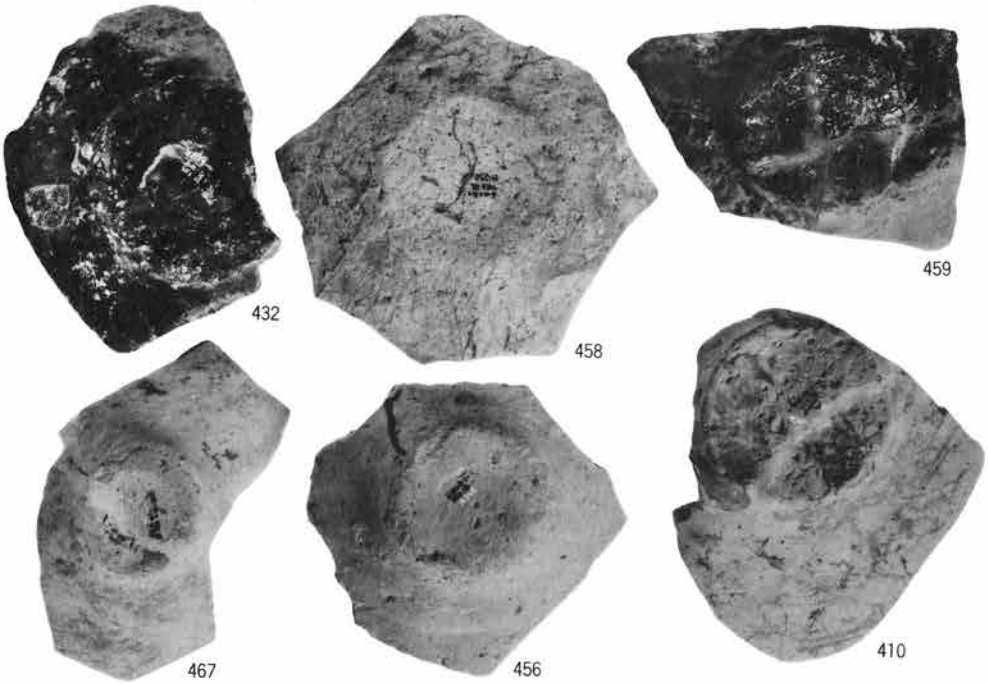
1　SR－3


452
442
441
436
463
434
449
452
431

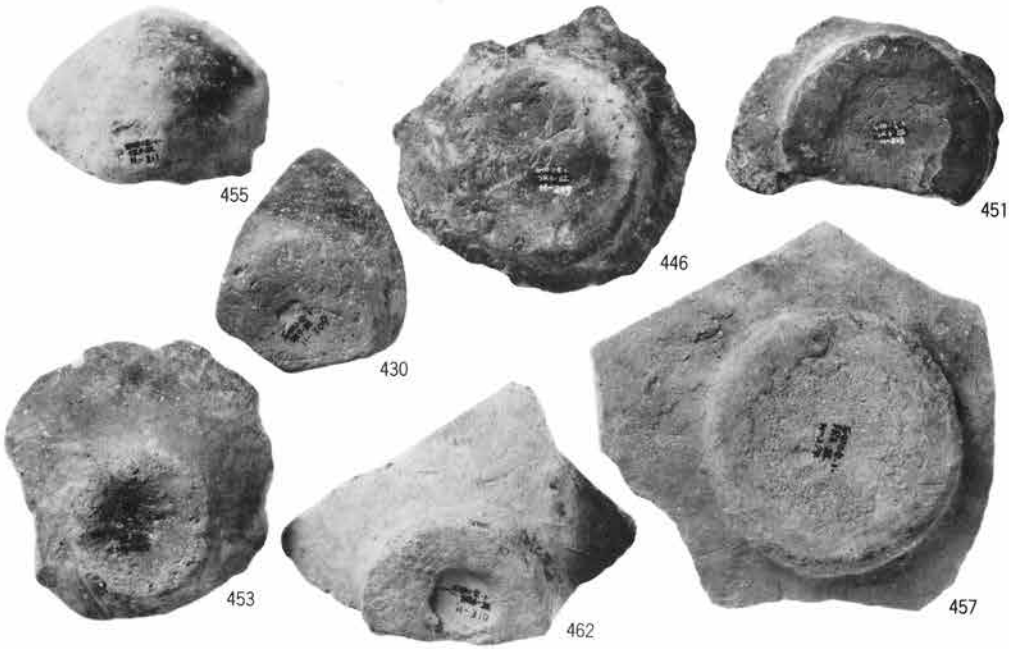
2　SR－3



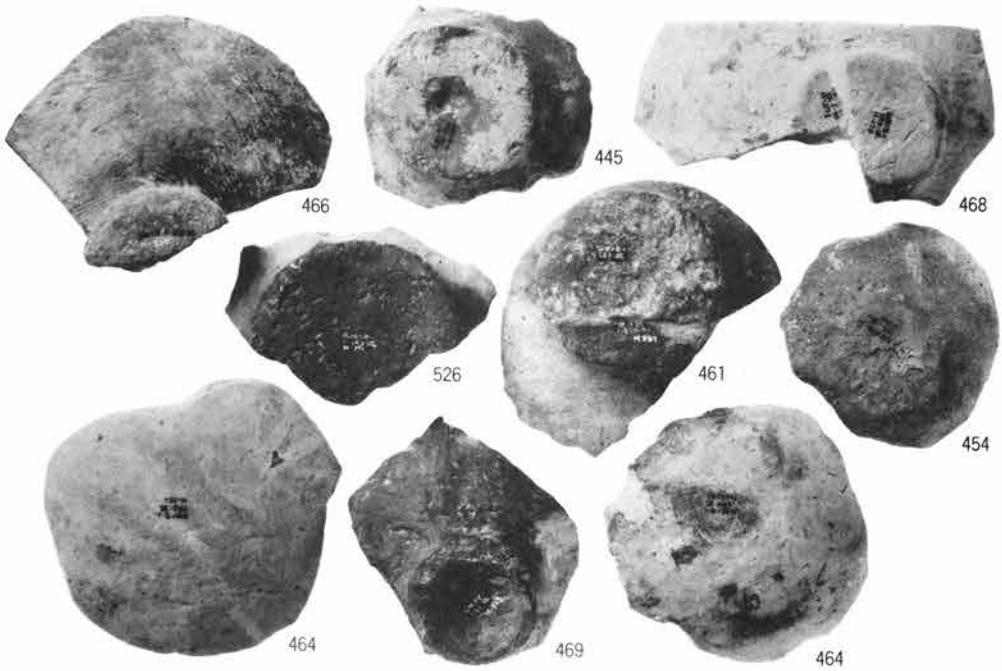
1　SR－3



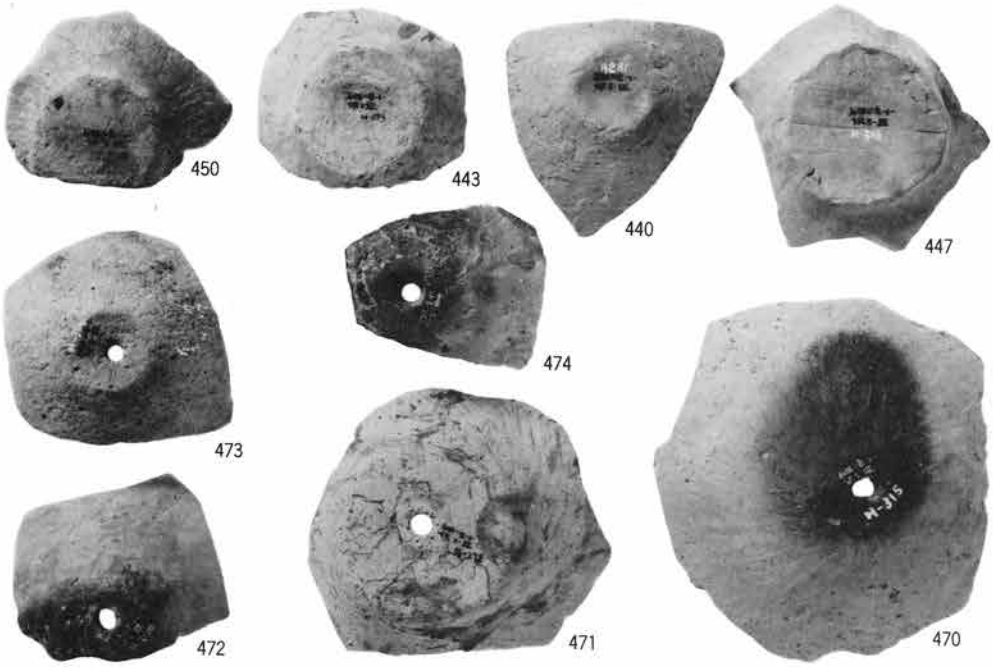
2　SR－3



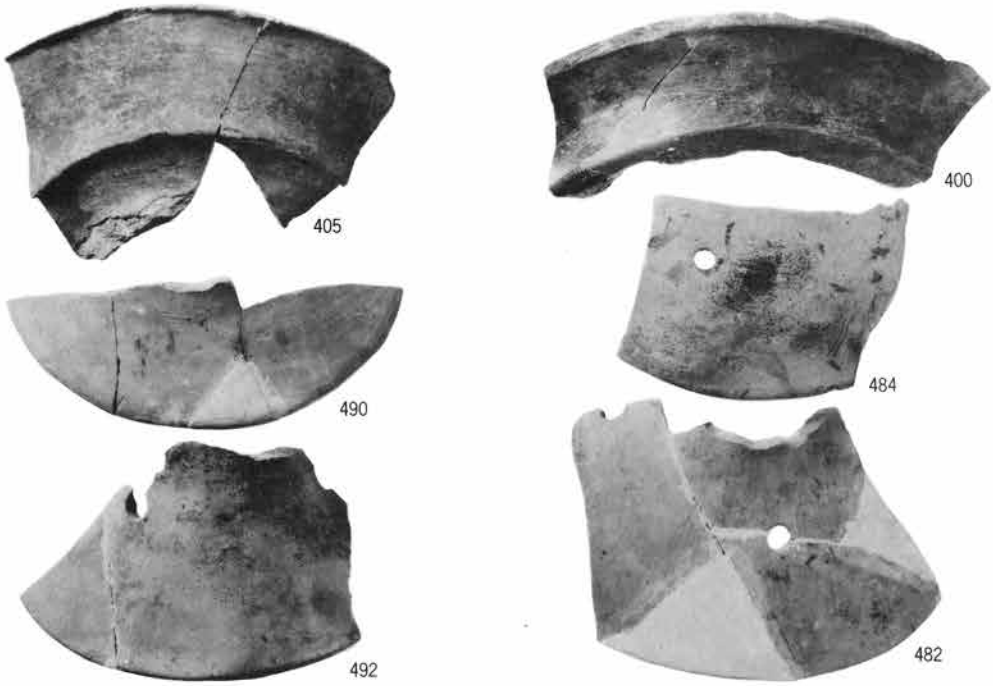
1　SR－3



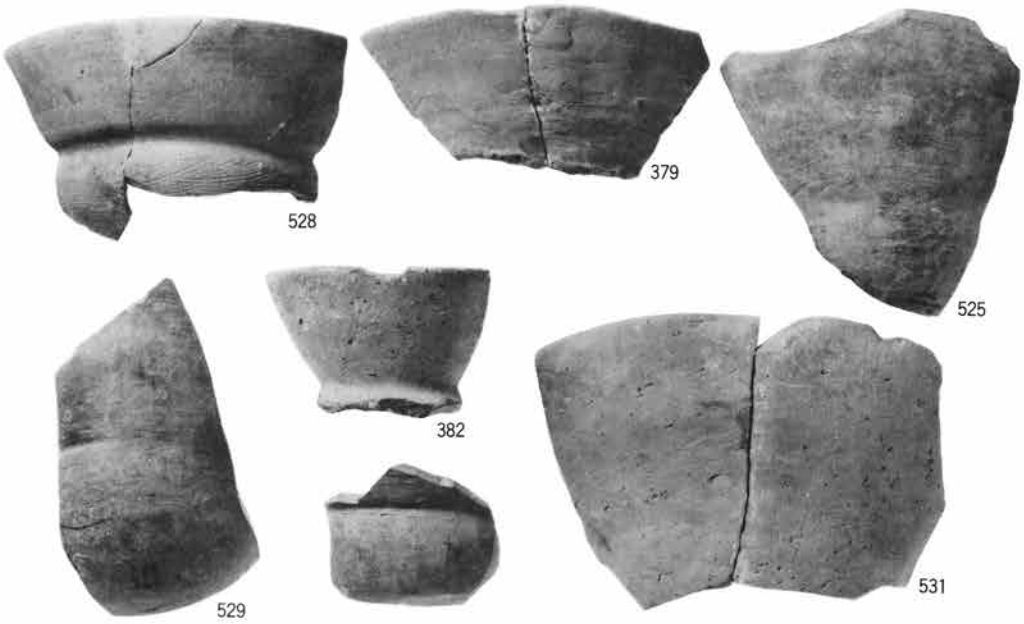
2　SR－3



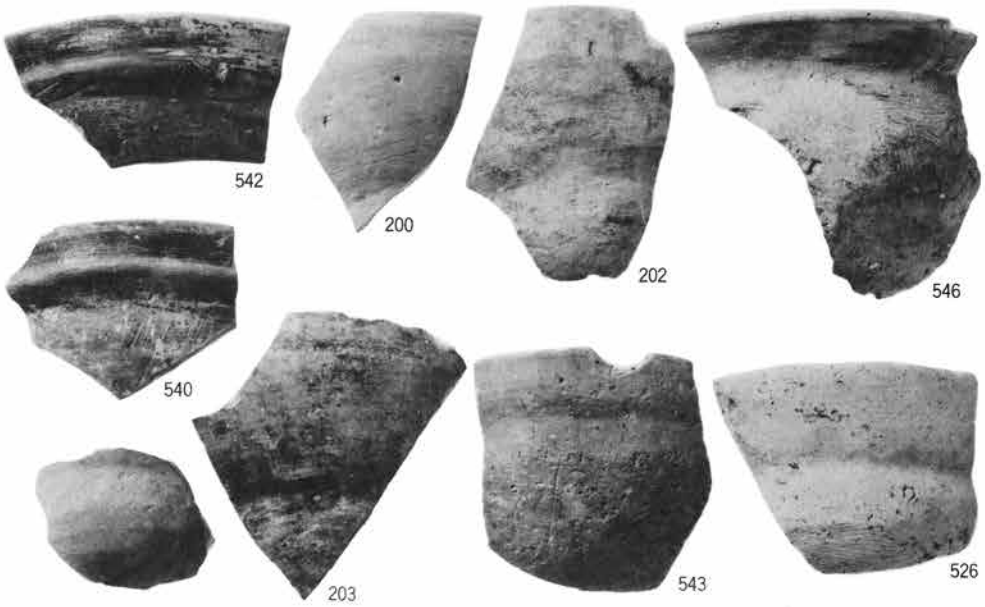
1　SR－3



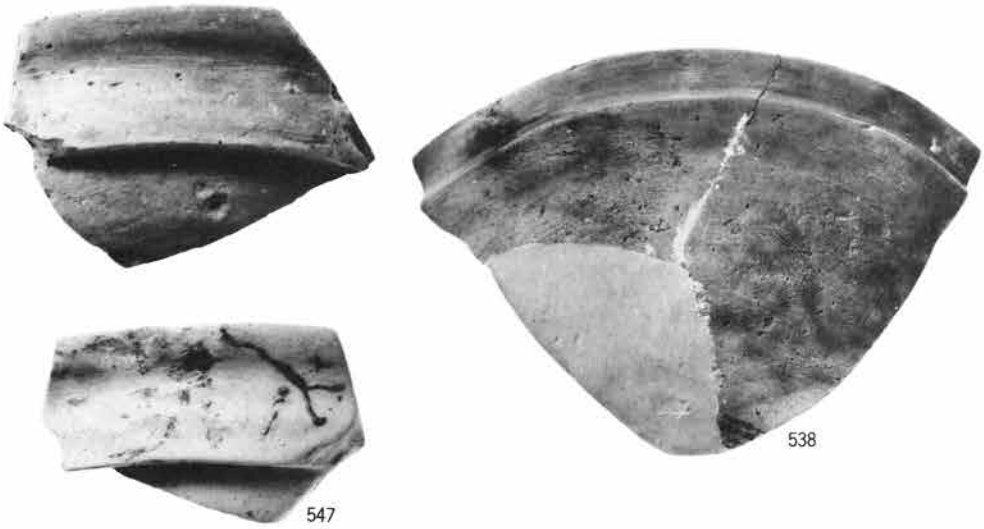
2　SR－3



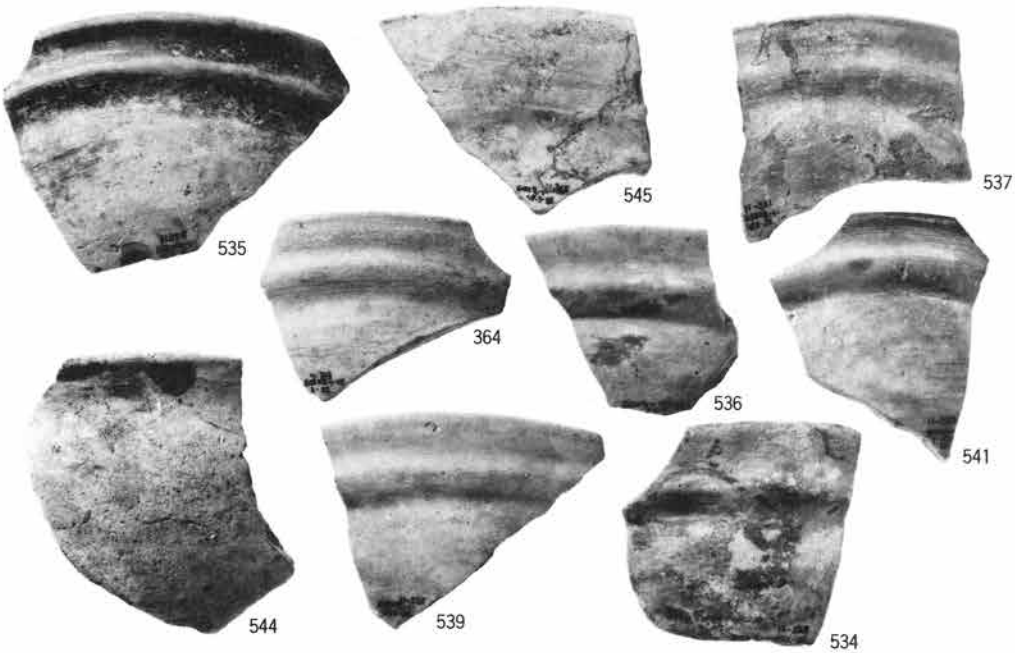
1　SR－3



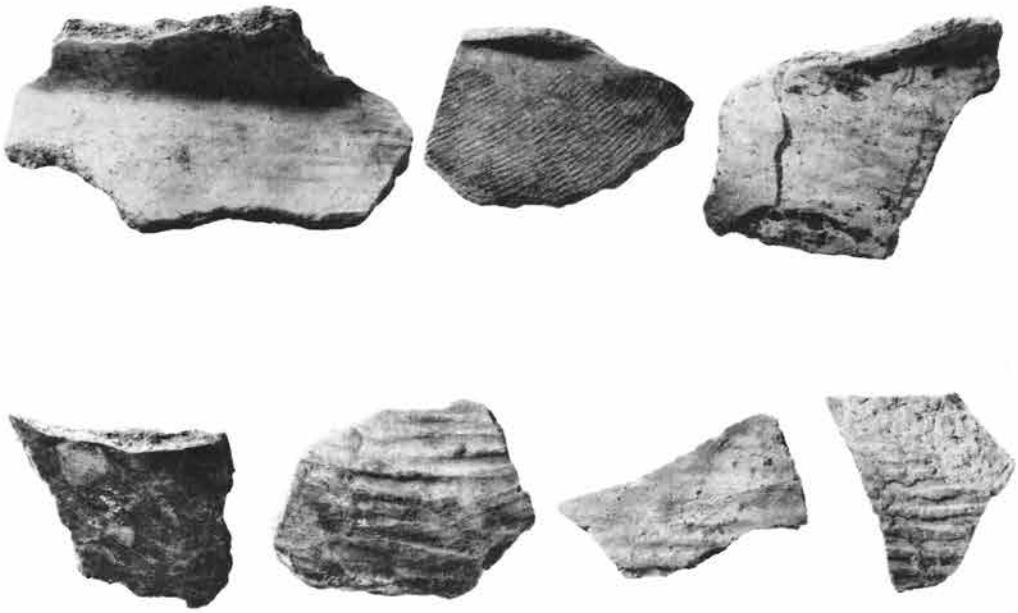
2　SR－3



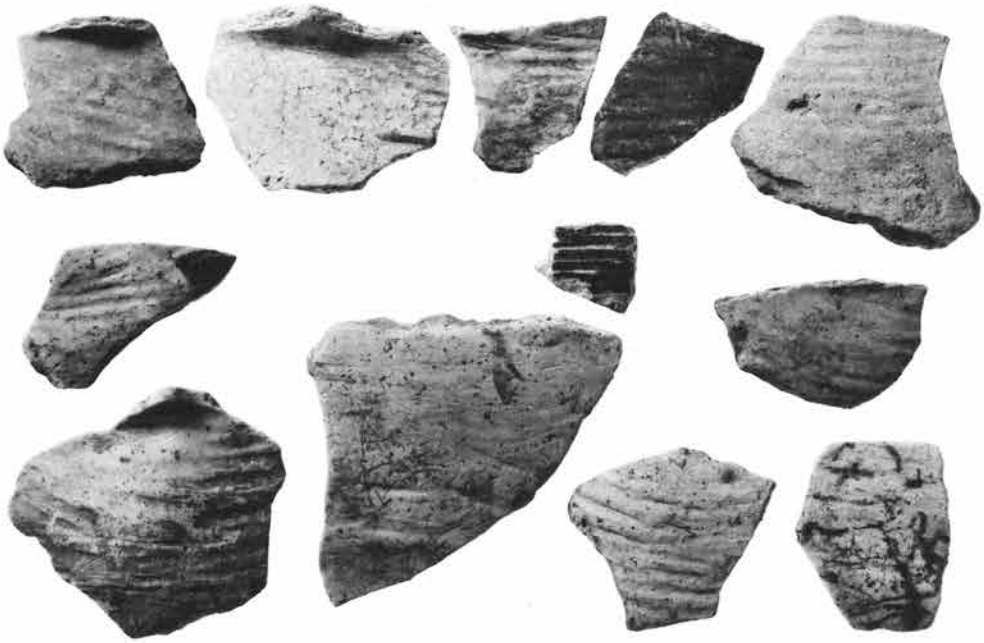
1　SR－3



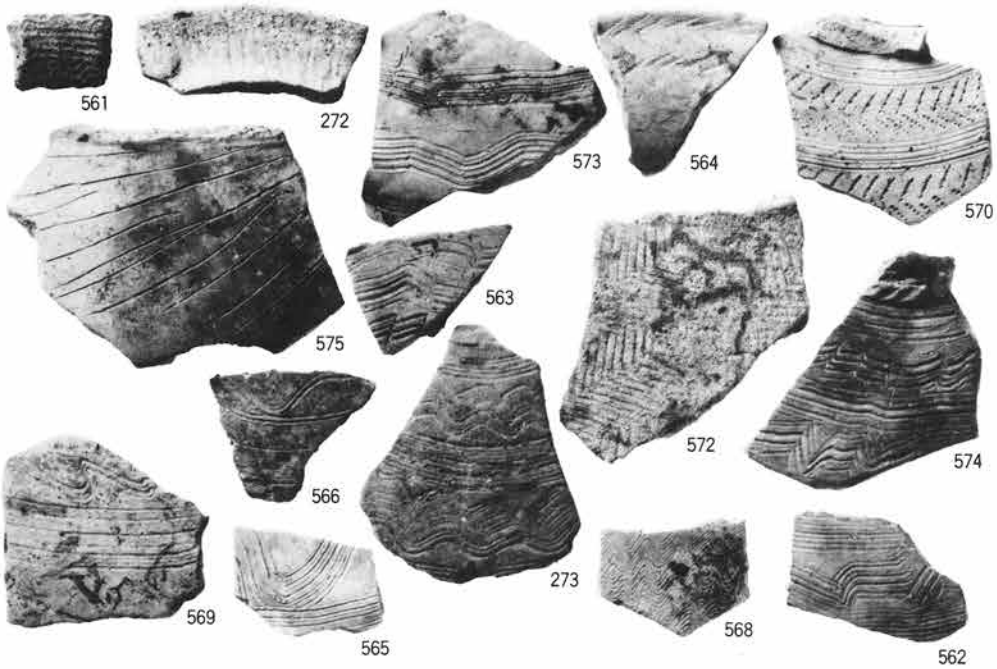
2　SR－3



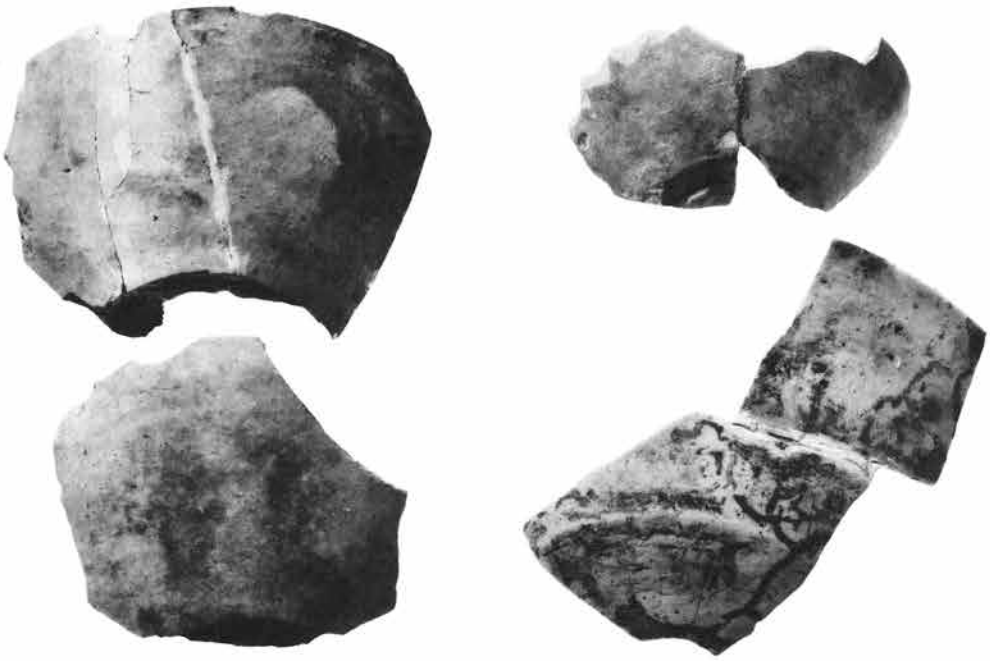
1　SR－1



2　SR－3



1　ＳＲ－２　272.273,　ＳＲ－３　561～566.568～570.572～575



2　ＳＲ－３

548

549

550

551

556

225

1　SR－3

560

552

553

554

557

559

555

2　SR－3

220

224

222

223

221

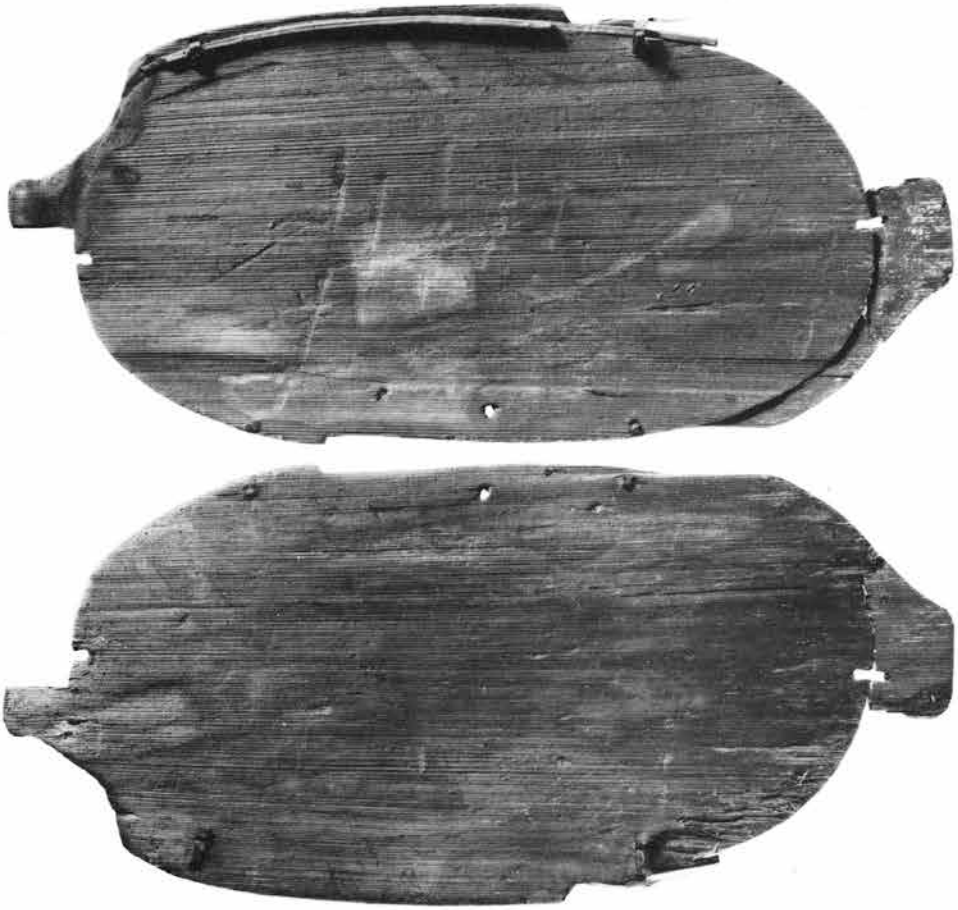
226

227

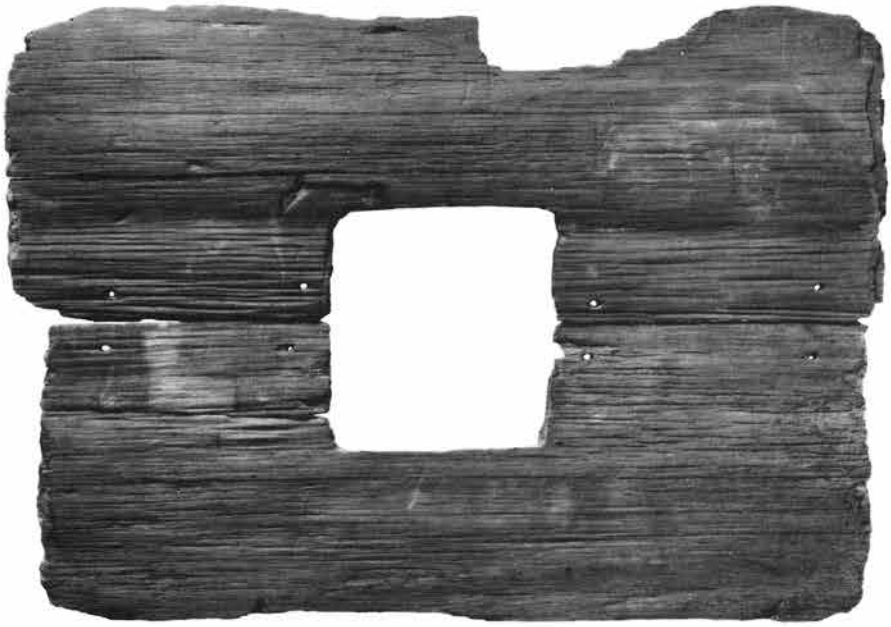
17

622

第１調査区ＳＲ－１　220～223，226，227，ＳＲ－３　622，第２調査区ＳＤ－１　17

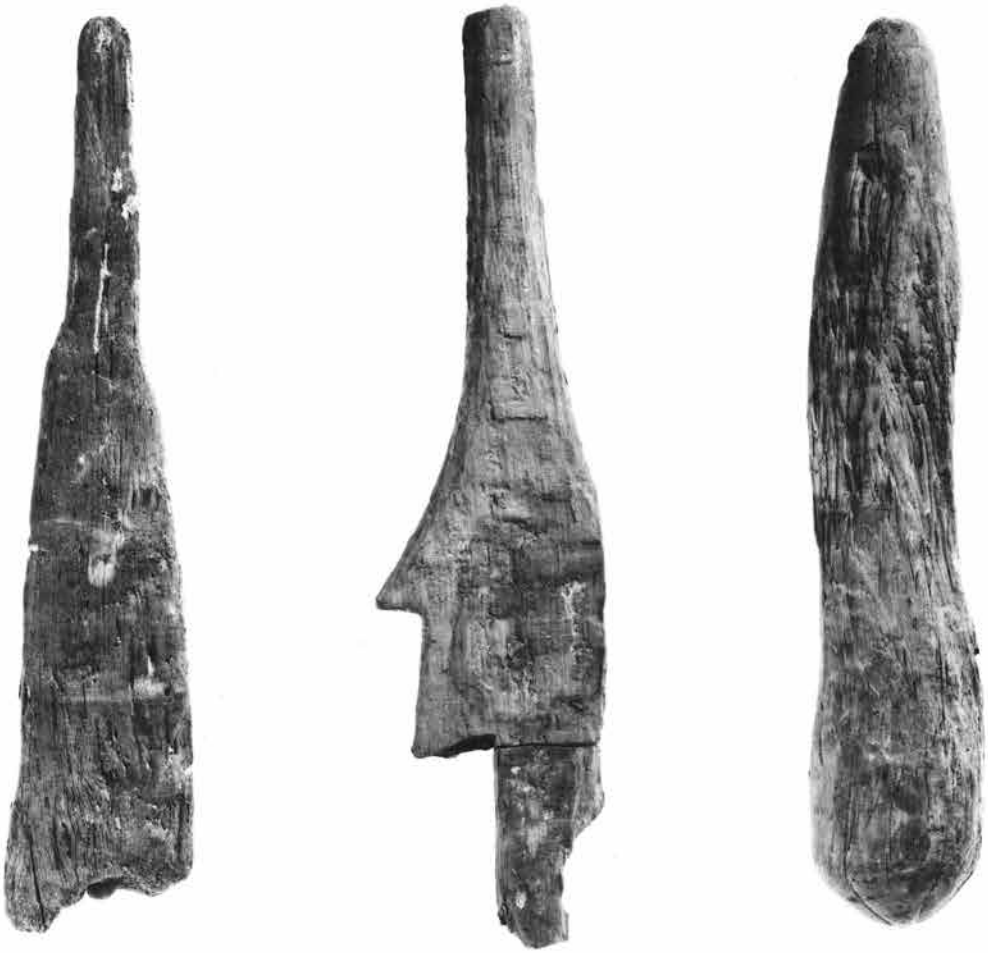


576



577

SR－1 577, SR－2 576



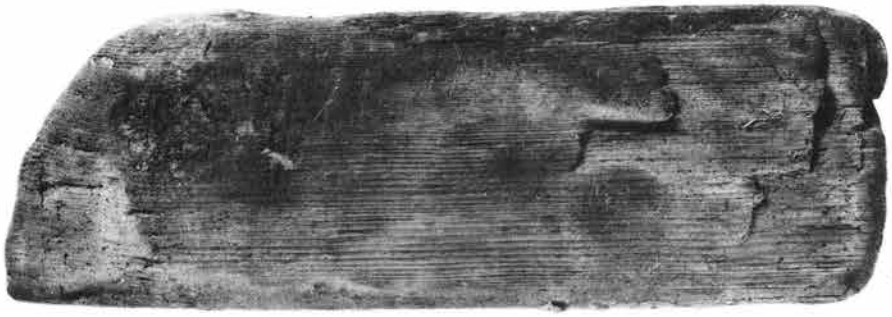
580　579　578

581

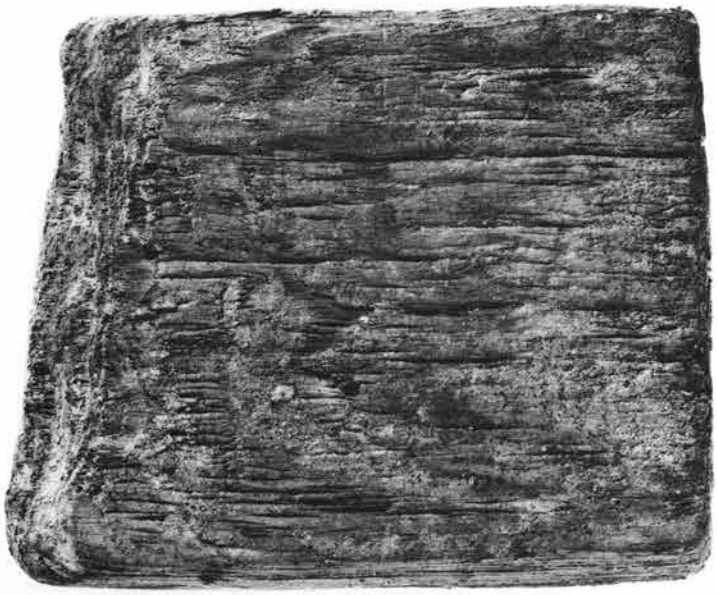
582

583

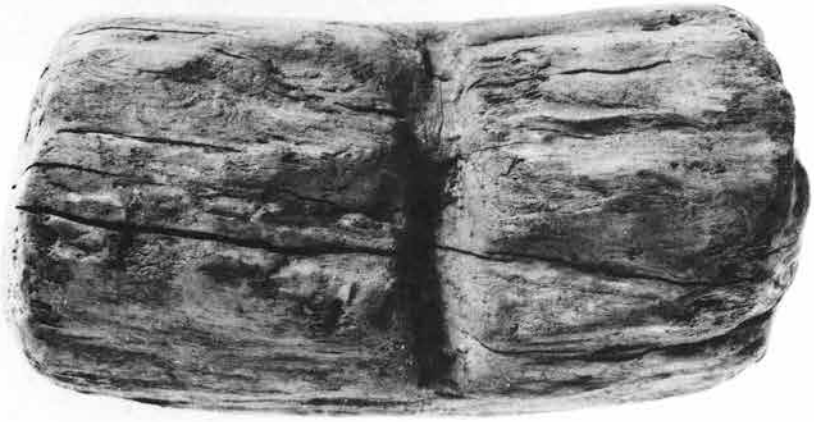
ＳＲ－１ 578．579，ＳＲ－３ 580～583



589

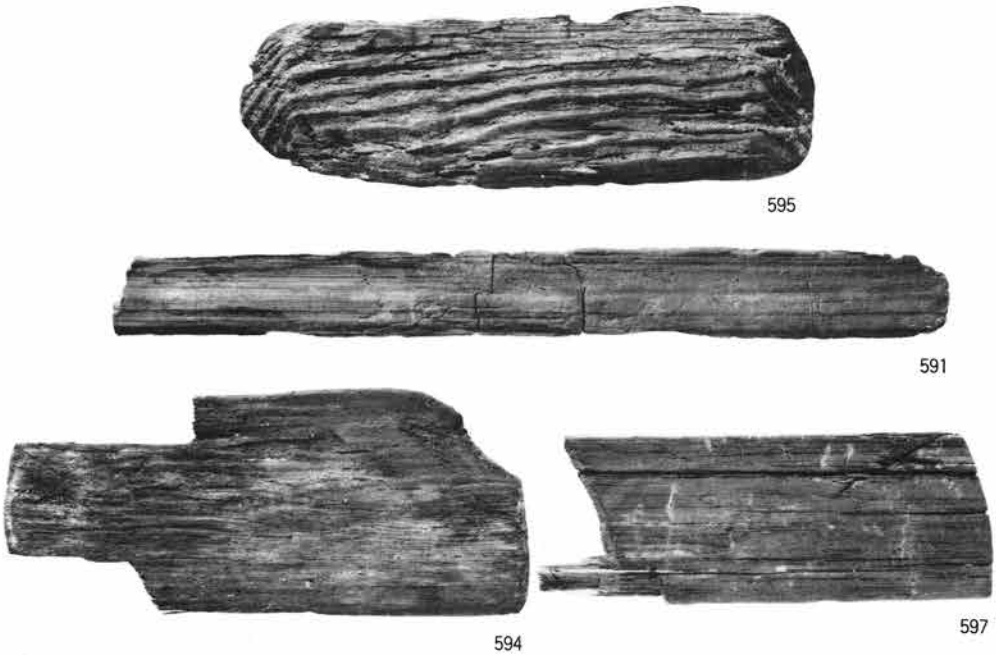


584

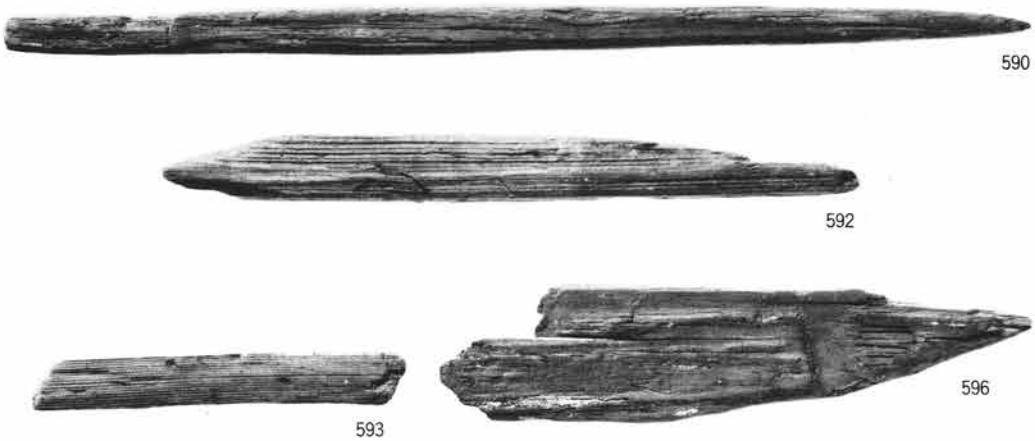


587

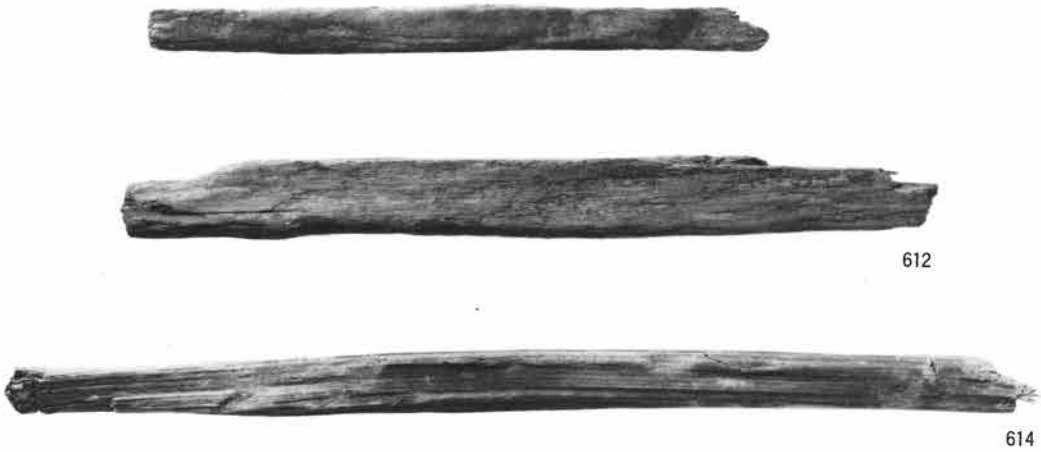
SR－2 589, SR－3 584. 587



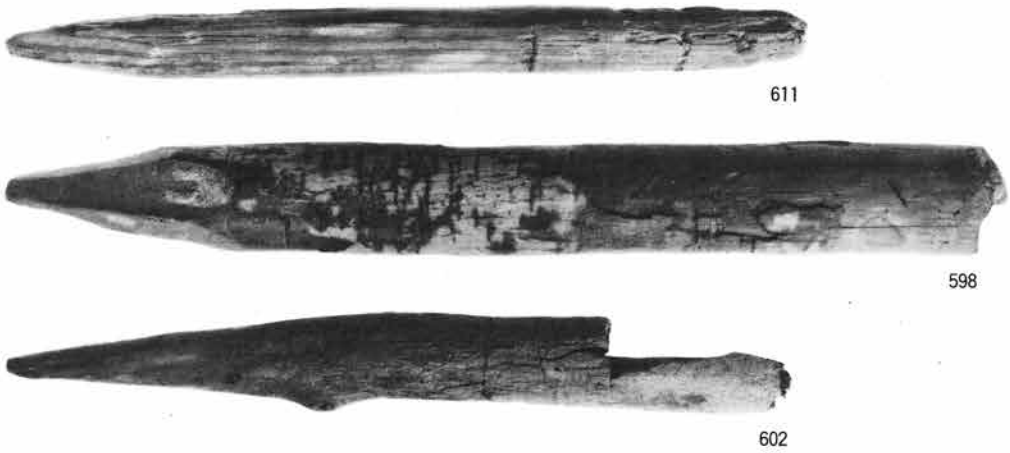
1　ＳＲ－３



2　ＳＲ－３



1　SR－3

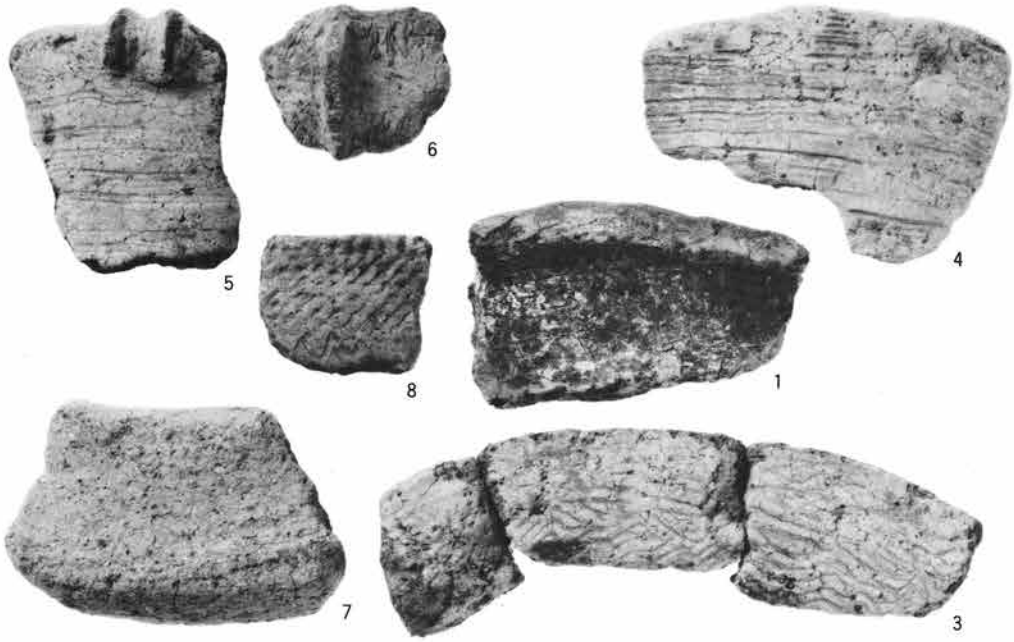


2　SR－3

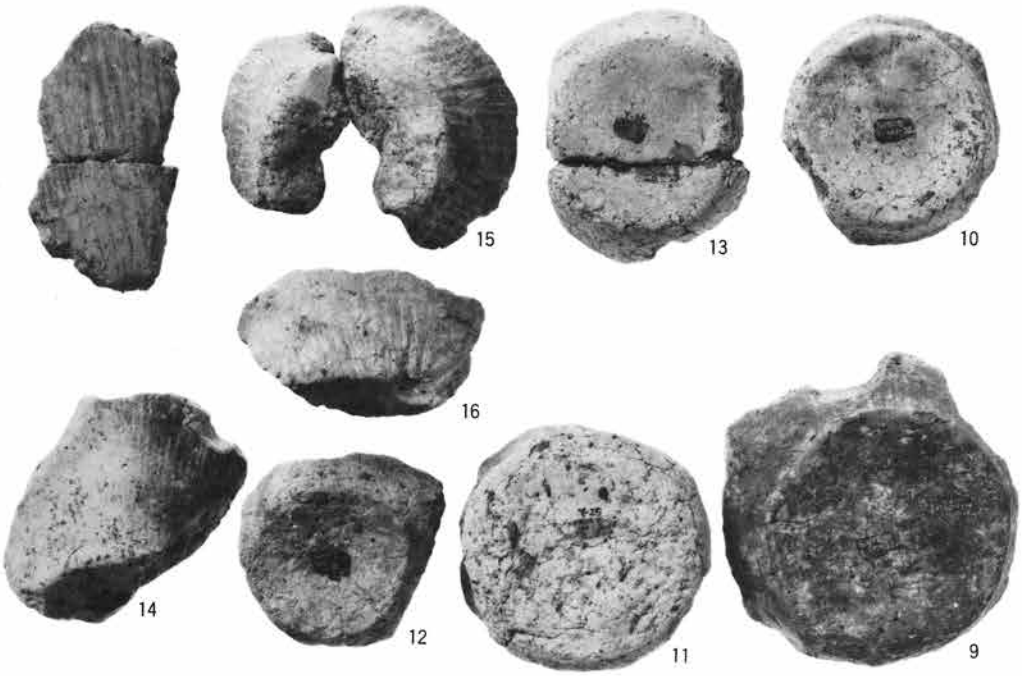
3　SR－2

1　第１調査区　ＳＫ－３

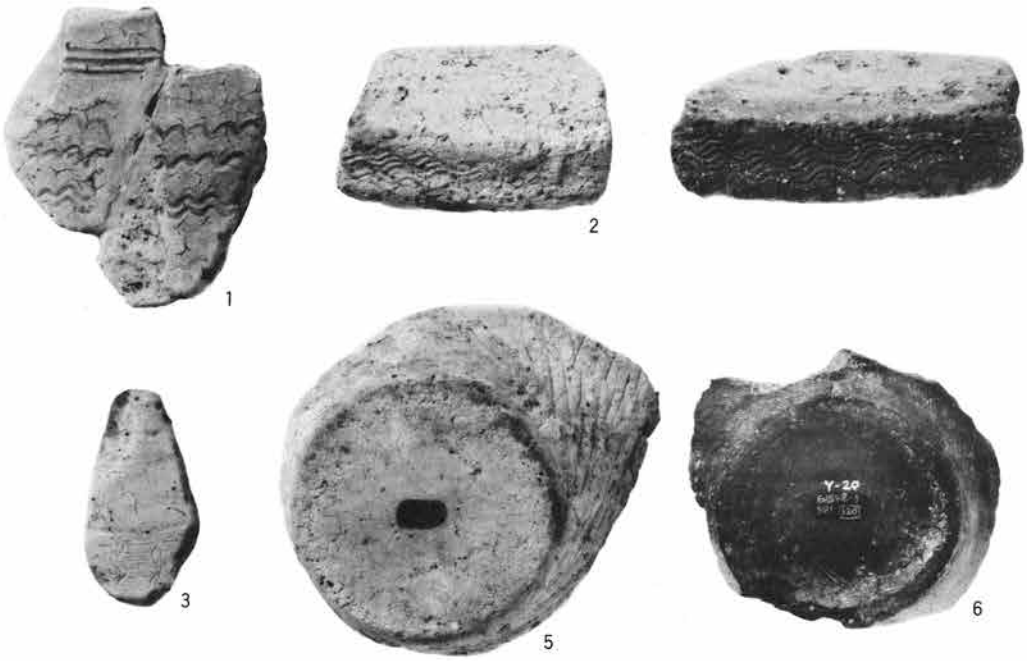
2　第２調査区　ＳＤ－１



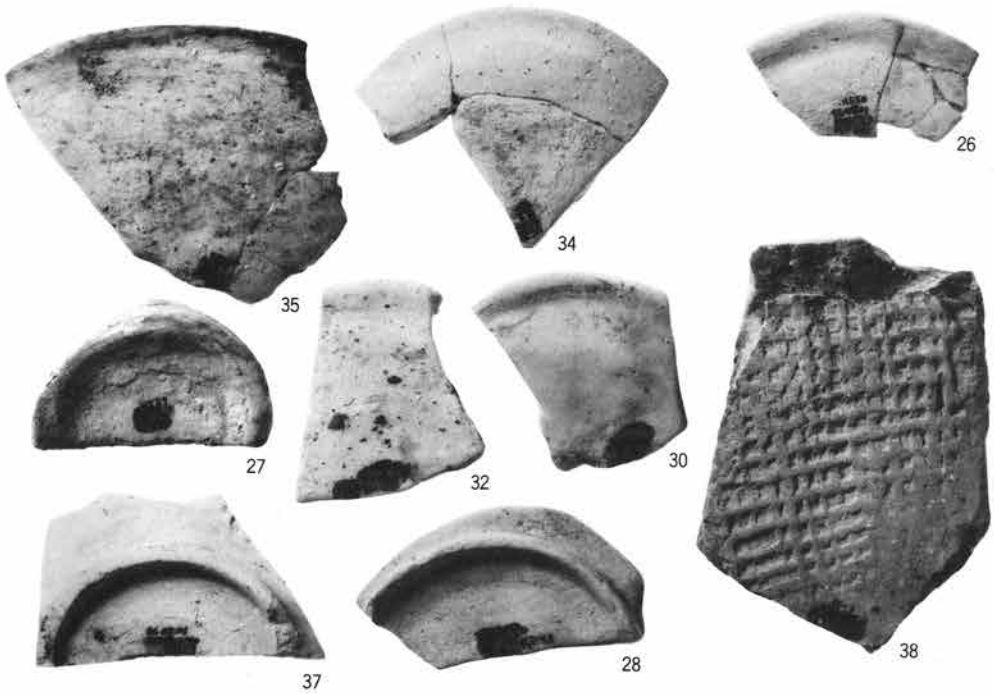
1　SD－1



2　SD－1



1　SD－1



2　SB－4 30. 32, SP－1 26. 27, SP－2 28, SP－4 34, SP－5 35, SP－7 37, SP－8 38

7

9

11

13

14

17

18

24

19

20

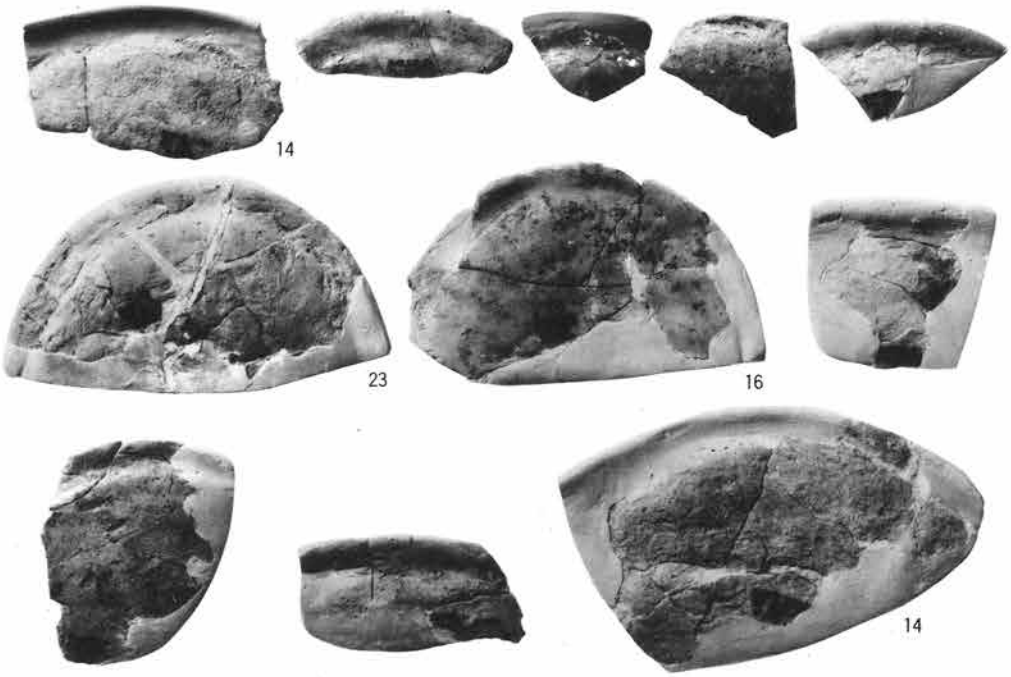
25

33

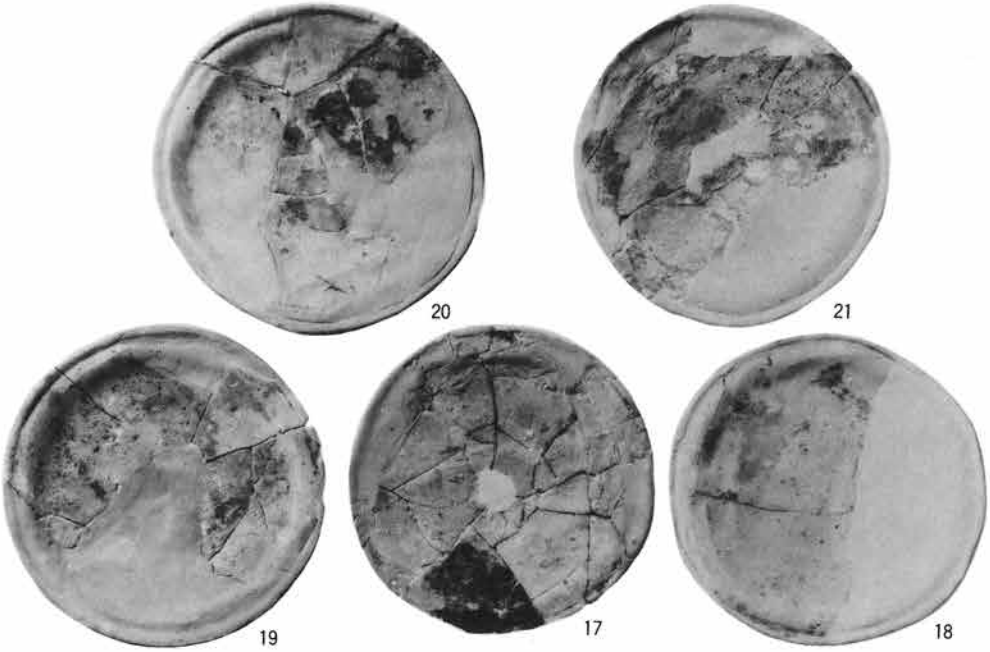
36

ＳＢ－１ 7. 9. 11. 13. 14. 17. 18. 19. 20. 24. 25, ＳＰ－３ 33, ＳＰ－６ 36

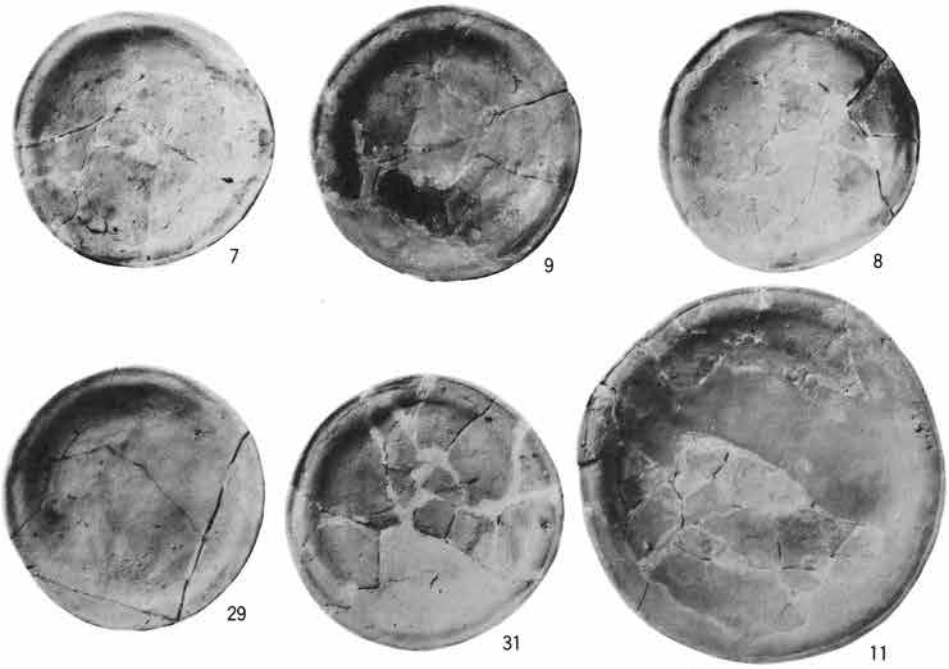
1　SB－1



2　SB－1



1　SB－1



2　SB－1 7～9. 11, SB－4 29. 31

50

52

53

55

57

70

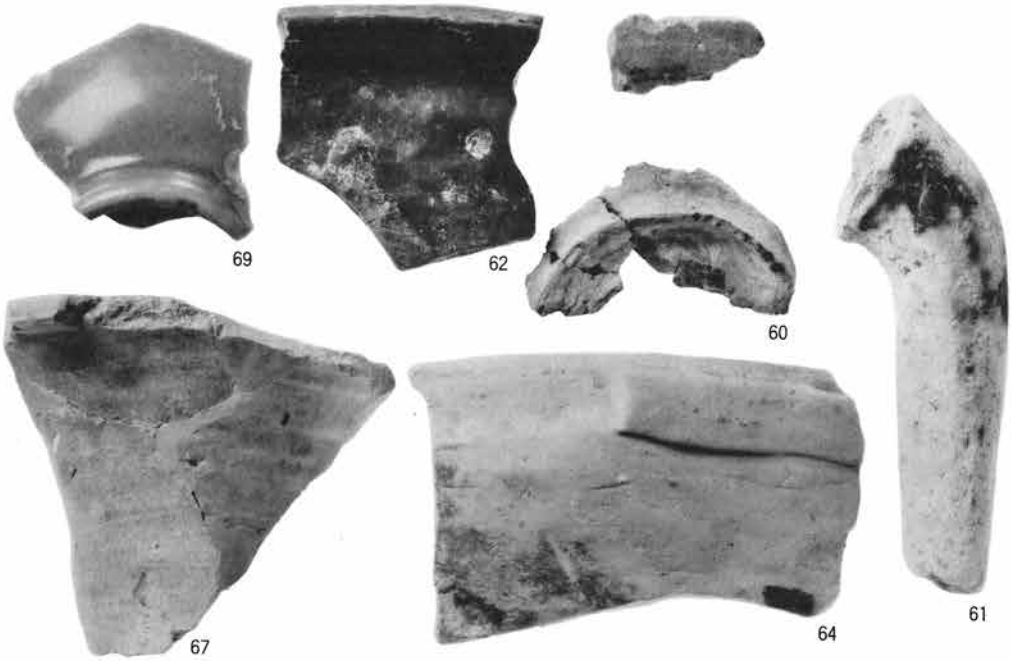
63

73

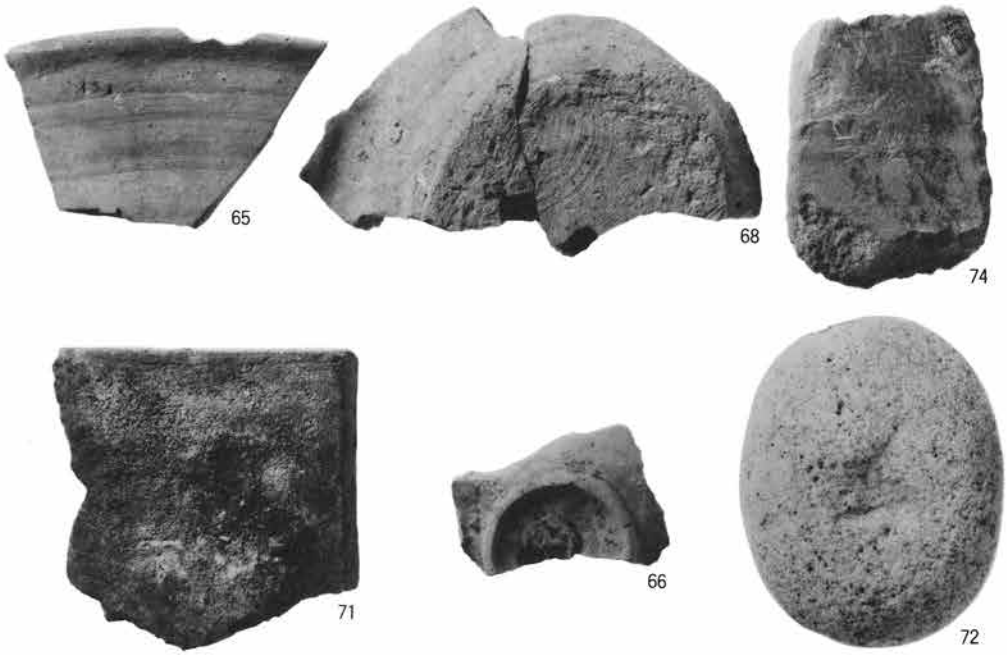
76

75

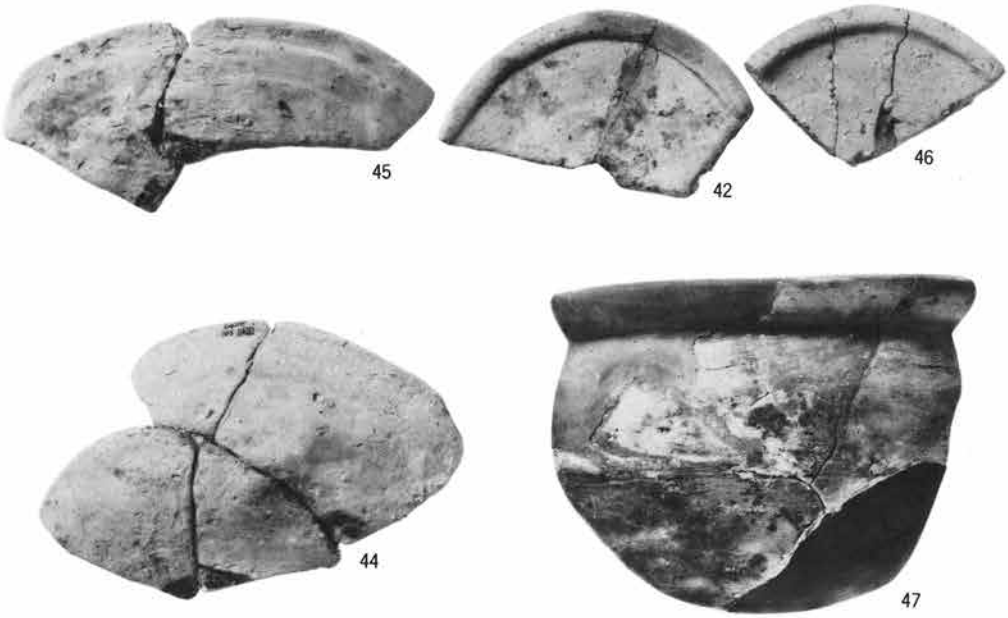
ＳＸ－２ 50. 52. 53. 55. 57, ＳＸ－３ 63. 70. 73. 75. 76



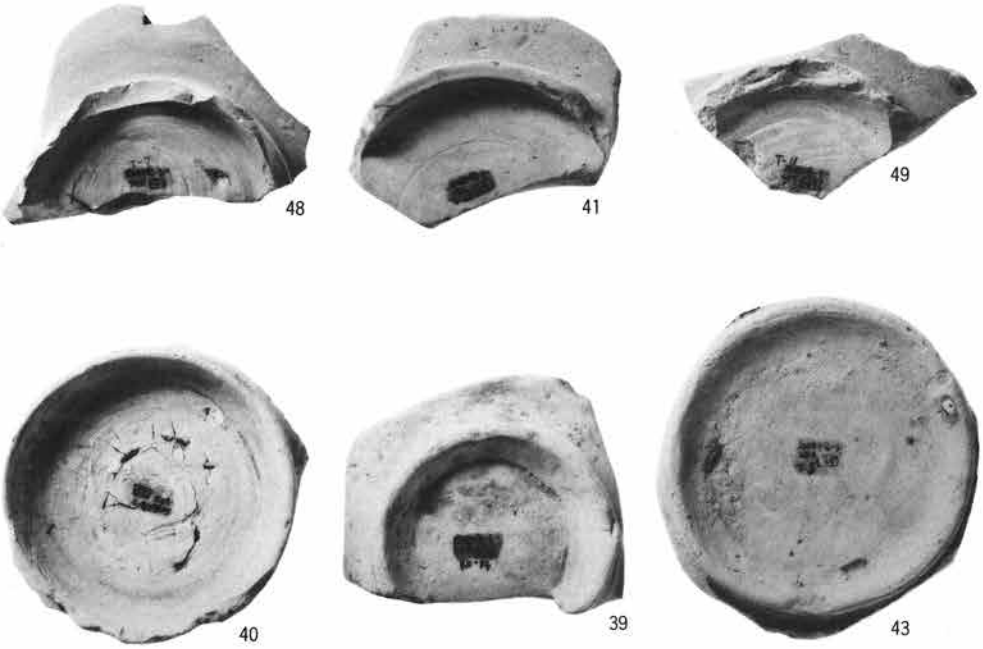
1　ＳＸ－３



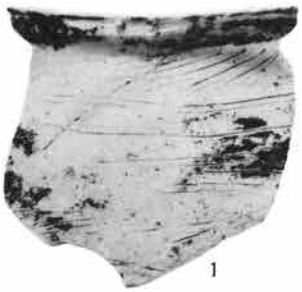
2　ＳＸ－３



1　ＳＤ－３ 42.44.45　遺構面 46.47



2　ＳＤ－２ 39～41，ＳＤ－３ 43，遺構面 48．49


1

18

17

20

19

26

32

28

22

25

23

ＳＤ—15 17，ＳＤ—16 1，ＳＤ—17 18，ＳＢ—10 22．23．25，ＳＢ—12 26，ＳＰ—９ 28，ＳＰ—13 32，遺構面 19．20

35

40

39

41

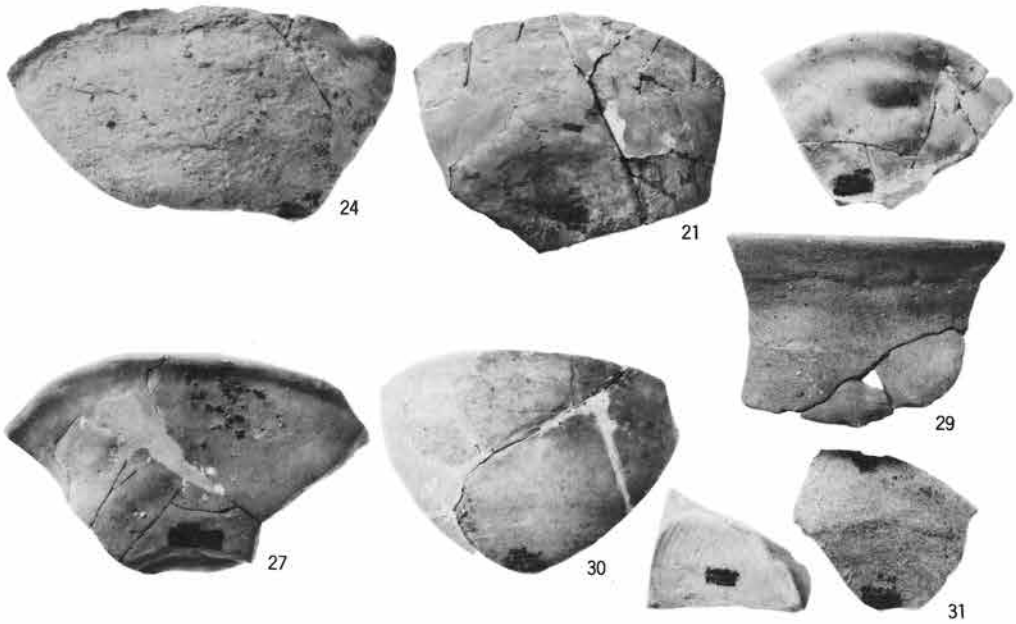
51

43

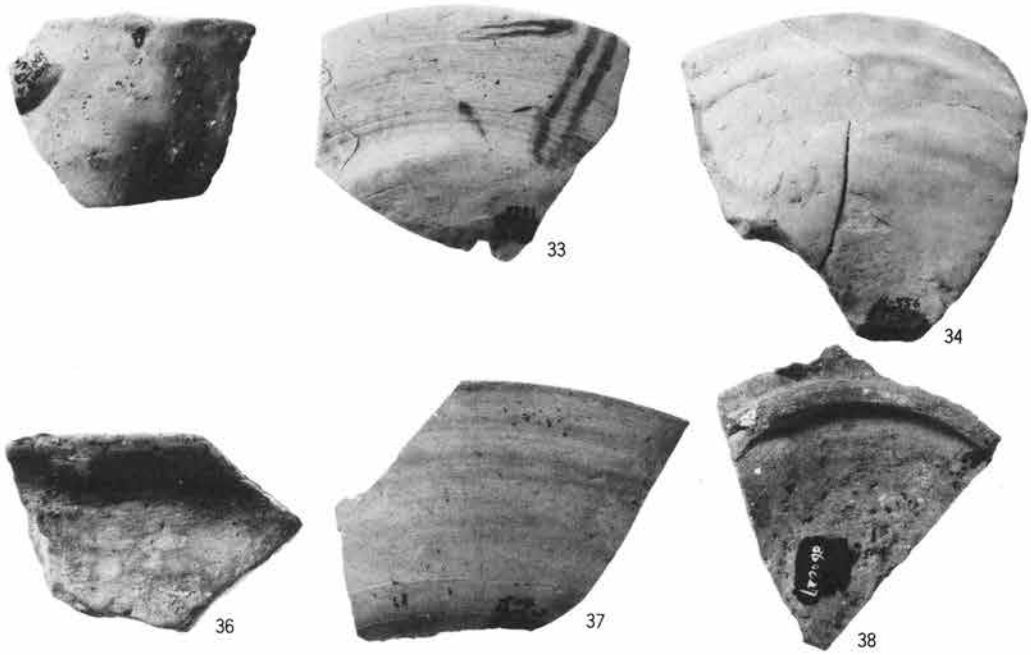
46

45

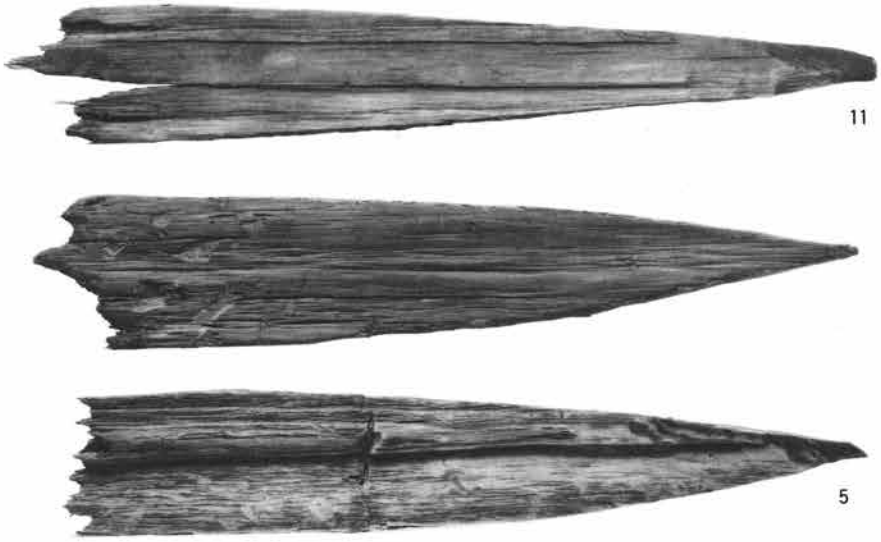
S D—13 41. 43. 45,　S D—14 46. 51,　S D—19 35. 39. 40



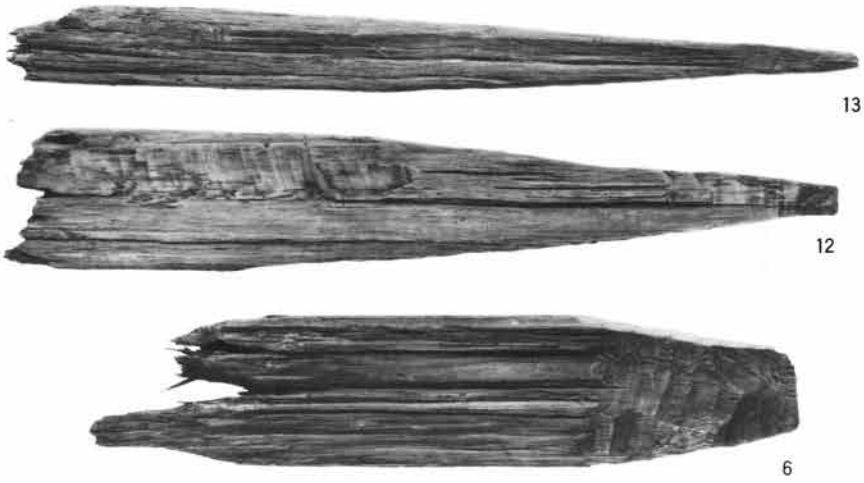
1　ＳＢ－８ 21，ＳＢ－10 24，ＳＰ－９ 29，ＳＰ－10 29，ＳＰ－11 30，ＳＰ－12 31



2　ＳＤ－19



1　ＳＤ—16　堰



2　ＳＤ—16　堰

昭和63年３月

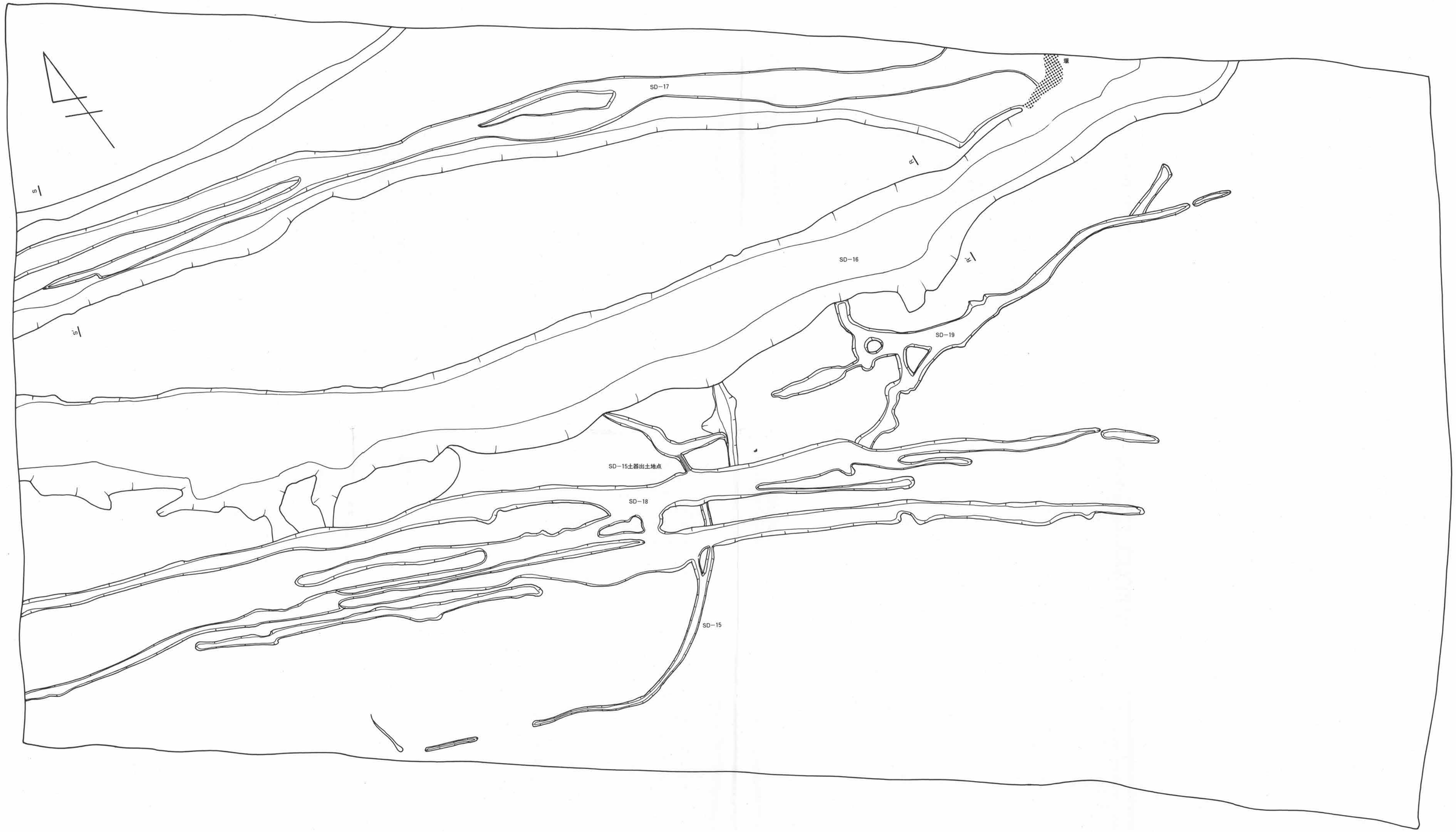
石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅰ

―滋賀県住宅供給公社宅地造成事業に伴う―

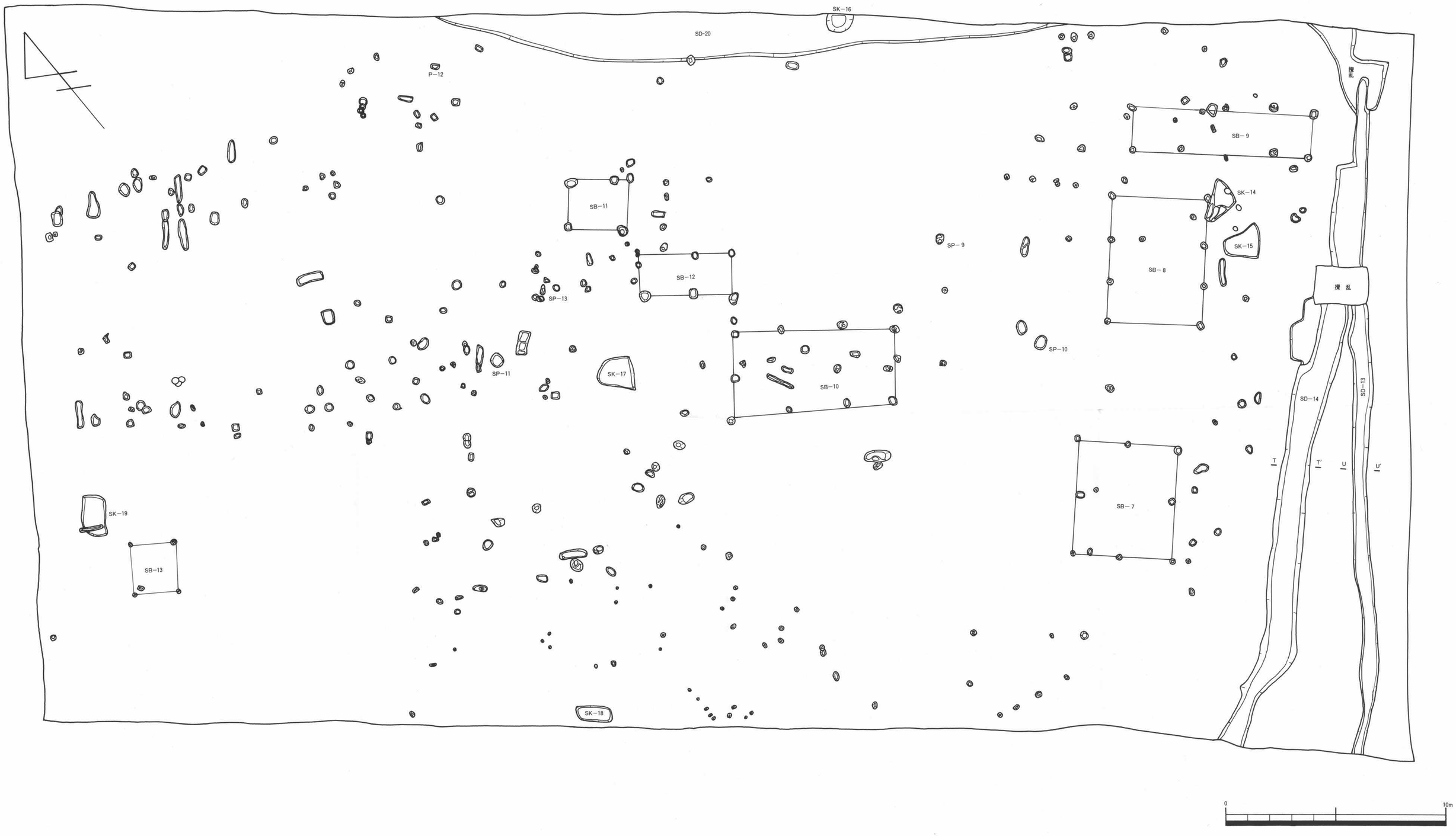
編集発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目１－１
電話　0775－24－1121
(財) 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－２
電話　0775－48－9781

印刷装本　冨士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
電話　0775－23－2580

付図１　第３調査区　遺構図２



付図２　第４調査区　遺構図１（弥生時代～古墳時代）



付図 3　第 4 調査区　平面図 2（平安時代～鎌倉時代）